HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究
Author(s)	山田, 祥子
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11061号
Issue Date	2013-09-25
DOI	10.14943/doctoral.k11061
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57324
Type	theses (doctoral)
File Information	Yoshiko_Yamada.pdf



Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士学位申請論文

ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究

山田　祥子

平成 25 年 3 月提出

目　次

凡例 …… 1

はじめに …… 4
0.1 研究の背景と目的
0.2 本稿の概要

第 I 部　ウイルタの歴史と言語接触 …… 7
第 1 章　ウイルタとウイルタ語 …… 7
1.1 ウイルタについて
1.1.1 民族名称
1.1.2 民族人口
1.1.3 居住地域と地域グループ
1.2 ウイルタ語のあらまし
1.2.1 系統
1.2.2 方言分類
1.2.3 書記法
1.2.4 今日の言語状況

第 2 章　ウイルタ語と言語接触 …… 22
2.1 概要
2.1.1 サハリンの位置づけ
2.1.2 サハリンの先住民族
2.1.3 ウイルタ語との接触言語
2.2 ニヴフ語・アイヌ語との接触について
2.2.1 民族間の交流
2.2.2 言語状況
2.2.2.1 ニヴフ語とウイルタ語
2.2.2.2 アイヌ語とウイルタ語
2.2.3 言語圏 I
2.3 エウェンキー語との接触について
2.3.1 エウェンキーの移住
2.3.2 エウェンキーからの文化的な影響
2.3.3 言語圏 II
2.4 ロシア語／日本語への言語交替

2.4.1 サハリン領有の歴史
2.4.2 戦前の言語状況
2.4.3 戦後の言語交替
2.5 まとめ

第３章　ウイルタ語文法研究の歩み …… 43
3.1 草創期
3.1.1 ピウスツキ B.
3.1.2 中目覚
3.1.3 川村秀弥
3.1.4 石田収蔵
3.1.5 澗潟久治
3.1.6 服部健
3.2 第一期
3.2.1 ペトローワ T. I.
3.2.2 池上二良
3.3 第二期
3.3.1 Novikova & Sem（1997）
3.3.2 Tsumagari（1985, 2009）、津曲（1988）
3.3.3 Ozolinja（2001）
3.4 第三期
3.4.1 Pevnov（2009）
3.4.2 Toldova & Brykina（2009）
3.4.3 そのほか、昨今の研究について
3.5 まとめ

第 II 部　ウイルタ語北方言の文法とテキスト …… 54
第４章　ウイルタ語北方言の音韻と形態構造 …… 54
4.1 音素
4.1.1 子音
4.1.2 母音
4.2 音素配列
4.2.1 音節構造
4.2.2 母音調和
4.2.3 語頭の子音制約
4.2.4 語末の子音制約

4.2.5 母音間の子音連続
4.2.6 母音間の *k* の出現制約
4.3 超分節的特徴
4.3.1 アクセント
4.3.2 イントネーション
4.4 形態構造
4.4.1 語と付属形式の分類
4.4.2 形態素の連結
4.4.3 接着と融合
4.5 まとめ

第 5 章　ウイルタ語北方言の動詞活用と時制(1) : 先行記述 …… 71
5.1 方言の記述文法に課された問題
5.1.1 池上（1994a [2001]）再考
5.1.2 問題提起
5.2 先行記述
5.2.1 Pilsudski（Majewicz ed. 2011）
5.2.2 中目（1917a）
5.2.3 Petrova（1967）
5.2.4 澗潟（1981）
5.2.5 Ikegami（1959 [2001]）／池上（1994a [2001], 2001）
5.2.6 Tsumagari（1985, 2009）
5.3 まとめ

第 6 章　ウイルタ語北方言の動詞活用と時制(2) : 記述の試み …… 91
6.1 記述の枠組み
6.1.1 活用形の分類
6.1.2 活用形のとる人称語尾の有無と系列
6.1.3 時制に関する形式の概要
6.2 人称形動詞
6.2.1 完了*-xA(n)/ -či(n)*
6.2.2 不完了*-ri/ -si*
6.2.3 未来*-li*
6.3 非人称形動詞
6.3.1 完了*-pulA*
6.3.2 不完了*-buri/ -puri*

6.4 定動詞
6.4.1 体験過去（三人称）*-tAA*
6.4.2 体験現在（三人称）*-rAkkA/ -sikkA*
6.4.3 近未来*-rilA-/ -silA-*
6.4.4 遠未来*-rAŋA-/ -siŋA-*
6.5 習慣*-bukki/ -pukki*
6.6 まとめ

付録　ウイルタ語北方言テキスト …… 127
7.0　概要と語り手紹介
7.1　一人語り
7.1.1　回想録(1)：おばあちゃんの影を見た話
7.1.2　回想録(2)：奇妙な声に恐怖した話
7.1.3　回想録(3)：スープの思い出
7.1.4　回想録(4)：アザラシ肉とニヴフと日本人
7.1.5　回想録(5)：池上先生の思い出
7.1.6　回想録(6)：池上先生の思い出
7.1.7　ヨードプのつくりかた
7.1.8　スルクタのつくりかた(1)
7.1.9　スルクタのつくりかた(2)
7.2　会話
7.2.1　昔の暮らし
7.3　民話
7.3.1　赤い川を渡った兄弟
7.3.2　アザラシ―海の主
7.4　歌謡と詩
7.4.1　歌謡(1)：ベリー摘みの歌
7.4.2　歌謡(2)：チュミルタカーヌの歌
7.4.3　歌謡(3)：お祭りの歌
7.4.4　歌謡(4)：ウイルタ語で話そう
7.4.5　詩：ロシア人もフランス人も

おわりに …… 233
謝辞 …… 234
参考文献 …… 236

凡　例

- 人名は、原則として姓・名（ロシア名で父称がある場合は、姓・名・父称）の順で示す。ただし、付録のウイルタ語からの訳文では、原文の語順にしたがうことがある。
- 原則として、敬称を省略する。ただし、付録のウイルタ語からの訳文と謝辞は、この限りではない。
- 本稿で単に「サハリン」という場合、特に断りのない限り、島嶼としてのサハリン島（樺太島）のことを指す。行政区域としての「サハリン州」とは区別する。
- 日本語以外の言語で書かれた先行記述の引用では、特に断りのない限り、筆者による日本語訳を示す。
- 日本語の旧字体は、新字体に改める。
- ウイルタ語の表記には下記の音素のイタリック体を用いる。

  母音：*a, ə, o, ɵ, u, i, e*

  子音：*p, b, t, d, č, ǰ, k, g, m, n, ɲ, ŋ, l, r, s, x, w, j*

  なお、基底形を示す際に母音調和により交替する母音を大文字の *A* で表わす。そのほか、音韻構造の説明において子音を大文字の C、母音を大文字の V で表わすことがある。
- 本文中の、あるいはウイルタ語の語句や例文の末尾に付す[ ]内の点区切り 5 桁の番号は、付録で掲載する北方言テキストにおける文の番号に対応する。例えば、[7.1.1.01]は付録 7.1.1 節の 1 番目の文、[7.1.2.03]は付録 7.1.2 節の 3 番目の文のことである。
- 例文は、原則として以下の構成で表記する。

1 行目：(例文の通し番号) *方言の別*
2 行目：***池上（1997）にもとづくウイルタ語表記***（太字イタリック）
3 行目：*ウイルタ語基底形*（イタリック）
（4 行目：文法注記）
5 行目：日本語の意訳（引用元が英文の場合は原文の英語訳、調査によってロシア語訳が得られた場合はロシア語訳を併記）（出典、筆者所有データの整理番号、もしくは付録の文の番号）

例：
1 行目：(250)*UiN.*
2 行目：　***bii***　　***ŋənəxəmbi***.
3 行目：　*bii*　　*ŋənə-xA(n)-bi*
4 行目：　1SG.NOM　　go-PRF.P-1SG
5 行目：　私は出かけて行った　Я пошла　[7.1.1.02]

例文 1 行目の( )で示す例文の通し番号の直後に、略号で言語（方言）の別を表示する。たとえば、上の例の *UiN.*は、ウイルタ語北方言の例文であるということを意味する。言語の略号は以下のとおりである。

Ain.：アイヌ語／*AinS.*：アイヌ語サハリン方言／*EvkS.*：エウェンキー語サハリン方言／*Jap.*：日本語／*Niv.*：ニヴフ語／*Rus.*：ロシア語／*Uil.*：ウイルタ語／*UiS.*：ウイルタ語南方言／*UiN.*：ウイルタ語北方言

例文 2 行目のウイルタ語表記では、文献から例文を引用する場合、引用元のウイルタ語表記を池上（1997）にもとづく音韻表記に改める。動詞語幹に文法要素が結合してできた複合体（「動詞複合体」）で文の述語を構成する部分には、下線を引いて強調する。なお、検索等の目的のため人名や地名などの固有名詞もすべて小文字で表わす（3 行目も同様）。また、ロシア語の語句が挿入される場合、ロシア語の部分は音韻表記でなく、ロシア字のローマ字転写（下記）で表わす。

例文 3 行目の基底形で、ウイルタ語以外の言語の語には[ ]を付してローマ字転写を示す（例： *[informantami]* ＝ロシア語の informantami「インフォーマントとして」[7.1.5.11], *[itadakimasu]* ＝日本語の「いただきます」[7.1.4.56]）。

例文 4 行目には、必要に応じて文法注記を付す。文法注記には語幹に英語の逐語訳、その他の文法形式には下記の略号を用いる。

例文 5 行目の意訳には、日本語以外の著述等や話者による（ロシア語）訳を参考にした場合、必要に応じてその言語による原文を併記する。

・ ロシア文字の転写は、以下の方針にしたがう。

а — a	и — i	с — s	ъ — -
б — b	й — j	т — t	ы — y
в — v	к — k	у — u	ь — ’
г — g	л — l	ф — f	э — e
д — d	м — m	х — x	ю — ju
е — e	н — n	ц — ts	я — ja
ё — jo	о — o	ч — ch	
ж — zh	п — p	ш — sh	
з — z	р — r	щ — ssh	

・　本稿の文法注記で用いる略号は、以下のとおりである。

-：形態素境界／+：融合／=：倚辞境界／＃:語境界／###：言い間違い／?：分析不能、または不確定の要素／1：一人称／2：二人称／3：三人称／ABL：奪格／ACC：対格／ADJ：形容詞派生接辞／AND：名詞並列「～と～」／C：副動詞／CAUS：使役／COM：共同格／COND：条件／CONJ：接続／COOR：同時／COP：コピュラ動詞語幹／DAT：与格／DFUT：遠未来／DIM：指小辞／DIR：方向格／DIT：方向・意志「～しに行く」／DSG：指定格／DUR：継続／EMPH：強調／EVD：証拠性（直接体験）／EXC：感嘆／F：定動詞／FIL：言いよどみ／FUT：未来／HBT：習慣／HS：伝聞／IM：不完了（Imperfect）／IMP：命令／IPSN：非人称／INCH：開始／INFER：推定／INS：道具格／INTJ：間投詞／ITR：継続・多回／LIKE：派生接辞「～のような」／LMT：限定／LNG：派生接辞「～のことばで」／LOC：場所格／MLT：回数詞／NEG：否定動詞語幹／NFUT：近未来／NIM：否定にともなう不完了形動詞／NOM：主格／ONP：オノマトペ／P：形動詞／PL：複数／PERS：派生接辞「～人」／POSS：所有「～を連れて」／PRF：完了（perfect）／PRL：沿格／PROP：所有「～持ちの」／PRS：現在／PST：過去／PTCL：付属語／PURP：目的／RCP：相互／REF：再帰所有／SG：単数／SPN：自発／STEM：動詞語幹／TERM：限界／TILL：派生接辞「～まで」／TOP：主題化／TR：他動詞化／VSF：動詞語幹形成接尾辞／WHQ：疑問詞疑問／WND：ひかえめな疑問／YNQ：肯否疑問

はじめに

0.1 研究の背景と目的

ウイルタ語は、サハリンに暮らしてきた民族であるウイルタが伝統的に話してきた言語である。その方言は、島中部のポロナイスク市（旧、敷香町）を中心とする地方に居住する南のグループが伝統的に話してきた「南方言（みなみほうげん）」と、島北東部のワール（ヴァル）村を中心とする地方に居住する北のグループが伝統的に話してきた「北方言（きたほうげん）」とに大きく分けられる。

北方地域の多くの先住民言語がそうであるように、ウイルタ語には長い間それを書き表わす固有の文字がなかった。ウイルタの人々は、実践的な訓練や口頭で話すことばによって暮らしの知恵や技術、出来事などあらゆる事柄を伝え、親から子へと受け継いできた。そうして伝わってきた伝承こそウイルタの歴史であり、受け継がれた知恵や技術がウイルタの固有の文化をかたちづくっている。

歴史や文化の研究に、言語学はどのように関わっているのだろうか。筆者には、（純粋な意味での）言語学がその研究の最前線に立つようなことはなかったように思われる。しかしながら、言語学による成果は、歴史や文化を論じるときの確固たる論拠になってきた。たとえば、民族集団の異同や起源の研究には、その人々の伝統的な言語の特徴にもとづく系統分類が主要な論拠の一つとなる。そのほかに、言語のもつ範疇化機能による民俗分類が、しばしば文化の記述の引き合いに出される。このような意味で、言語学は歴史や文化の研究を根幹で支える役割を担ってきたのだと思う。

ウイルタ語の研究は、第 3 章で紹介するロシアのペトローワ T. I.、そして日本の池上二良によってそれぞれに一つの完成形を見た。その後は、先人のウイルタ語研究を基礎にして現在行う記録・記述、そして将来につなげていく保存・教育というタテの拡がり、加えて、国内外の協力や他の学問分野との関連づけによりウイルタ語の研究をウイルタやその近隣の諸民族の歴史や文化の研究に応用していくヨコの拡がりを進めてゆく時期に入っている。

本稿では、言語接触によりウイルタ語に他言語の影響が及んだ可能性を視野に、今日話されるウイルタ語北方言の文法を明らかにする研究の、一つの段階を報告するものである。ウイルタ語の特徴における時間的な変化や地域的な差異を記述し、そこに及んだ他言語の影響を見極めることは、ウイルタの人々が誰からどのような影響を受けてきたのかという、民族関係の歴史を知る手掛かりともなるだろう。将来的には、この成果を他分野に応用していくことで、ウイルタの書かれざる歴史や文化の解明に少しでも近づくことができるかもしれない。

0.2 本稿の概要

本稿の内容は、大きく第 I 部（第 1〜3 章）と第 II 部（第 4〜6 章）に分かれる。第 I 部では、ウイルタ語北方言の文法記述を行う背景として、ウイルタやウイルタ語、ウイルタをめぐる言語接触、ウイルタ語文法研究史の概要について、文献の記述をまとめるかたちで述べる。第 II 部では、ウイルタ語北方言に焦点を当て、その文法の記述を試みる。

第 I 部のうち、第 1 章では、本稿の導入として、ウイルタという民族とその固有の言語であるウイルタ語の基本的な特徴について述べる。サハリンの先住民であるウイルタの人口は現在 300〜400 人、その伝統的な言語であるウイルタ語の話者数は 10 人以下である。

第 2 章では、ウイルタ語をめぐる言語接触の歴史に関する文献の記述を概観する。なお、歴史学的に新しい情報や意見を述べるのではなく、あくまで文献のまとめであることを断っておく。ウイルタ語に接触してきた言語として本稿で着目するのは、ニヴフ語、アイヌ語、エウェンキー語、日本語、ロシア語である。これらの言語を話す人々がサハリン島においてどのような相互関係をもってきたのか、相互のコミュニケーションにおける言語使用や言語習得のあり方を、記録からわかる範囲で見てゆく。

第 3 章では、前章で概観した言語接触の歴史を踏まえて、これまでのウイルタ語文法研究の歩みについて述べる。ウイルタ語の研究史は Ikegami（1993 [2001]）、Tsumagari（2009）がまとめているが、本稿はそのうち文法研究に焦点を当て、20 世紀初めから 2013 年現在に至るまでの流れを草創期・第一期・第二期・第三期に分けて概観する。この考察により、これまでのウイルタ語文法研究において方言を比較する資料が不足していることを示し、今日話される北方言の特徴を記述する意義を明らかにする。

第 II 部に入り、第 4 章では、ウイルタ語北方言の音韻と形態構造を概説する。根本的な部分は南方言と共通だが、なかには今日の北方言に特異な点もある。この章では音韻形態論的な特徴の全体を扱うが、南方言に対して北方言に特異な点、すなわち、一部の語の語根を除き母音音素 *o* と *ɵ* の対立を認めないこと、語構成のプロセスにおいて形態素動詞が複雑に「融合」する場合と単純に「接着」する場合の揺れが認められること、などについては特に詳しく述べることにする。ここで述べる内容は、以下の文法記述やテキスト表記の基礎となる。

第 5 章では、ウイルタ語北方言の文法のうち、動詞活用と時制の表わし方に考察対象をしぼってゆく。この章では、その考察の前提として、池上（1994a [2001]）とその他の関連する先行記述を概観する。

第 6 章では、ウイルタ語北方言の動詞活用と時制について記述する。文法の基本的な枠組みは南方言と共通であると仮定し、その枠組みのなかで北方言の形式を整理する。結果として、南方言の枠組みに必ずしも合わない部分、すなわち人称形動詞（未来）*-li*、非人称形動詞（完了）*-pulA*、習慣*-bukki/ -pukki* の使用に、南方言とは異なる北方言の特徴があることを明らかにする。

最後に付録として、ここまでの記述（特に 4, 6 章）の論拠となった資料の一部として、

ウイルタ語北方言のテキストを掲げる。内容は、話し手一人が自身の体験等について語るもの 9 篇、会話 1 篇、かつて記録された民話の再話 2 篇、および歌謡と詩 5 篇の計 17 篇から成る。音韻・文法のほか、関連する文化的な情報についての写真や注記を加える。

第 I 部　ウイルタの歴史と言語接触

第 1 章　ウイルタとウイルタ語

本章では、本稿の導入として、ウイルタの民族・社会的な概要と、その固有の言語であるウイルタ語の基本的な特徴について述べる。

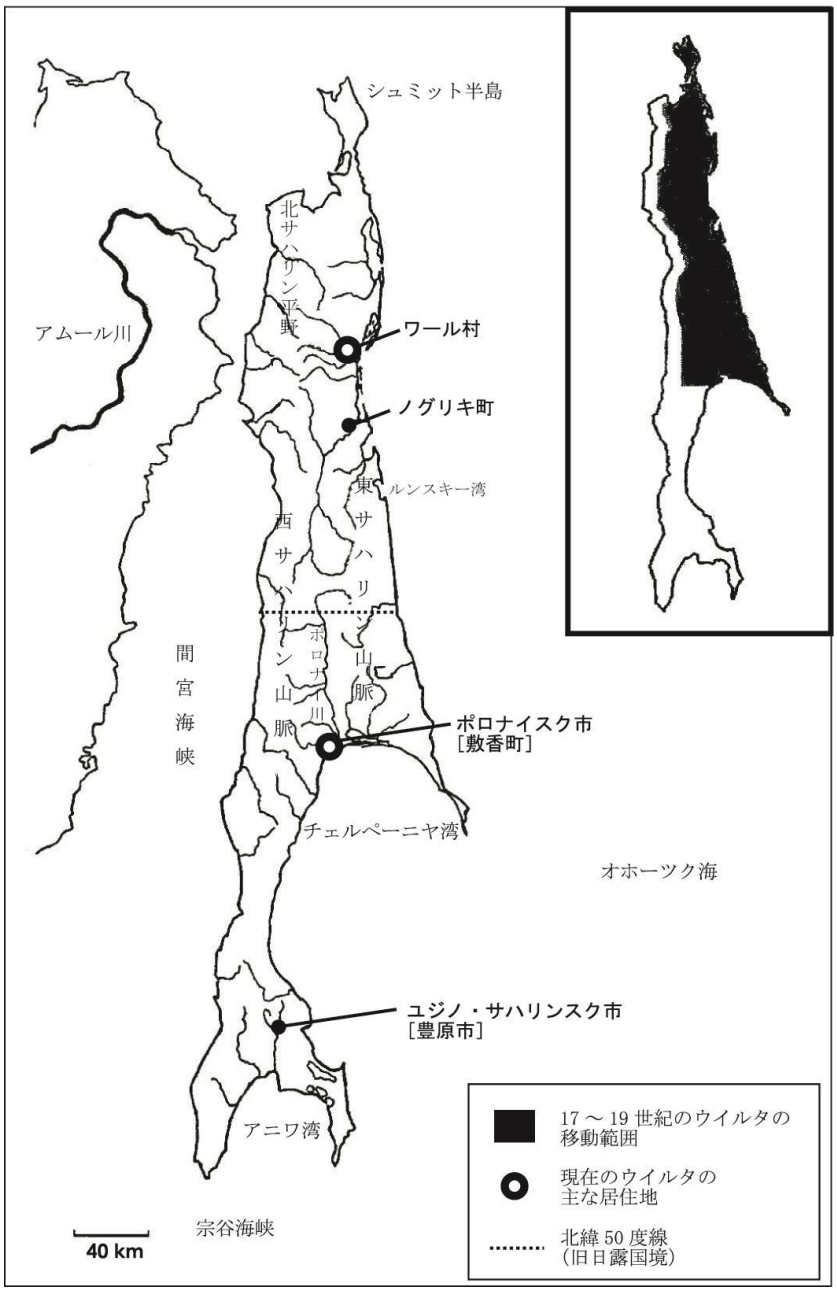


図 1-1　ウイルタの居住地（Roon 1996: 6 をもとに作成）

1.1 ウイルタについて

1.1.1 民族名称

ウイルタには、オロク、オロッコ、オロキ、オロチョン、ウリタ、ウィルタなど、表記の違いも含めて非常に多くの名称がある。

従来、文献やインターネットの記事などでは、オロク（ロシア語で orok）と記されることが多い。この民族名称は、かつてサハリンのアイヌの人たちがウイルタを指して言ったことばを採用して日本人が用いた名称「オロッコ」から来ていると推定されている（Roon 1996: 12）。なお、オロキ（oroki）というのは、オロク（orok）のロシア語式の複数形である。

一方、サハリンでも日本でも一般には「オロチョン orochen」という名称が通用している（Missonova 2006: 64 ほか）。オロチョンという語は、ロシア系移民がウイルタを指して言った名称と共通である（Roon 1996: 12-13）。また、エウェンキーによる名称ウリチャン ul'chan（ul't'an）に類似する（Funk 2000: 15）、という指摘もある。日本では、金田一（1912）が 1912（大正元）年に東京で開催された拓殖博覧会でウイルタ語に当たる言語を「オロチョン語」と紹介していることから、1910 年代にはすでにオロチョンという名称が知られていたことがわかっている。

サハリンに暮らすウイルタの人々自身が自分たちをオロチョン orochen と呼ぶ傾向は、ローン　T. P.（Roon T. P.）による 1995 年の調査でも確かめられている。当時はパスポートにもオロチョン orochen と記載したという（Roon 1996: 13）。1999 年 10 月にワール村でインタビュー調査をしたフンク D. A.（Funk D. A.）らの報告によっても、ワール村のウイルタの人々はずっと自分たちのことをオロチョン orochen と呼んできたことがわかっている（Funk 2000: 15）。

近年ロシアの文献や報道などで「ウイルタ ujl'ta」あるいは「ウリタ ul'ta」と表記されることが多くなってきた。これらはいずれも、かつてウイルタの人たちがウイルタ語で自分たちのことを呼んだ名称にもとづく。

「ウイルタ ujl'ta」は、ウイルタ語の *uilta* をロシア語の方式で表わしたものである。ウイルタ語の *uilta* が古くから彼らの自称であったことは、19 世紀中頃の記述によって確かめられている（Roon 1996: 13）。

他方、個人差あるいは地域差によって「ウリタ ul'ta」という人もいる。池上（1997: i）が、「自称については、ウイルタのほかにウルタ（ウリタ）という語形を使う人もいる」と述べたとおりである。2011 年 2 月に行った筆者の調査で、戦前から戦後にかけて今日のポロナイスク市（かつての旧日本領・敷香町）に住んでいた人たちにはウリタ ul'ta と発音する話者がいたということもわかっている。

上述のように自らを「オロチョン orochen」と呼んできたワール村のウイルタの間では、

1994 年くらいにビビコワ E. A.（Bibikova Elena Alekseevna；7.0 で紹介）が同村に引っ越して来た頃から「ウイルタ ujl'ta」という民族名称を用いることが増えたという（Funk 2000: 15）。ビビコワ E. A.が、ワール村に「ウイルタ ujl'ta」という民族名称を普及させたということであろう。同氏は、本稿筆者の主要なインフォーマントであり、ウイルタ語・ウイルタ文化の保存と復興に力を注いできたウイルタ女性で、上記の人類学者ローン T. P.（現在、サハリン州立郷土博物館館長）やウイルタ語研究者である池上二良（3.2.2 参照）との親交も深い。筆者には、ビビコワ E. A.が民族名称「ウイルタ ujl'ta」を強調したのには、研究者から受けた影響が大きかったように思われる。

Funk（2000: 15）の報告によると、ワール村の住民の一人ソロヴィエワ A. V.（Solov'eva A.V.）が、「『ウイルタ』はオロチョン語を知っている人たちのこと。『オロチョン』は言語を知らない人たちのことだ」と証言している。この場合の「言語」とはロシア語以外の言語を指す（Funk 2000: 15 にもとづく）。先住民言語の衰退によってロシア語しか話さなくなったワール村の人々にとっては、ウイルタ語で「ウイルタ」だと言われても、すぐにそれが自分たちを指す名称だとは思えなかったのだろう。

2008 年からワール村を調査に訪れている筆者の見たところ、今日までに上述のビビコワ E. A.（現在はノグリキ町在住）とワール村在住のフェジャエワ I. Ja.（Fedjaeva Irina Jakovlevna；7.0 で紹介）を中心に、「ウイルタ ujl'ta」という名称が広まってきた[1]。依然として会話のなかで「オロチョン orochen」という名称の通用性が高いが、少なくとも民族名称を尋ねられたときに「ウイルタ ujl'ta」を意識する人が増えてきている。

なお、日本ではウイルタ語の *uilta* をかなで書く場合、表記の方針によって、「ウイルタ」でなく「イ」を小さくして「ウィルタ」と書くことがある。だが、「ウィ」と書くと最初の部分が [wi] と読まれて、あたかも**wilta* であるかのように誤解される傾向が強い。池上（1993 [2001: 284]）が指摘しているように、ウイルタ語本来の発音から見て、かなで書く場合の二文字目は小字にしない方が妥当である。

以上に述べたように、ウイルタの民族名称をめぐる問題はきわめて複雑な様相を呈する。本稿では、特に注記しない限り、この人々がウイルタ語で自分たちを呼んだ名称を本来の発音に則した表記で書く「ウイルタ」（ロシア語で ujl'ta、英語で uilta）を用いている。

1.1.2 民族人口

前節で述べた民族名称の混乱は、民族の同一性（アイデンティティ）や人口の記録を不明瞭にする要因となってきた。民族自称と民族の同一性の問題は、Roon（1996: 10-11）が指

[1] 2008 年にウイルタ語の書記法を教える教科書（Ikegami et al. 2008）が刊行されてから、ビビコワ氏やフェジャエワ氏は、ロシア語の書記法で ujl'ta（ロシア字で уйльта）ではなくウイルタ語の書記法で uilta（ロシア字で уилта）と書くべきだと主張している。

摘しているほか、近年に Missonova（2006, 2009a, 2009b）が詳しく扱っている。自称のほかにも、異民族間の婚姻による親族系統の複雑化や、伝統文化・言語の衰退も関連して、昔も今もいったい誰が「ウイルタ」であるかを特定することは非常に難しい。このような問題を踏まえて、ここでは二つの人口統計を紹介する。

まず、2002 年ロシア国勢調査を参照したい。この結果では、本稿でいうウイルタに相当する「ウリタ（オロク）ul'ta (orok)」の総人口が 346 人、そのうち 298 人がサハリン州に居住すると報告された。**表 1-1** は、サハリン州の総人口約 55 万人の民族ごとの人口をまとめたものである。これを見ると、ウイルタが総人口比 1%に満たない少数民族の一つであるとわかる。

表 1-1　サハリン州の民族構成（2002 年 1 月現在）

	人口（人）	比率
ロシア人	460,778	84%
朝鮮人	29,592	5%
ウクライナ人	21,831	4%
タタール人	6,831	1%
ベラルーシ人	5,455	1%
その他（総人口比が各 1%未満）	22,208	4%
合計	546,695	100%

	人口（人）
ニヴフ	2,450
ウイルタ	298
エウェンキー	243
ナーナイ	159
その他	19,058
合計	22,208

（FSGS 2004 にもとづく作表）

Missonova（2009: 196）の調べによると、2002 年の国勢調査では、「ウリタ（オロク）ul'ta (orok)」と登録される 346 人のうち、自分を「ウリタ ul'ta」と答えた人が 42 人、「ウイルタ ujl'ta」と答えた人が 72 人、「オロキ oroki」と答えた人が 37 人、「ウリタ語を母語とするオロチ」と答えた人が 37 人、「ウリタ語を母語とするオロチョン」と答えた人が 148 人、「ウリタ語を母語とするウリタ」と答えた人が 10 人だったという。この回答内訳を見ると、ウイルタではなく、アムール川流域に居住するウリチやオロチの人々が誤って計数されている可能性があり、サハリン州外の人口は実際のところ 48 人より少ないと推測される。他方、「オロチョン」を民族名称だと思っている人で母語が何かわからないウイルタの人がいれば、この人口に計数されなかっただろう。この点を考えれば、実際のサハリン州内の人口は報告された 298 人よりも多いと推測される。

次に、2010 年のサハリンエナジー社の報告を参照したい（**表 1-2**）。サハリンの資源開発の一環としてサハリン 2 プロジェクトを統括するサハリンエナジー社は、地方議会とサハリン州と共同してサハリン島の先住少数民族の生活向上を目指す持続的な発展事業「サハ

リン先住少数民族発展計画」を実施している。2006～2010 年を第一期、2011～2015 年を第二期としており、以下で参照するのは、第二期を前にサハリンエナジー社がサハリン州と各地区の統計資料をもとに報告したものである。

サハリンエナジー社（SEIC 2010: 14-15）によると、2010 年 1 月現在、サハリン州内の 6 つの地区に居住する北方少数先住民族のうちウイルタは 362 人と数えられた（SEIC 2010: 14-15）。ただし、州都ユジノ・サハリンスク市ほか、州内の他の地域に居住するウイルタの数は含まない。なお、調査の具体的な質問項目など、何を基準に「ウイルタ（オロク）」と判断しているかという点は明らかではない。

表 1-2　サハリン州における北方先住少数民族の人口

北方先住少数民族が居住する地区	ニヴフ	ウイルタ（オロク）	エウェンキー	ナーナイ	その他の少数民族	計
オハ地区	1312	18	86	6	-	1422
ノグリキ地区	842	156	99	7	-	1104
ティモフスク地区	268	-	6	6	9	289
アレクサンドロフスク・サハリンスキー地区	79	-	93	-	-	172
スミルニフ地区	5	10	4	19	15	53
ポロナイスク地区	176	178	38	126	7	525
計	2682	362	326	164	31	3565
ユジノ・サハリンスク市	調査中	調査中	調査中	調査中	調査中	約 100

※　サハリン州と地区の調べ（2010 年 1 月 1 日現在）。7 か所以外の地域にも少数が居住する可能性がある 。

（SEIC 2010: 14-15；筆者訳、一部改変）

以上、2002 年のロシア国勢調査および 2010 年のサハリンエナジー社の報告を参照したが、いずれも数え方に曖昧な点がある。結局のところ、ウイルタの民族人口を正確に答えることは難しく、「約 350 人」（Roon 2009）または「300 人ないし 400 人」（池上 1997: i、Tsumagari 2009: 2）というように、幅を持たせて答えるのが適当と思われる。

1.1.3 居住地域と地域グループ

Roon（1996）は、18～20 世紀におけるウイルタの居住地を上掲の**図 1-1** のように示した[2]。この居住地の広がりは概して今日まで保たれているが、上掲の**表 1-2**（SEIC 2010: 14-15）で居住地の内訳を見てわかるように、2010 年現在のウイルタの人口は特に島北東部オホーツク海沿岸のノグリキ地区と中部チェルペーニヤ湾岸のポロナイスク地区という 2 ヶ所に集

[2] 同書によると、狩猟のために訪れた最北地域はシュミット半島であり、最南地域はアニワ湾で、そこは交易の目的で訪れたという。

中している。このような居住地域の分布は、ウイルタの伝統的な生活様式、そして地域グループの存在と深く関係している。

ウイルタの人々は、19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけては複合的な経済活動を営み、陸獣・海獣の狩猟、漁撈、採集およびトナカイ飼育を行っていた（Roon 1996: 19, 1999: 41）。他に、交易も彼らの経済を支える重要な役割を担っていた。近隣の諸民族との交易によりウイルタの社会に新式の武器や衣服、食糧がもたらされていたという（Roon 1996: 19, 1999: 41）。

彼らはトナカイを橇の牽引や騎乗に利用して、季節的に移動する生活を営んできた。基本的に、冬は島北部の内陸地域で毛皮獣や野生トナカイ、クマなどの狩猟をして過ごし、夏はオホーツク海沿岸地域の川や海で魚をとって暮らすという季節移動のパターンを繰り返した（Roon 1996: 61-63）。また、アザラシなど海獣猟も行っていた。季節移動のパターンは集団ごとに異なり、それぞれの集団に季節ごとの拠点となる場所が決まっている。

Roon（1996: 13）はウイルタの季節移動について、北のウイルタと南のウイルタに分けて記述した。以下、同書の記述を要約する。

・北のウイルタ（ドロンネニ *doronneni*）：北サハリンに居住し、春夏季はシュミット半島からルンスキー湾までのオホーツク海沿岸地域に、秋冬季は北サハリン平野と東サハリン山脈に分布した
・南のウイルタ（スンネニ *sunneni*）：春夏季はチェルペーニヤ湾とポロナイ川地域で暮らし、冬には東サハリン山脈へと移動した

この二つの地域グループを特徴づける春夏季の拠点が、今日の集住地域と結びついている。言い換えると、北のウイルタが春夏季の拠点としてきた「シュミット半島からルンスキー湾までのオホーツク海沿岸地域」に今日のノグリキ地区が含まれ、南のウイルタが春夏季の拠点としてきた「チェルペーニヤ湾とポロナイ川地域」に今日のポロナイスク地区が含まれる。つまり、今日のノグリキ地区に居住するグループが北のウイルタと、ポロナイスク地区に居住するグループが南のウイルタと対応することがわかる。

Roon（1996: 13）は、かつては地域グループを明確に分けることはなかったが、20 世紀初め日露によるサハリン分割により二つの地域グループが分離したという見解を示した。この地域グループの分離は、後述のウイルタ語の方言分類と深く関わっていると考えられる。

1.2 ウイルタ語のあらまし

1.2.1 系統

ウイルタ語は、ウイルタの固有の言語で、ツングース諸語[3]の一つである。ツングース諸語の系統分類には諸説あるが、筆者の見たところ、日本では**表 1-3** に示す Ikegami（1974 [2001]）／池上（1989a）によるものが広く認められている。これによると、ウイルタ語はツングース諸語のなかでもナーナイ語やウルチャ語と近い親縁関係にあり、「第Ⅲ群」に属する（Ikegami 1974 [2001: 394]；池上 1989a: 1063 も参考）。

表 1-3　Ikegami（1974 [2001]）によるツングース諸語の系統分類

第Ⅰ群：エウェンキー語、ソロン語、ネギダール語、エウェン語
第Ⅱ群：ウデヘ語、オロチ語
第Ⅲ群：ナーナイ語、ウルチャ語、ウイルタ語
第Ⅳ群：満洲語

（Ikegami 1974 [2001: 395]；一部省略）

なお、上記のツングース諸語全体を「ツングース語」という一つの「言語」、上に掲げる個々の言語を「エウェン方言」「エウェンキー方言」のように「方言」と呼ぶこともある（池上 1971b [2004]参考）。音対応に支えられた親縁関係の確かさとコミュニケーションの可否（筆者の聴取では、ウイルタ語の話し手がたまたまオロチ語が話されるのを聞いても、ある程度は理解できるという）という観点で、そのような見方もできる。しかし、亀井ほか（1996: 466）によると、同一の言語の異なる方言であることを決める条件の一つに「その上に同一の標準語や文字共通語が被さっていること」があり、上記の言語群にはその全体に通用する標準語や文字共通語が存在しない点から、本稿では上記の言語変種を別々の「言語」と呼ぶ。

1.2.2 方言分類

ツングース諸語の比較研究には長年の蓄積があり、上掲の**表 1-3** の分類がほぼ定着している。しかし、そこに含まれる個々の言語内部の方言分類については未解明の点が多い。

ウイルタ語の方言分類については、池上（1994a [2001]）が詳細に検討した。池上（1994a [2001: 247-248]）は、ポロナイスク（旧、敷香）を中心とする地方で話されるウイルタ語を

[3] ツングース諸語（ツングース語）、チュルク諸語（チュルク語）、モンゴル諸語（蒙古語）は、三つの言語グループでまとめてアルタイ諸言語（アルタイ語、あるいはアルタイ諸語）と総称される。アルタイ諸言語、さらには朝鮮語や日本語を巻き込んでの系統関係については古くから議論されており、その結果、音韻対応や文法的な類似性が認められている（池上 1978[2004]、風間 2003b）。しかし、それらが系統関係によるものなのか、言語接触による変化の結果であるのか必ずしも明らかではない（ibid.）。

「南方言」、ワールを中心とする地方で話されるウイルタ語を「北方言」と定義した。ただし、小地域ごとの方言がいくつもあった可能性、および、南・北の方言の顕著な境界がどこかにあったか、あったならばどのあたりにあったかなどの問題は明らかになっていないと述べ、明確な方言区域は定めていない（ibid.[2001: 249]）。

また、池上（1994a [2001]）の後に、Novikova & Sem（1997: 214）がウイルタ語の概説のなかで下記のように述べている。

> オロッコ語［筆者注：ウイルタ語］は二つの方言に分けられる。*doronneeni* という地域集団が話す北方言（東サハリン方言）と、*sunneeni* という集団が話す南方言（ポロナイスク方言）である。これらの方言の差異は、おもに音韻と語彙に見られる。文法的な特徴は、さまざまな氏族との同化の過程と関連する。（Novikova & Sem 1997: 214）

なお、戦後に北海道へ移住したウイルタは後者のグループに属し、南方言を話すということにも言及した（ibid.: 202）。[4]

以上に挙げた池上（1994a [2001]）や Novikova & Sem（1997）の方言分類と、1.1.3 で参照した Roon（1996）による地域グループの分類を照らし合わせると、北のグループの居住地域と「北方言」の話される地域、南のグループの居住地域と「南方言」の話される地域が、それぞれ対応することがわかる。歴史的には、北のウイルタが話したウイルタ語が北方言、南のウイルタが話したウイルタ語が南方言というように、考えることができる。

ただし、今日の状況では、居住地域が直接にウイルタ語の方言に結びつくとも限らない。たとえば、津曲（2010）が紹介したウイルタ語話者の一人は 2001 年の調査時に北方言の地域に含まれるノグリキ町に住んでいたが、実は幼少時、南方言の地域である敷香（今日のポロナイスク）で学んだことがあったとわかった（津曲 2010: 160）。この話者のように、戦後に南から北へ移り住んだ人もいるので、居住地とは別に、話し手が言語を習得した地域にも注意しなければならない。

また、筆者の調査協力者には自分でウイルタ語を熱心に研究している人がおり、まれに聞き取り調査で自分のとは別の方言で答えることがある。後述するようにウイルタ語を話せる人も話す機会も少なくなった今日、話せる人でも語句や表現を思い出せないことが多い。その場合、既刊の辞書（池上 1997、Ozolinja 2001, Ozolinja & Fedjaeva 2004）を調べて、辞書どおりの語句や表現を調査者に提供することがある。方言を調べる場合、この点にも注意する必要がある。

[4] 方言を分類しない立場もある。Ozolinja（2002）は、歴史的には南北の方言差を認めるが、今日的には方言を分けないという立場を示した。同じ著者による辞書（Ozolinja 2001）でも方言が区別されていない。

1.2.3 書記法

ウイルタの人々は、もともと自分たちの文字を持たず、話すことばを書き記す習慣がなかった。 そのため、ウイルタ語の記録は最近まで、ネイティブ以外の調査者や研究者により、かなやローマ字、ロシア字など他言語の文字で、各々に異なる方式で書かれてきた。

今日知られているかぎり最も古いウイルタ語の記録は、19 世紀中頃にサハリンを訪れた日本の探検家がかな書きで記した 369 項目の語彙と短文である（**図 1-2**；『カラフト西奥地里数書』「ヲロッコ語」、池上 1971a [2002]）。1971 年に池上二良が活字化した後、谷澤（1980）によって原本を記した人物は松浦武四郎と推定された（Ikegami 1993 [2001: 294]）。そのほかにも、1854（嘉永 7）年に記されたとされる『蝦夷紀行』（1859（安政 6）年に筆写）にもウイルタ語の 1 から 10 までの数詞がかな書きで著わされている（池上 2000: 87）。

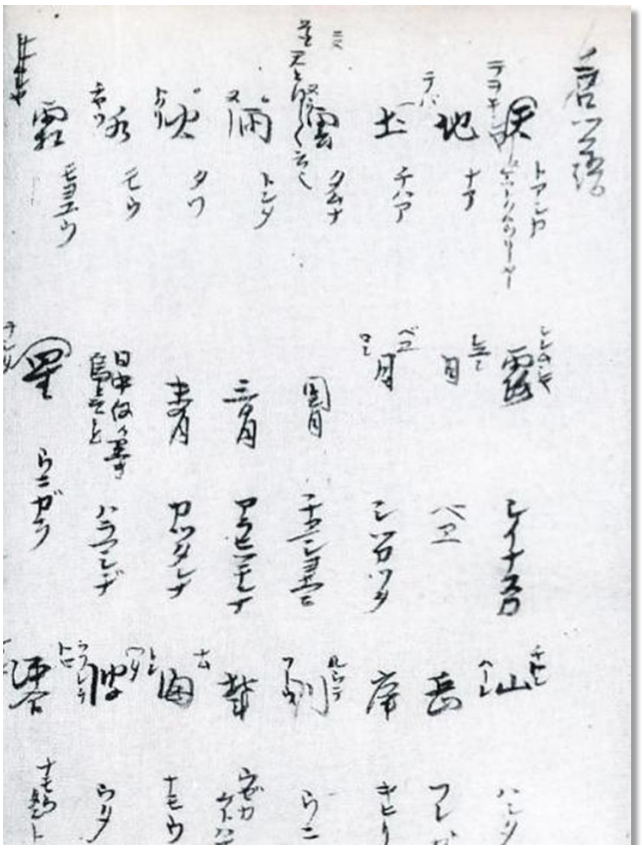


図 1-2　19 世紀中頃にかな書きで記されたウイルタ語の語彙集
（『カラフト西奥地里数書』「ヲロッコ語」；池上 1971 [2002] より一部転載）

ウイルタ自身がウイルタ語を書き綴った記録には、ダーヒンニェニ　ゲンダーヌ（北川源太郎）による『ウイルタのことば』シリーズ（北川 1988 ほか）がある。旧日本領・敷香の町の幌内川（今日のポロナイ川）を挟んで対岸にある集落サチ（佐知；今日のユジュヌ

ィ Juzhny 島）で生まれ、オタス（後述 2.4.2）で教育を受けたゲンダーヌは、徴兵され 8 年間のシベリア抑留を経た後に北海道網走市に移り住んだ。その生涯は、田中・ゲンダーヌ（1978）によって知られるところである。母語としてのウイルタ語の知識と日本語の知識を持ち合わせていたゲンダーヌは、ウイルタ語の日常表現で用いられる短文をかなで書きためた。その内容は、1984 年に同氏が亡くなった後に、池上二良や津曲敏郎により音韻表記と日本語訳を加えて刊行された（池上 1986、池上・津曲 1988, 1990, 1991）。

ウイルタの故地サハリンでウイルタ語に一定の書記法を決めようという動きが本格的に始まったのは、外国人の立ち入りが自由になった 1990 年代に入ってからである。池上二良をはじめとした研究者と、サハリンのウイルタ語の話者たちが共同して、文字の策定と文字教本（書き方を教える教科書）の編纂に取り組んだ。

ウイルタ語の文字体系は、1992 年に池上がサハリン州政府に提出した草案（Ikegami 1994 [2001]所収）をもとに作成された。この草案の冒頭で池上は、ウイルタ語が南方言と北方言に分かれること、北方言よりも南方言がより古い特徴をもつこと、したがって、ウイルタ語文語の基礎は北方言よりも南方言におくべきであることを強調した（Ikegami 1994 [2001: 145-146]）。その後、1993 年 7 月にモスクワのロシア科学アカデミー言語研究所で開催された会議において、**図 1-3** の文字体系が決定した。[5]

ローマ字をもとにするか、ロシア字をもとにするかは意見が分かれたが、結果的には一般のロシア字をもとにした書き方が採用された。これは、日常的にロシア語を使っている現地の人々が学びやすいようにするためだった。

また全体的な編集方針として、方言的差異を示す単語や句はできるだけ避け、ウイルタ語の話された地域全域に共通する語句を使用するように薦められた（池上 2000: 75）。ただし、ウイルタ語において（ウイルタの生活において）重要な語句は挙げることとし、その場合は略号をつけてどの方言のかたちかを明示することとした（ibid.）。[6]

文字教本の編集には、池上二良教授が筆頭となって専門的な指導を行った。ウイルタ語の話し手からは上述のビビコワ E. A.、フェジャエワ I. Ja.（以上、北方言の話者）、キタジマ L. R.（Kitazima Ljubov' Romanovna）、ミナト S.（Minato Sirjuko（Ljudmila Xomovna））（以上、南方言の話者）の 4 名が編集作業に加わった。また、現・サハリン州立郷土博物館館長のローン T. P.も編集作業の調整に尽力した。

[5] 1993 年の会議では、ロシア字を用いること、長母音を VV ではなく $\bar{V}$ と書くことなど、1992 年の池上氏による提案と異なる方式も数点取り入れられた。
[6] 池上（2000: 75）によると、文字教本のなかの各字母の学習用の語例・例文はすべて、ビビコワ E. A.が用意したものである。



図 1-3　ウイルタ語の文字一覧（Ikegami et al. 2008: 見返し；通し番号は筆者による挿入）

v1.1　a　*aduli*「網」
v1.2　aa　*aapu*「帽子」
v2.1　e　*keuri*「胃」
v2.2　ee　*dəunǰee*「左」
v3.1　i　*isal*「目」
v3.2　ii　*iiwə*「杓子」
v4.1　o　*orge*「ブタ」
v4.2　oo　*soondo*「仔トナカイ」[7]
v5.1　ө　*pərө*「親指」
v5.2　өө　*өөrө*「カラフトマス」
v6.1　u　*udala*「カエル」
v6.2　uu　*uurini*「乗る」
v7.1　ə　*əsələ*「トカゲ」
v7.2　əə　*əəktə*「女」

c1　b　*bee*「月」
c2　w　*wəskə*「袖」
c3　g　*gusi*「ワシ」
c4　d　*daali*「太鼓」
c5　ǰ　*ǰili*「頭」
c6　j　*joodopu*「ヨードプ（振楽器）」
c7　k　*kurkə*「白樺樹皮製の取っ手付き容器」
c8　l　*lokko*「カレイ」
c9　m　*muri*「ウマ」
c10　n　*nuŋna*「ガン（雁）」
c11　w　*wəskə*「袖」
c12　ŋ　*ŋinda*「イヌ」
c13　p　*paloo*「槌」
c14　r　*poro*「エゾライチョウ」
c15　s　*sillaa*「花」
c16　t　*tuksa*「ノウサギ」
c17　x　*xoopu*「斧」
c18　č　*čooraa*「鈴」

[7] 編者からの聞き取りによれば、この語の表記は *soondoo* とあるべき。



写真 1-4　ウイルタ語教科書の出版を報じる広告塔（2008 年 4 月 14 日ロシア・サハリン州ユジノ・サハリンスク市にて、津曲敏郎撮影）

出版に至るまでには、出版資金調達のためのミソノワ L. I.（Missonova Ljudmila Ivanovna；ロシア科学アカデミー人類学研究所）らの働きかけなど、多くの人たちの協力があった（山田 2010b: 105-106、Missonova 2010）。結果的には、サハリンエナジー社とサハリン州先住民族委員会が共同で行う「サハリン先住少数民族発展計画」（SIMDP）の出資によって、2008 年 4 月にようやく出版が実現することとなる。

いよいよ出版された教科書（文字教本）『ウイルタ語で話しましょう』（*Uiltadairisu: Govorim po-ujl'tinski*, Ikegami et al. 2008）は、ロシア字に特殊文字を加えたウイルタ語の書記法を教えることが主眼になっている。2008 年の出版時には、ユジノ・サハリンスク市で出版記念式典が開かれ、「ウイルタの子どもたちに、初めての教科書」という文句で、大々的に報じられた（**写真 1-4**）。事実、ウイルタ語を書いて学習するという道が子どもたちに拓かれたことを意味する、大きな出来事だった。

1.2.4 今日の言語状況

書記法が定められ、ウイルタ語を学ぶ教育の道が拓かれた一方で、今日サハリンに暮らすウイルタの人々が日常的には皆、ロシア語を話すという事実に変わりない。そのなかでロシア語の他にウイルタ語も話せるという人はごく少数である。

Ozolinja（2002: 144-145）によると、2000 年 9 月の調査で、口頭文芸の知識がありロシア語の助けをほとんど借りずにウイルタ語を話せる人は約 10 人、口頭文芸の知識がなくロシア語を交えればある程度話せる人は 16 人（以上の約 26 人は全員 50 歳以上）、ロシア語による説明を多く交えればウイルタ語を理解できる人は 24 人であったという。つまり、その時点で多かれ少なかれウイルタ語の知識がある人は約 50 人ということになる。

2007 年 10 月に話者の一人であるビビコワ E.A.から津曲敏郎が得た情報によれば、ウイル

タ語を話せる人は 16 人という。このとき、ビビコワは全員の名前を挙げてこの人数を割り出した。

2012 年 11 月にサハリン州ユジノ・サハリンスク市で開催された国際学術会議「極東先住民族の歴史と文化」（主催：サハリン州文化庁・サハリン州立郷土博物館）で、ソロヴィエワ O. F.（Solov'eva O. F.）（サハリン州立郷土博物館）は、「ウイルタ語を（さまざまなレベルで）コミュニケーションに用いることのできる人は 10 人以下」と報告した（ソロヴィエワ p.c.）。2008 年から現在までノグリキ地区とポロナイスク地区で調査を行っている筆者にも、ソロヴィエワの提示した数字は妥当と考えられる。筆者が知り合った最も若い話し手は、1950 年代生まれ（2013 年現在、63 歳）のコーヌソワ L. N.（Konusova Ljubov' Nikolaevna；ワール村在住；7.0 で紹介）である。

地域ごとの人数について補足すると、筆者の調査でわかった範囲では、ポロナイスク地区にはウイルタ語の知識のある人が 3 名いる。だが、この 3 名は互いに交流がなく、ウイルタ語を会話で使う機会はほとんどない。他方、ワール村を含むノグリキ地区には少なくとも 6 名はウイルタ語を話せる人がおり、互いに交流がある。全員普段はロシア語で話すが、なかには話者どうしで話す時にはウイルタ語を用いるように心がけている人もいる。現在の状況については、北の地方のほうが比較的ウイルタ語の使用が盛んであるといえる。

いずれにしても、現在ウイルタ語を話せる人数はわずかで、しかも高齢であることから、この言語が近い将来に話されなくなる危険性は非常に高い。「消滅の危機に瀕した言語」の一つとして記録・保存が急がれるところである。

ウイルタ語を教える教育活動について、2013 年現在、ポロナイスク市にあるポロナイスク市立北方民族伝統産業技術伝習指定校全寮制普通科学校第 3 学習院（以下簡略に、ポロナイスク第三学校）のほか、ノグリキ町の有志がノグリキ町立郷土博物館で開いているウイルタ語教室で、文字教本（Ikegami et al. 2008）をつかったウイルタ語の学習が継続的に行われている。

ポロナイスク第三学校では、文字教本の編者の一人であるミナト　シリュコ（1943 年生まれ）が 2・3・4 年生対象の科目「郷土のことば」で、ウイルタ語を教えている（Missonova 2010: 107；筆者の現地調査でも確認）（**写真 1-5**）。

ノグリキ町のウイルタ語教室は、やはり文字教本の編者であるビビコワ　E. A.（1940 年生まれ）の呼びかけで 2010 年 10 月に発足した。その後も同町立郷土博物館が積極的に支援し、大人・子どもが集まる自主的な市民活動として現在まで継続している（山田 2011d）（**写真 1-6**）。

2012 年 9 月には国連の世界人権宣言がウイルタ語に翻訳され、ウイルタの文字で書かれたものが発表された。同 13 日にユジノ・サハリンスク市で催されたプレゼンテーションでは、ウイルタ語を学習した子どもたちが歌や踊り、詩の暗唱などを披露した（**写真 1-7**）。



写真 1-5　ポロナイスク第三学校の授業科目「郷土のことば」でウイルタ語を教えるミナトシリュコ（2011 年 1 月 12 日ロシア連邦サハリン州ポロナイスク市にて、筆者撮影）



写真 1-6　ノグリキ町立郷土博物館で行われているウイルタ語教室で熱心にノートをとる参加者（2010 年 10 月 22 日ロシア連邦サハリン州ノグリキ町にて、筆者撮影）



写真 1-7　世界人権宣言ウイルタ語訳のプレゼンテーションで登壇した子どもたちと関係者（2012 年 9 月 13 日ロシア連邦サハリン州ユジノ・サハリンスク市にて、筆者撮影）

第 2 章　ウイルタ語と言語接触

本章では、ウイルタ語の記述研究の背景として、この言語をめぐる状況がどのように変遷していたのか、特に近隣の諸言語と接触による影響関係について、文献からわかる情報を整理する。新しい情報や研究成果を述べるものではなく、あくまで既刊の文献から情報をまとめた報告である。

なお本章は拙稿 Yamada（2009）の構成をもとにし、その内容を大幅に加筆・修正したものである。



図 2-1　サハリンの位置

2.1 概要

2.1.1 サハリンの位置づけ

ウイルタ語と近隣の諸言語に対する考察に先立って、ウイルタ語が話されてきた地域であるサハリンの位置づけを確認しておきたい。この地域を考察対象とする研究では、アムール川下流域とサハリンを連続する一つの地域として見ることが多い。以下、アムール川下流域とサハリンの連続性に関する記述を参照する。

第一に、地理的な連続性である。サハリンは、ユーラシア大陸の東側、オホーツク海の

南西部に位置する（**図 2-1**）。アムール川下流域とサハリンの西海岸とを分かつ間宮海峡の最も狭い部分では両岸の距離がわずか 7km ほどである。しかも冬季は結氷するので、氷の上を行き来することができる。人だけでなく動物も、古くから比較的自由に大陸と島の間を移動していたと考えられる。

第二に、文化の連続性である。これについては自然環境と関連して、先住民の生業や文化がいずれも複合的であるという点から説明しなければならない。アムール川下流域とサハリンを含む一帯の自然環境には、北方的な要素と南方的な要素が混在しているといわれている。気候や植生についていえば、比較的低緯度であるにもかかわらず、海流や気流などの関係で冷温帯から亜寒帯、寒帯への移行地帯であり、植生が南から北に向かって混合樹林から針葉樹林へと変わり、動物相も温帯のものから亜寒帯、寒帯のものへと移行する途中にある（佐々木 1991: 284）。しかも、同じ緯度でも内陸部は気温の年較差が大きいため、冬は非常に寒冷であるが、夏には高温になり、農耕が可能であるのに対し、海岸部では冬の寒さは内陸に比べて厳しくないが、夏も気温が上がらないためにかえって農耕に不向きになる場合もある（ibid.: 285）。また、山岳地帯の高地では河谷の低地に比べ、全体的に冷涼、寒冷であるという（ibid.）。こうした自然環境と密接に関連して、この地域一帯に暮らす人々の伝統的な生活様式には、陸獣や海獣の狩猟、川や海での漁撈、ベリー類など植物の採集、農耕、移動や移送のためのトナカイ飼育など、多様な生業活動が見られる。人々は変化に富んだ自然環境に適応して、多様な生業活動を組み合わせることよって生活を営んできたのである。生業に関する物質文化・精神文化の要素がいくつかの民族間で共通することが少なくない。そしてその共通点と漸次的な異なりにより、アムール川下流域とサハリンの文化が連続していると考えられてきた。

第三に、経済の連続性である。これは、先の二点と密接に関連する。歴史研究によって、サハリンは外的には中国や日本といった国家やシベリアの諸民族の交流を仲介する地域の一部であり、内的にも交易、交流が盛んな地域だったことが明らかになっている。佐々木（1991: 285）は、アムール川下流域とサハリンについて、その「文化の十字路」としての位置づけを強調し、「この地域では生産技術の向上や社会システムの変化は、多くの場合中国、満州、モンゴル、朝鮮、日本などの国家とその住民との交流によって引き起こされていた」と述べた。また、当該地域には、一つの「交易圏」「経済圏」が形成されていたとし、生業活動の異なる民族集団が交易や交流を盛んに行い、各々の過不足を補充しあっていたとも指摘した（佐々木 1991: 287）。このような外的・内的な交流や交易によって、共通の生活物資が広まるなどの連続性が見られる。

以上の 3 点に加え、言語についても、アムール下流域とサハリンは連続する地域としてひとくくりに扱われる。たとえば、池上（1989b）は北東アジアで古くから話されてきた諸言語について、便宜的に「東シベリア」「アムール川下流地域」「中国東北部」の三つの地域に分けて説明した。池上（1989b）では「アムール川下流地域」に、アムール川の松花江との合流点からアムール川河口までの流域一帯、ウスリー川沿岸から沿海州、そして、サ

ハリン北部と中部が含まれる。この「アムール川下流地域」は、「比較的小地域にもかかわらず、少なからぬ言語が密に分布している」ことが特徴とされている（池上 1989b: 17）。「密に分布する」言語のなかには、系統関係のある言語もあれば、そうでない孤立的な言語もある。後述するサハリンの諸言語も、そのような連続性のなかに位置づけられる。

以上の記述で見てきたアムール川下流域とサハリンの連続性を視野に入れたうえで、次節以下では、サハリンに焦点をしぼってゆく。上に述べた四つの点と関連して、サハリンに居住するウイルタの人々が近隣の諸民族と交流するときにどの言語を用いたのか、またウイルタの人々が話す言語の変化が何の影響で起こったのか、という問題に着目する。

2.1.2 サハリンの先住民族

サハリンの先住民族といった場合に、歴史学や民族学の文献で挙げられるのがアイヌ、ニヴフ、ウイルタである。ウイルタは、アイヌやニヴフよりも後に大陸からやって来た民族と考えられている。たとえば、1850 年代にアムール川下流域を調査したシュレンク（Schrenck L. von）は、ウイルタ（オロキ）を、ニヴフ（ギリヤーク）やアイヌの人々がすでに居住していた地域に編入してきた「第三の民族」とした（Schrenck 1881: 19）。

ウイルタの移住時期については、さまざまな説がある。1890 年代にサハリンを訪れたシュテルンベルグ（Shternberg L. Ja.）は、ウイルタの人々は 17 世紀になってアムール地方からサハリンに移ってきたと指摘した（Shternberg 1933: 9）。また、加藤九祚は、総合的な文献調査にもとづき、ウイルタの人々は「17 世紀以前に、大陸のアムグニ川流域からサハリンに移住した」と述べている（加藤 1986: 343）。

民族の起源や歴史については、上述の文化的な連続性のほか民族名称の複雑さと関連して、多くの資料を調べても結局はっきりしたことはわからない（加藤 1986: 376-379 参考）。ここまでに参照した記述をもとに、サハリンではアイヌ、ニヴフ、ウイルタという三つの民族集団が少なくとも 300 年間はこの島に居住していたと仮定して、話を先に進めたい。

2.1.3 ウイルタ語との接触言語

図 2-2 は、19 世紀末から 20 世紀初めのサハリンで四つの先住民言語が話されていたことを示している。四つの言語とは、アイヌ語、ニヴフ語、ウイルタ語、エウェンキー語であり、前節で述べた三つの民族集団が話す言語に、エウェンキー語が加わる。本節では、ウイルタ語の接触言語として、アイヌ語、ニヴフ語、エウェンキー語の基本的な情報をまとめる。

アイヌ語は、アイヌの人々によって、北海道、サハリン、千島列島などで話されてきた言語である。他の言語との系統関係は認められていない。アイヌ語の方言は、大きくサハ

リン方言（Sakhalin dialects）[8]、千島方言（Kurile dialects）[9]、北海道方言（Hokkaido dialects）の三つに分類され、この三つの方言では基礎語彙に著しい差異がある（田村 1988: 7）。

サハリンで話されるアイヌ語サハリン方言は、**図 2-2** が示すように、島の南半分で話されていた。田村（1988: 7）によると、サハリン方言は、千島列島で話された千島方言よりも北海道で話された北海道方言に近いという。

サハリン方言のなかでも、西海岸と東海岸との間や南北に若干の差異がある（田村 1988: 7）。ただ、島中部のタライカ方言（**図 2-2** では島中部にあるポロナイスク “Poronaysk” の東側にプロットされている）がサハリンの他の地域と際立って違っており、タライカ方言にはむしろ北海道南部の方言との共通性が指摘されているという（ibid.）。もっとも、村崎（2004: 17）によれば、タライカ方言の話者（1882 年生まれ）と西海岸の方言の話者たち（1894 年生まれのマオカ方言の話者と 1900 年生まれのライチシカ方言の話者）が戦後の北海道で出会ったとき、それぞれのアイヌ語方言を話して支障なく会話ができたという。サハリン方言のなかに地域による差異があっても、コミュニケーションができないほどではなかったようである。

1905〜1945 年に日本領だった北緯 50 度以南のサハリンで、アイヌの居住者は多いときで約 1500 人を数えた（田村 2008: 470 にもとづく）。しかし、戦後にそのほとんどが北海道などへ移住し、今日のサハリンの統計ではアイヌの居住者はいないことになっている（SEIC 2006: 13, 15）。

ニヴフ語（旧称ギリヤーク語）[10]は、ニヴフの人々によって、アムール川下流域とサハリンの北部で話されてきた言語である。アイヌ語と同様、他の諸言語との系統関係は認められていない。ニヴフ語については、広く北東アジアの系統的に孤立した諸言語の総称である「古アジア諸語」（または「旧シベリア諸語」ともいう）の一つに加えられる。

ニヴフ語の方言は、大きな分類ではアムール方言とサハリン方言に分かれる（丹菊 2006: 100, 2009: 30）。アムール方言は、アムール川下流域およびサハリン北西海岸で、サハリン方言はサハリンの東海岸で話される（丹菊 2006: 100）。細かい分類では、サハリン方言を、さらに東サハリン方言、北サハリン方言（シュミット方言）、南サハリン方言（ポロナイスク方言）の三つに分けることもできるという（Gruzdeva 1998: 7）。細かい分類をする Gruzdeva（1998: 7）によると、アムール方言と東サハリン方言は、話者どうしが互いにコミュニケーションできないほど異なるという。北サハリン方言は、アムール方言と東サハリン方言

---

[8] 「樺太（カラフト）アイヌ語」「アイヌ語樺太（カラフト）方言」とも呼ばれる。話されていた時期や地域を考慮すれば、「樺太（カラフト）」の方言（言語）と見るのが適当かもしれないが、本稿では便宜的に、サハリンで話されたアイヌ語の方言という意味で「サハリン方言」という名称を用いる。

[9] 千島方言は、わずかな記録によってしか知ることができず、しかも、ほとんど語彙の面にとどまる（田村 1988: 7）。北海道方言ともサハリン方言とも、かなり異なる語彙が目立つという（ibid.）。

[10] なお、「ニヴフ」という名称は、アムール方言で「人間」を表わす語に由来する（丹菊 2009: 30）。サハリン方言を話す人々は自らを ɲiɣvŋ ~ ɲivŋ と呼んでいた（ibid.）。

の中間的な特徴をもつ（ibid.）。南サハリン方言は、音韻・文法・語彙の面で根本的に他の方言とは異なるといわれている（ibid.）。

2002 年ロシア国勢調査では、ニヴフの人口は 5,162 人で、そのうちニヴフ語の話し手は 688 人と報告された。丹菊（2006: 100, 2009: 30）によれば、話し手の高齢化と減少が急激に進んでおり、現在では 100 人を下回るという。

図 2-2 を見ると、サハリンでニヴフ語が話された地域は主として島の北部に分布している。ウイルタ語との接触についていえば、ワール村の近辺でウイルタ語北方言とニヴフ語サハリン方言（東サハリン方言）とが、ポロナイスクの近辺でウイルタ語南方言とニヴフ語サハリン方言（南サハリン方言）とが、それぞれ隣接していることがわかる。

エウェンキー語（エヴェンキ語）は、エウェンキーの人々によって、シベリア、モンゴル、中国に及ぶ広い範囲に分布する諸地域で話されてきた言語である。**図 2-2** からわかるように、20 世紀初めにも 20 世紀末にも、サハリンの北部でエウェンキー語が話されていた。この言語は、ウイルタ語と同じツングース諸語の一つだが、親縁関係では第 I 群に分類され、ウイルタ語の属する第 III 群との差異は大きい（**1.2.1 表 1-3** 参照）。

話される地域が広大な範囲に分布することと関連して、エウェンキー語は方言差が大きい。方言分類にはさまざまな説があるが、「南方言群」「北方言群」「東方言群」の三つに分類する場合[11]は、それぞれに含まれる方言を合計すると 51 にもなるという（Bulatova & Glenoble 1999: 3）。サハリンで話されるエウェンキー語はサハリン方言と呼ばれ、東方言群に含まれる（Atknine 1997: 114-117 参考）。サハリン方言は、それ以上細かくは分類されていない。

2002 年ロシア国勢調査では、ロシア国内のエウェンキーの人口は 35,527 人で、そのうちエウェンキー語の話し手は 7,584 人と報告された。サハリン州の 6 地区に居住するエウェンキーの人口は、2010 年 1 月現在で 326 人である（**1.1.2 表 1-2**；SEIC 2006: 13, 15）。

以下では、ここまでに挙げたアイヌ語、ニヴフ語、エウェンキー語に、ロシア語と日本語を加えた五つの言語と、ウイルタ語との関係に関する記述を見てゆく。前節で述べた大陸から続く地理・文化・経済の連続性やウイルタ民族の歴史を考えれば、以上の五つ以外にも、ウルチャ語、ナーナイ語、サハ語、朝鮮語などの言語が関与してくる。だが本稿では、他の言語との関係についてはひとまず置き、上記の五つの言語とウイルタ語について見ることにする。

[11] 四つに分類する見方もある。



図 2-2　サハリン先住民の言語状況（Gruzdeva & Volodin 1996；一部抜粋）
A：アイヌ語、N：ニヴフ語、O：ウイルタ語、E：エウェンキー語
それぞれ、赤色が 19 世紀末～20 世紀初の言語状況、緑色が 20 世紀末まで保たれた言語状況を表わす。
なお、この地図では示されていないが、19 世紀末～20 世紀初の北部ワール（Val）周辺でもウイルタ語が話されていたと考えられる。

2.2 ニヴフ語・アイヌ語との接触について

2.2.1 民族間の交流

以下では、まずニヴフ語・アイヌ語とウイルタ語の接触についての情報を見てゆく。本節 2.2.1 では、これらの言語を話す人々の相互関係に焦点を当てる。

居住地の分布は、上述のとおり、概してニヴフは島の北部、アイヌは島の南部が中心になっている。**図 2-2** の地図上で見れば、ウイルタの地域グループのうち、ワールを中心とした地域に住む北のグループがニヴフと、ポロナイスクを中心とした地域に住む南のグループがアイヌやニヴフと隣接していることが見てとれる。以下では、民族間の関わりがどのようなものであったかという点について、文献から得られる情報を確認しておきたい。

上述のシュレンクは、1850 年代の現地調査にもとづき、系統の異なる三つの民族が居住域を分けているという民族学的状況を報告した。その報告によると、ウイルタの人々は北部においてニヴフの居住域に深く入り込み、南部においてはアイヌと近接していたという（Schrenk 1881: 19）。また、彼らの相互関係や周辺地域との関係について、シュレンクは、ニヴフ、アイヌ、ウイルタの言語や性格は異なるが、それぞれがサハリンと周辺地域の諸民族との交流を仲介していると述べた（Shrenk 1883: 21；佐々木 2001: 30-31 も参照）。

ウイルタの季節移動のプロセスについて考察した Roon（1996: 14）は、彼らがニヴフやアイヌの居住域を侵すことはしなかったが、夏季にはその居住域内に住んでいたと述べている。上述（1.1.3）の地域グループごとの移動パターンと照らすと、北のウイルタは夏季の居住地において北東海岸の近くで定住していたニヴフの居住域内に、南のウイルタは夏季の居住地において中部のチェルペーニヤ湾の近くで定住していたアイヌやニヴフの居住域内に住んだと考えることができる。

彼らの間で土地をめぐる争いがあったことは、伝説として口承で伝えられてきた。すなわち、「タライカ戦争」「多来加合戦」「オロッコ曾我物語」などとして知られる、チェルペーニヤ湾岸近くで起こったというアイヌとウイルタの争いである。ウイルタの口頭文芸テールグとして語られたウイルタ語（南方言）のテキストは、池上（2002: 45-48）に採録されている。Vishnevskij（1994: 119-121）はこの言い伝えを 16〜17 世紀の出来事と考えており、この争いによってアイヌは島の南部に退き、ウイルタはタライカ地方を獲得して 18 世紀までにはチェルペーニヤ湾岸でアイヌやニヴフとともに平和に暮らした、と述べている。結局のところ、この争いは民族間の明確な境界を定めるものではなく、互いが隣接して暮らしていくなかでの秩序を定める契機となったと考えられている（Roon 1996: 15 も参照）。

民族間では交易が行われた。ウイルタは、サハリンの住民であったニヴフやアイヌだけでなく、ウルチャ、サハ（ヤクート）、ロシア人とも物々交換をする関係にあった（Levin & Potapov 1956: 858）。Levin & Potapov（ibid.）によると、ウイルタは、アムール流域まで出かけて行って、獣皮、海獣の脂、肉、毛皮を渡すかわりに、米、小麦粉、キビ、茶、砂糖、

タバコ、ロシア製または中国製の食器、中国製の布を得ていたという。

以上の記述から、アイヌ、ニヴフ、ウイルタの人々がサハリンという島のなかで隣り合い、交流していたようすが少しずつ見えてくる。居住地の分布を考え合わせれば、北の地方と南の地方との間でその状況が異なり、北のウイルタは北東海岸部のニヴフと、南のウイルタはチェルペーニヤ湾岸部のアイヌやニヴフとの交流があったと推測される。

2.2.2 言語状況

2.2.2.1 ニヴフ語とウイルタ語

互いに異なる言語を話す民族の間では、どのように交流ができたのだろうか？　本節では、ニヴフ語を話す人たちとウイルタ語を話す人たちのコミュニケーションについて、主として社会言語学の記述を見てゆく。

Burykin（1996: 993）は、19 世紀のアムール川下流域とサハリンではニヴフ語の話者が数的に優勢だったことから、ニヴフ語が共通言語として用いられていたと指摘している。Burykin（1996）の指摘は、ニヴフ語からウイルタ語を含むツングース諸語に入った借用語の数にもとづいているというが、その具体的なデータは論文のなかで挙げられていない。

他方、Gruzdeva（1996）の記述では、Burykin（1996）とは逆の可能性が示される。Gruzdeva（1996）は Shternberg（1908: VIII）の「ニヴフの近くに住む先住民族は、ニヴフ語以外ならどのような土着の言語も容易に習得したので、ニヴフはアイヌ語やウイルタ語などを話さなければならなかった」という記述を引用し、ニヴフの人々が多くの言語を併用したので、ニヴフ語が異なる民族間の共通言語になることはなかったことを示唆した。

Burykin（1996）と Gruzdeva（1996）の記述を概観して、Wurm（1996: 981）は、「ニヴフ語は、かつては民族共通語（リンガフランカ）として重要で、その結果としてニヴフの人々の近くに住んでいたツングース諸語の話者たちがニヴフ語の語を多く取り入れた。だが、ニヴフ語は 20 世紀初めには民族共通語としての重要性を失っていた」と述べ、19 世紀の後半に起こった変化を説明した。すなわち、ニヴフ語はかつて民族共通語として用いられたが、次第にその地位を失い、ニヴフの人々がウイルタ語を習得するようになったという。

20 世紀前半の南の地方でも、ニヴフの人がウイルタ語を話したと報告されている。たとえば金田一（1912: 10）は、ニヴフ語の音韻的な複雑さに言及して、次のように述べた。

> ギリヤーク即ちニクブン語［筆者注：サハリンのニヴフ語］の特色は、大層色々な珍らしい音に富むことで、中々日本人やアイヌ人には真似も出来ません。オロチョン［筆者注：ウイルタ］ですらもむずかしがって、よく覚えきれないというほどです。それ故彼等は、アイヌ語やロシア語やオロチョンの言葉を覚えて、それで以て交際しています（金田一 1912: 10［1980］）。

この報告は、Shternberg（1908: VIII）の指摘と共通して、ニヴフの人々が多言語使用で、ウイルタ語を話せたということを示唆している。

他方、筆者の聴取では、ウイルタの人たちがニヴフ語を話したということも聞く。ウイルタ語北方言の話者の一人であるビビコワ E. A.（1940 年ダーギ Dagi 生まれ）は、子どもの頃、ウイルタの大人たちがニヴフ語を話していたことを覚えている。ビビコワの両親もそうだったという。また、異なる民族がそれぞれ自分の言語を話しても会話が成り立っていて、ニヴフの人はウイルタ語を、ウイルタの人はニヴフ語を聞いて理解していた、と語る。

2.2.2.2 アイヌ語とウイルタ語

アイヌ語を話す人々とウイルタ語を話す人々の交流に関連して、社会言語学などでアイヌ語が共通語として用いられたという説がある。

Gruzdeva（1996）、Burykin（1996）などで、アイヌ語が民族間のコミュニケーションの主要な手段になっていたことが指摘されている。Wurm（1996b: 981）は、「アイヌ語は［中略］19 世紀のサハリンにおいて、その土地の民族の間だけでなく、彼らとロシア人や日本人の役人らとの間でも重要な共通語であった」と述べている。

19 世紀中頃にサハリンを訪れた日本の探検家は、アイヌ語の通訳をとおしてウイルタ語の語彙を採録した（池上 1971 [2002]）。手記による原本では、ウイルタ語の語彙項目の横にアイヌ語の見出し語が（ときには日本語の代わりに）添えられている（Ikegami 1971 [2002 : 158, 247]）。このことは、アイヌ語が民族共通語の役割を担ったことと関連するかもしれない。

これらの記述では、19 世紀に日本人がサハリンの先住民族とのコミュニケーションのためにアイヌ語を用いたことがあった可能性が示唆される。しかし、ウイルタの人々がアイヌ語をどの程度理解できたのか、またアイヌ語を話すことができたのかという点は、以上の記述からは明らかでない。

2.2.3 言語圏 I

Gruzdeva（1996: 1008）は、ニヴフ、アイヌ、ウイルタの言語状況は概して「多言語併用（multilingualism）」によって特徴づけられると述べた。ただ、サハリンのなかの地域的な差異や時間的な変化については疑問が残る。とりわけ、地域的な差異については、島内部の地理的な条件や民族の居住域などの社会的な条件が関わっている。これらの問題の詳細については、今後より広い分野での文献調査や考察が必要だろう。

一般に、二つ以上の言語が地理的に近く接触し「多言語併用」の状況が長く続いた場合、それらの言語は互いに影響を与え合い、共通の言語特徴をもつようになる。言い換えると、複数の言語で一つの言語圏を形成する。作業仮説として、ニヴフ語・アイヌ語・ウイルタ

語の間で形成された言語圏を「言語圏 I」と呼ぶことにする。逆に、この言語圏 I の特徴がわかれば、ニヴフ、アイヌ、ウイルタの多言語併用の実態が見えてくるのではないかと考える。

従来、サハリンの先住民族の間での言語的な影響関係についての研究には、語彙の借用について論じるものが多かった。主なものに、服部（1952 [2004]）、Austerlitz（1968）、池上（1980 [2004]、1988 [2004], 1990 [2004]）、丹菊（2003）、津曲（2009）、Tsumagari（2010）がある[12]。以下では例として、服部（1952 [2000]）、Austerlitz（1968）、池上（1980 [2004]）を紹介する。

服部（1952 [2000]）は、ニヴフ語の漁撈や海獣狩猟に関する語彙についての記述である。その最後の部分（服部 1952 [2000: 69-70]）で、ニヴフ語の語彙 15 語（例：ニヴフ語 “arkai”「キュウリウオ」）と、それと音韻上の対応のあるアイヌ語の語（例：アイヌ語 “arkoi”「キュウリウオ」）が挙げられている。服部（1952 [2000: 70]）は、「これらの多くは物と共に一方から他方へ入つた語であると思はれる」と述べ、二つの言語間の借用関係を認めたが、借用の方向（どちらの言語がもとになったか）には言及しなかった。

Austerlitz（1968）は、ニヴフ語、ウイルタ語、アイヌ語で海獣を表わす語彙を比較した論考（英文）である。この論考では、（以下すべて和名で）アゴヒゲアザラシ、ゴマフアザラシ、フイリアザラシ、クラカケアザラシの 4 種について年齢別の語彙を表にまとめ、三つの言語間の対応関係のあるものを線で結んで示した。例としてアゴヒゲアザラシについての部分を抜粋し、**表 2-1** に転載する。

表 2-1　Austerlitz（1968: 135）によるアゴヒゲアザラシ（Erignathus barbatus nauticus Pallas）を表わす語彙の対応

	ウイルタ語		ニヴフ語		アイヌ語
～1 歳	*amɔspi*	—	*amsp*	—	*amúspe*
～2 歳	*ceeŋa*	—	*the-ŋa*	—	*(ciyanka)*
～3 歳	*ɔǰii*		*the-ŋa-aki*		
3 歳以上	*dəriəəci*				
成獣	*dawŋgari*	—	*dawɣř*	—	*taúnkari* *tukará* *poróp*

Austerlitz（1968: 135）Table 3 の一部を転載（各言語の音韻表記は原文のまま）

Austerlitz（1968: 138）は、4 種類のアザラシについての調査結果を概観して、「多くの場合、ウイルタ語が借用元になっていると思われる」という見解を述べ、これについてはアムール地方のナーナイ語など他のツングース諸語との比較によって確かめなければならないと

[12] 関連して、アムール川流域におけるニヴフ語とツングース諸語（ウルチャ語など）の言語接触に関する研究に、Pevnov（1991）、風間（2009）がある。

指摘した。

また、池上（1980 [2004]）は、アイヌ語のイナウ（木幣、削りばな）の語源が、ウイルタ語の *illau* と共通して、ツングース諸語にたどれることについて論じた。（ただし、ツングース諸語からアイヌ語に直接入った可能性のほかに、他の言語を経由して入った可能性も示唆している。）この論文は『民族学研究』に掲載され、アイヌ民族の歴史や文化に関心をもつ民族学研究者たちの目を北方に向けさせた。

以上のようなサハリンの言語間における語彙の借用に関する研究は、次第に進歩し、言語から歴史・文化の研究への拡がりを見せてきた。上述の Austerlitz（1968: 133）は「文化や言語の借用関係を明らかにすることはサハリンの南部における歴史の再構築に手掛かりになる」と述べ、この研究の意義を強調している。

他方、アイヌ語、ニヴフ語、ウイルタ語における文法の借用については、あまり知られていない。三者における名詞並列構造を比較した津曲（1991）は、その分野の数少ない論考の一つである。また、拙稿（山田 2008）も、この三言語の伝聞形式に着目した文法の比較を試みた。今後は、語彙と文法の両方についての比較研究を進めてゆけば、Austerlitz（1968）のいう「歴史の再構築」の一部として上述の「言語圏 I」の実情が次第に明らかになるだろう。

もっとも、語彙や文法のいずれの研究でも、借用の方向について断定的な結論を出していないことに注意したい。言語学による語彙借用の研究は、歴史や文化の研究へ（Austerlitz（1968: 133）のいう）「手掛かり」を提示するのであり、結論の前に分野横断的な検証が必要だということを暗に主張してきたのだと思う。

さて、地域の言語の比較研究に加えて、一つの言語内の方言差もまた、サハリンの言語接触に関する問題を解決する重要な手掛かりになる。ウイルタ語話者の居住域の分布を見ると、ウイルタ語北方言を話すウイルタの北のグループは、アイヌ語話者よりニヴフ語話者に（地域的に）近い。アイヌ語話者との接触があるとすれば、ウイルタ語話者のうちでも北よりは南のグループ、すなわち南方言の話者集団の方にその可能性が高い。

さらに、各言語の方言が話される地域を鑑みれば、ウイルタ語北方言はニヴフ語サハリン方言（のうち、東サハリン方言）と、ウイルタ語南方言はニヴフ語サハリン方言（のうち、南サハリン方言）やアイヌ語タライカ方言と接触していると考えられる。

ウイルタ語の南北の方言差については、以下に述べるエウェンキー語、日本語、ロシア語からの影響関係が関与してくる。そこで、次にエウェンキー語との接触について見てゆくことにする。

2.3 エウェンキー語との接触について

2.3.1 エウェンキーの移住

エウェンキー語とウイルタ語の接触について見る前に、まずそれを話す人々、すなわちエウェンキーとウイルタの関係についての情報を見てゆく。文献資料から、サハリンにおいてウイルタとエウェンキーの人々との居住地が近くなったのは19世紀中頃であると考えられる。

サハリンのエウェンキーに関する初期の記録は、Patkanov（1912）に見られる。Patkanov（1912: 88）は、1860年代に天然痘の流行を避けて当時の沿海州ウダ管区からサハリンへ、エウェンキーの一部の人々が移住したと報告した。同書によると、彼らは島の中部に飼育トナカイの群れとともにやって来て、間宮海峡沿いの、北は「リャングル Ljangr」から南は「ヴィアハトゥ Viaxtu」までに分布するツンドラ地帯に住んだという。また、Smoljak（1975: 66）は、1869年代にサハリンに移って来たエウェンキーの人々は、1890年代には冬季に西海岸の近くに住み、夏の初めにはオホーツク海の方へ移動して行って、8月までには東海岸に移住し、そこで干魚を作って蓄えたと記述している。

これらの記述によれば、エウェンキー語とウイルタ語の接触は、長くとも 150 年程度ということになり、この期間はウイルタ語、ニヴフ語、アイヌ語との接触の期間（上の推測では、少なくとも 300 年）よりもずっと短い。また、エウェンキーの人々は、移住して初めの頃は間宮海峡沿いの北西海岸部に住んでいたので、中部から北東部にかけての一帯に暮らしていたウイルタの人々と居住域が重なることはなかったはずである。しかし、遅くとも19世紀末には東海岸側にも進出していた。そこではエウェンキーとウイルタの夏の居住地が重なり、二つの民族の接触が多くなっていたと考えられる。

2.3.2 エウェンキーからの文化的な影響

エウェンキーの人々がサハリンに居住するようになったのは他の諸民族（ニヴフ、アイヌ、ウイルタ）よりも後のことであるにもかかわらず、彼らはウイルタの人々に大きな影響を及ぼしたといわれている。

サハリンでウイルタがエウェンキーから受けた文化的な影響に関して、二つの民族の生業の共通性を指摘する記述がある。エウェンキーとウイルタは生業活動の一つとして、トナカイを飼育する。この点で、エウェンキーの人々がトナカイの群れを連れてサハリンに移ってきたことは、この島でトナカイ飼育をしていたウイルタの人々にとって重大な出来事となった。Roon（1996: 61）によれば、とりわけトナカイを飼うという点で、エウェンキーとウイルタの人々が常に近く接触しているので、外部から来た旅行者や探検家たちの多くがエウェンキーとウイルタを共通の民族であると認識した。このような認識と関連して、ソ連体制下の1938年にはウイルタのコルホーズ「ナビリ」とエウェンキーのコルホーズ「クラスヌィ・ツングース」が合併され、一つのトナカイ飼育キャンプとなった（Roon 1996：160）。Roon（1996: 86）によると、ウイルタの人々はエウェンキーの人々から秋の柵囲い、

蚊よけの燻煙、鈴、テントなどを生活に取り入れていった。エウェンキーのトナカイの群れはウイルタよりも規模が大きく、特にウイルタの人々にとって権威あるものに見えたという（ibid.）。

ほかに、エウェンキーの文化的な先進性を指摘する記述が、特に日本領時代（1905〜1945年）になされている。この時代、サハリンの南部にいたエウェンキーはごく少数だったが、他の先住民族に衣服、家屋、パンなどの作り方を伝えていたという（樺太庁敷香支庁 1932 [1997: 343]）。これに関連して、中目（1917b [1997: 51]）は、エウェンキーの人々は移住前に大陸で中国やロシアの文明を経験していたため、サハリンの他の民族に対して「文化の度合い」が高かったと指摘している。

また、エウェンキーとウイルタの相互影響ということについては、近年の接触による影響関係とは別に、もっと古い時代にさかのぼる文化・言語の共通性にも注意を向けるべきである。この問題については、次節以降に見るエウェンキー語とウイルタ語の比較と合わせて、今後の検討課題としたい。

2.3.3 言語圏 II

ウイルタ語の特徴には、サハリンへ移住してきたエウェンキーの文化的な影響が現れているといわれている。それは、エウェンキー語サハリン方言とウイルタ語北方言との共通点であり、語彙だけでなく文法にも見られる。このことにより、サハリンの北の地方におけるエウェンキー語とウイルタ語の言語圏を認めることができる。エウェンキー語サハリン方言とウイルタ北方言の共通特徴を、上述の言語圏 I（ウイルタ語、ニヴフ語、アイヌ語の共通特徴）に対して「言語圏 II」と呼ぶ。

ウイルタ語の方言分類を詳しく検討した池上（1994a [2001]）は、その論考の最終節でウイルタ語北方言とエウェンキー語サハリン方言が類似する点を指摘した。池上（1994a [2001]）の概要を**表 2-2（次頁）**に示す。なお、**表 2-2** の①については 4.2.5 および 5.1.1、②③④については 4.2.6、⑤⑦⑧については 5.1.1、⑥については 5.2.5、6.4.5 で扱うので、ここで詳述はしない。

池上（1994a [2001]）の考察は、広くツングース諸語を比較した結果にもとづいている。1.2.1（**表 1-3**）で見たように、エウェンキー語とウイルタ語は同じツングース諸語の系統に属する。二つの言語の親縁関係は、ウルチャ語やナーナイ語とウイルタ語との関係よりは遠いものの、同じ祖語から保持された共通点は少なくない。このことを前提として、池上（1994a [2001: 275]）はウルチャ語やナーナイ語との関係に目を向けつつ考察し、「ウイルタ語は、エウェンキー語に対して、隣接するサハリン方言を通して密接な関係をもつ。[…] エウェンキー語とウイルタ語の言語接触によっておこる干渉も考えられ、エウェンキー語がウイルタ語の音韻・文法の面にも影響を与えているかどうかは、一つの問題であろう」と述べた。具体的には、**表 2-2** の①⑥⑦⑧の点について、ウイルタ語北方言とエウェンキー

語サハリン方言の類似点を指摘し、ウイルタ語北方言がエウェンキー語サハリン方言からの影響を受けて南方言との相違を来したという。とりわけ、①と⑧の点については、その蓋然性が高いと指摘した（池上 1994a [2001: 278]）。この論考については、5.1.1 で詳述する。

表 2-2　池上（1994a [2001]）によるウイルタ語南方言と北方言、およびエウェンキー語サハリン方言との比較

音韻	文法	語彙
①　唇音・軟口蓋音の順序 ②　母音間の *x* ‖ *k* ③　母音間の *ø* ‖ *g* ④　*iga, igə* > *ee* ‖ *aa, əə*	⑤　不完了形動詞語尾の融合 ⑥　動詞語尾*-bukki* ⑦　名詞述語構文 ⑧　所有構造	260 余りの基礎語彙を対照
①⑥⑦⑧について、ウイルタ語北方言とエウェンキー語サハリン方言との類似点を指摘		

※ 通し番号は筆者による　　※（南方言）‖（北方言）

（山田 2009b: 13）

池上（1994a [2001]）の指摘した音韻・文法・語彙の方言差とは別に、ウイルタ語とエウェンキー語の影響関係については、口頭文芸の「伝来」についての研究もある。池上（1984）は、ウイルタの口頭文芸の一つのジャンル「ニグマー」は、元来、エウェンキー人から伝わったものであると指摘した。ウイルタのニグマーは、語りと唄とを交互に繰り返す形式で演じられる、一種の語り物である。内容的には、英雄物語とも呼ばれる。ウイルタの人々は、その語りの部分をウイルタ語で、唄の部分をエウェンキー語で演じたというのが、池上（1984 [2001: 215]）の指摘である。このことから、ウイルタがかつてエウェンキーの演じる英雄物語を聞き、内容の語りの部分はウイルタ語で、唄の部分はエウェンキー語で伝承したのだと考えられている。

池上（1984）が考察対象としたウイルタのニグマーの一つ「シーグーニ物語」の冒頭部分（1957 年採録）が、池上（2002）に収録されている。池上が同じ語り手から採録した「シーグーニ物語」完全版（1977 年）の録音音声も残されており、筆者がサハリンの話者の協力を得て表記と分析の作業を行っている。

池上の採録したのは南のウイルタによるものだが、北のウイルタにもやはり同様のジャンルが伝わっていた。このジャンルは、南のウイルタで「ニグマー*niŋmaa*」、北のウイルタでは「ニムガー*nimŋaa*」と呼ばれる（山田 2009a: 136）。筆者は、池上の採録した音声（1977 年版）を北のウイルタ語話者（北方言の話者）に聞いてもらい、また、唄の部分に関してはサハリンのエウェンキー語話者にも聞いてもらって、分析を進めている。しかし、唄の部分の分析はどちらの話者にも困難で、エウェンキー語話者は「これはエウェンキー語ではなく、エウェンキー語と似た別の言語だ」と言う。このような意見などから、このジャ

ンルがウイルタに伝来した後に、唄の部分のことばは独特の変化を遂げてきたと思われる。池上による音声記録を整理し、将来的には物語の内容も検討して、エウェンキーからの影響について考察を進めてゆく必要がある。

以上に挙げた言語や口頭文芸についてエウェンキー語からウイルタ語に及んだ影響については、今後の記述研究によってより多くの情報が得られると期待できる。

2.4 ロシア語／日本語への言語交替

2.4.1 サハリン領有の歴史

次に、ロシア語や日本語とウイルタ語との関係についての記述を見てゆく。ここからは、国や国境といった概念が大きく関わってくる。

19 世紀中頃、サハリンをどこの国が領有するかという問題で、日本とロシアの間で交渉が始まった。1855（安政元）年、日露和親（下田）条約で、サハリンは日本とロシアが共同で領有することに決まった。

1875（明治 8）年、樺太・千島交換（サンクトペテルブルグ）条約で、サハリン全土がロシア領となった。これと前後してロシア政府は、サハリン開拓の主要な手段として流刑囚をサハリンに送り込んだ。Vysokov（1994: 61-63）によると、1869 年にサハリンが流刑の地と定められ、流刑が存続した全期間を通じて 3〜4 万の囚人が送られたという。

この島のロシア人人口は、軒並み増えていった。1895 年にはロシア人集落は 147 を数え、20 世紀初までにサハリンの人口は 4 万人を超えていた（Vysokov 1994: 65）。そのようななか、もともとこの島に住んでいた先住民の人口は、ロシア人に対して少数派となっていった。Vysokov（1995: 95）によると、1897 年に先住民族の人口はサハリンの住民全体の 15%であったという。

日露戦争（1904〜1905 年）後のポーツマス条約によって、サハリンの北緯 50 度以南が日本の領土となった。日本は樺太庁を設置して、この領土を 1945（昭和 20）年まで統治した。このおよそ 40 年の間に、南のウイルタを含む先住民たちは日本文化を受容した。

第二次世界大戦後、サハリンの全体が旧ソ連の支配下に置かれた。南のウイルタのうち少数の人たちは北海道などへ移住したが、大多数はポロナイスク市（旧敷香町）とその周辺に残り、今度はロシア文化を受容していくことになった。

2.4.2 戦前の言語状況

サハリンをロシア（ソ連）と日本が分割した 1905〜1945 年の間、それぞれの国の支配下でウイルタの社会は変容していった。彼らの話す言語もまた、北ではロシア語、南では日本語の影響を強く受けることになる。それは、それまでのニヴフやアイヌ、エウェンキーの言語との接触とは異なり、教育による言語の習得と、ウイルタ語からロシア語や日本語への使用言語の変更に結びつく力のあるものだった。

北の地方について言えば、1925 年のソ連成立にともない、ウイルタの人々は社会主義的な生活に入っていった。Roon（1996: 159-160, 1999: 41）によると、社会主義体制のもとウイルタの生業のなかでトナカイ飼育が主要な経済活動として選ばれた。すでに 2.3.2 で述べたように、1938 年にはエウェンキーと合同で、一つのトナカイ飼育キャンプを運営することになる（Roon 1996 : 160）。北のウイルタの人々は戦前まで伝統的なトナカイ飼育を続け、ワール村に置かれた集団経営農場（コルホーズ）への集住化が進んだ。1930 年代末には、ワール村の人口の 90%をウイルタ民族が占めたという（Roon 1996: 160）。

ここで注目したいのは、集住化などによる生活の変化に対し、使用言語には大きな変化が見られなかったことだ。Roon（1996: 160）によると、1930 年代末のワール村に居住したウイルタのうちロシア語を話したのは 5%に満たなかったという。そのため、人々はロシア語を話すように教育を受けた。子どもたちは 8 歳からノグリキにある学校で、大人たちはワール村に設置された識字教育のための特別学校でロシア語を学んだ（Roon 1996: 160）。Grudzeva（1996: 1009）も、サハリンの先住民社会の言語状況は戦後まで大きく変わることはなかったと述べている。

日常生活におけるウイルタ語の存続は、ウイルタの伝統的な生業であるトナカイ飼育が継続されたことと無関係ではないように思う。一該に言えないが、トナカイ飼育が伝統的なかたちで継続される限り、トナカイ飼育という生業と不可分に結び付いた重要な伝達手段として、ウイルタ語が必要とされた可能性があるからだ。たとえば、ビビコワ E. A.からの聴取にもとづくウイルタ語北方言による飼育トナカイの分類を**表 2-4（次頁）**に示す。ウイルタ語による飼育トナカイの名称は、その年齢や特徴を端的に伝えることができる。

他方、日本領となった南の地方に居住したウイルタの人々は、他の先住民とともに日本への同化政策と日本語教育を受けることになる。日本領・樺太に居住した先住民族（「土着の民族」あるいは「土人」と呼ばれた）には、アイヌ、ウイルタ、ニヴフ、エウェンキー、ウルチャ[13]、ヤクート[14]の 6 民族が挙げられる。

[13] アムール下流域に今日まで居住する民族であるが、そのなかに交易のためにサハリンに来て定住していた人がいるとされる。樺太敷香時報社（1932 [2000: 453]）は、ウルチャ［サンダー］のことを「我が國に於て往昔山丹人（又は山韃人）と稱へ、往時貿易の為め大陸と本島間を往来したるもの」と説明した。

[14] ロシア革命後にヤクーツク（今日のサハ共和国の中心都市）から亡命してきた人たちとされる（樺太敷香時報社 1932 [2000: 453]）。

表 2-4　ウイルタ語北方言における飼育トナカイ *ulaa* の分類 [15]

	おす		めす
	xakta（去勢）[16]	*koorbo*（非去勢）	*nami*
新生	*soondoo*		
～1 才	*suwəə*		*namoo soondoo*
1～2 才	*seepoo*		*sačee*
2 才	*apala*		-
3 才	*iktənə*		*umnuu*
4 才	*nootono*		*gulu*
5 才	*xamatana*		-
6 才	*dupči*		-
その他	-		*waŋgai*「不妊のめすトナカイ」 *ɲaaluku*「若いめすトナカイ」
	adauxa「双子の飼育トナカイ」 *xəəkə*「純血種と普通種の雑種 полукровка」		

（2009 年 3 月、ビビコワ E. A.からの聴取による）

樺太庁は昭和の初め頃（1920 年代）、敷香郊外のオタス[17]にアイヌを除く先住諸民族を集住させて保護する政策を実施した（菊池 1997: 559 ほか参考）。樺太庁（1934: 842-851）は、1930（昭和 5）年 10 月 1 日現在の同庁に居住する総人口 295,196 人に含まれる先住諸民族の人口統計を**表 2-5（次頁）**のように報告している。この統計によると、アイヌ以外の諸民族の人口は敷香支庁に集中していることがわかる。

同じ報告書（樺太庁 1934）はまた、先住諸民族の日本語理解についても報告している。同書によると、アイヌを含む先住民族の総人口 2167 人のうち日本語日常会話を理解できる者は 1617 人（総人口の 74.72%）だったという（樺太庁 1934: 77）。また、日本語の読み書きができる者は 813 人（総人口の 37.57%）、読むことだけできる者は 124 人（総人口の 5.73%）と報告されている（ibid.: 74-75）。読み書きのできる者の民族人口に対する割合は、アイヌが 45.21%、ニヴフ 15.93%、ウイルタ 9.88%であり、アイヌ以外の民族の識字率が低いと指摘された（ibid.: 76）。

[15] トナカイの名称に関しては、笹倉（1992）、澗潟（1981: 221）、池上（1997: 257）、Roon（1996: 76；邦訳ではローン 2005: 79）の記述がある。いずれも、南方言にもとづく。

[16] Ozolinja（2001: 142）によると、*xakta*「去勢」はトナカイ以外の動物を修飾することもあるという。例：*xakta muri*「去勢された馬」（*muri*「馬」）

[17] オタスは「オタスの杜」とも呼ばれ、日本領時代に日本人が先住民の暮らしを見物に訪れた観光地の一つである。

表 2-5　1930（昭和 5）年 10 月 1 日現在の樺太における先住諸民族の人口（支庁別）

支庁 / 民族	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	元泊	敷香	民族別合計	日本語の日常会話を理解できる人数［民族別合計に対する割合］
アイヌ［アイヌ］	331	176	37	448	451	34	204	1,681	1,442［85.78%］
ニヴフ［ニクブン］	-	-	-	-	-	-	113	113	60［53.10%］
ウイルタ［オロツコ］	-	-	-	-	-	-	334	334	107［32.04%］
エウェンキー［キーリン］	-	-	-	-	-	-	24	24	6［25.00%］
ウルチャ［サンダー］	-	-	-	-	-	-	10	10	2［2.00%］
ヤクート［ヤクート］	-	-	-	-	-	-	2	2	-［0.00%］
支庁別合計	331	176	37	448	451	34	687	2,164	1,617［74.72%］

樺太庁（1934: 842-851）「土人ノ種族別世帯及人口（町村、大字）」をもとに作表
※括弧外の数字はすべて人数　　※［ ］は原典による民族名称

1930（昭和 5）年、オタスで敷香教育所が開校した。そこでは、アイヌ以外の諸民族の子どもたちが日本語などを学習するようになる。この教育所では、後述の川村秀弥（3.1.3 で詳述）やその夫人が教鞭を執った。

もっとも、Smoljak（1965: 29）によると、ウイルタのなかにはオタスではなく森林や海岸部の別の村落に住む人々もいて、その子どもたちは教育を受けずに両親のもとで育ったという。だが、そのような人々も日本人やその社会と無関係だったわけではない。彼らの多くは、ニシンやサケ類の漁獲期に日本人経営者のもとで漁業に従事し、重い労働に対してわずかな賃金を得た（Smoljak 1965: 29）。収入の不足を補うために、荷役として港や鉄道駅へ犬橇で荷運びをしたり、女性たちも男性とともに魚の加工をして働いたりしていたという（ibid.）。Smoljak（1965: 29）は、概して「日本の支配下においてウイルタ（oroki）は少数で困窮し、いくつかの文化要素（トナカイ飼育）を失ったにもかかわらず、自分たちの言語と文化をもった一つの民族集団でありつづけた」と指摘している。

生活様式が変化し、一部で日本語の習得が進む一方で、ウイルタ語が日常生活から消えることはなかった。この点は、やはり北の地方と共通である。ウイルタの日常の使用言語が一変するのは、戦後になってからのようである。

2.4.3 戦後の言語交替

戦後、サハリンの全土が旧ソ連の支配下に置かれると、ロシア語化が本格的に進み始める。この変化は、先住民言語の一部が変化するというよりも、むしろ使用言語そのものが別の言語に置きかわる「言語交替」であった。先住民は、異なる民族の間だけでなく同じ民族どうしで話すときにも、国の公用語であるロシア語で話すようになっていった。もっとも、言語交替は初めのうち漸次的で、急速に進んだのは 1960〜80 年代と考えられる。

1960～1980 年代は、社会主義体制下で生業活動が再組織化された結果、先住民の集住化が進んだ時期である（Roon 1996: 167）。この政策により、妻は村に、夫は山野に、子どもたちは寄宿学校にと、家族は分断された（ibid.）。その結果、家族内で伝統が継承されなくなり、言語や文化の同化が急速に進んだ。

これは、同時期のシベリアにおける他の先住民言語の状況と共通である。Malchukov（2003: 236）は、この時期にツングース諸語の話者が激減したことを指摘した。社会生活の等質化と学校教育のロシア化、そして寄宿学校制度による家族の分離が、民族言語の急激な衰退を促したというのである。サハリンの北の地方について言えば、ワール村から約 60km 南にあるノグリキに寄宿学校があった。ウイルタ、ニヴフ、エウェンキーの子どもたちは親元を離れて寄宿学校に入り、国の完全な保障のもとで教育を受けた（Levin & Potapov 1956: 860）。寄宿学校で、子どもたちはロシア語を話すよう厳しく指導された。教室内で母語を話していると先生から厳しく叱られたという思い出は、筆者もノグリキの寄宿学校で育った先住民の人たちから耳にする話である。彼ら自身、寄宿学校での経験こそが、親たちの話したことばからロシア語への使用言語を変える原因になったと考えているようだ。

南の地方について言えば、ウイルタの一部の人々が北海道などへ移住して行き、大多数は当地に残った。移住した人々のなかには、上述のダーヒンニェニ　ゲンダーヌ（北川源太郎；1.2.3）や後述の池上二良ほか日本の研究者の協力者になった人たちなど、後に日本におけるウイルタ文化・ウイルタ語の記録・研究に多大な貢献をした人もいる。しかし、その人々も日常的には日本語を話し、ウイルタ語は次世代に受け継がれなかったと見られる。今日、ウイルタ語を母語として話せる人は日本国内では知られていない。

他方、サハリンに残ったウイルタの人々は、ロシア語を公用語として話す社会に組み込まれてゆく。徹底した教育制度によって、若い世代ではロシア語の習得が確実に進んだ（Smoljak 1965：40-45）。そして、婚姻などにともなう生活の変化や世代の交代とともに、しだいに公用語であるロシア語を話すようになっていったようである。

たとえば、ヤマカワ　イチロウ（1933 年、粒軽（今日の Neve）生）は、戦前からずっとサハリンに住んでいるウイルタの一人である。両親ともウイルタで、両親とはいつもウイルタ語で話した。戦前オタスの教育所で日本語を習ったが、戦争が終わると一転してロシア語を身につけなくてはいけなかった。父が 1958 年に亡くなり、1960 年代に入ってロシア人女性と結婚した頃からウイルタ語を話す機会がなくなり、気が付けば、ロシア語しか話さなくなっていたという。筆者は 2010 年からヤマカワにウイルタ語の調査協力を得ているが、同氏はしきりに「（ウイルタ語を）忘れた」と言い、語句を思い出すのに時間がかかる。ウイルタ語をまったく話さなかったという 50 年近い時間が、かつての言語知識を記憶の奥に押しやってしまったようだ。それほどに、使用言語の交替が決定的だったことがわかる。個人のなかでもそうだから、世代が変わればなおさらのことである。

現在のウイルタ語の状況の概要は、1.2.4 ですでに述べたとおりである。

2.5 まとめ

本章のまとめとして、サハリンにおける言語状況を三つの段階に分けて要約する。次頁の**図 2-3** は、この要約を模式的に表わしたものである。

第一段階として、遅くとも 18 世紀には、ウイルタ、ニヴフ、アイヌの人々が互いに接触する状況にあった（**図 2-3** 左）。これらの民族集団は、概して多言語使用の状況を保ち、それぞれの言語に共通の特徴が生じたと考えられる。本章では、仮説として、ウイルタ語・ニヴフ語・アイヌ語のなかに生じた共通特徴を「言語圏 I」（**図 2-3** の Linguistic area (I)）と呼んだ。

第二段階として、19 世紀半ばにエウェンキーの人々がサハリンの北の地方へ移住して来てから、ウイルタとエウェンキーが近く交流するようになり、エウェンキーの話す言語がウイルタの話す言語に影響を与えることとなった（**図 2-3** 中央）。北の地方で見られるウイルタ語の北方言とエウェンキー語サハリン方言との共通性は、この影響の結果と考えられる。本章では、この共通性を「言語圏 II」（**図 2-3** の Linguistic area (II)）と呼んだ。

第三段階として、20 世紀に入り、それまでの使用言語であったウイルタ語を日本語やロシア語に置きかえる言語交替が起こるようになる（**図 2-3** 右）。南のウイルタは日本領時代に日本語を習得した。戦後には、サハリンの全土でロシア語が唯一の使用言語となり、ウイルタ語を話す人は急速に減少していった。

Yamada（2010）による**図 2-3（次頁）**は、サハリンにおける言語状況とその変遷を地層に模したものである。上層が、その時期の日常会話に使用される言語を表わす。Yamada（2010）は、今日の使用言語として「地表」に出ているロシア語や日本語が、かつての使用言語である伝統的な言語を見えなくしてしまっている状況を模式的に説明した。

ウイルタ語の記述に関しては、その話し手であるウイルタの人々がたどった歴史と言語状況の変遷を踏まえ、まずは南北の方言差に注意して共時的な特徴について考察を進めたい。

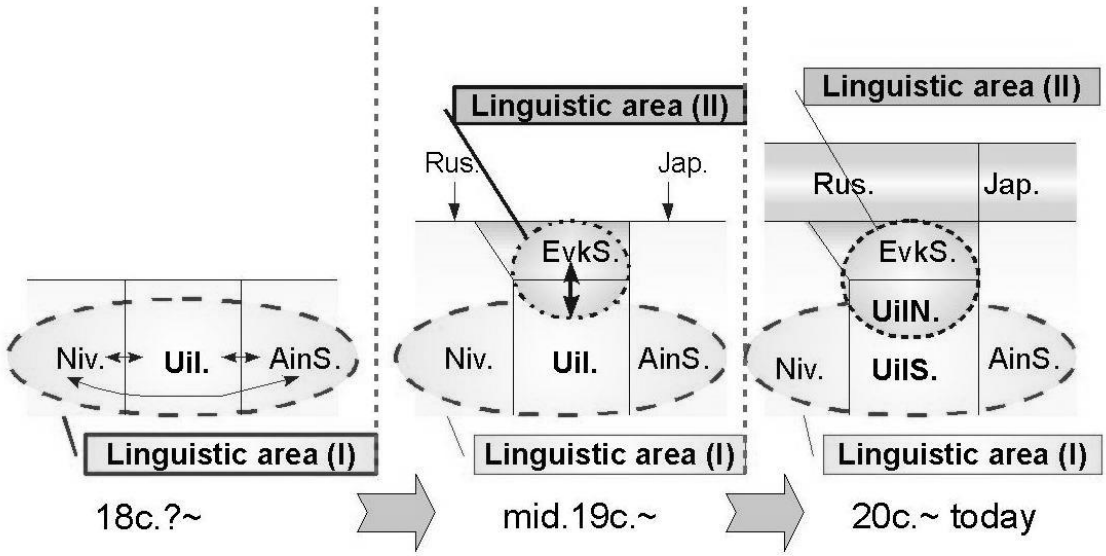


図 2-3　サハリンにおける言語状況の変遷と言語圏の形成（Yamada 2010: 71）
Niv.＝ニヴフ語／Uil.＝ウイルタ語／UilS.＝ウイルタ語南方言／UilN.＝ウイルタ語北方言／AinS.＝アイヌ語サハリン方言／EvkS.＝エウェンキー語サハリン方言／Rus.＝ロシア語／Jap.＝日本語

第 3 章 ウイルタ語文法研究の歩み

上述（1.2.3）のように、最も古いウイルタ語の記録は 19 世紀中頃にさかのぼることができる。だが、文法のしくみを体系的にとらえようという言語学的な研究が見られるようになるのは、20 世紀に入ってのことになる。

19 世紀の断片的な記録から 1990 年代の調査・研究の動向までを総括したウイルタ語の研究史は、Ikegami（1993 [2001]）に詳しくまとめられている。Ikegami（1993 [2001]）の要約に 2000 年代の動向を加えた研究史は、Tsumagari（2009: 1-2）がまとめた。本章では、ウイルタ語の研究史のなかでも文法の研究に焦点を当て、筆者の観点で草創期・第一期・第二期に分けて見てゆくことにする。

3.1 草創期

以下に紹介する 20 世紀前半のウイルタ語研究は、言語学的な視点が加わってくるものの、ウイルタ語の全体像を捉えるには至らなかった。しかし、この時期の記録や論考の数々は、後に池上二良らによる文献調査をとおして世に出され、本格的な研究の基礎となってゆくことになる。

3.1.1 ピウスツキ B.

ポーランド出身のピウスツキ　ブロニスラウ（Piłsudski Bronisław ; 1866-1918）（**写真 3-1**）は、1902 年から 3 年間、流刑囚としてサハリンに滞在し、約 2000 のウイルタ語語彙、文法記述およびテキストの記録を残した（Majewicz ed. 2011: 115, 池上 1987 [2001: 223]、津曲 1987）[18]。津曲（1987: 283）が指摘するように、今日わかっているなかでは、ピウスツキのものが不完全ながらも最初のウイルタ語文法ということができる。



写真 3-1　ピウスツキ B.
（Majewicz 2011 より転載）

Majewicz（ed. 2011: 115, 124）によると、ピウスツキがウイルタ語を調査したのは、1904 年、ポロナイ川左岸の‘Socigare (~ Socihare)’（表記ママ）という場所である。これは現在のポロナイスク市郊外のユジュヌィ Juzhnyj 島（旧称「サチ（佐知）」）を指すと考えられ、後年の方言分類（池上 1994 [2001]）では「南方言」の話された地域に当たる。

ピウスツキによる記録は、没後 70 年近くを経た 1980 年代に、マイェヴィチ A. F.（Majewicz

[18] ピウスツキは、とりわけアイヌ語とニヴフ語の記録・研究を行ったことでよく知られている。また、ウルチャ語についても語彙とテキストの記録を残した。

A. F.）によってポーランド語から英語に訳された（Majewicz 1985, 1987）。これにより、ピウスツキの記録が日本でも利用できるようになり、その研究業績が高く評価された。近年では、マイェヴィチの編集によりピウスツキの著作集シリーズ *The Collected Works of Bronisław Piłsudski*（全 4 巻；De Gruyter Mouton）が刊行されている。ウイルタ語の語彙、文法記述、テキストは、その第 4 巻（Majewicz ed. 2011）に収載されている。

3.1.2 中目覚

中目覚（なかのめ・あきら；1874-1959）は、広島高等師範学校でアルタイ諸言語を専門に研究していた人物で、1912（明治 45／大正元）年、1913（大正 2）年、1914（大正 3）年の 3 度にわたって旧日本領・樺太を訪れ、ニヴフ民族とウイルタ民族の言語調査を行った（菊池 2007: 201）。この調査にもとづき、1917 年にウイルタ語の文法書『オロッコ文典』（中目 1917a）、のち 1928 年に同書のドイツ語訳（Nakanome 1928）が発表された。ドイツ語訳（Nakanome 1928）は、西洋諸国でウイルタ語について知る主要な情報源となった。

別の著作『土人教化論』（中目 1918 [2007]）からわかるように、中目には「先住民族を未開民族と位置付けて広く世に知らしむることに努めた」（菊池 2007: 201）姿勢があった。『オロッコ文典』（中目 1917a）では、日本語や西欧の言語を基準とした述べ方が目立つ。

3.1.3 川村秀弥

川村秀弥（かわむら・ひでや；1884-1956）（**写真 3-2**）は 1930～1947 年、旧日本領・樺太の敷香町郊外のオタスに設置された教育所（敷香教育所；上述 2.4.2）で教鞭を執りながら、先住民の言語や文化について調査・記録した。敷香教育所ではウイルタやニヴフらの子弟が集められ、日本語の読み書き、算数、歴史、修身などを学んでいた（Vishnevskij 1994: 125）。Vishnevskij（1994: 125-126）が、川村が日常表現や1～10までの数字を日本語とカナ書きのウイルタ語で黒板に書いて授業を行ったようすを紹介している。



写真 3-2　中央が川村秀弥（北海道立北方民族博物館所蔵写真 D9.65.169）

調査の記録は、川村自らが書きつづった一冊の採集帳（川村 1940）[19] に残された。その

[19] 川村から池上二良が受けた手紙によると、川村はもっと多くの記録資料を持っていたそうである（池上 1983: i）。しかし、サハリンから北海道への引揚げに際して、書かれた物は一切持ち出しを禁止されたため、十冊以上を燃やしてしまった（ibid.）。冒険的に一冊だけ持って出るこ

原本は長く隠されていたが、川村の没後に池上二良が遺族の同意を得て活字化し、樺太時代の先住民族に関する貴重な記録・資料として刊行した（池上 1983）。民俗語彙、文例、歌謡、民話など、その内容は多岐にわたる。大部分がウイルタ語を記述したものだが、ニヴフ語、アイヌ語ほかその他の言語について書かれた部分もある。ウイルタ語の表記には、かなやローマ字を用いている。

文例の部分では、日本語教育用と思われる文を各言語に訳したものが目につく。日本の昔話「桃太郎」の翻訳もある。その訳文には逐語訳がほどこされており、ところどころに文法的な事項も付記されている。

川村が調査を行った目的は、先住民の言語・文化の記述・研究ではなく、あくまでも教育であったと思われる。ウイルタ語文法に関しても、その体系を解明しようとするものというよりは、ウイルタ語を話す子どもたちに日本語を効率よく教えるための材料として調べたのだろう。その意味で、川村の記述だけで「文法研究」とは言えないが、当時話されていたウイルタ語ほか先住民言語を教育者の視点から記録した成果は、その後の研究に受け継がれてゆく。

3.1.4 石田収蔵

石田収蔵（いしだ・しゅうぞう ; 1879-1940）は、1907（明治 40）年を第一回として、1909（明治 42）年、1912（明治 45・大正元）年、1917（大正 6）年、1939（昭和 14）年の全 5 回にわたって、当時の樺太（サハリン南部）でアイヌ、ニヴフ、ウイルタの民族調査を行った。その成果は『人類学雑誌』などで生前に多く著わされていたが、現地調査で得られた具体的な情報が明らかになったのは近年のことである。調査ノート、写真、書簡類、実物資料などが 1993（平成 5）年に東京都板橋区で発見され、のちに板橋区立郷土資料館に収蔵されたことにより、これらの資料の整理・研究が始まった。

石田の残した調査ノートには、人類学的な記述のみならず樺太アイヌ語・ニヴフ語・ウイルタ語も採録されている。精密な写生図を付した生活用具に関する記述[20]が豊富であるが、そのほかにニヴフ語とウイルタ語の短文を書き連ねた原稿があることが、池上（2000）によって報告された。池上（2000: 88）は、「東京高等農学校試験用紙と柱にある罫紙を片面ずつに切った 14 枚に、ペン書きで 76 項目の和文を挙げ、それに当たる G（ギリヤーク語［筆者注：ニヴフ語］）と O（オロッコ語［筆者注：ウイルタ語］）の文を片仮名で書いた稿」であるとし、そのうちの 30 項目のウイルタ語の部分を活字化し、ローマ字式音韻表記を付して紹介した（ibid.: 89-91）[21]。石田により文中ところどころに付記された語義やその他の記

とに成功したのが、この採集帳だったという（池上 1983: i）。1965（昭和 40）年に池上二良が原本から複写した版の一つが北海道大学付属図書館に保存されており、閲覧が可能である。

[20] 佐々木（編）（2002）により、整理され電子化されたものを見ることができる。

[21] 筆者が 2013 年 1 月に板橋区立郷土資料館で原本を実見したところ、39 項目と思われる和文とそれに対応するニヴフ語訳・ウイルタ語訳が記載されていることを確認できた。筆者が確認できた 39 項目のうち、18 項目は池上（2000: 89-91）の通し番号 1〜15 番と 28〜30 番の文に一致し

述（ibid.）も、掲載してある。

見出しになっている日本語の文から、石田は文法を調べる目的で計画的に調査を行ったと推測される。たとえば、「昨日」「今日」「今」「明日」などの語句を含めた短文「明日天気だろうか」「昨日雨が降った」「昨日水を飲んだ」「明日酒を飲まん」をニヴフ語やウイルタ語に訳して分析しており、時間を表わす形式に関心を持っていたことが読み取れる。

池上（2000: 88）は、石田の記述がピウスツキに続く文法の資料であり、中目（1917a）など同時期の成果を一段と豊富にするものであると述べて、その重要性を評価した。一般に「人類学者」として名高い石田収蔵であるが、その研究の言語学的な価値にも注目される。

3.1.5 澗潟久治

澗潟久治（まがた・ひさはる；1899-1981）（**写真 3-3**）は、1928〜1935 年の間に計 4 回、タライカ地方（現在のポロナイスク市近くにあるトゥナイチャ湖の周辺地域）でオタスとその周辺のウイルタを調査した。そのときの語彙と例文の記録は、戦後に北海道へ移住したウイルタの人々や後述の池上二良との交流のなかで長い年月をかけて増補・改訂が加えられた。その成果は、1981 年に『ウイルタ語辞典』（澗潟 1981）として刊行された。



写真 3-3　樺太敷香付近幌内川沿岸での澗潟久治とウイルタ（撮影時は 1928（昭和 3）年から 1935（昭和 10）年の間、福島氏撮影か）（池上 1987: 18 より、写真・説明文とも転載；表記一部改変）

澗潟（1981）は辞書の体裁をとっているが、豊富な例文を掲載し、接辞や付属語などの文法形式も見出し語に立てるなど、文法書のような性格も有している。同書の刊行に至るまでには、後述の Petrova（1967）や Tsintsius et al.（1975, 1977）も参照して加筆を重ねているが、内容は主として戦前の南の地方で話されたウイルタ語（南方言）を紹介するものである。

なお、澗潟（1981）は、ウイルタの生活用具の模式図や、博物館に収蔵されている民族資料の写真も掲載しており、民族誌的な情報も豊富である。

3.1.6 服部健

服部健（はっとり・たけし；1909-1991）（**写真 3-4**）は、ニヴフ語の研究者として知られているが、ウイルタ語についても調査を行っていた。笹倉（2009: 43）によれば、そもそも服部が昭和 12（1937）年に初めて樺太へ行ったときにはニヴフ語ではなくウイルタ語を研

た。池上（2000）は全部で「76 項目」と述べているので、39 項目のほかに 37 項目（通し番号 16〜27 番の文を含む）があるはずだが、今回は確認できなかった。

究するつもりだったそうだ。また、1943（昭和 17）年には、札幌でウイルタ女性を相手に調査を行ったという記録がある（ibid.: 44）。

服部が行ったウイルタ語調査の成果としてこれまでに公刊されているものは、ウイルタ語テキスト「北風と太陽」（服部 1943 [2000: 248-249]）に限られる。ニヴフの男性に嫁いだ「ナツ子」（1918（大正 8）年生まれ）というウイルタ女性から採録したという（服部 1943 [2000: 248]）。これはわずか 7 文の短いものだが、音声記号による表記、人称標示に結合符-（ハイフン）、日本語の逐語訳など、細かい分析が含まれている。文法記述の体裁はとっていないが、ウイルタ語の音と文法に対する服部の考えを短いテキストの表記に表わした、言語学的に精度の高い資料である。このウイルタ語テキスト「北風と太陽」は後に、ウイルタ語文字教本（Ikegami et al. 2008: 88）の読み物に採用された。



写真 3-4　後列右が服部健（笹倉 2009: 42 より転載）

現在、北海道立北方民族博物館が所蔵している服部健旧蔵資料のなかに、ウイルタ語の文法を概説した手記が見られる（収蔵番号 T137-1）[22]。このような未公開の資料を整理していけば、服部によるウイルタ語研究の成果が見えてくるだろう。

2.2 第一期

以下に挙げる Petrova T. I.や池上二良は、ウイルタ語文法のしくみを全体的に記述した。草創期の研究が文法の全体を説明できるものではなかったのに対し、ペトローワや池上の研究ではそれが説明されている。その点で、両氏の研究はウイルタ語文法を完成させるものだった。

3.2.1 ペトローワ　T. I.

ペトローワ　タイシヤ（Petrova Taisija I.）は、ソ連科学アカデミー・レニングラード言語学研究所の研究者で、ナーナイ語やウルチャ語、ウイルタ語などを研究した。ウイルタ語については、1936 年にレニングラード（今日のサンクトペテルブルグ）でサハリン出身のウイルタ人学生 5 人[23]を対象に調査を行った（Petrova 1967: 1）。その後、1949 年にレニングラードのゲルツェン教育大学で学んでいたウイルタ男性パヴロフ　S.（Pavlov Semen）によ

[22] 筆者の見たところ、筆跡からして服部本人ではなく別の人物が書いた可能性がある。ただ、内容の一部が服部（1943 [2000]）と表記以外はほぼ一致することから、多かれ少なかれ服部の考察が含まれていると考えられる。

[23] 5 人は当時 30～35 才、うち 3 人は Getta 氏族、2 人は Torisa 氏族であった（Petrova 1967:1）。

る内容の点検を経て、1967 年に文法書（Petrova 1967）、翌 1968 年にはその概略（Petrova 1968）を発表した。また、語彙や例文が『ツングース・満洲諸語比較辞典』（Tsintsius et al. 1975, 1977）に収録されている[24]。

Petrova（1967, 1968）には、ウイルタ語の音韻論・形態論の記述、テキストが含まれており、この言語のしくみ全体を用例とともに見ることができる。後述の Novikova & Sem（1997）、Ozolinja（2001）、Ozolinja & Fedjaeva（2003）など、ロシアにおける後年のウイルタ語研究は Petrova（1967, 1968）の文法によるところが大きい。このような意味で、Petrova は、ロシアにおけるウイルタ語研究の礎石を据えたといえよう。

ペトローワがレニングラードで行った調査の対象者は、当時の社会状況や人名から、戦前に旧ソ連領だったサハリン北部の出身だと考えられる。Petrova（1967: 4）は、上述の中目覚による文法書（Nakanome 1926）や後述の池上二良の論考（Ikegami 1956, 1959）を前書きで紹介しているが、中目や池上の記述内容を自らの文法記述に取り入れてはいない。また、Ikegami（1993 [2001: 297]）によると、ペトローワは戦後にポロナイスク地方を含むサハリン南部でも調査を行っているが、少なくとも Petrova（1967）には、その戦後の調査結果は反映されていないとみられる。その他の著述（Petrova 1968 および Tsintsius et al. 1975, 1977 収録の例文）については、そのウイルタ語がどの地方で採録されたものなのか、注意が必要である。それでも、概してペトローワの研究は、今日の「北方言」に結びつくウイルタ語の情報を残す稀少な先行記述であり、ウイルタ語の方言差を考えるためにもきわめて重要な資料といえる。

3.2.2 池上二良

池上二良（いけがみ・じろう；1920-2011）（**写真 3-5**）は、1940 年代から 2000 年代の長きにわたってウイルタ語を研究した、事実上ウイルタ語学の泰斗である。山田（2012b）がまとめたように、同氏は古い記録の文献学的研究、アルタイ諸言語の比較言語学的研究、

[24] Tsintsius et al.（1975, 1977）収録のウイルタ語には、ペトローワ T. I のほかノヴィコワ K. A. と後述のセム L. I.によって採集された語彙も含まれている（Tsintsius et al. 1975: IV）。
ノヴィコワ K. A.（Novikova Klavdija Aleksandrovna）は、1949〜1951 年にサハリンで現地調査を行った（Ozolinja 2001）。同氏の採集したテキストは、のちに Ozolinja L. V.によって分析され、辞書（Ozolinja 2001）の内容に加えられた。
セム L. I.（Sem Lidija Ivanovna）は、1963 年にサハリンを訪れ、ポロナイスクでウイルタ語の調査を行った（Ikegami 1993 [2001: 301]）。同氏の採集したテキストは長く未発表のまま残されていたが、2009 年、セム L. I.の遺族から 185 頁のウイルタ口頭文芸の手書き原稿および音声テープがロシア科学アカデミー言語研究所（ペテルブルグ）にもたらされた。原稿ではウイルタ語原文が特殊記号を含むロシア文字で書かれている。セム本人が録音したデータを書き起こしたものと見られる。（これ自体には、いつどこで記録したか書かれていない。）音声テープは、1960 年代にポロナイスク付近で録音した 3 本のカセットテープと 8 本のオープンリールテープであった（以上は、Pevnov A. M. p.c.）。のち、ロシア科学アカデミー文学研究所プーシキンドームで音声テープの電子化作業が行われた。2013 年現在、ロシア科学アカデミー言語研究所（モスクワ）が主体になって表記と分析の作業が進められている。

フィールド調査による記述的研究など、さまざまな角度からウイルタ語の体系を明らかにした。文法に関する記述は、主として論文集『ツングース語研究』（2001 年、汲古書院）に集成されている[25]。

池上の著述は、旧日本領・樺太から北海道に移住したウイルタ語話者を対象に行われた調査（1949 年～80 年代）にもとづくところが大きい。したがって、戦前の南の地方で話されたウイルタ語、すなわち南方言を基礎にしているということができる。



写真 3-5　1978（昭和 53）年 9 月、市立函館博物館における（左から）佐藤チヨ（ナプカ *Napka*）と池上二良（倉谷一男撮影）（池上 1987: 12 より転載）

ただし、同氏は早くからウイルタ語の地域的・方言的な差異に注意を向けていたと思われる。1960 年の旧ソ連モスクワでの第 25 回国際東洋学者会議や、1969 年 4～12 月の文化庁派遣によるレニングラード（今日のサンクト・ペテルブルグ）教育大学での留学に際しては旧ソ連の研究者たちと交流し、上記のペトローワとも会っている（北海道大学文学部付属北方文化研究施設 1985: ii、池上 1970 [2004]ほか）。同氏によるウイルタ語の方言を論題とした初めての記述は、ソ連崩壊後 1990 年に初めてサハリンを訪れて北の地方のウイルタ語話者を対象とした調査を行った後 1994 年に発表された（池上 1994a [2001]）。

池上は、文献学的な研究により上述の草創期以前の記述を発見・整理したという点で、先人たちからのウイルタ語研究を継承し、総合した。そして、自身が長年行った調査・研究により文法記述、辞書（池上 1997）、テキスト（池上 2002）（いわゆる、言語の記述研究における「三点セット」; 風間 2012: 199）を刊行し、次世代にも研究の可能性をつなげた。

3.3 第二期

以下に挙げる第二期の研究では、第一期のペトローワや池上による記述を総合する動きが見られる。これにより、ウイルタ語の特徴を概略的に示し、言語の比較研究や類型論、言語人類学など、ウイルタ語の研究がより広い学問分野へと発展する道筋が開かれた。以下は、人物ではなく著作ごとに紹介する。

3.3.1 Novikova & Sem（1997）

Novikova & Sem（1997）は、世界じゅうの言語の概説を集めた事典 *Jazyki mira* 『世界の言語』に収録されたウイルタ語の概説（露文）である。その大部分、特に文法に関しては、ペトローワの記述（Petrova 1967, 1968）にもとづく。しかし、音韻に関して母音音素 *ɵ* を立

[25] ウイルタ語文法の入門的な記述には、池上（1971b [2004]）がある。

てている点、そして方言分類に関して、上述（1.2.2）のように、北方言と南方言を分けている点がペトローワの記述とは異なる。

Novikova & Sem（1997）は、Nakanome（1926）や池上の記述（Ikegami1956, 1959、池上1965, 1980）を文献リストに挙げ、母音音素 *ɵ* や方言分類に関しては池上の記述を参照して、ペトローワにはなかった新たな視点を加えたと考えられる。

3.3.2 Tsumagari（1985, 2009）、津曲（1988）

Tsumagari（1985, 2009）は、ウイルタ語の文法概説（英文）である。Tsumagari（2009）はTsumagari（1985）の改訂版であり、内容に若干の加筆・修正が加えられている。また、津曲（1988）も、ウイルタ語の文法を概説した記事である。

Tsumagari（1985, 2009）、津曲（1988）は、上述の池上二良による著述を総合的にまとめたものであるが、自身が北海道で行ったウイルタ語南方言の聞き取り調査で採録した例文も加えている。また、通時的な考察にもとづく池上の記述に対して、Tsumagari（1985, 2009）、津曲（1988）はウイルタ語の共時的な特徴に重点を置き、全体を簡略に説明している点に特徴がある。

なお、2010 年に発表された文例集である津曲（2010）では、Tsumagari（2009）にもとづく文法注記がつけられている。

3.3.3 Ozolinja（2001）

Ozolija（2001）は、12,127 語を収録したウイルタ語・ロシア語辞典である。語彙の約半分は『ツングース・満洲諸語比較辞典』（Tsintsius et al. 1975, 1977）がもとになっている（Ozolinja 2001: 前文）。他には、ノヴィコワ K. A.のテキストから抽出した語彙、編者オゾリニャ L. I. 自身が 1989、1991、1994 年にワール村のウイルタ語話者フェジャエワ I. Ja.から聴取した語彙、ピウスツキ B.による語彙、澗潟（1981）、池上（1997）の語彙も含めたという（ibid.）。それまでのウイルタ語研究を総合して、一冊の辞書に集成したものといえる。

Ozolinja（2001）は例文も豊富なので、文法研究の資料としてもきわめて有用である。ただ、本文中で出典が示されていないため、それぞれの語彙や例文がどの方言によるのか判断できない。この点では、同書を参照するとき注意が必要である。

なお、Ozolinja & Fedjaeva（2003）は、Ozolinja（2001）の内容を簡略にして、前半はウイルタ語・ロシア語辞典、後半はロシア語・ウイルタ語辞典という構成で編集されたものである。とくに後半部分の編集に、フェジャエワ I. Ja.が加わった。一般の人がウイルタ語学習に利用することを目的として作成されたものだが、ロシア語からウイルタ語を引ける唯一の資料である。ただし、簡略化のためか例文が省略されているので、単語を調べる以上のことはできない。

3.4 第三期

外国人のサハリンへの立入りが解禁された 1989 年以降、日本人によるサハリンの現地調査が比較的自由に行われるようになった。また、国境を越えた学術交流も進んでいる。ウイルタ語文法研究の第三期は、日本とロシアの研究協力や、分野横断的な「共同」が特徴となっている。

3.4.1 Pevnov（2009）

Pevnov（2009）は、ペヴノフ A. M.（ロシア科学アカデミー言語研究所）（**写真 3-6**）が 2008 年 9 月に北海道大学で開催されたシンポジウム「サハリンの言語世界」で報告した内容と、その直後に行われたサハリンでの現地調査の成果を合せた論考（英文）である。ツングース諸語の比較研究およびサハリン・アムール川流域の地域研究の視点から、ニヴフ語やウイルタ語の特徴について報告した。



写真 3-6　（左から）ブルィキナ M. M.、トルドワ S. Ju.、ペヴノフ A. M.、キリロワ E. A.、フェジャエワ I. Ja.、コーヌソワ L. N.、ビビコワ E. A.、クルシナ V. G.（2008 年 9 月 12 日ワール村にて、筆者撮影）

ウイルタ語について、Pevnov（2009）は音韻、形態、語彙について、特異な点を挙げた。形態に関しては、複雑な形態変化（本稿で言うところの「融合」）の例や、未来、仮定、命令、推量などの「非現実」の意味を表わす形式を挙げ、他のツングース諸語に対して特異であることを強調した。

Pevnov（2009）は、ウイルタ語の体系全体を説明したものではないが、文法の一部に踏み込んで、テキストや辞書の刊行では終わらない、これからのウイルタ語研究の可能性に光を当てた。そして、論考全体の結論として、ニヴフ語やウイルタ語の記録と研究のためには日本とロシアの研究協力が重要であると強調した。

3.4.2 Toldova & Brykina（2009）

Toldova & Brykina（2009）は、2007～2008 年にポロナイスク市、ノグリキ町、ワール村で行った調査[26]にもとづく、ウイルタ語の状況や記録についての報告（露文）である。1～3 章に分かれるうちの 3 章では、2008 年 9 月 6 日にポロナイスクで採録したミナト　シリュコ氏による語りのテキストをロシア字表記で提示している。

報告したトルドワ S. Ju.（Toldova S. Ju.；モスクワ大学人文学研究科研究員）とブルィキ

[26] 2008 年の調査（2008 年 9 月）では、ワール村へ向かう途中のノグリキ町でペヴノフ A.M.と筆者も偶然に合流した。その後、ワール村でのインタヴューの一部を四人共同で行った。

ナ M. M.（Brykina M. M.；モスクワ大学人文学研究科研究員）（**写真 3-6**）は、ナーナイ語の現地調査も経験し、継続的に北方少数先住民の言語の記録に従事している。2007～2008年のウイルタ語調査では、特に語彙の収集と口頭テキストの採録が目的であった（Toldova & Brykina 2009: 47-48）。

報告されたテキストには、形態素レベルまで分析したグロスと一文ごとの訳が付されている。筆者の知る限り、ロシアでウイルタ語テキストがグロス付きで刊行されたのは異例のことであった。

3.4.3 そのほか、昨今の研究について

本節では、ウイルタ語文法研究の昨今の動きを補足しておきたい。

風間（2011）は、風間伸次郎（東京外国語大学）（**写真 3-7**）が 2010 年 8 月にサハリンで行った調査をもとに、ウイルタに関する人類学的情報を記録したほか、ウイルタ語のテキストをローマ字式音韻表記で逐語訳を付けて発表した報告書である。テキストの語り手は、本稿筆者にも多くの情報を提供している北方言の話者ビビコワ E. A.である。風間（2011）のテキストでは文法注記までは記されていないが、「付属語」（本稿でいう「倚辞」に相当；4.4.2）をハイフンで表わすなど、文法的な検討にもとづく音韻表記が示してある。

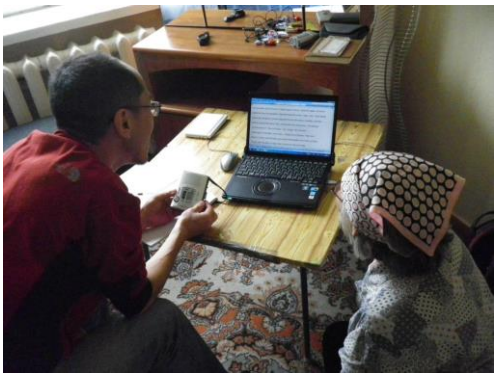


写真 3-7　採録テキストの表記確認・分析をする（左から）風間伸次郎とビビコワ E. A.（2010 年 8 月 16 日ノグリキ町にて筆者撮影）

文法研究そのものではないが、言語学という学問分野を越えた調査・研究活動もある。その一つは、音楽分野と言語学の共同による歌謡の研究である。その先駆けとなったのは、池上・谷本（1974）である。池上・谷本（1974）は、南のウイルタ出身の女性から採録した歌謡 4 例を五線譜付で記録し、韻律的分析と音楽的分析を加えた。二つの異なる分野からの複合的なアプローチは、少なくともそこに掲載された歌謡 4 例で、一定の折返し句のもつ音楽上の長短リズムを基本とした行（line）が韻律的単位として認められることなど、歌謡の特徴を明らかにした。このことは、歌謡のみならず、上述（2.3.3）のニグマーなど韻律的なジャンルのテキストを扱う際にも活かされるだろう。池上・谷本（1974）から着想を得て、山田・荒山（2010）は、2007～2008 年に採録された歌謡の音楽と詞を記録した。山田・荒山（2010）による歌謡 4 篇の歌詞は、本稿 7.4.1～7.4.4 に再掲する。

また、美術・工芸の分野と言語の記述研究の共同も行われている。筆者は、2009 年から、

美術家としてサハリン先住民の工芸を学んでいる進藤冬華と数度の調査を共同してきた。ウイルタの伝統的な儀礼用具ヨードプの制作について記述した本稿 7.1.7（山田 2011a の再掲）は、その成果の一つである。言語の記述研究ではしばしば民話や体験談などが資料として用いられるが、生活道具や料理、工芸品などの制作方法を説明するテキストも資料となりうる。美術・工芸の専門家との協力による参与観察により、辞書や単なる聞き取りだけでは得られない技術的な情報を補うことができた。

近年ではネイティブの研究者も育っている。ソロヴィエワ O. F. （**写真 3-8**）はワール村のウイルタ出身で、2010 年秋からサハリン州立郷土博物館の研究員としてウイルタ語の調査・研究に従事している。彼女自身、ウイルタ語を知らずに育った世代ではあるが、ネイティブの若手研究者としてこれからの活躍が期待される。筆者と共同で、Yamada & Solov'eva（2011）を執筆し、その後も研究協力を続けている。



写真 3-8　左からソロヴィエワ O. F.、ヤマカワイチロウ、筆者（2012 年 9 月 9 日ポロナイスク市にて進藤冬華撮影）

3.5 まとめ

以上、本章ではウイルタ語文法研究の歴史を概観した。ウイルタ語の文法研究は、ピウスツキ B.から服部健までの断片的な記録・記述が蓄積された草創期を経て、ペトローワ T. I.、池上二良によって本格化し、それぞれに体系的な完成形を見た。その後、ペトローワや池上の研究（第一期）を総合して概説する著述が生み出され（第二期）、近年ではこれまでの研究を基礎とした国際的な研究交流や、分野横断的な共同も始まっている（第三期）。

第 I 部のまとめとして、前章の最後に提起した課題と本章で述べたウイルタ語文法研究の歩みを考え合わせると、ウイルタの歴史と言語状況の変遷を踏まえた方言差の記述をするためには、今日の調査・研究に課された課題が見えてくる。それは、戦後から今日までのウイルタ語の時間的な変化と、南と北の方言を明確に区別した空間的な差異の解明である。

この課題に関して、これまでの研究で純粋に北方言の文法と思われるものは、主に戦前の北の地方で話されたウイルタ語を記述した Petrova（1967）に限られる。時間的な変化や空間的な差異の考察に入る前に、今日の北方言の特徴を明らかにする必要がある。本稿の後半では、今日話される北方言について新たな調査成果を取り入れた文法の記述を試みる。

第 II 部　ウイルタ語北方言の文法とテキスト

第 4 章　ウイルタ語北方言の音韻と形態構造

本章では、ウイルタ語北方言の文法を記述する基礎として、音韻的・形態的な特徴を概説する。大部分は、池上（1971b [2004], 1997, 2001）、津曲（1983, 1988, 1997）、Tsumagari（1985, 2009）らが記述している南方言の特徴と共通する。南方言と共通する根本的な部分は概略と参考文献を挙げるにとどめ、北方言に特異な点に重点を置いて述べることにする。

なお、本章の構成には、遠藤（1993）、児倉（2007）、山越（2007）による文法概説を参考にした。

4.1 音素

4.1.1 子音

ウイルタ語北方言の子音音素として、*p* [p], *b* [b], *t* [t], *d* [d], *č* [ʧ], *ǰ* [ʤ], *k* [k], *g* [g, ɣ~ʁ], *m* [m], *n* [n, ɲ], *ɲ* [ɲ], *ŋ* [ŋ], *l* [l, l̥], *r* [r], *s* [s, ʃ~sʲ], *x* [x], *w* [w], *j* [j] の 18 個を認める。

表 4-1　ウイルタ語北方言の子音

閉鎖音	*p* *b*	*t* *d*		*k* *g* [g, ɣ~ʁ]
鼻音	*m*	*n*	*ɲ*	*ŋ*
摩擦音		*s* [s, ʃ~sʲ]		*x*
破擦音			*č* [ʧ] *ǰ* [ʤ]	
流音		*l* [l, l̥]　*r*		
半母音	*w*		*j*	

g は、母音間では摩擦音 [ɣ~ʁ]で現れる。

s は、*a, ə, o, u* の前では[s]（例：*satu*「砂糖」）、*ɵ, i, e* の前では口蓋化して[ʃ~sʲ]（例：*sillaa*「花」）で現れる。*u* の前で口蓋化しない点は、南方言と異なる。

n は、前舌母音 *i, e* の前では口蓋化する。

l は、無声子音の前で無声化することが多い（例：*uilta*「ウイルタ」）。

r は、南方言では *l* と同様に無声子音の前で無声化する傾向があるのに対し、北方言では無声子音の前でも弾き音で現れる（例：*kurkə*「白樺樹皮製の取っ手付き容器」）。

なお、他言語からの音訳語においては、上記の 18 子音だけでなく *f* [ɸ]や *v* [v]が現れるこ

ともある。

4.1.2 母音

ウイルタ語北方言の母音音素として *a* [ɑ], *ə* [ə], *o* [ɔ], *ɵ* [o, ȯ], *u* [u], *i* [i], *e* [e]の 7 個を認める。ただし、*ɵ* [o, ȯ]は、語根の内部にしか現れない。

表 4-2　ウイルタ語北方言の母音

i [i]			*u* [u]
e [e]	*ə* [ə]	*ɵ* [o, ȯ]	*o* [ɔ]
			a [ɑ]

i, u について、池上（1997: xii-xiv）は南方言で異音[ɪ], [ʊ]の存在を認め、通時的な観点でその区別に注目しているが、簡略にはいずれも *i* [i], *u* [u]と表わしている。北方言でも、同様の方針をとる。

4.2 音素配列

4.2.1 音節構造

音節構造は、南方言と同様に、$(C_1)V_1\,(V_2)(C_2)$（C：子音、V：母音、( )内は任意）と規定できる（Tsumagari 2009: 3 参考）。一つの音節は、さらに細かい単位モーラに分けられる。$(C_1)V_1$ を主モーラ、(V_2)と(C_2)を副モーラと呼ぶ（ibid.）。

原則として、語は二つ以上のモーラで構成され、必ず少なくとも二つの V を含む（津曲 1983: 77、Tsumagari 2009: 3）。したがって、1 モーラ語*V, *CV や、*(C)VC というかたちの 2 モーラ語は存在しない。

$V_1\,V_2$ の組み合わせには、長母音と同様に発音される同一の母音連続 *aa* [a:], *əə* [ə:], *oo* [ɔ:], *ɵɵ* [o:, ȯ:], *uu* [u:], *ii* [i:], *ee* [e:]のほかに、下降二重母音 *ai* [aĭ], *au* [aŭ], *əi* [əĭ], *əu* [əŭ], *oi* [ɔĭ], *ou* [ɔŭ], *ɵi* [ȯĭ], *ɵu* [ȯŭ], *ui* [uĭ], *eu* [ęŭ]がある。しかし、*bi*（< *bii*「私（が）」）、*ča*（< *čaa*「その」）など、しばしば V_2 が脱落して単音節・単母音で現れる。

また、*ərəəi*「あれまあ」[7.1.4.29]などの間投詞やオノマトペにもこの原則は適用されない。

4.2.2 母音調和

母音調和には、次の原則を定めることができる。

・母音調和の原則

二重母音を含む母音音素を、次のように 3 分類する。括弧内は語根にしか現れない音素である。

① *a, aa, ai, au*

② *ə, əə, əi, əu*（*ɵ, ɵɵ, ɵi, ɵu*）

③ *o, oo, oi, ou, u, uu, ui, i, ii, e, ee, eu*

一つの語形のなかに①と②の母音音素は共存しない。③の母音音素は、①の母音音素とも②の母音音素とも共存する。

o と *ɵ* の対立は明確ではない。話者のうち、ビビコワ E. A.とフェジャエワ I. Ja.は、*poro*「エゾライチョウ」と *pɵrɵ*「親指」などの例を挙げ、語根での *o* と *ɵ* の対立を主張する。しかし、これは両氏がウイルタ語教科書（Ikegami et al. 2008）の編集のときに、池上教授から受けた教示による影響と思われる。両氏とも、派生接辞や語尾では *o* と *ɵ* の区別をしていない（例：*ə-buddoo-ni*（NEG-PURP-3SG）「～しないように」）し、両氏の発話で人称代名詞の（共時的）語幹内部にも *o* と *ə* の共起が認められる（例：*mumboopə*（1PL.ACC）「私たちを」）。さらに、筆者がこれまでに知り合った両氏以外の話し手は概して *o* と *ɵ* の対立を認識されていないようである。このような現状から判断し、今日の北方言については上記の原則を立て、今後の記述に適用することにする。

なお、まれに *ŋənəmǰikəəda*「行くときに」[7.1.3.16]、*lakəə*「近く」[7.4.5.08] などのように、母音調和の原則に合わない例もある。[27]

4.2.3 語頭の子音制約

原則として、*r* は語頭に立たない。ただし、(1)のようなロシア語等の他言語からの音訳語はこの限りではない。

(1) *UiN.*

ruksaakidu

[ruksaaki]-du

rucksack-DAT

リュックサックに [7.1.4.47]

cf. ロシア語 rjukzak「リュックサック」

4.2.4 語末の子音制約

ǰiŋ「とても」[7.2.1.80][7.3.1.04][7.3.1.19][7.3.1.23]、*səəm*「真っ赤に」[7.1.4.29]などの一

[27] 池上（1997: xvi, 117）には南方言の *mam'ənnə*「おばあさん（祖母）」（*mama ənnə* とも言う）という複合的な語が挙げられている。これも、母音調和の原則の反例といえようが、ウイルタ語において複合による語形成はごくまれである。

部の副詞を除き、語末に立つ子音は *l* に限られる。

ただし、文中において語の末尾が発音上脱落することがしばしばあり、その結果として子音で終わるように聞こえることが多い。(2)では、*uččin* は *uččini*、*mamaŋutak* は *mamaŋutakki* とあるべきところだが、それぞれ末尾の音が発音上脱落している。

(2) *UiN.*

gə	***uččin***	***mamaŋutak.***
gə	*un+či(n)-ni*	*mama-ŋu-tAkki*
INTJ	say+PRF.P-3SG	old.woman-AL-REF.DIR

さて、かれは言った、自分の（若い方の）つれあいへ。（池上 2002: 118）[28]

4.2.5 母音間の子音連続

母音音素間における唇音（*p, b, m*）と軟口蓋音（*k, g, ŋ*）の子音音素の連続について、南方言では一般に軟口蓋音・唇音の順（*kp, gb, ŋm*）になるのに対し、北方言の対応する単語ではその逆の順序、すなわち唇音・軟口蓋音の順（*pk, bg, mŋ*）が広く見られる。以下、‖の左側に南方言の語形、右側に北方言の語形を示す。

・南方言の V*kp*V が北方言の V*pk*V に対応する例：

(3) *UiS. ǰakpu* ‖ *UiN. ǰakpu, ǰapku* 「八」（池上 1994a [2001: 249]）

(4) *UiS. dakpa* ‖ *UiN. dapka* 「境」（池上 1997: 39）[7.2.1.67]

(5) *UiS. pəkpu-* ‖ *UiN. pəpku-* 「くだく」（池上 1997: 157）[7.1.9.09]

(6) *UiS. akpan-* ‖ *UiN. akpan-, apkan-* 「寝る」（池上 1997: 157、2002: 117）[7.3.1.16]

・南方言の V*gb*V が北方言の V*bg*V に対応する例：

(7) *UiS. pəgbirə* ‖ *UiN. pəbgirə* 「スキーのストック」（池上 1994a [2001: 250]）

(8) *UiS. tugbu-* ‖ *UiN. tubgu-* 「落とす」（池上 1997: 211）[7.1.7.04]

(9) *UiS. sugbu* ‖ *UiN. subgu* 「魚皮」（池上 1997: 191）[7.1.7.07]

・南方言の V*ŋm*V が北方言の V*mŋ*V に対応する例：

(10) *UiS. aŋma* ‖ *UiN. amŋa* 「口」（池上 1997: 10）[7.1.4.57]

(11) *UiS. niŋmaa* ‖ *UiN. nimŋaa* 「語り物」（池上 1997: 137）

なお、池上（1994a [2001: 250]）が指摘しているように、この差異は調音点に関する子音音素の順序についてのことで、調音の仕方に関しての鼻音と閉鎖音の順序については両方

[28] 池上（2002）では発音上脱落した音をイタリックで区別して表わしているが、本稿では表記の一貫性のため、表層（例文の 1 行目）では発音上脱落した音を表わさない。

言の間で等しい。

4.2.6 母音間の *k* の出現制約

南方言の音韻論では、母音間で単一の無声・軟口蓋閉鎖音 *k* が消失するという規則的な変化が認められる。たとえば、池上（1990 [2004]）の指摘する語彙借用のプロセスにおいてその現象が顕著である。下の例(12)は日本語からウイルタ語に借用された語彙とされるが、借用元の日本語では母音間に *k* があるのに対し、ウイルタ語に入ると *k* が失われている。また、例(13)(14)は日本語からアイヌ語を経由してウイルタ語に入ったと考えられているが、ここでも *k* の消失はウイルタ語に入ってから起こった変化であると見られている。[29]

(12) *Jap. masakari*（マサカリ）＞ *Uil. masaari*「斧」（池上 1990 [2004: 281]）
(13) *Jap. osiki*（ヲシキ［折敷］）＞ *Ain. otcike* ＞ *Uil. očči*i「膳、盆」（ibid.）
(14) *Jap. sintoko*（シントコ［ほかゐ］）＞ *Ain. sintok*o ＞ *Uil. sittoo*「たる」（ibid.）

次の(15)〜(18)の名詞は、かつては語幹末の母音間に *k* があったが、主格ではそれが消失あるいは *g, w, j* に変化した例である（Ikegami 1956 [2001: 23]）。[30]

(15) 母音間の *k* が消失（**k* > *ø* / V_V）：**giləkə* ＞ *gilə*ə「ニヴフ人」
(16) 母音間の *k* が *g* に交替（**k* > *g* / V_V）：**olǰika* ＞ *olǰiga*「炉かぎ」
(17) 母音間の *k* が *w* に交替（**k* > *w* / V_V）：**əmukə* ＞ *əmuwə*「ゆりかご」
(18) 母音間の *k* が *j* に交替（**k* > *j* / V_V）：**čuuki* ＞ *čuuji* 「足のつけね」
（(15)〜(18)：Ikegami 1956 [2001: 16-21]の語形変化表にもとづく）

この規則的な音韻変化は、ウイルタ語において母音間で単一の無声・軟口蓋閉鎖音の出現になんらかの制約があることを想起させる。 このことは、山田（2009b: 15-16）ですでに指摘したとおりである。

ところが、南方言と北方言でかたちの異なる語を比較すると、北方言でのみ母音間に単一の *k*（発音は[kx]）が出現する例がいくつか見出される。

・南方言の V*x*V が北方言の V*k*V に対応する例：

---

[29] ここで、母音間の単一の *k* が語末の音節にあった場合、主格語幹では失われても、対格語尾-*bA* を融合（後述）した対格形では代償重音化により重複した *kk* として保たれる（池上 2004: 282-283）。たとえば、(13)の *očči*i「膳、盆」、(14)の *sittoo*「たる」の対格形はそれぞれ *oččikkee*「膳を、盆を」、*sittokkoo*「たるを」となる。

[30] 対格では代償重音化による *kk* というかたちで保つ（例：*gilə*ə (<**giləkə*)「ニヴフ人」＋ *-bA*（ACC）＞ *giləkkə*ə「ニヴフ人を」[7.1.4.23] ; *olǰiga* (< **olǰika*)「炉かぎ」＋ *-bA*（ACC）＞ *olǰikkaa*「炉かぎを」; *əmuwə* (< **əmukə*)「ゆりかご」＋ *-bA*（ACC）＞ *əmukkə*ə「ゆりかごを」; *čuuji* (< **čuuki*) 「足のつけね」＋ *-bA*（ACC）＞ *čuukkee*「足のつけねを」）

(19) ***UiS.*** *laxa* ‖ ***UiN.*** *laka* 「近い」（池上 1994a [2001: 250]）
(20)***UiS.*** *paaxa* ‖***UiN.*** *paaka* 「肝臓」[7.1.8.03]
(21) ***UiS.*** *duxu* ‖ ***UiN.*** *duku* 「家」（池上 1994a [2001: 250]）
[7.1.1.24][7.1.3.03][7.1.3.15][7.1.3.17][7.1.4.27][7.1.5.01][7.3.2.21][7.3.2.22]
(22) ***UiS.*** *burixə* ‖ ***UiN.*** *burikə, burikkə* 「弓」（池上 1994a [2001: 250]）

・南方言の V*kk*V が北方言の V*k*V に対応する例：
(23) ***UiS.*** *pakkam* ‖***UiN.*** *pakam* 「真っ黒に」（池上 1997: 153）[7.1.4.55]
(24) ***UiS.*** *=lAkkA* ‖***UiN.*** *=lAkA* 主題化の倚辞（池上 1994b [2001: 98]）
[7.1.4.61][7.1.4.67][7.1.6.08][7.1.6.19][7.2.1.04][7.2.1.08][7.2.1.12][7.2.1.13][7.2.1.15][7.2.1.51][7.2.1.52][7.2.1.59][7.2.1.66]

・南方言で対応する語がない、北方言の V*k*V を含む語の例：
(25)***UiN.*** *ataka* 「おばあちゃん（祖母）」[7.2.1.02]
(26)***UiN.*** *gəgdəkə*「いつも」[7.1.5.14]

これらの例から、北方言においては母音間の *k* が許容されやすい、すなわち、北方言では母音間における無声・軟口蓋閉鎖音の出現制約が南方言よりも弱いと考えられる。

また、同じく軟口蓋閉鎖音で有声の *g* についても、類似の傾向が見られる。

・南方言の VV が北方言の V*g*V に対応する例：
(27) ***UiS.*** *əərə* ‖***UiN.*** *əgərə*「カラフトマス」（池上 1994a [2001: 250]）
(28) ***UiS.*** *saari* ‖***UiN.*** *sagari*「黒い」（池上 1994a [2001: 250]）[7.1.1.03][7.1.4.63]
(29) ***UiS.*** *səəri* ‖***UiN.*** *səgəri*「魚の背骨」[7.1.7.13]

もっとも、上述（4.1.1）のように母音間で単一の *g* は軟口蓋摩擦音[ɣ ~ ʁ]で現れるため、母音間において有声・軟口蓋閉鎖音[g]が出現しないという点ではどちらの方言も共通である。

池上（1994a [2001: 250]）は、母音間での *k* や *g* の出現に関する方言的な相違について、北方言の *k* を有する形、および *g* を有する形の方が「古い」だろう、と述べた。通時的な見方では、（方言の分岐の後に）南方言において母音間で単一の軟口蓋閉鎖音 *k* および *g* の出現に制約が加わったと見ることができる。

4.3 超分節的特徴
4.3.1 アクセント

南方言と同様に、声の高低（ピッチ）変化によるアクセント（高低アクセント）を認める。どの単語（句）においてもアクセントの位置やパターンは一定で、非弁別的である（津曲 1983、Tsumagari 2009）。さらに語の後ろから 2 番目のモーラ（それが副モーラの場合は、その前の主モーラ）が高く発音され、これをアクセントの峰とする（Tsumagari 2009: 3-4）。2 モーラから成り第一モーラが高くなる語以外は、語の最初から二番目のモーラからアクセントの峰までが高く発音される（ibid.）。

しかし、今日の北方言では同一母音の連続（長母音）に強さアクセントを置く傾向があり、その影響で高低アクセントの規則にも変化が及んでいる。これに関連して、同一母音の連続する音節に隣接する音節の母音 *o* は、しばしば[ɑ]に近い音で現れる。これはロシア語の発音規則で、強さアクセントの前か後ろにある o が[ɑ]あるいは[ɑ]に近く発音されることと、著しく類似している。

(30) *UiN.* *ok*|*soo* [ɑksɔ:]「そり」
(31) *UiN.* *bo*|*boo*|*nik*|*ka* [bɑbɔ:niqqɑ]「頭巾」
(32) *UiN.* *joo*|*do*|*pu* [jɔ:dɑpu]「ヨードプ（振楽器）」
(33) *UiN.* *o*|*juu*|*kam*|*ba* [ɑjú:kɑmbɑ]「少し」（< *ojuuka(n)-bA*；a.little-ACC）[7.1.4.25]
(34) *UiN.* *see*|*to*|*si*|*či* [ʃɛ́:tɑʃìtʃì]「音をたてている」（< *seeto-si-či*；rustle-IM.P-3PL）[7.2.1.75]
(35) *UiN.* *o*|*poom*|*bu*|*ri* [ɑpɔ́:mburi]「する」（< *o-poon-buri*；become-CAUS-IPSN.IM.P）[7.1.9.07]
（ | は音節境界を表わす）

このような例はウイルタ語テキストの採録においてしばしば聞かれるが、別のときに話者に尋ねて発音を確かめると、通常どおり母音 *o* は[ɔ]で発音される。話者には *o* は[ɔ]という規範意識があるものの、語りのなかでは無意識的にロシア語の発音の「癖」が出るものと思われる。

4.3.2 イントネーション

イントネーションは、平叙文の場合、下降調が基本である。南方言の口頭文芸で特徴的な伝聞形式にともなう上昇イントネーション[31]は、北方言では確認されない。

命令文の場合、最も基本的な命令形*-ru* をともなう命令文では、多くの場合イントネーションは下降調である。とくに(36)のような *əjǰee* をともなう否定の命令文では、下降調のイントネーションが顕著である。しかし、(37)のように *unuu*「言え」という語をともなう命令文は例外で、この語にかけてイントネーションが上昇することが多い。

[31] 南方言の口頭文芸では、文末の伝聞形式の感嘆融合形で文末にかけてイントネーションが上昇する傾向が強い（山田 2008: 64）。ここでいう感嘆融合形とは池上（1994b [2001: 91, 101]）の用語で語尾*-ndA* から派生する*-ndAA* あるいは*-ndAmAA* を指し、池上（2002）に所収されている口頭文芸テキストでは*-ndA* の用例のうち 8 割以上がこのかたちをとる（山田 2008: 64）。

(36) *UiN.*

əjǰee	***aksaa!***
ə+ru	*aksa+rA* ↘
NEG+IMP	get.angry+NIM

腹を立てるな！

(37) *UiN.*

uiltadaiǰi	***unuu!***
uilta-dAi-ǰi	*un+ru* ↗
Uilta-LNG-INS	say+IMP

ウイルタ語で言え！

疑問文の場合、肯否疑問文（Yes-No 疑問文）ではイントネーションが上昇する。とりわけ、(38)(39)のように疑問の倚辞=*i* をともなう場合は、この倚辞の部分を極端に高く発音して疑問の意を強める（倚辞については、後述 4.4.2）。なお、(39)は勧誘の構文に疑問の意味が加わっている。[32]

(38) *UiN.*

ǰimda	***naaduni***	***biččisui?***
ǰimda	*naa-du-ni*	*bi+či(n)-su=i* ↗
Zhimda	land-DAT-3SG	COP+PRF.P-2PL=YNQ

ジムダに住んだことはある？[7.2.1.46]

(39) *UiN.*

čaiwa	***ummisui?***
čai-bA	*umi+ri-su=i* ↗
tea-ACC	drink+IM.P-2PL=YNQ

（一緒に）お茶を飲みましょうか？（20110819_1SS_BEA）

他方、疑問詞疑問文のイントネーションは上昇する場合と下降する場合に分かれる。この区別に規則性があるかどうかは、今後の検討を要する。次の例(40)は、イントネーションが上昇する例、(41)は下降する例である。

(40) *UiN.*

[32] 不完了形動詞-*ri* と二人称複数-*su* の組み合わせで勧誘の意味が表わされることについては、南方言にもとづく記述で Ikegami（1959 [2001: 36]）、Tsumagari（2010: 8）が指摘している。

xooni biisee?

xooni bi+ri-si+kA ↗

how COP+IM.P-2SG+WHQ

いかがお過ごしですか？（20110819_1SS_BEA）

(41) *UiN.*

xaiji	***bolgoxosee,***	***ŋəələluxəsee?***
xai-ǰi	*bolgo-xA(n)-si+kA* ↘	*ŋəələ-lu-xA(n)-si+kA* ↘
what-INS	be.frightened-PRF.P-2SG+WHQ	fear-INCH-PRF.P-2SG+WHQ

なんでおびえているんだい？ [7.1.1.16]

4.4 形態構造

他のツングース諸語と同様にウイルタ語は原則として接尾辞・膠着的で、「中心的要素に附属的な要素がいくつも連結する」（池上 1971b [2004: 81]）形態構造をとる[33]。この原則は南方言でも北方言でも同様だが、細部においては異なる記述を要する部分もある。以下では、おもに動詞の構造を例にして、ウイルタ語北方言の形態構造について述べる。

4.4.1 語と付属形式の分類

語やそれに付属する形式は、そのふるまいや機能によって**表 4-3** のように分類される。

表 4-3 語と付属形式の分類

語	変化詞類	名詞類	名詞、代名詞、数詞、形容詞
		動詞類	動詞
	不変化詞類		副詞、（接続詞、）間投詞、付属語
付属形式	倚辞		
	派生接辞		
	語尾		格語尾、活用語尾、人称語尾、複数語尾

※ 括弧内は借用による形式

語は、付属形式を接続して変化する「変化詞類」と、付属形式を接続しない「不変化詞類」とに分けられる。

変化詞類のうち、名詞類は名詞、代名詞、数詞、形容詞を含み、格語尾をとって名詞変化を行う。名詞変化については、Ikegami（1956 [2001]）による南方言のパラダイムが参考になる。

動詞類は、活用語尾をとって動詞活用を行う。

[33] 脚注 27 でも触れたように中心的要素が二つ以上組み合わさって語をつくるプロセス（複合）は生産的ではない。

不変化詞類には、ウイルタ語固有の副詞、間投詞、付属語のほか、ロシア語からの音訳借用による接続詞（例：*a* < *Rus.* a「そして」[7.1.1.18][7.2.1.03][7.2.1.29]ほか、*i* < *Rus.* i「そして」「～と」[7.1.3.09][7.2.1.82][7.2.1.89]ほか、*esli* < *Rus.* esli「もし」[7.2.1.45]）を含む。

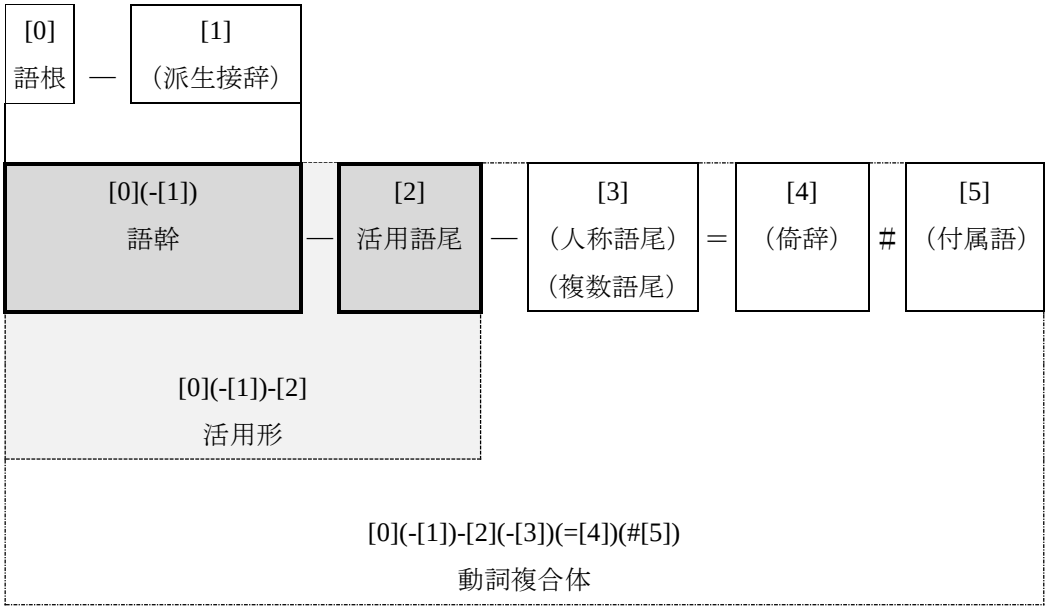
付属語および付属形式（倚辞、派生接辞、語尾）についての詳述は、次節 4.4.2 に譲る。

4.4.2 形態素の連結

本節では、動詞の構造を例に、形態素の連結について述べる。

風間（1992）・金子（1998）を参考に、動詞語幹を中心的要素として、それに付属的な要素がいくつも連結して形作られる構造の全体を「動詞複合体」と呼ぶ。ウイルタ語の動詞複合体の構成（肯定文の述語の場合）は、おおむね**表 4-4** のように一般化できる。

表 4-4　ウイルタ語における動詞複合体の構成（肯定文の述語の場合）[34]



※　括弧内は任意の要素

表4-4の[ ]の通し番号を付けて示した構成要素が順に連結して拡張するしくみを、模式的に(42)で例示する。なお、ここに挙げる語形は理論的に可能と推定するが、実際にすべての用例を話者に確かめたわけではない。

[34] 否定の動詞複合体は、「否定動詞語幹（－派生接辞）－活用語尾（－人称語尾／複数語尾）＃否定される動詞語幹－形動詞語尾*-rA*（＝倚辞）（＃付属語）」という構成を規定できる。

(42)

[0]	*itə-*	「見る」
	see-	
[0]-**[1]**	*itə-**ndə**-*	「見に行く」
	see-**DIT**-	
[0]-[1]-**[2]**	*itə-ndə-**xə***	「見に行った」
	see-DIT-**PRF.P**	
[0]-[1]-[2]-**[3]**	*itə-ndə-xə-**ni***	「（彼が）見に行った」
	see-DIT-PRF.P-**3SG**	
[0]-[1]-[2]-[3]**=[4]**	*itə-ndə-xə-ni**=ndə***	「（彼が）見に行ったんだって」
	see-DIT-PRF.P-3SG**=HS**	
[0]-[1]-[2]-[3]=[4]**#[5]**	*itə-ndə-xə-ni=ndə* ***goči***	「（彼が）見に行ったんだってさ」
	see-DIT-PRF.P-3SG=HS **PTCL**	

以下、**表**4-4で示した構成要素それぞれの特徴を説明する。[ ]の通し番号は、**表**4-4と(42)に対応する。

[0] 語根

そのままで動詞語幹になる場合(43)(44)と、そうでない場合(45)がある。後者の場合、語根は名詞語幹であり、それに派生接辞を付加して動詞を派生できる。

(43)

itə-「見る」＞ *itə-xə*（see-PRF.P）「見た」／ *itə-ndə-xə*（see-DIT-PRF.P）「見に行った」

(44)

gida-「槍をさす」「槍」＞ *gida-xa*（spear-PRF.P）「槍をさした」

(45)

dausu「塩」＞ **dausu-xa*（salt-PRF.P）／*dausu-la-xa*（salt-VSF-PRF.P）「塩漬けにした」

[1] 派生接辞

Ikegami（1973 [2001]）のいうverb-stem-formative suffixes「動詞語幹形成接辞」を指す。[0]で述べたように、語根がそのままで動詞語幹になる場合（上掲の例(43)(44)）は、派生接辞は必須ではない。

おもにヴォイス（動詞の自他、使役、受身、相互、自発など）や動作様相（継続、趨向、開始など）の意味を加える。

[2] 活用語尾

Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）がsimple verb-endings「基本活用語尾」[35]と呼ぶものとsecondary verb-endings「動詞二次語尾」と呼ぶものが結合したものの全体を、本稿では「活用語尾」と呼ぶ。この活用語尾がないと語幹だけでは文の構成素とならない、動詞複合体の必須要素である。かつ、二つ以上連なることはないと考えられる。おもにテンス・アスペクトの意味を表わす。

[3]　人称語尾／複数語尾

Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）でも同様にpersonal endings「人称語尾」、plural ending「複数語尾」と呼ばれる。前に立つ活用語尾の種類によって、後続する人称語尾／複数語尾の系列が異なる（後述6.1.2）。人称語尾と人称語尾、複数語尾と複数語尾など、同じ種類の語尾が二つ以上連なることはない。

人称語尾は、主語の人称を標示する機能をもつ。人称語尾をとるかとらないかは直前の活用語尾の種類（ないし活用形の種類）によって決まる。複数語尾は、人称語尾がつかない場合、あるいはゼロの場合に、その後ろに連なって主語の複数性を標示することがある。ただし、複数語尾による数の標示は必ずしも義務的ではない。

[4]　倚辞（いじ）

Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001, 1994b [2001]）が other endings「その他の語尾」と呼ぶもの。動詞だけでなく名詞や形容詞にもつき、先行する要素から文法的な制約を受けないという点で、他の「語尾」よりも自立性の高い形態素である。しかし、音韻的には前の要素との結びつきが強く、母音調和だけでなく融合を起こすという点で「語」と呼ぶにも問題がある。本稿ではこのような形態素を「倚辞」と呼ぶ。おもに伝聞、感嘆、疑問など、広義のモダリティと関連する意味を表わす。

[5]　付属語

倚辞と現れ方も意味も似ているが、先行する要素との音韻的な結びつきが弱く、融合も母音調和も起こさない。そのため形態的な基準から独立の語とみなす。しかし述語の直後に固定されている点で、統語的に述語に拘束されている。こうした統語的機能は、日本語の終助詞と類似する。おもに、推量・強調などの意味を加える。

下記の(46)では、*doromočini* という述語の後ろに推量を表わす付属語 *taani* が連なっている例である。

[35] 風間（2003a: 165）がエウェン語文法で「きれつづき」と呼んでいるものに相当する。

(46)*UiN.*

amba doromočini taani.

amba doromo-či(n)-ni taani

beast steal-PRF.P-3SG INFER

化け物が盗んだのだろう（20110211_3MLG_BEA(5).025）

4.4.3 融合と接着

前節で動詞を例に見たように語幹や語尾などさまざまな形態素が一定の原則にしたがって連結するのが基本であるが、語の内部に限っては隣り合う形態素が複雑な音韻変化を起こして、表層で簡単に分離できないこともある。このような現象を、「融合」と呼んでいる（南方言について、津曲 1988: 745、池上 2001: 157 ほか参考）。本稿では、「融合」と区別して、表層で形態素境界がはっきりしている場合を「接着」と呼ぶ（用語について池上 1994a [2001]を参考にした）。

語形成のプロセスにおいて、形態素どうしが接着するか融合するかは、多くの場合、前の形態素の末尾の音韻構造**【条件 1】**と後ろの形態素の種類**【条件 2】**によって決まる。

【条件 1】直前の形態素の末尾の音韻構造が-CV である。

【条件 2】後ろの形態素が①②のいずれかに該当する。

①単一の *r* で始まる一部の語尾　例：*-rA* (NIM), *-ri* (IM.P), *-rAkkA* (PRS.EVD.F.3), *-rilA-* (NFUT.F), *-rAŋA-* (DFUT.F), …

②単一の *b* で始まる一部の語尾　例：*-bA* (ACC), *-buri* (IPSN.IM.P), *-bukki* (HBT), …

【条件 1】【条件 2】が同時に満たされる場合、子音の代償反復や母音の長音化などによって、融合が起こる。**【条件 2】**において上記①の場合を「タイプ①」として**表 4-5-1** に、②の場合を「タイプ②」として**表 4-5-2** に例示する。最右列の音韻変化について「融合」とした以外の部分は、「接着」に該当する。

なお、動詞活用において Ikegami（1959 [2001]）／池上（1994a [2001], 2001）が「0.2 類」とするタイプの動詞は、独自の活用を行う。「0.2 類」は語彙的に決まっており、音韻構造からは規定できない。本稿では、活用語尾の基底形を示す際、「*-rA/-si*」「*-buri/ -puri*」のように、/（スラッシュ）の右側に「0.2 類」のとる形式を表わすことにする。

そのほかに語幹末が*-ptu* の動詞（例：*aaptu-*＋*-ri*＞*aapči*「着く」など）や特殊な変化をする動詞（例：*bi-*＋*-ri*＞*bii*「いる、ある」、*bul-*＋*-ri*＞*buǰi*「死ぬ」など）もある。こうした不規則変化動詞や上記の「0.2 類」の存在を考慮すれば、融合の法則を単純に規定するのは難しい。網羅的に説明する場合は、Ikegami（1959 [2001]）のように精細なパラダイムの記述が必要となる。

表 4-5-1　タイプ①：否定につく形動詞語尾*-rA/-si* の結合

直前の要素の末尾の音韻構造		例		音韻変化	
		基底形（STEM＋*-rA/-si*）	結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-rA* ＞	*waa-ra*	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-rA* ＞	***ŋənnəə***	融合	
-CCV		*əksə-*＋*-rA* ＞	***əksəə***		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-rA* ＞	*bujal-**d**a*	なし	*r* > *d*
	-g	*xaag-*＋*-rA* ＞	*xaag-**d**a*		
	-n	*un-*＋*-rA* ＞	*un-**d**ə*		
*-V*k*V		*loo-*（<**-loko*）＋*-rA* ＞	***lokkoo*** ~ *loo-ro*	融合～なし	
「0.2 類」		*andu*＋*-si* ＞	*andu-si*	なし	

（Ikegami 1959 [2001], Tsumagari 2009 を参考に作表）

表 4-5-2　タイプ②：対格語尾*-bA* の結合

直前の要素の末尾の音韻構造		例		音韻変化	
		基底形（STEM＋*-bA*）	結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*naa*＋*-bA* ＞	*naa-**w**a*	なし	*b* > *w*
-VCV		*ulisə*＋*-bA* ＞	***ulissəə***	融合	
			~ *ulisə**m**-bə*	*m* 挿入	なし
-CCV		*əəktə*＋*-bA*	***əəktəə***	融合	
			~ *əəktə**m**-bə*	*m* 挿入	なし
-C	*-l*	*mamaril*＋*-bA* ＞	*mamaril-ba*	なし	
	-(n)	*siro(n)-*＋*-bA* ＞	*siro**m**-ba*	*n* > *m*	なし
*-V*k*V		*giləə*（<**-giləkə*）＋*-bA* ＞	***giləkkəə***	融合	
			~ *giləə**m**-bə*	*m* 挿入	なし

（Ikegami 1959 [2001]を参考に作表）

この他に融合の「タイプ③」として、末尾が-CV の語に単一の *k* で始まる倚辞（例：*=kA* (WHQ), *=kAA* (EXC)）が連なるときに起こる母音の長音化がある。次の(47)(48)(49)は、感嘆の倚辞*=kAA* が融合する「タイプ③ 」の例である。

(47) *UiN.*

bɵjɵɵ

bɵjɵ+kAA

bear+EXC

クマよ　[7.3.2.23]

(48) *UiN.*

dauripoo

dau-ri-pu+kAA

go.across-IM.P-1PL+EXC

渡るよ　[7.4.1.03]

(49) *UiN.*

inəmee

inə-mi+kAA

laugh-COOR.C+EXC

笑いながらさ　[7.1.3.19]

ここで特に注目したいのは、同じ環境でも融合と接着のどちらも起こりうる場合があるということだ。たとえば、**表 4-5-1** に示したように*-V*k*V タイプの動詞語幹 *loo*-「掛ける」と*-rA/ -si* の結合では、通時的な推定形に含まれる語幹第二末尾の *k* が表層に現れた *lokkoo* というかたち（融合形）と、共時的な語幹-VV から類推した *looro* というかたち（接着形）の二種類を認める。特定の形式で融合形と接着形の両方があるのは、**表 4-5-2** に示した対格語尾*-bA* (ACC)の結合でも同様である。**表 4-5-2** では、*giləkkəə* と *giləəmbə* の例を挙げた。これは、*-V*k*V タイプの名詞語幹 *giləə*「ニヴフ」に対格語尾*-bA* が結合した場合に、融合形 *giləkkəə* と接着形 *giləəmbə* の二種類が認められる例である。

以下、対格語尾*-bA* の例として(50a)(50b)(51a)(51b)を補足する。なお、後の方の(51a)と(51b)は、同一の話し手から異なる文脈において採録した例文である。

(50a) *UiN.*

səduximbə

səduxi(n)-bA

berry-ACC

ベリーを（接着形）

(50b) *UiN.*

səduxxee

səduxi+bA

berry+ACC

ベリーを（融合形）

(51a) *UiN.*

alukkutai	***muuwə***	***xuulǰiči,***	***čaa***	***muudu***
alukku-tAi	*muu-bA*	*xuul-ri-ci*	*čaa*	*muu-du*
bowl-DIR	water-ACC	pour-IM.P-3PL	that	water-DAT

ŋaalambani	***silləunǰici,***	***čaa***	***muuǰi***	***pisučči̥či***
ŋaala(n)-bA-ni	*silləun-ri-či*	*čaa*	*muu-ǰi*	*pisuči+ri-či*
hand-ACC-3SG[36]	wet-IM.P-3PL	that	water-INS	splash+IM.P-3PL

pəəjəkkeeči.

pəəjə-kkee-či

forehead-PRL-3PL

［神父は］器に水を注いで、水で手をぬらし、その水を人々の額にふりかける。(20101225_BEA.003)

(51b) *UiN.*

čomi	***bii***	***mərəčči̥wi***	***ŋinda***	***seexani***
čomi	*bii*	*mərəči+ri-bi*	*ŋinda*	*see-xA(n)-ni*
that's.why	1SG.NOM	think+IM.P-1SG	dog	bite-PRF.P-3SG

ŋaallaawwee.

ŋaala+bA-wwee

hand+ACC-1SG

だから、犬が私の手を噛んだのだと思った。(20101207_BEA.016)

(50a)(51a)では、名詞語幹 *səduxi*「ベリー」、*ŋaala*「手」の末尾に（主格では現れない）隠れた *n* があると見て、単純に*-bA* をその後ろに付ける *səduxim-bə*、*ŋaalam-ba*（以下、人称語尾は省略）となっている。(50b) *səduxxee* と(51b) *ŋaallaa* では、子音の代償反復と母音の長音化をともなう融合が起こって、表層で境界がわからなくなっている。結果として(50a) *səduxim-bə* と(50b) *səduxxee*、(51a) *ŋaalam-ba* と(51b) *ŋaallaa* はそれぞれ異なるように見えるが、意味・用法の区別はない。そのため、これらは形式の「揺れ」であると考えられる。

今日の北方言話者の何人かは、(50a)や(51a)のような接着形を、語幹に*-mbA* という語尾が付いていると考えているようである。それに対して(50b)や(51b)のような融合形は説明が難

[36] 統語的には名詞語幹 *ŋaala* に再帰所有語尾*-bi* をつけた *ŋaalabi*「自分の手を」とあるべき。

しいため、とくにウイルタ語の学習では融合形を避けて接着形のほうを教える傾向がある。このように異分析と簡略化傾向が重なって、会話のなかでも接着形が多用されるようになっている。

4.5 まとめ

以上、本章ではウイルタ語北方言の音韻と形態構造を概説した。根本的な部分は、池上（1971b [2004], 1997, 2001）、津曲（1983, 1988, 1997）、Tsumagari（1985, 2009）らによる南方言の特徴と共通だが、北方言の記述において新たに規定しなければいけない特徴もある。特に、4.1.2、4.2.2 で扱った母音音素 *ə* をめぐる規定や、4.4.3 で扱った融合と接着の揺れ、ないし文法の簡略化傾向は、今後の記述研究を進めるうえで重要である。このように北方言に特異な点も含め、本章で述べた内容を今後の文法記述やテキスト表記の基礎とする。

第 5 章　ウイルタ語北方言の動詞活用と時制(1)：先行研究

本章以下、ウイルタ語の南方言と北方言の間で文法的な相違がどこにあるのかという問題に迫ってゆく。本章では、まず前半の 5.1 で方言比較に関する主要な論考である池上（1994a [2001]）の論旨を確認することにより、問題の焦点を動詞活用と時制の体系にしぼる。そして、後半の 5.2 でウイルタ語の動詞活用と時制に関する先行記述を確認する。

5.1 方言の記述文法に課された問題

5.1.1 池上（1994a [2001]）再考

すでに 1.2.2 や 2.3.3 で言及したように、池上（1994a [2001]）は、ウイルタ語の方言差を検討し、エウェンキー語サハリン方言との接触の影響について示唆を与えた重要な論考である。以下では、ウイルタ語方言の記述文法の観点で、改めて池上（1994a [2001]）の内容を確認する。

池上（1994a [2001]）は、ウイルタ語の南方言と北方言の相違点を「音韻」「文法」「語彙」に分けて記述し、その相違点のうちの 4 点について、ウイルタ語北方言とエウェンキー語サハリン方言とが類似していることを指摘した。池上（1994a [2001]）の要点をまとめた**表 2-2** を再掲する。

表 2-2'　池上（1994a [2001]）によるウイルタ語南方言と北方言、およびエウェンキー語サハリン方言との比較

音韻	文法	語彙
⑨　唇音・軟口蓋音の順序	⑬　不完了形動詞語尾の融合	260 余りの基礎語彙を対照
⑩　母音間の *x* ‖ *k*	⑭　動詞語尾*-bukki*	
⑪　母音間の *ø* ‖ *g*	⑮　名詞述語構文	
⑫　*iga, igə* > *ee* ‖ *aa, əə*	⑯　所有構造	
①⑥⑦⑧について、北方言とエウェンキー語サハリン方言との類似点を指摘		

※ 通し番号は筆者による　　※（南方言）‖（北方言）

（池上 1994a [2001]にもとづく作表；山田 2009a: 13）

本節では、例として**表 2-2** の①⑦⑧の論旨を紹介する。まず、①について 4.2.5 で述べたウイルタ語北方言の特徴をエウェンキー語サハリン方言と比較する。(3)（再掲）はウイルタ語の南方言（左）と北方言（右）の語形、(52)はエウェンキー語サハリン方言の語形であり、いずれも基数詞「8」を表わす。ただし、ウイルタ語北方言では話者によって南方言と同じ語形も用いられる。

(3') *UiS. jakpu* 「8」‖ *UiN. jakpu, japku*「8」 （池上 1994a [2001: 249]）
(52) *EwkS. japkUn* 「8」 （池上 1994a [2001: 275]）

4.2.5 で述べたように、ウイルタ語南方言では軟口蓋音・唇音の順（上例では *kp*）になるのに対し、北方言では唇音・軟口蓋音の順（上例では *pk*）になる音位転倒が見られる。そして、エウェンキー語サハリン方言では唇音・軟口蓋音の順（上例では *pk*）である。

池上（1994a [2001: 276-277]）によれば、ウイルタ語南方言の順序の型はナーナイ語ナイヒン方言などやウルチャ語（原文では「オルチャ語」）と共通する。これはかつてナーナイ語・ウルチャ語・ウイルタ語において起こった音位転倒によって生じた型であり、ウイルタ語北方言の順序の型はそれよりさらに後の改新である。つまり、南方言がナーナイ語・ウルチャ語と共通する系統的特徴を保持するのに対し、北方言ではエウェンキー語との接触による干渉を受けてエウェンキー語サハリン方言と類似の型が用いられるようになったのだという。そのほかに、動詞語尾*-bukki*、名詞述語構文、所有構造の 3 点（**表 2-2** の⑥⑦⑧）についても比較言語学的な論理でエウェンキー語サハリン方言との類似を指摘している。

次に文法の方言差について、**表 2-2**⑦の名詞述語構文とは、文字どおり名詞類を述語とし、「A が B だ」「A が B だった」のように主語の名詞類と述語の名詞類がイコールの関係で結ばれる構文のことを言う。ウイルタ語南方言における名詞述語文では、通常、三人称に限って人称語尾*-ni*（3SG）／*-či*（3PL）がつかない（すなわち、*-ø*（ゼロ）で表わされる）のに対し、北方言では過去の名詞述語構文で用いられる連辞（コピュラ）の動詞 *bi-*に三人称の人称語尾*-ni*（3SG）をつける例が見られる。池上（1994a [2001]）の指摘をもとに口頭文芸テキストを調べた山田（2009b）は、ウイルタ語の名詞述語構文（過去）の人称標示を**表 5-1** のようにまとめた。

表 5-1 ウイルタ語の名詞述語構文（過去）における人称標示

		1SG	1PL	2SG	2PL	3SG	3PL
南方言		*-bi*	*-pu*	*-si*	*-su*	*-ø*	*-ø*
北方言	I	*-bi*	*-pu*	*-si*	*-su*	*-ø*	*-ø*
	II	*-bi*	*-pu*	*-si*	*-su*	*-ni*	*-či*

（池上 1994a [2001]にもとづく作表；山田 2009b: 19）

北方言では過去の名詞述語構文における人称標示に I と II の二つの系列が認められ、そのうちの系列 I は南方言と共通であるが、他方の系列 II が南方言と異なる。概して、三人称の場合に方言差が現れるといえる。

名詞述語構文のこのような方言差を確認した池上（1994a [2001: 277]）は、北方言におい

て三人称語尾がつく**表 5-1** の II のような系列は、ナーナイ語、ウルチャ語、エウェンキー語サハリン方言と共通であると指摘した。そのうえで、「ウイルタ語北方言で連辞の役をする動詞語幹 *bi-*の動名詞［筆者補足：本稿で言う「形動詞」; 6.1.1 で詳述］形に第三人称語尾がつくことがあるのは、近い親縁関係にあるウルチャ語・ナーナイ語におけるように古くからウイルタ語にあったのか、あるいは地理的に近いエウェンキー語サハリン方言の影響によることなのかなどの問題については、確実なことがいまだ言えない」（池上 1994a [2001: 277]）と述べ、結論を出すことを保留した。

また、**表 2-2** の⑧について池上（1994a [2001]）は、人称代名詞を含み、それが所有者を表わす所有構造の方言差を指摘した。この場合⑦の点とは逆に、一人称と二人称で差異が現れる。一人称および二人称が所有者を表わす場合、南方言ではその人称を表わす代名詞の属格が用いられるのに対し、北方言では代名詞の主格が用いられる（池上 1994a [2001: 257]）。池上（1994a [2001: 277-278]）によると、エウェンキー語のサハリン方言を含む東部の諸方言では、ウイルタ語北方言と同様、一人称と二人称が所有者を表わす場合に、その人称代名詞が主格形をとるという。そして、ウイルタ語においては、南方言の所有構造が古いものであり、北方言の所有構造はエウェンキー語サハリン方言の影響による改新によって生じたものであると考えた。

ただし、池上（1994a [2001]）は 2001 年再版の「追記」において、南方言でも 1910 年代生まれの世代より下の世代の話者は、北方言と共通の所有構造を用いることと報告し、「エウェンキー語の影響を受けたとみられるウイルタ語北方言の影響が南方言にまで及んできているといえるだろうか」という推論した（ibid. : 283）。南方言の話された地域で 1910 年代生まれよりも下というと、日本領・樺太で日本による同化政策や日本語教育の影響を受け始めた世代である（第 2 章参照）。池上（1994a [2001]）はそこまで言及していないが、南方言における所有構造の「改新」と当時の社会状況、そしてエウェンキー語の影響がどのように関連しているのか、興味深い問題である。いずれにしても、ウイルタ語の方言差の研究には、それぞれの方言における時間的な変化にも注意を向ける必要性が確かめられる。

以上、本節ではウイルタ語南方言と北方言の相違点について、池上（1994a [2001]）の記述を見てきた。池上（1994a [2001]）は相違点の一部について、ウイルタ語北方言とエウェンキー語サハリン方言との類似を指摘した。ツングース諸語の比較文法にもとづいたその指摘は、断定的な論調で述べられている。その一方で、その類似が果たしてエウェンキー語からの影響なのかどうかについては、その可能性に言及はしても断定的な答えは出していないことに気づく。池上（1994a [2001]）は、ウイルタ語の方言差や時間的な変化と言語接触の影響について関連づけ、その課題について取り組む研究の指針を示すも、慎重な態度をとった。その後の研究に、検討の余地を残したともいえようか。

5.1.2 問題提起

前節で述べたように、ウイルタ語南方言と北方言の相違点は、言語接触による影響と関連づけられる。言い換えれば、ウイルタ語の方言差が、他言語との接触、ないし、話者集団（民族）どうしの接触の地域的な差異によって生じた可能性が大きい。この可能性を視野に入れ、ここからはウイルタ語南方言と北方言の相違点をさらに掘り下げて見てゆきたい。

池上（1994a [2001]）が指摘したウイルタ語の南方言と北方言の相違点のなかで、本稿が着目するのは上掲**表 2-2** の⑤、すなわち、不完了形動詞語尾の融合についてである。この点に関して池上（1994a [2001]）が述べた主要な部分を以下に引用する。

> 南方言では、末尾に母音音素を一つだけもつ動詞語幹に、不完了動名詞［筆者注：本稿でいう形動詞］語尾*-ri* がつく場合、両者が融合（代償重音化）をおこして合体した形となるが、北方言では、このような融合形も使われるが、このほかに、その動詞語幹に上記の動名詞［同上：形動詞］語尾が接着しただけで両者が融合していない語形も使われる（池上 1994a [2001: 251]）。

表 5-2 は、この池上（1994a [2001: 251]）の指摘をもとに山田（2009b）が作表したものである。

今日サハリンで話されるウイルタ語北方言の形態構造に融合と接着の揺れが見られることは本稿 4.4.3 でも指摘したとおりである。池上（1994a [2001]）は、北方言の形態構造のこにような傾向を見越して、**表 5-2** のような不完了形動詞語尾の「接着形」を指摘したものと考えられる。

表 5-2　池上（1994a [2001]）の指摘による不完了動名詞語尾*-ri* の結合形

基底形		南方言	北方言
ŋənə-＋*-ri*＋*-ni* go＋IM.P＋3SG	＞	【融合形】*ŋənnee-ni*	【融合形】*ŋənnee-ni* **【接着形】*ŋənə-ri-ni***
sinda-＋*-ri*＋*-ni* come＋IM.P＋3SG	＞	【融合形】*sinǰee-ni*	【融合形】*sinǰee-ni* **【接着形】*sinda-ri-ni***

（山田 2009b: 17；一部改変）

ところが、筆者が既刊のテキスト資料（池上 2002）や現地調査によって実例を確かめようとしたところ、該当する例が見つからなかった。サハリンの現地調査に関して言えば、池上（1994a [2001]）と筆者の被調査者は共通している。話者の少ないこの言語の状況で、一時「適格」と報告された形式（例：*ŋənə-ri-ni*）が 10 年余の間で急に「不適格」（例：**ŋənə-ri-ni*）になるとは考えにくい。池上（1994a [2001]）が何らかの異なる形式を指して上記のように報告したという可能性が想起される。

筆者は、現地調査において、音形や出現位置および意味機能が池上（1994a [2001]）の言う不完了形動詞語尾の接着形（例：**ŋənə-ri-ni*）とよく似たものとして、動詞語幹に語尾*-li* が結合した語形（例：*ŋənə-li-ni*）が用いられることに気付いた。そこで拙稿（山田 2010a）において、池上（1994a [2001]）の指摘を出発点として、今日のウイルタ語北方言に見られる動詞語尾*-li* についての考察を行った。この考察では動詞語尾*-li* による「未来」形の例文を挙げた Pevnov（2009）も参考にし、池上（1994a [2001]）の言う不完了形動詞語尾の接着形は、動詞語幹に*-ri* ではなく、*-li* が結合した語形であることがわかった。これにより、山田（2010a）はこの動詞語尾*-li* は今日のウイルタ語北方言において動詞を活用させ「未来」の意味を加えるテンスの形式であると結論した。

南方言では北方言の動詞語尾*-li* に当たる形式が見られない。山田（2010a）は、Pevnov（2009）が指摘した動詞語尾*-li* による「未来」形が、北方言に特異な点であるということが明らかにした。しかしながら、山田（2010a）では、動詞語尾*-li* が他の形式とどのような範列関係にあるのかという点が、未検討の問題として残った。動詞語尾*-li* と他の「未来」を表わす形式との範列関係、および他のテンスに関する形式と範列関係を見定めるには、この言語の動詞活用と時制を表わす形式の体系を記述することが必要となる。

そこで、次節以下では文法に関わるさまざまな問題のうち、動詞活用と時制を表わす形式に焦点を合わせてゆく。この考察では、必然的に池上（1994a [2001]）の指摘した北方言の動詞語尾*-bukki*（**表 2-2** の⑥）も対象に含まれる。

北方言の記述（次章）に先立ち、本章の後半で、もう一度南方言と北方言の両方に視野を広げて、関連する先行記述の内容を確認したい。第 3 章で紹介したウイルタ語文法研究の著作のうち、ピウスツキ B.の記述（Majewicz 2011）、中目（1917a）、Petrova（1967）、澗潟（1981）、Ikegami（1959 [2001]）／池上（1994a [2001], 2001）、Tsumagari（1985, 2009）をを取り上げる。

5.2 先行記述

5.2.1 Pilsudski（Majewicz ed. 2011）

3.1.1 で見たように、ピウスツキ B.は 1902 年半ばから 3 年間サハリンに滞在して、ウイルタ語の語彙や文法を記述した。ピウスツキの記述対象となったウイルタ語は、対象となった地域から南方言と判断される。ピウスツキによる動詞についての記述は、Majewicz（ed. 2011: 661-666）で参照することができる。

ピウスツキは、動詞についての記述では、例文を列挙するだけで説明を加えていない。この部分の記述について、津曲（1987: 290）が「おおむね個々の動詞ごとに短い文例とその訳を未整理のまま列挙するにとどまっており、分析的・体系的であるとはいえないし、いくつかの誤りも含まれている」と評しているとおりである。実際に挙げられた例文を見ると時制について調べようとしていたことは明らかだが、一貫した法則を見出すまでには

至らなかったと思われる。

たとえば(53)(54)は、現在時制と関連して、*waarini* と *waajiččeeni* のアスペクト的対立を調べようとしているようだが、二つの語形についての形態的な分析や意味の違いについての記述はない。以下、ピウスツキの例文の引用では、原文の表記を 1 行目の‘ ’内に、本稿の方針に改めた表記を 2 行目に示す。2 行目の下線部が、時制を表わす述語動詞である。

(53)*UiS.* ‘tárińe varińe’

tarinnee waarinee.

彼が魚を獲る。he fishes（Majewicz ed. 2011: 661）

(54)*UiS.* ‘to-tadu nari s’undatta vajcćeni’

tootodu nari suŋdattaa waajiččeeni.

あそこで人が魚を獲っている。there a man is fishing（Majewicz ed. 2011: 662）

次の(55)(56)では、現在進行中の動作を表わす(55)と、そうでない(56)の比較ができる。(56)は、Majewicz（ed. 2011: 662）に載る英訳を見ると過去の動作ということはできそうだが、そこに「完了」のようにアスペクト的な意味が加わっているかどうかなどの詳細は、これだけでは判断できない。

(55)*UiS.* ‘ýys’ej nari sindaka.’

əwəsəi nari sindaakka.

ここに人が来る／来るところだ。here a man goes/ is going（Majewicz ed. 2011: 662）

(56)*UiS.* ‘ýys’ej nari isuhan.’

əwəsəi nari isuxani.

ここに人が来た。here a man came（Majewicz ed. 2011: 662）

次の(57)(58)では、*čeennee*「昨日」(57)、*čimanaa*「明日」(58)という単語を補うことで、過去の動作を表わす *ələčimbi* (57)と未来の動作を表わす *ələsiwi* (58)を比較しているようである。

(57)*UiS.* ‘ćen’e[?] ulučimbi’

čeennee ələčimbi

昨日、料理をした／していた I cooked/ was cooking yesterday（Majewicz ed. 2011: 663）

(58)*UiS.* ‘čimana ulusivi’

čimanaa ələsiwi.

明日、料理をする。I will cook tomorrow（Majewicz ed. 2011: 663）

また次の(59)(60)では、*əsi*「今」(59)、 *čimanaa*「明日」(60)という単語を補うことで、現在の動作を表わす動詞の形と未来の動作を表わす動詞の形の例を得ようとしたようである。だが、ここでは二つの例文の動詞の形に違いはない。

(59)*UiS.* ‘ýsi　dyrukpixypu’

əsi　dərukpixəpu

今、休んでいる。now we are resting（Majewicz ed. 2011: 664）

(60)*UiS.* ‘čimana　dyrukpixypu’

čimanaa　dərukpixəpu

明日、休んでいる。tomorrow we’ll be resting（Majewicz ed. 2011: 664）

(59)(60)の動詞の形 *dərukpixəpu* には、上掲(56)と共通する活用語尾*-xA(n)*を含んでいると分析することができる。つまり、ピウスツキの訳文から《過去》と解釈される例文(56)と《現在》と解釈される例文(59)、《未来》と解釈される例文(60)の活用語尾が共通している。

例文の表記や分析の妥当性を疑うこともできるだろうが、いずれにしても、ピウスツキの記述から時制の表わし方をはっきりと読み取ることは難しい。

5.2.2 中目（1917a）

3.1.2 で述べたように中目（1917a）は、旧日本領・樺太での言語調査をもとにまとめられた文法書である。その調査対象となったウイルタ語は、南方言に当たる。

中目（1917a）は、動詞の章の冒頭において、「動詞の人称語尾を有することは総説に於いて述べたるが如し。而してその主要部分は不定法・絶対分詞・単数一人称現在・単数一人称過去とす」（中目 1917: 53）と述べた。その他、「不完全動詞」「受身動詞」「打消動詞」「形容動詞」なども挙げられている。動詞形態の整理が不十分であり、体系性を欠く。

中目（1917a）は動詞の表わす時制として、《現在》と《過去》の 2 系列を記述した。ただし、同書が「不完全動詞」と呼ぶものについて、「動詞の多数は現在及び過去の両形を有すれども、過去の形式のみありて現在の形式に併用せらるるものあり」（中目 1917a: 61）とし、現在と過去の形式に区別がないと指摘した。しかし、その例として‘buyatti’ *bujačči* しか挙げられておらず、論拠が明確ではない。

また、《未来》について「オロッコ語動詞の未来は特別の形式なく、現在動詞の形式を用い、又は副詞等によって其未来たるを知るのみ」（中目 1917a: 61）と指摘した。この指摘は上述のピウスツキの挙げた例と類似しており、興味深い。ピウスツキも中目（1917a）も、ウイルタ語で《未来》を表わす形態論的な手段を見出さなかったと考えられる。

5.2.3 Petrova（1967）

3.2.1 で述べたように、Petrova（1967）は 1930～1950 年代にかけて行われたウイルタ語調査にもとづく文法書である。その対象は戦前にサハリンの北の地方で話されたウイルタ語であり、今日の北方言に結びつくと推定される。

Petrova（1967: 94）は動詞の記述において、統語・形態の特徴にもとづき「形動詞；причастие」「法制動詞；наклонение」「副動詞；деепричастие」「五つの特殊形；пять особых форм」の四つのグループを規定している。その下位分類を**表 5-3** にまとめる。

以下では、時制に関する形式に焦点をしぼり、**表 5-3** の太字で示した項目(a1)(a2)(13)(b1)に着目する。

表 5-3　Petrova（1967: 94）による動詞形の分類

分類	下位分類
(a) 形動詞；причастие	**(a1) 能動；активное** **(a2) 被動；пассивное** **(a3) 行為の習慣；обычности действия**
(b) 法制動詞；наклонение	**(b1) 直説法；изъятельное** (b2) 仮定法；сослагательное (b3) 命令法；повелительное
(c) 副動詞；деепричастие	(c1) 同時；одновременное (c2) 同時・継続；одновременно-длительное (c3) 異時；разновременное (c4) 条件・時間；условно-временное
(d) 特殊形；особые формы	(d1) 目的；цели (d2) 条件・時間；условно-временная (d3) 条件・譲歩；условно-уступительная (d4) 同時性動作；одновременноые действия (d5) 未完了；несостояшегося действия

※　記号・番号は本稿筆者による

まず、「過ぎた瞬間とみなされる時点に属する行為」（Petrova 1967: 106）を表わす《過去》は、形動詞（能動）*-xA(n), -xə(n), -tči(n), -či(n)*（**表 5-3** の(a1)）によって標示されるとした。次の例(61)(62)は、それぞれ*-xə(n), -tči(n)*の用例である。なお、以下の Petrova（1967）からの例文では、3 行目に動詞部分の基底形を示す。基底形は、Petrova（1967）にもとづく。

(61)*UiN.*

si ***<u>buuxəsi</u>***

buu-xə(n)-si

お前はくれた　ты дал（Petrova 1967: 106）

(62)*UiN.*

bi ***<u>uččimbi</u>***

u?+tči(n)-bi

私は話した　я сказал（Petrova 1967: 106）

次に、「その時点で現在起こっている、あるいはすでに起こってしまった行為」（Petrova 1967: 106）を表わす《現在》は、形動詞（能動）*-j, -ri, -ǰi, -si*（**表 5-3** の(a1)）によって標示されるとした。次の例(63)(64)は、それぞれ*-ǰi, -si* の用例である。

(63)*UiN.*

nooni ***<u>unǰini</u>***

un-ǰi-ni

彼は話している　он говорит（Petrova 1967: 106）

(64)*UiN.*

bi ***<u>panusiwi</u>***

panu-si-ni

私は尋ねている　я спрашиваю（Petrova 1967: 106）

そして、「ある行為がこれから実現する、あるいは、いくぶん遠い未来にのみ実現する可能性のある行為」（Petrova 1967: 106）を表わす《未来》は、2 種類の形式で表示されるという。以下では、便宜的に（Ⅰ）（Ⅱ）と分けて要約する。

（Ⅰ）能動・形動詞形《現在》＋*-la, -lə*＋人称語尾

Petrova（1967: 106）が《未来》として第一に挙げたのは、(55)の例である。*waarilami*「（私は）殺す」、*dəpčiləmi*「（私は）食べる」の部分で《未来》の行為を表わしている。

(65)*UiN.*

əsigisi ***buurə,*** ***bi*** ***simbe*** ***<u>waarilami</u>,*** ***<u>dəpčiləmi</u>.***

waari-la-mi *dəpči-lə-mi*

もし与えなければ､私はお前を殺す､(そして)食べる。　Если не дашь, я тебя убью (и) съем.（Petrova 1967: 106）

ここで例示されている動詞形は、「現在時制の能動・形動詞形に、対応する人称語尾（ここでは*-mi*）を後続する接尾辞*-la, -lə* が結合したかたちである」（ibid.）としている（*waarilami*「私は殺す」＜*waari* ＋*-la* ＋*-mi*）。

（Ⅱ）接尾辞*-lu*＋《現在》

第二に、動詞語幹に「～し始める」という意味をもつ接尾辞*-lu* がつき、さらに現在時制の動詞接尾辞（Petrova（1967）によると*-j*）が後ろに結合したかたちが《未来》を表わすことを指摘した（ibid.: 107）。また別の頁でも「現在時制の形式は、語幹の接尾辞*-lu* の援用により、しばしば未来時制の意味で用いられる」（ibid.: 91）と述べている。

以下(66)は、*itəčiluxəči*「彼らが見物し始めた」という部分で「～し始める」を意味する接尾辞*-lu* が用いられた例である。そして(67) *putaччilleewi*「私は罠をかける」が、接尾辞*-lu* に《現在》*-j* が融合した《未来》形であるという。

(66)*UiN*

narisal bəjŋəl sorriwači <u>itəčiluxəči</u>.

itəči-lu-xa(n)-či

人々は、獣たちが争うのを見物し始めた。Люди начал смотреть на борьбу зверей.（Petrova 1967: 91）

(67)*UiN.*

mapa uččini: bi jədu <u>putatčilleewi</u>.[37]

putatči-lu+j-wi

おじいさんは言った、「私はここに罠をかけるだろう」と。Старик говорит: я здесь буду петли (силки) ставить.（Petrova 1967: 107）

Petrova（1967）では、以上の形動詞（能動）による《過去》《現在》や《未来》の動詞形とは別に、形動詞（被動）（**表 5-3** の(a2)）がある。形動詞（能動）が「語幹の表わす行為や状態が、常に行為者の人称を明示する」のに対し、形動詞（被動）は「行為者を明示しない行為」を表わす（ibid.: 103）。Petrova（1967: 103）によると、《過去》と《現在》の 2 種類がある。

《過去》は、語幹に*-pulA* を後続することで表わされるという。なお、(69)のように、数の一致で*-pulA* の後ろに複数を表わす*-l* をともなうこともある（ibid.: 103）とも述べている。

[37] Petrova（1967: 107）は *путатчиллёви*（ローマ字音韻表記に転写すると *putatčilleewi*）と表記する。語幹を *putatči-*としているが、これを *puta*「罠」と動詞語幹形成接辞*-či* と考えると、語幹の後ろから 2 番目の音節末に *t* あるいは *č* があるかどうか疑わしい。池上（1997: 167）のように *putači-*とすべきところかもしれない。

(68)*UiN*.

dawa baaramba təlipulə.

təli-pula

サケがたくさん加工してあった　Кеты (рыбы) множество наготовлено.（Petrova 1967: 103）

(69)*UiN*.

isuxanduči amiččilčida anagal, čipaali waapulal.

waa-pula-l

彼らが来たとき、彼らの親たちはいなかった、みんな殺されてしまっていた　Когда они пришли, их родителей нет, все убиты.（Petrova 1967: 103）

形動詞（被動）《現在》は、語幹に*-wuri, -uri, wri, -buri, -puri* を後続することで表わされるという（Petrova 1967: 103）。

(70)*UiN*.

ča utəki ipee, bakawri duu sitto muuwə.

baka-wri

その戸口を入ると、二樽の水が見つかる В ту дверь когда войдёшь, найдутся две бочки воды.（Petrova 1967: 103）

上述の能動・被動のほかに、Petrova（1967: 104）は形動詞の一つとして「行為の習慣」を挙げた（**表 5-3** の(a3)）。これは、*-wuki, -wki, -uki, -puki, -buki* というかたちで表わされる。同書によると、このかたちは、もっぱら述語として用いられ、述語形式として能動形動詞（**表 5-3** の(a1)）よりも高い頻度で現れるという（ibid.）。

(71)*UiN*.

nooči sundatta təlluwkili biččiči.

təlu+wki-li

彼らは網漁をしていたものだった　Они рыбу сетью ловили (ловящие были).（Petrova 1967: 104）

(72)*UiN*.

nooči əmənǰi pulipukili biččiči.

puli-puki-li

彼らはトナカイに乗って行き来していたものだった　Они на оленях верхом ездили (ездящие были).（Petrova 1967: 104）

5.2.4 澗潟（1981）

3.1.5 で述べたように、澗潟（1981）は主としてウイルタ語の南方言を対象とした辞書である。Petrova（1967）や Tsintsius et al.（1975, 1977）も参照しているが、引用部分には出典が示されているので区別することができる。本稿では、澗潟（1981）の記述を南方言として扱う。

澗潟（1981）では、動詞につく語尾について「副動詞」「形動詞」などの用語が各所にみられる。だが、同書は辞書の構成なので、編者がどのような文法パラダイムを想定し、動詞をどのように分類していたのか読み取るのは難しい。

澗潟（1981）は、たとえば「*təəxəni təərini*　座る」（ibid.: 206）、「*waaxani waarini*　殺す、獲る、怪我する」（ibid.: 226）のように、多くの動詞の項目で 2 種類の語形を見出しとしている[38]。また「*-ri*」という見出しのもとで、「動詞現在語尾、*waaxani*（過去）、*waara*（不定語尾）、― *waarini*（現在）」（ibid.: 178）と説明しているように、基本的には *waaxani* のような語形の意味を《過去》、*waarini* のような語形の意味を《現在》と見ていると解釈できる。（なお、「不定語尾」とする *waara* は否定構造で用いられる形動詞である。）

澗潟（1981）は上記の《過去》《現在》を基本として、時制に関する形式を他にも挙げている。たとえば、(73)〜(76)に例を挙げる形式「*-kka* (*-kkə, -kko*)（動詞接尾辞）（単）継続中の第三人称の動作、…し続けている、*-kkal* (*-kkəl, -kkol*)（複）」（ibid.: 110）もその一つである。なお、以下に掲げる澗潟（1981）からの例文 3 行目では、動詞部分について澗潟（1981）にもとづく基底形を示す。

(73)*UiS.*

puttə ***soŋŋokko***.

soŋŋo-kko

一人の子供が泣いている（澗潟 1981: 110）

(74)*UiS.*

puril ***soŋŋokkol***.

soŋŋo-kkol

子供達が泣いている（澗潟 1981: 110）

(75)*UiS.*

gasanneeni ***issukkal*** ***joo!***

issu-kkal

部落の人達がもどって来るよー！（澗潟 1981: 110）

---

[38] 「*ŋənə-*　行く（基幹語尾）」（澗潟 1981: 151）のように、語幹だけを見出しにする例など、表記が一貫しないこともある。

(76)*UiS.*

ulisə bara biikkə goči!

bii-kkə

肉が沢山目の前に在るじゃないか！（澗潟 1981: 110）

また、《未来》に関して、澗潟（1981: 118）は「*-la* (*-lə*) *mi*（動詞接尾辞） 近い未来の動作…するだろう」を挙げた。次の(77)〜(79)はその用例であるが、人称は区別されていない。

(77)*UiS.*

amimbi xaiwadda uččimbəni čipaali toilami.

toi-lami

父さんがなんでも言ったことを俺は凡て実行するだろう（澗潟 1981: 118）

(78)*UiS.*

nooni dəpčillə.

dəpči-llə

彼は食うだろう（澗潟 1981: 118）

(79)*UiS.*

nooči waarillal.

waari-llal

彼等は殺すだろう（澗潟 1981: 118）

もう一つ、澗潟（1981）の記述にある形式「*-pula* (*-pulə*)（被動形動詞過去、述語にもなる）…されている、*-pulal* (*-pulə*l)（複）」（ibid. 173）を見ておきたい。Petrova（1967）の挙げた被動形動詞と同じものを指していると考えられる。(80)(81)は、その用例である。

(80)*UiS.*

bučči ŋindaa purəttəi orokpula.

orok-pula

死んだ犬は山へもって行かれた（澗潟 1981: 173）

(81)*UiS.*

xulməkkөө čakka təəwupulə.

təəwu-pulə

梱がギッシリ詰められている（澗潟 1981: 173）

5.2.5 Ikegami（1959 [2001], 2001）／池上（1994a [2001], 2001）

Ikegami（1959 [2001]）は、戦後にサハリンの南の地方から北海道へ移住したウイルタが話したウイルタ語を対象にした調査により動詞活用を精細かつ体系的に記述した論考である。池上（2001）は Ikegami（1959 [2001]）を日本語で概略したもので、どちらも南方言の記述である。また、1990 年代以降に池上が行ったサハリンでの調査を受け、池上（1994a [2001]）と Ikegami（2001）では北方言の特徴について報告されている。

Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）は、動詞の活用形を、それがとる活用語尾の種類によって「定動詞」（finite-verb）、「形動詞」（「動名詞」; verbal-noun）[39]、「副動詞」（converb, 池上（2001）では「共動詞」）の三つに分類している。

「定動詞」「形動詞」「副動詞」は、統語的なふるまいが異なる。その違いを、Ikegami（1959 [2001]）をもとにまとめたのが**表 5-4** である。

表 5-4　Ikegami（1959 [2001]）、池上（2001）による動詞の形態分類

分類	[1]	[2]	[3]
	文の述語になる	文の主語になる	名詞類を修飾する
(a) 定動詞	＋	－	－
(b) 形動詞		＋	＋
(c) 副動詞	－		

※　この表中で「文」とは、「一つの完全文」のこと

Ikegami（1959 [2001: 26-27]）の説明によると、まず文の述語になるかどうか（**表 5-4** の[1]）によって、述語になるものは(a)「定動詞」か(b)「形動詞」、ならないものは(c)「副動詞」に分かれる。次に、文の主語になったり（**表 5-4** の[2]）名詞類を修飾したり（**表 5-4** の[3]）できるかどうかによって、できないものが(a)「定動詞」、できるものは(b)「形動詞」と判断される。

Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）は、もっぱら形式的特徴によって動詞語尾を体系化している。そのため、たとえば「(a) 定動詞」のなかにいわゆる命令形も含まれるなど、動詞の分類においてはムードなどの意味的特徴は関与しない。一方、個々の語尾についての記述になると非常に精細で、例文とともに意味的特徴が詳しく説明されている。以下では、時制に関する記述のごく一部を紹介する。

Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）は、形動詞については「過去」「現在」「未来」などという用語を用いず、「完了」「不完了」というアスペクトの対立による区別をした。すなわち、*-xA(n)*を「完了」の形動詞語尾、*-ri* を「不完了」の形動詞語尾とする。Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）の見方では、これらの形動詞語尾を直説法の述語に援用して《過去》

[39] Ikegami（1959）による用語にしたがうならば「動名詞」とすべきだが、本稿では他の箇所との統一のため「形動詞」としておく。

《現在》などの時制を表わすという解釈ができる。

(82)*UiS.*

uuxani.

uu-xA(n)-ni

かれが乗った（池上 2001: 158）

(83)*UiS.*

uurini.

uu-ri-ni

かれが乗る（池上 2001: 158）

また、ウイルタ語の直説法で《未来》を表わす形式として*-rilA-/ -silA-*と*-rAŋA-/ -siŋA-*が挙げられている。池上（2001: 159）の分類ではいずれも定動詞で、*-rilA-/ -silA-*は「近い未来・確実な未来」を、*-rAŋA-/ -siŋA-*は「遠い未来・不確実な未来」を表わすという。次の(84)(85)は*-rilA-/ -silA-*の用例、(86)は*-rAŋA-/ -siŋA-*の用例である。なお、(86)のように、*-rAŋA-/ -siŋA-*は定動詞人称語尾の後ろには「動詞二次語尾」*-i* をともなう（Ikegami 1959／池上 2001）。この*-i* の意味は Ikegami（1959 [2001]）でも不明とされている（ibid.: 37）。

(84)*UiS.*

apaaččilami.

apaači+rilA-mi

私は寝る（Ikegami 1959 [2001: 29]）

(85)*UiS.*

mini dulleekkeewwee bujiləsi.

bul+rilA-si

お前は私よりも先に死ぬだろう（Ikegami 1959 [2001: 29]）

(86)*UiS.*

buu ŋənnəəŋəpui.

ŋənə+rAŋA-pu-i

私たちは行かなければならない（Ikegami 1959 [2001: 29]）

*-rilA-/ -silA-*と*-rAŋA-/ -siŋA-*は、三人称の場合、そのまま三人称を表わす無標*-ø* をつけるのではなく、それぞれ*-rillAA/ -sillAA*、*-rAŋŋAi/ -siŋŋAi* という形式で実現する。たとえば、*waa-*「殺す」という動詞の三人称では**waarila* や**waaraŋa* ではなく *waarillaa* や *waaraŋŋai* という語形ならば可能である。次の(87)は、*-rilA-/ -silA-*の三人称形の用例である。

(87)*UiS.*

<u>ŋənneellaa</u>.[40]

ŋənə+rillAA

かれが行くだろう（池上 2001: 159）

上述の形動詞・完了および不完了と対照するかたちで、池上（2001）は非人称形動詞（原文では「非人称動名詞」）を挙げた。ここで挙げられた 2 例(88)(89)はいずれも非述語用法だが、これらが述語として用いられることは同じ執筆者の採録・訳注によるテキスト（池上 2002）や、辞書（池上 1997）に載る例文(90)(91)により明らかである。

(88)*UiS.*

<u>uuwuri</u>.

uu-buri

乗ること・もの（池上 2001: 159）

(89)*UiS.*

<u>uupula</u>.

uu-pulA

乗ったこと・もの（池上 2001: 159）

(90)*UiS.*

jəə suŋdattaa bakkaa <u>dəpuri</u>.

dəptu+buri

この魚も食べられる。（池上 1997: 45）

(91)*UiS.*

čai təəluŋŋөөni čala <u>saapula</u>.

saa-pulA

そのいいつたえを、そのできごとからはっきりと知ってわかった。（池上 2002: 14）

ほかに Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）は、話し手によって検証された《過去》（例：(82)(83)）、および、話し手によって検証されている《現在》の形式（例：(84)(85)）を挙げている。

Ikegami（1959 [2001]）／池上（2001）は、通時的な観点で、いずれの形式も定動詞の「基本活用語尾」*-tA* および*-rA* に、かつての動詞語尾の一部*-n*、そして「動詞二次語尾」*-kA* が結合したものと分析した。まず、話し手によって検証された《過去》は、「動詞語幹＋定動詞・過去を表わす活用語尾*-tA*＋動詞語尾の一部*-*n*＋動詞二次語尾*-*kA*」が融合したもの

[40] 母音調和により *ŋənneellə* とあるべきところだが、原文のまま引用する。

と分析する。共時的な見方をすれば全体として「動詞語幹＋*-tAA*」というかたちで実現すると考えることができる。

(92)*UiS.*

ŋənətəə.

ŋənə-tAA

かれが行った（池上 2001: 159）

(93)*UiS.*

məənə ***moolotoo.***

moolo-tAA

（あの人は）自分で薪集めに行った（話し手が行くのを見た場合）（Ikegami 1959 [2001: 38]）

一方、話し手によって検証されている《現在》は、動詞語幹＋定動詞・過去を表わす活用語尾*-rA*＋動詞語尾の一部*-*n*＋動詞二次語尾*-*kA* が融合したものと分析する。共時的な見方をすれば全体として「動詞語幹＋*-rAkkA*」というかたちで実現すると考えることができる。

(94)*UiS.*

uurakka.

uu-rAkkA

かれが乗りつつある（池上 2001: 159）

(95)*UiS.*

tari nari məənə ***moollookko.***

moolo+rAkkA

あの人は自分で薪集めに行くところだ（話し手が行くのを見ている場合）（Ikegami 1959 [2001: 38]）

また、池上（1994a [2001: 251]）はウイルタ語の南方言と北方言の文法的な相違点の一つとして、動詞語尾*-bukki* を挙げた。「ある行動が習慣的にくりかえしおこることを表し、また文を終結させるはたらきをもつ。また、あとに *bičči*（あった）をともなうことによって、その行動が過去におきたことを表す」（池上 1994a [2001: 252]）という。さらに、Ikegami（1959 [2001]）の再版される際の補遺である Ikegami（2001: 70）も、北方言の動詞語尾*-bukki* について加筆した。

池上（1994a [2001: 251]）は、近接するツングース諸言語との比較から次のように述べ、動詞語尾*-bukki* がエウェンキー語からの借用である可能性を示唆した。

北方言の*-bukki* は、南方言にも、ウルチャ語、ナーナイ語にもみられないことから、ウ

イルタ語の固有の語尾ではなく、エウェンキー語から借用したものともみられよう。しかし*-bukki* は語幹との結びつきかたが単純でなく、接尾する異なる語幹の音形に応じて形を変えたり、語幹と融合したりするが、そのしかたは、ウイルタ語本来のものとみられるいくつかの語尾と軌を一にしている。このことからみると、*-bukki* はウイルタ語が古くから有していた語尾であるようであり、隣接のエウェンキー語の方言から借用されたとしても、比較的新しく借用されたものではなさそうである。（池上 1994a [2001: 277]）

5.2.6 Tsumagari（1985, 2009）

Tsumagari（2009: 8）は、「動詞は、その機能によって四つのグループに分類されるさまざまな動詞語尾を付加することで活用される」と述べ、動詞の形態を「(1) 命令形 imperative forms」「(2) 終止形 final forms」「(3) 分詞形（動名詞形）participle forms (verbal-noun forms)」「(4) 副動詞形 converb forms」に分類した。この分類のうち、ここでは直説法の述語になる形式として、「(2) 終止形」「(3) 分詞形（動名詞形）」に着目する。

まず、「終止形」について、Tsumagari（2009）は次の三つの形式を挙げた。これは、Ikegami（1959 [2001]）の言う定動詞に相当する（5.2.5 **表** 5-4）。

- 現在形：*-rAkkA* (3SG)　　話し手によって目撃される現在の動作
- 過去形：*-tAA* (3SG)　　話し手によって目撃された過去の動作
- 未来形：*-rillAA* (3SG)

（Tsumagari 2009: 9より、一部省略・表記改変）

また、「分詞形（動名詞形）」について、次の三つの形式を挙げた。これは、Ikegami（1959 [2001]）の言う形動詞（動名詞）に相当する（5.2.5**表**5-4）。

- 現在形1：*-rA ~ -si ~ -dA*　　普通、否定構造でのみ用いられる
- 現在形2：*-ri ~ -si ~ -ǰi*
- 過去形：*-xA(n-) ~ -či(n-)*

（Tsumagari 2009: 9より、一部省略・表記改変）

なお、過去形の*-xA(n-) ~ -či(n-)* 末尾の子音*n*（唇音の前では*m*）は、一人称単数語尾*-bi*や格語尾*-bA, -du*の前で現れる（ibid.）。

「分詞形（動名詞形）」のうち「現在形2」および「過去形」は、「(1) 名詞の限定詞として、(2) 格語尾をとることのできる動名詞として、(3) 述語として「終止形」よりも広く

一般に用いられる」という（Tsumagari 2009: 9）。他方、「終止形」ないし定動詞は文の述語としてしか機能しないが、実際のところ、「分詞形（動名詞形）」ないし形動詞よりも使用頻度が低い（ibid.）。

表5-5　Tsumagari（2009: 9）にもとづく動詞活用と時制の関係（肯定文の述語となるもの）

原文に即した訳語	左記に対応する本稿の用語	過去	現在	未来	使用頻度
分詞形（動名詞形）	形動詞	*-xA(n-)* ~ *-či(n-)*（過去）	*-ri* ~ *-si* ~ *-ji*（現在）	-	高
終止形	定動詞	*-tAA*（話し手によって目撃された過去）	*-rAkkA*（話し手によって目撃されている現在）	*-rillAA*（未来）	低

（本稿筆者によるまとめ）

5.3 まとめ

以上、本章ではウイルタ語の時制に関する先行記述を概観した。調査時期や対象とする方言、表記や分析がそれぞれに異なるため、全体を関連づけるのは容易ではないが、ここでは時制を表わす形式への言及に着目して、**表 5-6** に要約する。

それぞれの時制に関与する形式は記述によって異なるが、**表 5-6** では本稿筆者の判断で同一と思われる形式をまとめてアルファベットの大文字による代表形を示す。例えば、池上（2001）による*-xAn*、Tsumagari（2009）による*-xA(n-)* ~ *-či(n-)*は、統一して-XAN とする。あくまでも全体的な言及の有無に着目するための便宜的な表記である。

表 5-6　動詞活用と時制に関する先行記述のまとめ

本稿の節	報告者	調査時期（年代）	対象（方言）	ウイルタ語の動詞語尾（代表形）		
				《過去》	《現在》	《未来》
5.2.1	Pilsudski（Majewicz ed. 2011）	1900	南	-XAN	-RI	
5.2.2	中目（1917a）	1910	南	-XAN	-RI	―
5.2.3	Petrova（1967）	1930 ～ 1940	北	-XAN	-RI	-RILA-
				-PULA	-BURI	-LLEE
				-BUKKI（習慣）		
5.2.4	澗潟（1981）	1920 ～ 1930	南	-TAA	-RAKKA	-RILA-
				-XAN	-RI	
5.2.5	Ikegami（1959 [2001]）、池上（2001）	1940 ～ 1950	南	-TAA	-RAKKA	-RILA-
				-XAN	-RI	-RAGA-
				-PULA	-BURI	
	Ikegami（2001）、池上（1994a [2001]）	1990 ～ 2000	北	-BUKKI（習慣）		
5.2.6	Tsumagari（2009）	1940 ～ 1980[41]	南	-TAA	-RAKKA	-RILA-
				-XAN	-RI	

[41] Ikegami（1959 [2001]）の概略を基本にしているため、池上の調査期間を含める。

第 6 章　ウイルタ語北方言の動詞活用と時制(2)；記述の試み

前章では、池上（1994a [2001]）をもとにウイルタ語方言の記述文法における課題を動詞活用と時制を表わす形式の体系を記述することに設定し、それに関連する先行記述を概観した。本章では、先行記述をもとにした記述の枠組みに新しい調査結果を取り入れることによって、動詞活用と時制を表わす形式の特徴を記述してゆく。本章前半の 6.1 では記述の枠組みとして重要な概念を整理し、後半の 6.2 では具体的に形式ごとの特徴を述べる。

6.1 記述の枠組み

6.1.1 活用形の分類

形式を一つ一つ見てゆく前に、ウイルタ語北方言の動詞活用の前提となる、記述の枠組みを規定する。

第 4 章で述べた音韻と形態構造をもつ動詞の活用形は、活用語尾の種類ごとに大きく「形動詞」「定動詞」「副動詞」の三つに分類される。この考えは、5.2.5 で見た Ikegami（1959 [2001]）による分類（5.2.5 **表 5-4**）にもとづく。ここでは「副動詞」の統語機能を加えて、**表 6-1** のように規定する。（なお、**表 5-4** では「定動詞」「形動詞」「副動詞」の順だったが、**表 6-1** では便宜のため「形動詞」を先頭にした。）

表 6-1　ウイルタ語における動詞活用形の分類と統語機能

活用形の分類	統語機能			
形動詞	名詞の修飾句	名詞句	―	述語
定動詞	―	―	―	述語
副動詞	―	―	副詞句	―

（Ikegami 1959 [2001: 26-27]にもとづく）

活用形の分類のうち、まず「形動詞」は統語的に多機能で、名詞の修飾句、名詞句となるほか、述語となって文を終止させる機能を持つ。以下、統語機能ごとに例を挙げる。

まず(96)(97)は、形動詞が名詞の修飾句となる例である。以下、名詞の修飾句となっている形動詞を波線で示す。(96)は、動詞 *sii-*「過ぎる」の語幹と活用語尾*-xA(n)*とから成る形動詞（完了）*siixə* が名詞 *bee*「月」を修飾して、*siixə　bee*「過ぎた月（先月）」という名詞句をつくっている。また、(97)は、波線で示す動詞 *puli-*「歩く」（「0.2 類」動詞；4.4.3 参照）の語幹と活用語尾*-si* から成る形動詞（不完了）*pulisi* が直前の語 *purəkki*「やまを」と連なって名詞の修飾句をつくり、名詞（複数形）*narisal*「人たち」を修飾して、*purəkki　pulisi　narisal*「やまを歩く人たち」という名詞句をつくっている。

(96)*UiN.*

duku	***biččini***	***andupula***	***siixə***	***beedu.***
duku	*bi+či(n)-ni*	*andu-pulA*	*sii-xA(n)*	*bee-du*
house	COP+PRF.P-3SG	make-IPSN.PRF.P	pass-PRF.P	month-DAT

家は先月［過ぎた月に］できた。(TSM200_BEA.180)

(97)*UiN.*

tari	***uliŋga***	***xuisə***	***purəkki***	***pulisi***	***narisaltai.***
tari	*uliŋga*	*xuisə*	*purə-kki*	*puli-si*	*nari-sAl-tAi*
that	good	rations	forest-PRL	walk-IM.P	person-PL-DIR

これはやまを行く人たちに良い携帯食だ。[7.1.9.13]

次に、形動詞が名詞句となる例を確認する。下記の例(98)～(100)では、名詞句をつくる形動詞を含む語を波線で示す。まず、(98)では、与格名詞 *naadu*「土地に」の後ろの動詞語幹 *bi-*「ある、いる」（不規則変化動詞；4.4.3 参照）と活用語尾*-či(n)*から成る形動詞（完了）*bičči* が名詞的にふるまい、*naadu　bičči*「土地にあったもの」という名詞句をつくっている。そして対格語尾*-bA* が形動詞 *bičči* の後ろにつく。(99)では、*pəətəmbə* の後ろの動詞語幹 *gobdo-*「狩る」と活用語尾*-buri* から成る形動詞（非人称、不完了）*gobdouri* が名詞的にふるまい、*pəətəmbə　gobdouri*「アザラシを狩ること」という名詞句をつくっている。対格語尾*-bA* は形動詞の後ろに融合している。(100)の一つ目の波線部では動詞語幹 *bi-*「ある、いる」に活用語尾*-ri* が融合してできた形動詞（不完了）*bii* に複数接辞*-sAl* がついて、(100)の二つ目の波線部では動詞語幹 *kaapadu-*「のぼる」に活用語尾*-ri* が融合してできた形動詞（不完了）*kaapajǰee* に与格語尾*-du* と三人称単数語尾*-ni*（*suunə* に一致）がついて、それぞれ形動詞が名詞的なふるまいをしている（cf. *suunə　kaapajǰeeni*「日が昇る」）。

(98)*UiN.*

naadu	***biččimbə***	***əbur*** [42]	***dappaa.***
naa-du	*bi+či(n)-bA*	*ə-buri*	*dapa+rA*
land-DAT	COP+PRF.P-ACC	NEG-IPSN.IM.P	take+NIM

土地にあったものはとらないことだ。（池上 2002: 121）

(99)

joosoǰi	***gəlburisiči***	***pəətəmbə***
jooso-ǰi	*gəlburi-si-či*	*pəətə(n)-bA*
hunting.sea.animals-INS	give.a.name.to-IM.P-3PL	seal-ACC

[42] 付録 CD で音声を筆者が聞いたところ、*əbur* の *b* の閉鎖音はさほど明確でなく、*əwur* とも聞こえる。

gobdourree.

gobdo+buri+bA

hunt+IPSN.IM.P+ACC

「ヨーソ」とは、アザラシを狩ることを言う。[7.1.4.04]

(100) *UiN.*

tamačee	***jooso***		***kəssəəni***	***saariči***	
tamačee	*jooso*		*kəsə+bA-ni*	*saa-ri-či*	
like.that	hunting.sea.animals		language+ACC-3SG	know-IM.P-3PL	
uiltasal	***giləəsəl,***	***əwwee***	***naadu***	***biisəl,***	***suunə***
uilta-sAl	*giləə-sAl*	*əwwee*	*naa-du*	*bi+ri-sAl*	*suunə*
Uilta-PL	Nivkh-PL	here	land-DAT	COP+IM.P-PL	sun

kaapajjeeduni.

kaapadu+ri-du-ni

rise+IM.P-DAT-3SG

「ヨーソ」ということばを、この地、日の昇るところに暮らす人たち、ウイルタとニヴフが知っている。[7.1.4.05]

形動詞の三つ目の統語機能として、述語の機能が挙げられる。後述の「述語専用」の活用形である定動詞よりも、形動詞のほうが述語として汎用性が高く、本稿で紹介するテキストでの用例も多い。上の(98)(99)(100)でも、 (98)では否定動詞 *ə-*「～しない」の形動詞形 *əburi*、(99)では動詞 *gəlburi-*「名づける」(「0.2 類動詞」; 4.4.3 参照）の形動詞形 *gəlburisiči*、(100)では動詞 *saa-*「知る」の形動詞形 *saariči*（下線部）が述語として用いられている。

次に、「定動詞」を見る。形動詞が統語的に多機能であるのに対し、定動詞は述語の機能しか持たない、いわば述語専用の形式である。[43]

(101)*UiN.*

puuni	***wəədəpčilləə.***
puu-ni	*wəədə-ptu+rillAA*
smell-3SG	leave.behind-SPN+NFUT.F.3SG

臭いは消えるでしょう。[7.1.4.51]

[43] ウイルタ語の語順はいわゆる SOV 型で述語が文末に来るのが基本である。だが、今日話される北方言では基本語順に合わない例が多い。Malchukov（2003: 242）は、エウェンキー語、エウェン語、ネギダール語における語順の変化をロシア語の影響と関連付けている。たとえば、ロシア語の影響によりエウェンキー語では本来の SOV 型語順と SVO 型語順が同頻度で見られるようになっているという（ibid.)。今日のウイルタ語についても同様に、ロシア語の影響によって語順が変化している可能性は高い。

(102)*UiN.*

tari	***ŋaalu***	***oŋdoni,***	***ŋaalu***	***oŋdoni***	***undəkkəl.***
tari	*ŋaalu*	*oŋdo-ni*	*ŋaalu*	*oŋdo-ni*	*un-rAkkA-l*
that	Galu	devil-3SG	Galu	devil-3SG	say-PRS.EVD.F.3-PL

それはガール（地名）の悪霊だというのよ。(20101227_2MLG_BEA.055)

(103)*UiN.*

xai	***balaalbani***	***baarilasi?***
xai	*balaa-l-bA-ni*	*baa-rilA-si*
what	pit.dwelling-PL-ACC-3SG	find-NFUT.F-2SG

どんな竪穴住居を見つけられる？ [7.2.1.61]

活用形の分類の三つ目「副動詞」は、次の例(104)(105)(106)の波線部のように、述語を修飾する副詞句としてはたらく。

(104)*UiN.*

daugaččeeri	***ŋənəxəči.***
dau-kAččeeri	*ŋənə-xA(n)-či*
go.across-SUB.PL.C	go-PRF.P-3PL

渡ってから、さらに進んで行った。[7.3.1.13]

(105)*UiN.*

ulaaba	***waamari***	***səəksəəni***	***təsusiči.***
ulaa-bA	*waa-mAri*	*səəksə+bA-ni*	*təsu-si-či*
reindeer-ACC	kill-COOR.PL.C	blood+ACC-3SG	gather-IM.P-3PL

家畜トナカイを殺して、その血を彼らは採る。(20101102_1MLG_BEA.020)

(106)*UiN.*

a	***lilak***	***mama***	[…]	***bulkutənnee***	***gaduxanee***	***goči.***
[a]	*lilak*	*mama*		*bul-kutA-nnee*	*gadu-xA(n)-ni+kAA*	*goči*
but	Lilak	old.woman		die-PRF.C-3SG	bring-PRF.P-3SG+EXC	PTCL

しかし、リラクばあさんが死んでから、彼は持って行ったんだね。（池上 2002: 121；一部省略）

6.1.2 活用形のとる人称語尾の有無と系列

動詞の活用形、および、活用形に連結する形態素によって構成される動詞複合体の構造は、すでに 4.4.2 で述べたとおりである。本節では、活用形ごとに異なる人称語尾について述べる。

前節で挙げた動詞の活用形のうち、形動詞と副動詞には人称語尾をとるものと、人称語

尾をとらないものがある。形動詞についていえば、人称語尾をとる形動詞を総称して「人称形動詞」、人称語尾をとらない形動詞を総称して「非人称」形動詞と呼ぶ。この用語は、Ikegami（1959）／池上（2001）にもとづく。人称語尾をとらない「非人称」形動詞は、Petrova（1967）および澗潟（1981）が「被動」形動詞と呼んだ形式に当たる（cf. 5.2.3, 5.2.4）。

たとえば、下記の(107a)と(108a)は主語の人称を標示する「人称形動詞」である。(107a)では主語の人称代名詞は現れていないが、形動詞に一人称複数の人称語尾*-pu*がつくことで、主語が一人称複数（私たち）であることを標示している。(108a)では主語の *nooni*「彼、彼女」（三人称単数代名詞主格形）に一致して形動詞に三人称単数の人称語尾*-ni* がついている。他方、(107b)と(108b)では述語となる形動詞が主語の人称を標示しない。(107b)と(108b)の述語動詞がとっている活用形が、「非人称形動詞」である。

(107a)*UiN*.

xooni	***joodopumba***	***andusipu.***
xooni	*joodopu(n)-bA*	*andu-si-pu*
how	ritual.rattles-ACC	make-IM.P-1PL

どのように私たちがヨードプを作るか（20101016_1MLG_BEA.001）

(107b)*UiN*.

xooni	***joodopumba***	***andupuri.***
xooni	*joodopu(n)-bA*	*andu-puri*
how	ritual.rattles-ACC	make-IPSN.IM.P

どのようにヨードプを作るか [7.1.7.01]

(108a)*UiN*.

nooni	***mittəi***	***bičixxəə***	***gačči-ni.***
nooni	*mittəi*	*bičixə+bA*	*ga+či(n)-ni*
3SG.NOM	1SG.DIR	book+ACC	take+PRF.P-3SG

彼女が僕に本を買ってくれた。（KZM242_BEA.057）

(108b)*UiN*.

čawa	***gawwuri***	***xaiduddaa***	***čipaali.***
čawa	*ga+buri*	*xai-du=ddAA*	*čipaali*
that.ACC	take+IPSN.IM.P	what-DAT=EMPH	altogether

それはどこでも買える。（KZM242_BEA.077）

人称形動詞には多くの種類があるが、非人称形動詞は*-pulA*（6.3.1）および*-buri/ -puri*（6.3.2）の 2 種類に限られる。

次の**表** 6-2 は、人称形動詞、非人称形動詞を含め、活用形の種類によって異なる人称語尾の系列をまとめたものである。

表 6-2　活用形の種類によって異なる人称語尾の系列

活用形の分類＼人称・数			一人称		二人称		三人称	
			単数	複数	単数	複数	単数	複数
形動詞	人称形動詞	(i)	*-wi ~ -bi*	*-pu*	*-si*	*-su*	*-ni*	*-či*
	非人称形動詞	(ii)	-	-	-	-	-	-
定動詞		(iii)	*-mi*	*-pu*	*-si*	*-su*	*-ø*	*-ø(-l)*
副動詞		(iv)	-	-	-	-	-	-
		(v)	*-wwee*	*-ppoo*	*-si*	*-su*	*-ni*	*-či*
		(vi)	*-wwee*	*-ppoo*	*-ssee*	*-ssoo*	*-nnee*	*-ččee*
その他		(vii)	*-bi*	*-pu*	*-si*	*-su*	*-ø*	*-ø(-l)* ~ *-ø(-li)* ~ *-ø(-lil)*

※　括弧内は任意の要素

形動詞以外について言えば、定動詞には(iii)の系列の人称語尾／複数語尾がつく。三人称複数の場合、任意で複数語尾*-l* がつく。副動詞には(iv)(v)(vi)の三種類の系列が認められる。暫定的に「その他」とした(vii)は、後述の動詞語尾*-bukki/ -pukki* につく人称語尾／複数語尾の系列である。

以上、形式にもとづいた動詞活用の枠組みを提案し、「形動詞・定動詞・副動詞」「人称・非人称」の分類を明らかにした。三種類の活用形のうち、以下では、直説法の述語形式（肯定）に焦点を当てる。すなわち、以下では形動詞の述語用法と定動詞が考察対象となる。

6.1.3 時制に関する形式の概要

以上に定めた動詞活用の枠組みにしたがい、ここからは述語形式が表わす時制に着目してゆく。ウイルタ語北方言における述語形式で用いられる動詞の活用語尾のおもなものには、*-xA(n)/ -či(n), -ri/ -si, -li, -pulA, -buri/ -puri,-tAA, -rAkkA/ -sikkA, -rilA-/ -silA-, -rAŋA-/ -siŋA-, -bukki/ -pukki* があり、縦軸を動詞活用の分類、横軸を時制とした表にまとめると、概略**表** 6-3 のように整理できる。

表 6-3　ウイルタ語北方言における動詞活用と時制（北方言）

動詞活用＼時制		過去	現在	未来
形動詞	人称	*-xA(n)/ -či(n)*	*-ri/ -si*	*-li*
	非人称	*-pulA*	*-buri/ -puri*	
定動詞		*-tAA*	*-rAkkA/ -sikkA*	*-rilA-/ -silA-* *-rAŋA-/ -siŋA-*
その他		*-bukki/ -pukki*		

横軸の時制の分け方は厳密ではなく、ここでは予備的に《過去》《現在》《未来》に分けた。本来、動詞活用の種類ごと、あるいは、形式ごとに異なるテンスやアスペクトの機能があるので、それらをまとめて同じ平面上で扱うには限界があるので、**表 6-3** はあくまでも時制に関わる形式を概観するための、概念図のようなものである。また、*-bukki/ -pukki* については、活用形の種類を特定しない。

次節以下では、**表 6-3** に挙げた活用語尾*-xA(n)/ -či(n), -ri/ -si, -li, -pulA, -buri/ -puri, -tAA, -rAkkA/ -sikkA, -rilA-/ -silA-, -rAŋA-/ -siŋA-, -bukki/ -pukki* について、それぞれの形式的な特徴と意味的な特徴を見てゆく。

6.2 人称形動詞

6.2.1 完了*-xA(n)/ -či(n)*

前章で見たすべての先行記述が言及した-XAN（**表 5-6** 参照）に当たる形式は、今日の北方言でも確認される。この形式は、**表 6-4（次頁）**に示すように、子音終わりの語幹（-C）につく場合、および「0.2 類」の動詞語幹につく場合は*-či(n)*、その他の場合は*-xA(n)*という異形態をとる。活用語尾末尾の *n* は、Tsumagari（2009: 9）が指摘するように、原則として *-bi*（1SG）、*-bA*（ACC）、*-du*（DAT）が後続するときにのみ現れる。このような形態変化を総合して、本稿では基底形を*-xA(n)/ -či(n)*と表記している。

述語として用いられる場合に限って見れば、Petrova（1967）ほか前章で参照したほとんどの先行記述が認めるように、今日話される北方言でも《過去》に起きた出来事を表わすことが多い。次の例(109)(110)でも、*-xA(n)/ -či(n)*が語りのなかの過去に継続した状態(109)や動作(110)を表わしている。

(109) *UiN.*

čadu	***čadu***	***biččiči***	***mama***	***mapaŋumuna.***
čadu	*čadu*	*bi+či(n)-či*	*mama*	*mapa-ŋu-munA*
that.DAT	that.DAT	COP+PRF.P-3PL	old.woman	old.man-AL-POSS

そこには、おばあさんとおじいさんが住んでいた。[7.1.1.11]

表 6-4　人称形動詞（完了）語尾*-xA(n)/ -či(n)*の結合

語幹末の音韻構造		例			音韻変化	
		基底形（STEM＋*-xA(n)/ -či(n)*）		結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-xA(n)*	＞	*waa-xa*　「殺した」	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-xA(n)*	＞	*ŋənə-xə*　「行った」		
-CCV		*əksə-*＋*-xA(n)*	＞	*əksə-xə*　「置いた」		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-či(n)*	＞	*bujal-či*　「こわした」		
	-g	*xaag-*＋*-či(n)*	＞	*xaa**k**-či*　「（岸に）着いた」	*g* > *k*	なし
	-n	*un-*＋*-či(n)*	＞	*u**č**-či*　「言った」	*n* > *č*	
*-V*k*V		*loo-*(<**-loko*) ＋ *-xA(n)*	＞	*loo-xo*　「掛けた」	なし	

「0.2 類」	*andu*＋*-či(n)*	＞	*andu-či*　「作った」	なし	

(110) *UiN.*

sundattaa	***ačibi***	***buuxəni.***
sundatta+bA	*ači-bi*	*buu-xA(n)-ni*
fish+ACC	grandmother-1SG	give-PRF.P-3SG

魚を祖母はくれた。[7.1.1.23]

しかしながら、筆者の考察によると、*-xA(n)/ -či(n)*は《過去》というカテゴリーだけでは説明しにくいことがある。とくに(111)(112)(113)のように主体の状態変化を表わす動詞語幹につく場合、*-xA(n)/ -či(n)*がすでに完成して現在までも継続している状態を表わす。この場合、《過去》というより「完成」あるいは「結果状態」というようにアスペクトのカテゴリーに当てたほうが説明しやすい。

(111)*UiN.*

aalixasii?

aali-xa-si=i

get.tired-PRF.P-2SG=YNQ

おまえ疲れた［疲れている］か？

(112)*UiN.*

bii	***sisamba***	***urəxəmbi***.[44]
bii	*sisa(n)-bA*	*urə-xA(n)-bi*
1SG.NOM	Japanese-ACC	get.resemble-PRF.P-1SG

私は日本人に似ている。(BE0903.289)

(113)*UiN.*

ugdapu	***daluptuxanee.***
ugda-pu	*daluptu-xA(n)-ni+kAA*
boat-1PL	become.full-PRF.P-3SG+EXC

私たちの舟はいっぱいだよ［いっぱいになってしまったよ］[7.4.1.09]

(114)(115)では、*əsiləkə*「今は、いまや」という語と共起して、すでに「完了」した出来事を表わすと説明できる。

(114)*UiN.*

əsiləkə	***əruni***	***siixəni.***
əsi=lAkA	*əru-ni*	*sii-xA(n)-ni*
now=TOP	time-3SG	pass-PRF.P-3SG

いまや、もうその時が過ぎてしまった［今はもうおそい］。 (KZM242_BEA.015)

(115)*UiN.*

nu,	***əsiləkə***	***dəgdəxəči***	***əmbee***.
nu	*əsi=lAkA*	*dəgdə-xA(n)-či*	*əmbee*
INTJ	now=TOP	burn-PRF.P-3PL	of.course

ああ、今は焼けてしまっているよ、もちろん。[7.2.1.59]

以上のことから、Ikegami（1959）／池上（2001）と同様、*-xA(n)/ -či(n)* そのものの基本的な意味は「完了」とし、これが述語で用いられる場合、主に過去の出来事を表わすと考える。

上述のように形動詞語尾*-xA(n)/ -či(n)*は、述語となるほかに、名詞の修飾句や名詞句としての統語機能もある。意味機能については、活用語尾*-xA(n)/ -či(n)*の非述語用法（名詞の修飾句、名詞句）における機能を総合して、今後はより積極的に検討するべきであると考える。

[44] 池上（1997: 221）によると南方言では「*urree-ni* v.［perf. *urəxə-ni*］発育する（*daaji osini*）」とある。同形で、方言によって意味の異なる語であるとみなされる。

6.2.2 不完了*-ri/ -si*

前章で見たすべての先行記述が言及した-RI（**表 5-6** 参照）に当たる形式も、今日の北方言で確認される。**表 6-5** に示すように、この形式は「0.2 類」の動詞語幹につく場合は*-si*、その他の場合は*-ri* で現れる。子音終わりの語幹（-C）につく場合は、*r* が *ǰ* に交替する。語幹末が-**V*k*V* の場合は、融合形（例 : *lokkee*）と接着形（例 : *loo-ri*）の二通りがありうる（4.4.3 参照）。このような形態変化を総合して、本稿ではこの語尾の基底形を*-ri/ -si* と表記している。

表 6-5　人称形動詞語尾*-ri/ -si* の結合

語幹末の音韻構造		例			音韻変化	
		基底形（STEM＋*-ri/ -si*）		結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-ri*	＞	*waa-ri* 「殺す」	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-ri*	＞	***ŋənnee*** 「行く」	融合	
-CCV		*əksə-*＋*-ri*	＞	***əksee*** 「置く」		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-ri*	＞	*bujal-**ǰi*** 「こわす」	なし	*r* > *ǰ*
	-g	*xaag-*＋*-ri*	＞	*xaag-**ǰi*** 「（岸に）着く」		
	-n	*un-*＋*-ri*	＞	*un-**ǰi*** 「言う」		
*-V*k*V		*loo-*（<**-loko*）＋*-ri*	＞	***lokkee*** 「掛ける」 *~ loo-ri*	融合～なし	
「0.2 類」		*andu*＋*-si*	＞	*andu-si* 「作る」	なし	

語尾*-ri/ -si* は、Petrova（1967）ほか前章で参照したほとんどの先行記述が認めるように、今日話される北方言でも発話時点の現在に起きている出来事や状態を表わすことが多い。(116)は 1 文目で表わされた過去の出来事に対し、2 文目では発話時点の出来事を説明している。

(116)*UiN.*

nooni	***goro***	***goro***	***tattuučimǰiǰi***	***uiləxəni.***
nooni	*goro*	*goro*	*tattuučimǰi-ǰi*	*uilə-xA(n)-ni*
3SG.NOM	far	far	teacher-INS	work-PRF.P-3SG

i	***əsi***	***əsi***	***anu***	***dərukpiččini.***
[i]	*əsi*	*əsi*	*anu*	*dərukpin-či+ri-ni*
and	now	now	FIL	rest-ITR+IM.P-3SG

彼女はずっと教師として働いていました。でも、今は（退職して）ずっと休んでいます。（20110326_1MLG_BEA.022-023）

一方、語りのなかでは過去の出来事を表わすこともある。たとえば、Petrova（1967）が《現在》の例文として挙げた例(117)では、文脈から過去の出来事であることは明らかだが、後半では *təəsini*「座っている」というように形式として*-ri/ -si* がついている。

(117)*UiN.*

nalma	***dukutakki***	***iiduxəni***		***dukuduni***
nalma	*duku-tAkki*	*ii-du-xA(n)-ni*		*duku-du-ni*
Nalma	house-REF.DIR	enter-REV-PRF.P-3SG		house-DAT-3SG
ənini	***soŋomi***	***təəsini.***	[...]	
əni-ni	*soŋo-mi*	*təə-si-ni.*		
mother-3SG	cry-COOR.C	sit-IM.P-3SG		

ナルマは自分の家に入ってきた。家では彼の母親が泣きながら座っている。[後略]（Petrova 1967: 106）

また、池上（2002: 109）のテキストのなかにも、過去の文脈のなかの述語動詞に*-ri/ -si* が用いられる例がある。若干長いが、(118)に引用する。下線部の *xuppiči*「遊ぶ」、*xurigačči*「くままつりをする」、*pəččənəsit*「飛び跳ねる」、*tuksauriči*「走りらせる」の基底形と文法注記で*-ri/ -si* がついていること、しかし文脈から、これらの述語動詞が表わすのは過去の出来事であることを確認されたい。

(118)*UiN.*

xuppiči	***nooči***	***čad***	***xurigačči̇či.***
xupi+ri-či	*nooči*	*čadu*	*xurigači+ri-či*
play+IM.P-3PL	3PL.NOM	that.DAT	hold.bear.festival+IM.P-3PL
pəččənəsit.	***tuksauriči***	***ulaaji.***	
pəččənə-si-či	*tuksa+bu-ri-či*	*ulaa-ji*	
jump-IM.P-3PL	run+TR-IM.P-3PL	reindeer-INS	
goropčinnee	***čaraŋači biu***	***biččiči***	
goropči-nnee	*čaraŋači biu*	*bi+či(n)-či*	
old-PERS	like.that #	COP+PRF.P-3PL	

bii ***nuuči*** ***biŋəsseewwee.***

bii *nuuči* *bi-ŋAssee-wwee*

1SG.NOM small COP-CONJ.C-1SG

čaa ***sulaa*** ***saariwi*** ***čaa*** ***biččimbəči.***

čaa *sulaa* *saa-ri-wi* *čaa* *bi+či(n)-bA-či*

that barely know-IM.P-1SG that COP+PRF.P-ACC-3PL

かれらは遊ぶ。かれらはそこでくま祭りをする。かれらは飛び跳ねる。かれらは走らせる、となかいを。むかしの人はそのようにしていた、わたしの小さかったころ。その（ことを）なんとかわたしはおぼえている、そのかれらがそうしていたことを。（池上 2002: 109）

また、(119)では主体の状態変化を表わす動詞について、変化が進行している状況を表わしていると考えられる。意味的には、完成あるいは結果状態が表わされる上掲の例(112)と対照的である。

(119)*UiN.*

sagda ***narree*** ***urreenee*** ***goči.***

sagda *nari+bA* *urə+ri-ni+kAA* *goči*

old man+ACC get.resemble+IM.P-3SG+EXC PTCL

年寄りにだんだん似ていくよなあ。（BE0903.290）

ここまでに見た例は、特定の時点で「進行」中の出来事と考えることもできる。他方、次の(120)(121)のような例では二人称複数人称語尾をともなって、文全体として勧誘の意味が表わされる。これは、まだ起こっていない事実を指すので、「進行」とは言えない例である。

(120)*UiN.*

ŋənneesu ***mindoo.***

ŋənə+ri-su *mindoo*

go+IM.P-2PL 1SG.COM

私と行こう。（TSM200_FIJ.111）

(121)*UiN.*

čaiwa ***ummisui?***

čai-bA *umi+ri-su=i*

tea-ACC drink+IM.P-2PL=YNQ

お茶を飲もうか。

以上の形動詞語尾*-ri/ -si* の用例を概観すると、《現在》や《未来》など特定の時点を表わすとは言い難い。やはりここでは、Ikegami（1959 [2001]）、池上（2001）の記述のように形動詞語尾*-ri/ -si* の基本的な意味を「不完了」とし、前節の形動詞語尾*-xA(n)/ -či(n)*の「完了」と対立する形式と考える。

ここまで挙げた人称形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*と不完了*-ri/ -si* は、この言語の動詞形態として最も使用頻度の高い、基本的な述語形式である。南方言では、後者に時間を表わす副詞を補えば《未来》を表わすこともできる。この意味で、南方言における*-ri/ -si* は（《過去》以外という意味で）《非過去》を表わすとも説明できる。一方、今日の北方言では形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*と不完了*-ri/ -si* と対立する《未来》専用の形式が見られる。これについて、次節で述べる。

2.1.3 未来*-li*

前章で見た先行記述では、《未来》を表わす形式として-RILA, -LLEE, -RAGA が挙げられている（**表** 5-6）が、今日の北方言では、これらのいずれとも合致しない形式*-li* が用いられる。5.1.2 で述べたように、山田（2010a）は、今日のウイルタ語北方言における語尾*-li* は動詞を活用させ《未来》の意味を加えるテンスの形式であると指摘した。以下、本節では山田（2010a）をもとに動詞語尾*-li* の特徴を考察する。

まず形態的特徴に着目すると、**表** 6-6（**次々頁**）に示すように語尾*-li* そのものは異形態をもたない、基本的に融合しないタイプの語尾であるといえる。ただし、先行する動詞語幹が *n* で終わる場合、語幹末の *n* が *l* に逆行同化する例が確認されている。

また、筆者の聴取では、上述の形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*や形動詞・不完了の語尾*-ri/ -si* の後に続く場合と同様の所有人称語尾が続く（**表** 6-2 参照）。この特徴から、筆者は動詞語尾*-li* を形動詞語尾と呼んでいる。ただし、名詞修飾句や名詞句として用いられる例は、今のところ得られていない。

例えば、下記の例(122)では一人称単数、(123)では一人称複数、(124)では二人称単数、(125)では二人称複数、(126)では三人称単数、(127)では三人称複数の人称語尾が動詞語尾*-li* の直後についている。いずれの場合も、動詞語尾*-li* を含む活用形が各文の述語の役割をしている。

(122)*UiN.*

bii	***əsi***	***xairee***	***dausulaliwi.***
bii	*əsi*	*xairi+bA*	*dausu-lA-li-wi*
1SG.NOM	now	fish.roe+ACC	salt-VSF-FUT.P-1SG

私は今いくらを塩漬けにしようとしているんだ。（FI080914.039）

(123)*UiN.*

ŋuiwə	***bii***	***panuliwee****?*
ŋui-wə	*bii*	*panu-li-wi+kA*
who-ACC	1SG.NOM	ask-FUT.P-1SG +WHQ

誰に聞けばいいですか？（BE0906.108）

(124)*UiN.*［食事で一休みした後、仕事を再開しようというときに］

uiləlipu.

uilə-li-pu

work-FUT.P-1PL

（私たち）仕事するぞ。（BE0809b.005）

(125)*UiN.*　［母親と一緒に行きたがる子どもに対して、母親のせりふ］

anaa,	***ačiǰǰi***	***dərəiǰilisi.***
anaa	*ači-ǰǰi*	*dərəiǰi-li-si*
no	grandmother-REF.DAT	stay.behind-FUT.P-2SG

だめよ、おまえはおばあちゃんと一緒にいるの！（20110212_3MLG_FIJ.009）

(126)*UiN.*［翌日に別の町に移動しようとする聞き手に対して］

xaali	***suu***	***ŋənəlisɵɵ?***
xaali	*suu*	*ŋənə-li-su+kA*
when	2PL.NOM	go-FUT.P-2PL+WHQ

お前たち、いつ［何時頃に］行くの？（FI080914.031）

(127)*UiN.*

poktokkeesu	***duu***	***uni***	***bilini,***	***paaji***	***uŋaatal.***
pokto-kkee-su	*duu*	*uni*	*bi-li-ni*	*paaji*	*uŋaa-tA(A)-l*
way-PRL-2PL	two	river	COP-FUT.P-3SG	shallow	stream-DIM-PL

「お前たちの行く道に二つの小川があります、浅い小川です。」[7.3.1.03]

(128)*UiN.*　［テレビドラマの一場面について］

əsinəŋi	***ittəuliči***	***nooči***	***čadu***	***annoo***
əsinəŋi	*itə+bu-li-či*	*nooci*	*čadu*	*anu+bA*
today	see+TR-FUT.P-3PL	3PL.NOM	that.DAT	FIL+ACC

almaǰǰee	***doromosiči***	***xaiduka.***
[almazy]+bA	*doromo-si-či*	*xai-du=kA*
diamond+ACC	steal-IM.P-3PL	what-DAT=WHQ

今日［テレビで］見せるよ、彼らがそこであれを、ダイヤモンドをどこから盗むかを。（20110214_4DLG_BEA&FIJ.067）

表 6-6　人称形動詞（未来）語尾*-li* の結合

語幹末の音韻構造		例			音韻変化	
		基底形（STEM＋*-li*）		結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-li*	＞	*waa-li*　「殺す」	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-li*	＞	*ŋənə-li*　「行く」		
-CCV		*əksə-*＋*-li*	＞	*əksə-li*　「置く」		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-li*	＞	*bujal-li*　「こわす」		
	-g	*xaag-*＋*-li*	＞	*xaag-li*　「（岸に）着く」		
	-n	*un-*＋*-li*	＞	***ul-li***　「言う」	*n* > *l*	なし
*-V*k*V		*loo-*(<**-loko*)＋*-li*	＞	*loo-li*　「掛ける」	なし	
「0.2 類」		*andu*＋*-li*	＞	*andu-li*　「作る」	なし	

意味について、山田（2010a）では仮に動作主の意志、客観的な義務や必要性、見込みなど、モダリティのカテゴリーで解釈することを試みたが、すべての用例に共通の解釈をすることはできなかった。上記の例(122) ~ (128)を概観しても、モダリティのカテゴリーで解釈する場合、動作主の意志(122)(126)、客観的な必要性(123)、勧誘あるいは命令(124)(125)など、幅広い意味機能を認めることになる。しかし、山田（2010a）によって、テンスのカテゴリーで《未来》と考えれば一貫した説明ができることがわかった。

近年にウイルタ語北方言の調査をした Pevnov（2009: 102）も、今日の北方言で用いられる *ŋənə-li-ni*（go-*li*-3SG）「行く」という語の*-li* の部分を《未来》と分析した。筆者も、Pevnov（2009）と同様に動詞語尾*-li* を《未来》の意味を加える形式と考える。

この動詞語尾*-li* に対応する形式は、Pevnov（2009）以外の先行記述には見られない。また、筆者の調査で、今日の南方言でも用例が確認されなかった。南方言の話者であるミナト　シリュコは、*-li* はもっぱら北方言の特徴だと認識している。これらのことから、形動詞語尾*-li* による未来形はペトローワ T. I.の調査した 1940 年代よりも後に、ウイルタ語北方言に新しく生じた形式だと考えられる。

6.3 非人称形動詞

6.3.1 完了*-pulA*

Petrova（1967）ほか、南方言について Ikegami（1959）、池上（2001）が記述した-PULA（**表 5-6** 参照）に当たる形式が、今日の北方言でも確認される。**表 6-7** に示すように、結合に際して複雑な形態変化は起こさないと考えられるが、子音終わりの語幹につく場合につ

いては不詳である。今後、情報を補充する必要がある。

表 6-7　非人称形動詞（完了）語尾*-pulA* の結合

語幹末の音韻構造		例			音韻変化	
		基底形（STEM＋*-pulA*）		結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-pulA*	＞	*waa-pula* 「殺した」「殺された」	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-pulA*	＞	*ŋənə-pulə* 「行った」		
-CCV		*əksə-*＋*-pulA*	＞	*əksə-pulə* 「置く」		
-C	*-l*				?	
	-g				?	
	-n	*dakkan-*＋*-pulA*	＞	*dakka-pula* 「覆った」「覆われた」	*n* > ø	なし
*-V*k*V		*loo-*(<**-loko*)＋*-pulA*	＞	*loo-pula* 「掛けた」「掛けられた」	なし	
「0.2 類」		*andu*＋*-pulA*	＞	*andu-pula* 「作った」「作られた」	なし	

統語的には、上述の*-xA(n)/ -či(n), -ri/ -si* と同様に、*-pulA* のつく活用形もまた名詞の修飾句や名詞句としても用いられる。そのため、形動詞に分類される。例えば、(129)の波線部は名詞修飾句となって *oksoo*「橇」を修飾している。他方、(130)の波線部は名詞句として、この文の目的語となっている。

(129)*UiN.*

geeda ulaaǰi ***xalleepula*** ***oksoo.***

geeda ulaa-ǰi *xallee-pulA* *oksoo*

one reindeer-INS hitch-IPSN.PRF.P sled

一頭のトナカイがつながれた橇（一頭引きの橇）（山田・笹倉 2011: 108）

(130)*UiN.*

utəpullәə ***ačči wi.***

utə-pulA+bA *atu+ri-wi*

tack-IPSN.PRF.P+ACC take.off+IM.P-1SG

仮縫い（しつけ）をほどいている。(20110307_BEA.012)

人称語尾がつかないことが特徴だが、(69)（再掲）のように複数語尾*-l* をともなうことはある。(69)の場合は、動詞 *waa-*「殺す」の動作対象が複数であることを複数語尾*-l* で標示している。

(69')*UiN.*

isuxanduči	***amiččilčida***	***anagal,***	***čipaali***
isu-xA(n)-du-či	*amičči**l**-či=(d)dA(A)*	*ana(g)a-l*	*čipaali*
come.back-PRF.P-DAT-3PL	parents?-3PL=EMPH	no-PL	altogether

waapulal*.*

waa-pulA-l

kill-IPSN.PRF.P-PL

彼らが来たとき、彼らの親たちはいなかった、みんな殺されてしまっていた。（Petrova 1967: 103）

この語尾*-pulA* は、形態的特徴に南方言と北方言の差異がないと考えられるのに対し、統語的・意味的特徴には差異が見られる。そこで以下では、南方言の例と比較しながら、統語的・意味的特徴を検討してみたい。

南方言の用例を見ると、一般の能動文に対して格枠組みの変換が見られない。例えば、南方言の人称形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*の例文(131)と形動詞*-pulA* を用いた例文(91)（再掲）を対照すると、どちらも目的語の格が対格で表わされることを確認できる。

(131)*UiS.*

aldoo	***saaxambi****.*
aldu+bA	*saa-xA(n)-bi*
news+ACC	know-PRF.P-1SG

便りをわたしはきいた。（池上 1997: 6）

(91')*UiS.*

čai	***təəluŋŋɵɵni***	***čala***	***saapula****.*
čai	*təəluŋu+bA-ni*	*čala*	*saa-pulA*
that	legend+ACC-3SG	that.LOC	know-IPSN.PRF.P

そのいいつたえをそのできごとからはっきりと知ってわかった。（池上 2002: 14）

一方、北方言では語尾*-pulA* の形動詞が述語となる構文で、形動詞が表わす動作の対象となる語が主格で表わされる。下記の例で、人称形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*と非人称形動詞*-pulA* の構文を比較する。人称形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*の例文(132) では動作対象が対格

で *kuŋilta pəbgirrəəni*「スキーのストックを」と表わされるのに対し、非人称形動詞*-pulA* を用いた(133)では動作の対象が主格で *joodopu-ŋu-pu*「私たちのヨードプ（が）」と表わされている。

(132)*UiN.*

ilija	***<u>andučini</u>***	***kuŋilta***	***pəbgirrəəni.***
ilija	*andu-či(n)-ni*	*kuŋilta*	*pəbgirə+bA-ni*
Ilija	make-PRF.P-3SG	ski	stick+ACC-3SG

イリヤがスキーのストックを作った（20101109_BEA.001）

(133)*UiN.*

joodopuŋupu	***<u>andupula</u>.***
joodopu-ŋu-pu	*andu-pulA*
ritual.rattles-AL-1PL	make-IPSN.PRF.P

私たちのヨードプが作られた [7.1.7.24]

下の例(135)でも(133)と同様で、動詞 *ɲuri-*「書く」に*-pulA* がついた構文では、動詞の表わす動作の対象が主格で表わされている。人称形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*による例文(134)と対照されたい。(134)では、動作の対象が対格で *jaajamba*「歌を」と表わされるのに対し、(135)では、動作の対象が主格で *əri*「これ（が）」と表わされている。

(134)*UiN.*

sii	***jaajamba***	***<u>ɲurixasi</u>***	***čeenee?***
sii	*jaaja(n)-bA*	*ɲuri-xA(n)-si*	*čeenee*
2SG.NOM	song-ACC	write-PRF.P-2SG	yesterday

昨日あなたは歌を書いた？（200903_59DLG_BEA.083）

(135)*UiN.*

əri	***lučadaiǰi***	***<u>ɲuripula</u>.***
əri	*luča-dAi-ǰi*	*ɲuri-pulA*
this	Russian-LNG-INS	write-IPSN.PRF.P

これはロシア語で書いてある。（TSM200_FIJ .078/ TSM200_BEA .129）

これは、述語動詞が表わす動作の対象（述語に対する目的語）のとる格が対格から主格に変更（昇格）する、ヴォイスの転換の一種とみることができる。この観点で見れば北方言の非人称形動詞*-pulA* は、「受身」の統語的な機能とよく似ている。

なお、Ikegami（1959 [2001]）および風間（2004）は、ウイルタ語の*-pulA* について第 III

群以外、とりわけツングース語第 I 群との対応を指摘した。以下、（Ikegami 1959 [2001]）より引用する。

> *-pula* はネギダール語の *waapla*「殺された」などの*-pla*、ラムート語［筆者注：エウェン語］の *xuunaatla*「おがくず」などのような*-tla, -tlə*、ウデヘ語の *xuuptilə*「おがくず」などのような*-ptilə* に対応する（Ikegami 1959 [2001: 65]；筆者訳）

今後は、エウェン語などとの比較も加えながら、より詳しく検討する必要がある。

6.3.2 不完了*-buri/ -puri*

前章で見た Petrova（1967）ほか、南方言について Ikegami（1959）、池上（2001）、Tsumagari（2009）が記述した-BURI（**表 5-6** 参照）に当たる形式が、今日の北方言でも確認される。この形式は、**表 6-8（次頁）**で示すように、「0.2 類」の動詞語幹につく場合は*-puri*、その他の場合は*-buri* というかたちで現れる。「0.2 類」以外で語幹末が-VV で同一母音の連続する場合は、語尾の先頭の子音が *b* から *ww* に交替する（例：*waa-wwuri*）。その他の二重母音の場合は、語尾の先頭の子音が *b* から *w* に交替する（例：*xai-wuri*）。語幹末の音韻構造が-CV あるいは*-V*k*V* の動詞語幹に結合する場合、融合する（例：*ŋənnəuri*）。ただし、後者の場合は融合形と接着形の揺れが見られる（例：*lokkouri* ~ *loo-wwuri*；cf. [7.1.9.05]）。動詞語幹末の *n* は *b* の前で逆行同化して *m* となる（例：*um-buri*）。このような形態変化を総合して、本稿ではこの形式の基底形を、*-buri/ -puri* と表記している。

前節までに挙げた他の形動詞と同様に、*-buri/ -puri* のつく活用形は名詞の修飾句や名詞句としても用いられる。この特徴から、形動詞に分類される（**表 6-1**）。例えば、(136)では *duunnee biwwuri*「二人が住む」が名詞修飾句となって *komnata*「部屋」（ロシア語の komnata の音訳）を修飾している。*biwwuri* に問題の語尾*-buri/ -puri* を分析することができる。なお、コピュラ動詞 *bi-*は不規則変化動詞であり、上掲の**表 6-8** の適用外とする。

(136)*UiN.*

mindu	***naada***	***duunnee***	***biwwuri***	***komnata.***
mindu	*naada*	*duu-nnee*	*bi+buri*	*[komnata]*
1SG.DAT	necessary	two-PERS	COP+IPSN.IM.P	room

私には二人用の（二人が住む）部屋が必要です。（20110309_1SS_BEA.038）

なお、名詞句の例はすでに(99)で説明したので、ここでは省略する。

表 6-8　非人称形動詞（不完了）語尾*-buri/ -puri* の結合

語幹末の音韻構造		例			音韻変化	
		基底形（STEM＋*-buri/ -puri*）		結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-buri*	＞	*waa-**ww**uri*　「殺す」	なし	*b* > *ww*
		xai-＋ *-buri*	＞	*xai-**w**uri*　「何する」	なし	*b* > *w*
-VCV		*ŋənə-*＋*-buri*	＞	***ŋənnəuri***　「行く」	融合	
-CCV		*əksə-*＋*-buri*	＞	***əksəuri***　「置く」		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-buri*	＞	*bujal-buri*　「こわす」	なし	
	-g	*xaag-*＋*-buri*	＞	*xaag-buri*　「（岸に）着く」		
	-n	*un-*＋*-buri*	＞	*u**m**-buri*　「言う」	*n* > *m*	なし
*-V*k*V		*loo*（<**-loko*）＋*-buri*	＞	***lokkouri***　「掛ける」	融合	
				*~ loo-**ww**uri*	なし	*b* > *ww*
「0.2 類」		*andu*＋*-puri*	＞	*andu-puri*　「作る」	なし	

（Ikegami 1959 を参考に作表）

-buri/ -puri が述語動詞に用いられる場合、通常主語の人称と一致する人称語尾がつかない。この特徴から、前節の*-pulA* と同様「非人称」と呼んでいる。例として、(137)と(138)を比較したい。(137)は主語 *amaka*「お父さん」の三人称単数を、述語動詞に結合した所有人称語尾*-ni* が表わしている。これは、人称形動詞（不完了）である。他方、(138)では主語がなく、述語動詞に人称語尾がつかない。(138)の述語動詞 *xaiwuree* は、形動詞語尾*-buri/ -puri* による活用形に疑問詞疑問の倚辞*=kA* が融合したかたちである。

(137) *UiN.*

amaka	***xairinee?***
amaka	*xai-ri-ni+kA*
papa	do.what-IM.P-3SG+WHQ

お父さんは何をしているの？（20110311_3LEC_BEA.003）

(138) *UiN.*

xaiwuree	***čaǰi?***
xai-buri+kA	*čaǰi*
do.what-IPSN.IM.P+WHQ	that.INS

それで何をするのですか？（200906_BEA.113）

Ozolinja & Fedjaeva（2003）のウイルタ語辞典では、動詞語彙の見出し語が*-buri/ -puri* のつく活用形で表わされている。同書の凡例 13（Ozolinja & Fedjaeva 2003: 10）で*-buri/ -puri* のつくかたちを「被動形動詞（現在）」と呼ぶのは、Petrova（1967: 103）にもとづくと考えられる。そのうえで Ozolinja & Fedjaeva（2003:10）は、この「被動形動詞（現在）」を「人称変化しない、ロシア語の不定形に当たるもの」と見ている。たしかに、人称変化しないという点では不定形にも似ている。

統語的特徴として、*-buri/ -puri* のつく動詞が表わす動作の対象は、対格で表わされる。例として、(139)と(140)を比較する。(139)は人称形動詞（不完了）*-ri/ -si* の例、(140)は*-buri/ -puri* の例である。どちらの場合も共通に、動詞 *andu-*の表わす動作「作る」の対象 *joodopu*「ヨードプ」が対格のかたちで、*joodopumba* と表わされる。つまり*-buri/ -puri* の文では、人称形動詞の文に対して格枠組みの変更がない。

(139)*UiN.*

xooni	***joodopumba***	***andusipu.***
xooni	*joodopu(n)-bA*	*andu-si-pu*
how	ritual.rattles-ACC	make-IM.P-1PL

どのように私たちがヨードプを作るか。（20101016_1MLG_BEA.001）

(140)*UiN.*

xooni	***joodopumba***	***andupuri.***
xooni	*joodopu(n)-bA*	*andu-puri*
how	ritual.rattles-ACC	make-IPSN.IM.P

どのようにヨードプを作るか。[7.1.7.01]

テキストの中で*-buri/ -puri* の用いられる位置を概観すると、主語を特定しない一般的な事柄を表わす文脈で用いられることがわかる。たとえば、本稿付録のテキストで 7.1.7、7.1.9 など、何かのつくりかたを説明する場合に多用される。たとえば、(141)は 7.1.7 からの例である。ヨードプ（振楽器）をつくる工程で必要な動作を、*-buri/ -puri* のつく活用形で表わしている。

(141) *UiN.*

pee	***moowani***	***tubguri,***	***čuŋgulluri,***
pee	*moo-bA-ni*	*tubgu+buri*	*čuŋguli+buri*
white.birch	tree-ACC-3SG	drop+IPSN.IM.P	cut+IPSN.IM.P

xoowwuri, ***ərəpčinəddəuri.***

xoo-buri *ərəpčinə-dA+buri*

chop-IPSN.IM.P plane-VSF+IPSN.IM.P

シラカバの枝を切り取り、切断し、打ち割り、かんなをかけます。[7.1.7.04]

また、次の(142)は調査中よく聞く文句で、ウイルタ語の表現がすぐに思い出せないときなど、言いよどみの表現として用いられる。この場合も、述語動詞に*-buri/ -puri* がつく。特に誰がというわけではなく、一般的に何と「言う」かを自問する意味であると考えられる。

(142) *UiN.*

xooni umburikənəə?

xooni un-buri=kA=nAA

how say-IPSN.IM.P=WHQ=WND

どう言うかな？ [7.1.4.38]

次の(143)では、手袋を失くした人に対しての叱責を込めたせりふである。このテキストの語り手の説明によると、下記の訳文のように「可能」のニュアンス（ロシア語の mozhno）が含まれるという。

(143)*UiN.*

xooni taraŋači wəəddəuree?

xooni taraŋači wəədə+buri+kA

how like.that lose+ IPSN.IM.P+WHQ

「どうやってそんなふうに失くせるっていうの？」[7.2.1.73]

6.4 定動詞

6.4.1 体験過去（三人称）*-tAA*

南方言の記述で澗潟（1981）、Ikegami（1959）、池上（2001）、Tsumagari（2009）が記述した-TAA（**表 5-6** 参照）に当たる形式が、今日の北方言でも確認される。しかし筆者の調査では、池上（2002）の北方言テキストに 2 例(114)(115)があるほかは、北方言の自然発話で用例が得られなかった。そのため、活用による動詞の形態変化は不詳である。また、南方言の調査で Ikegami（1959）／池上（2001d）は一人称・二人称の語形も挙げたが、筆者にはその用例が得られなかった。そのため、ここではもっぱら三人称について述べる。

次の例(114)は、主語が三人称複数の場合で、*-tAA* の後ろに複数語尾*-l* がつく。

(144)*UiN.*

gə	***oo***	***ŋənətəəl.***
gə	*oo*	*ŋənə-tAA-l*
INTJ	INTJ	go-PST.EVD.F.3-PL

さて、さあ、かれらは行っちゃったのだ。（池上 2002: 117）

このような形態的なふるまいは上述の非人称形動詞（完了）*-pulA* に複数語尾*-l* がつくことと似ている。しかし、統語的に見ると*-tAA* の後ろの複数語尾*-l* は、動詞の表わす動作の対象（述語に対する目的語）ではなく、動作を行う主体（主語）の複数性を表わしていると考えられる。これは定動詞の人称標示の系列（**表 6-2**）に対応している。

次の例(145)は、昔語りのなかで、何を見たのかという問いに対する答えのせりふである。

(145)*UiN.* ［登場人物のせりふ］

geeda	***narimal***	***gitutaa***	***čawa***	***ki***
geeda	*nari=mAli*	*gitu-tAA*	*čawa*	*čakki* [45]
one	man=LMT	walk-PST.EVD.F.3	that.ACC	that.PRL

poktokki	***poktokkeeppoo.***
pokto-kki	*pokto-kkee-ppoo*
way-REF.PRL	way-PRL-1PL

一人だけが歩いて行った、そこを、足跡に沿って、わたしらの足跡に沿って。（池上 2002: 135）

また筆者の調査では、南方言の用例を北方言の話者に提示して、同様の形式があるかどうか尋ねる方法をとった。そこで、下記(146)の文脈付の作例を得た。話者によると、同じ文脈で過去の出来事を形動詞（完了）*-xA(n)/ -či(n)*で表わすこともできるが、「自分の目で見た」ということを特に強調したい場合、(146)のように*-tAA* を用いるという。

(146)*UiN.*

sii	***opoonǰisi***	***noonduni***	***ulisəŋuni***	***anaa?***
sii	*o-boon-ri-si*	*noonduni*	*ulisə-ŋu-ni*	*anaa*
2SG.NOM	become-CAUS-IM.P-2SG	3SG.DAT	meat-AL-3SG	no

[45] 基底形を *čakki* としたのは、池上（2002）の訳注（p. 137）にもとづく。

biini!	***čeennee***	***dəptutəə!***
bi+ri-ni	*čeennee*	*dəptu-tAA*
COP+IM.P-3SG	yesterday	eat-PST.EVD.F.3

彼のところに（食料の）肉がないとでも思うの？　あるよ！　昨日（肉を）食べていた（のを私は見た）もの！（20110307_BEA.001）

Ikegami（1959）／池上（2001d）および Tsumagari（2009）では、南方言の*-tAA* は話し手によって過去に検証ないし目撃された事実を表わすと記述されている。北方言の*-tAA* は例が少ないが、同様の意味機能があると推測される。筆者は、話者による直接体験といったエヴィデンシャリティのカテゴリーが関与していると考え、「体験過去」と呼んでおく。

6.4.2 体験現在（三人称）*-rAkkA/ -sikkA*

南方言の記述で澗潟（1981）、Ikegami（1959）、池上（2001）、Tsumagari（2009）が記述した-RAKKA（**表 5-6** 参照）に当たる形式が、今日の北方言でも確認される。**表 6-10（次頁）**に示すように、「0.2 類」の動詞語幹の後で*-sikkA* となるほかは、*-rAkkA* という形で現れる。「0.2 類」以外で、動詞語幹末が-CV の場合は、語幹と語尾が融合する。子音で終わる動詞語幹（-C）では語尾先頭の子音が *r* から *d* に交替するという音韻変化が見られる。また、語幹末が*-V*k*V の場合、理論的には融合が期待されるところだが、北方言話者から確認できたのは融合しない形（接着形）だけであった。このような形態変化を総合して、本稿ではこの形式の基底形を*-rAkkA/ -sikkA* と表記している。

前節で挙げた定動詞（体験過去）*-tAA* の用例の少なさに比べると、この*-rAkkA/ -sikkA* については多くの用例が得られる。ただ、南方言についての Ikegami（1959）／池上（2001）では一人称・二人称の語形も挙げられているのに対し、筆者は北方言でその用例を得られなかった。そのため、ここでの考察は三人称に対象を限ってのものである。

Ikegami（1959）／池上（2001）および Tsumagari（2009）によると、*-rAkkA/ -sikkA* は話し手によって現在検証ないし目撃されている事実を表わすという。

筆者の調査では、同様の形式が今日の北方言でも日常会話のなかで頻繁に用いられることがわかった。話者によると、話し手が自分で見聞きしている事実について述べる文脈で用いられるという。なお、(149)のコピュラ動詞 *bi-*は不規則変化動詞であり、**表 6-10** の適用外とする。

表 6-10　定動詞（体験現在）語尾（三人称）*-rAkkA/ -sikkA* の結合

語幹末の音韻構造		例		音韻変化	
		基底形（STEM＋*-rAkkA/ -sikkA*）	結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-rAkkA* ＞	*waa-rakka*　「殺そうとしている」	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-rAkkA* ＞	***ŋənnəəkkə***　「行くところだ」	融合	
-CCV		*əksə-*＋*-rAkkA* ＞	***əksəəkkə***　「置くところだ」		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-rAkkA* ＞	*bujal-**d**akka*　「こわすところだ」	なし	*r* > *d*
	-g	*xaag-*＋*-rAkkA* ＞	*xaag-**d**əkkə*　「（岸に）着くところだ」		
	-n	*un-*＋*-rAkkA* ＞	*un-**d**əkkə*　「言っている」		
*-V*k*V		*baa-*(<**-baka*) ＋ *-rAkkA* ＞	*baa-rakka*　「見つけようとしている」	なし	

「0.2 類」	*andu*＋*-sikkA* ＞	*andu-sikka*　「作っている」	なし	

(147)*UiN.*

taree	***suunə***	***nəərəkkə,***	***ajaa***	***ajaa!***
tari+kAA	*suunə*	*nəə-rAkkA*	*aja+kAA*	*aja+kAA*
that=EXC	sun	go.out-PRS.EVD.F.3	good+EXC	good+EXC

ほらあそこ、お日さまが出てくるよ、良いな良いな！（200903_BEA.181）

(148)*UiN.*

ərəəi,	***bəjə***	***jəkki***	***pulisikka!***
ərəəi	*bəjə*	*jəkki*	*puli-sikkA*
INTJ	bear	this.ALL	walk-PRS.EVD.F.3

うわぁ、クマがここを歩いているよ！（20110212_1DLG_BEA&FIJ.035）

(149)*UiN.*

tari	***korgoljook***	***biikkəə***	***goči,***	***anu***	***nimŋaadu.***
tari	*korgoljook*	*bi+rAkkA?+kAA*	*goči*	*anu*	*nimŋaa-du*
that	Korgoljok	COP+PRS.EVD.F.3+EXC	PTCL	FIL	narrative-DAT

ほらコルゴルジョーク（という人）がいるよね、えーとあれ、ニグマーに。（20110104_2INT_BEA.012）

おおむね、どちらの方言でも、話し手による直接体験というカテゴリーが関与していると考えられる。本稿では前節の*-tAA*「体験過去」に対して現在を表わす形式と考え、「体験現在」と呼ぶ。

6.4.3 近未来*-rilA-/ -silA-*

Petrova（1967）のほか、南方言の記述で澗潟（1981）、Ikegami（1959）、池上（2001）、Tsumagari（2009）が記述した-RILA（**表 5-6** 参照）に当たる形式が、今日の北方言でも確認される。

表 6-11 で示すように、「0.2 類」の動詞語幹につく場合は*-silA-*、その他の場合は*-rilA-*で表わされる。「0.2 類」以外で-CV で終わる動詞語幹につく場合は、融合する。子音終わりの語幹（-C）につく場合は、語尾先頭の *r* が *j* に交替する。また、語幹末が*-V*k*V の場合、理論的には融合形（例：?*baakkeela-*）が期待されるところだが、北方言話者から確認できたのは接着形（例：(150) *baarila-*；[7.2.1.60]）だけであった。

表 6-11　定動詞（近未来）語尾*-rilA-/ -silA-*の結合

語幹末の音韻構造		例			音韻変化	
		基底形（STEM＋*-rilA-/ -silA-*）		結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-rilA-*	＞	*waa-rila-* 「殺す」	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-rilA-*	＞	***ŋənneelə-*** 「行く」	融合	
-CCV		*əksə-*＋*-rilA-*	＞	***əkseelə-*** 「置く」		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-rilA-*	＞	*bujal-**ǰ**ila-* 「こわす」	なし	*r* > *ǰ*
	-g	*xaag-*＋*-rilA-*	＞	*xaag-**ǰ**ila-* 「（岸に）着く」		
	-n	*un-*＋*-rilA-*	＞	*un-**ǰ**ila-* 「言う」		
*-V*k*V		*baa-*(<**-baka*)＋*-rilA-*	＞	*baa-rila-* 「見つける」	なし	

「0.2 類」	*andu*＋*-silA-*	＞	*andu-sila-* 「作る」	なし	

下記の用例によって、定動詞の人称語尾（**表 6-2** の(iii)）がつくことが確認される。(150)(151)は、一人称単数の定動詞人称語尾*-mi* を、(152)は一人称複数の定動詞人称語尾*-pu* を、(153)は二人称単数の定動詞人称語尾*-si* をともなう例である。

(150)*UiN.*

bii	***suttəi***	***saŋnaa***	***xudaačikkudu***	***<u>baarilami</u>.***
bii	*suttəi*	*saŋna+bA*	*xudaačikku-du*	*baa-rilA-mi*
1SG.NOM	2PL.DIR	tobacco+ACC	shop-DAT	find-NFUT.F-1SG

私はあなたのためにタバコを店で手に入れよう。(TSM200_FIJ.003)

(151)*UiN.* ［昔語り中、登場人物のせりふ］

əsi	***bii***	***ŋənupee***	***<u>dajjilami</u>***	***unǰini.***
əsi	*bii*	*ŋənu-pee*	*daji+rilA-mi*	*un-ri-ni*
now	1SG.NOM	return-COND.C	hide+NFUT.F-1SG	say-IM.P-3SG

ləkkəlbəči	***ləkkəlbəči***	***<u>dajjilami</u>***
ləkkə-l-bA-či	*ləkkə-l-bA-či*	*daji+rilA-mi*
arrow-PL-ACC-3PL	arrow-PL-ACC-3PL	hide+NFUT.F-1SG

xuriaččiduči.

xurigači+ri-du-či

hold.bear.festival+IM.P-DAT-3PL

「今わたしが戻れば隠すつもりです」と言う。「やつらの矢をやつらの矢を隠すつもりです、かれらがおまつりしているときに。」（池上 2002: 133-134）

(152)*UiN.*

čimanaa	***dukutakkeeri***	***<u>ŋənneeləpu</u>***	***taani.***
čimanaa	*duku-tAkkeeri*	*ŋənə+rilA-pu*	*taani*
tomorrow	house-REF.PL.DIR	go+NFUT.F-1PL	INFER

明日、私たちは家に帰るだろう（20110212_3MLG_FIJ.036）

(153)*UiN.*

tədəpee,	***təəli***	***<u>iččeeləsi</u>.***
tədə-pee	*təəli*	*itə+rilA-si*
believe-COND.C	then	see+NFUT.F-2SG

信じれば、そのとき見えるだろう。(20110815_10ELT_FIJ&BEA.006)

三人称単数の場合、無標-ø による*-*rilA/ *-*silA* という形ではなく、*-rillAA/ -sillAA* という形式で実現する。たとえば、*waa-*「殺す」という語幹の場合、**waarila* という例はなく *waarillaa* という語形ならば可能である[46]。次の例(154)(155)は三人称主語の文で、*-rillAA/ -sillAA* が結合する。(154)は主語が三人称単数、(155)は三人称複数の例である。

[46] Ikegami（1959）／池上（2001）は、これを*-rillAA/ -sillAA* ＜*-rilA-/ -silA-*＋動詞二次語尾**-kA* と分析した。しかし、本稿では、共時的な観点で、Tsumagari（2009）の方針にしたがい、三人称の場合*-rillAA/ -sillAA* という形式をとるという説明にとどめる。

(154)*UiN.*

əwwuri	***dawwaanisi***	***nari***	***biiduni.***
ə+buri	*dawwaani-si*	*nari*	*bi+ri-du-ni*
NEG+IPSN.IM.P	yawn-NIM	man	COP+IM.P-DAT-3SG
baajuuŋusi	***narisaltai***	***dakseellaa.***	
baajuu-ŋu-si	*nari-sAl-tAi*	*daksa+rillAA*	
laziness-AL-2SG	man-PL-DIR	stick.to+NFUT.F.3	

人前であくびをしてはいけない。お前の不精が人にうつる。（20101212_BEA.001, 20101212_BEA.002）

(155)*UiN.*

sumbeep	***waarillaa***	***sugdəək***	***narisal***	***unǰin.***
sumbeepə	*waa-rillAA*	*sugdəəkki*	*nari-sAl*	*un-ri-ni*
2PL.ACC	kill-NFUT.F.3	terrible	man-PL	say-IM.P-3SG

「あんたらを殺すでしょう、ならず者らが」と言う。（池上 2002: 133）

三人称複数の場合、(155)では三人称の複数性が明示されないが、任意で複数語尾*-l* をつけることがある。たとえば、次の
(156)は、複数語尾*-l* をつける例である。*sinǰeellaal* の末尾の形式が、それに当たる。

(156)*UiN.*

əsi	***čii***	***sinǰeellaal***	***unǰini.***
əsi	*čii*	*sinda+rillAA-l*	*un-ri-ni*
now	soon	come+NFUT.F.3-PL	say-IM.P-3SG

sinǰeellaal	***tar***	***narisal.***
sinda+rillAA-l	*tari*	*nari-sAl*
come+NFUT.F.3-PL	that	man-PL

「今すぐやつらは来るでしょう」と言う。「やつらは来るでしょう、あの人ら。」（池上 2002: 134）

意味について、先行記述（澗潟 1981、Ikegami 1959 [2001]、池上 2001 ほか）には「近い未来」「確実な未来」を表わすという指摘がある。上記(150)～(156)の例文を概観すると、おおむねその意味にとることができる。ただし、なかには(153)(154)のように非現実的な用法もあり、慎重に意味を分析する必要があるだろう。ここでは概して「近未来」と呼んでおく。

6.4.4 遠未来*-rAŋA-/ -siŋA-*

南方言の記述で Ikegami（1959）、池上（2001）が記述した「遠い未来・不確実の未来」を表わす-RAGA-（**表 5-6** 参照）に当たる形式が、今日の北方言でも確認される。ただし、下記に挙げるほかはほとんど例がなく、形態的な活用変化の特徴を捉えるまでには至らなかった。本稿では、Ikegami（1959）による活用変化のパラダイムにもとづき、この形式の基底形を*-rAŋA-/ -siŋA-*と表記している。

(157) *UiN*.

unǰini,	***ŋənəməri***	***ŋənəməri***		***anumari***
un-ri-ni	*ŋənə-mAri*	*ŋənə-mAri*		*anu-mAri*
say-IM.P-3SG	go-COOR.PL.C	go-COOR.PL.C		FIL-COOR.PL.C
saaraŋasu	***anusu***	***duwəŋusu***	***naatai***	***anulini***
saa-rAŋA-su	*anu-su*	*duwə-ŋu-su*	*naa-tAi*	*anu-li-ni*
know-DFUT.F-2PL	FIL-2PL	ice-AL-2PL	land-DIR	FIL-FUT.P-3SG
xaaglini.				
xaak-li-ni				
reach.land-FUT.P-3SG				

「ずっと進んで行くと、そのうちにあなたの乗っている氷が陸に着くのに気づくでしょう」と言う。(20120830_6MLG_BEA.024)

(158) *UiN*.

issooŋŋai	***əniččі***	***ulaa***	***ulissəəni***	***iratagačči.***
isu+rAŋŋAi	*əni(n)+si*	*ulaa*	*ulisə+bA-ni*	*irata-kAčči*
come.back+DFUT.F.3	mother+2SG	reindeer	meat+ACC-3SG	take-PRF.C

お前の母さんは、トナカイの肉を運び届けた後で必ず戻って来る。(20101029_7MLG_FIJ.014)

(159)*UiN*.

anu,	***xamaruu***	***ŋuidə***	***ŋuiddəə***	***čipaal***
anu	*xamaruu*	*#*	*ŋui=ddAA*	*čipaali*
FIL	the.time.after	#	who=EMPH	altogether
saajittaaŋŋai,		***wəədəgəččeeri***		***wəədədugəččeeri***
saa-kitA+rAŋŋAi		*wəədə-kAččeeri*		*wəədə-du-kAččeeri*
know-ITT+DFUT.F.3		leave.behind-SUB.PL.C		leave.behind-REV-SUB.PL.C
məənə	***kəssəəri.***			
məənə	*kəsə-bAri*			
REF.NOM	language-REF.PL			

後で誰もが皆知りたがるだろうよ、自分たちの母語を失ってしまったら。(20110311_2MLG_BEA.017)

南方言の記述で人称標示の後ろに不明の要素*-i* がつくという（Ikegami 1959 の記述について 5.2.5 参照）が、上掲の北方言の(157)のように*-i* がつかない例も見られる。

意味について、Ikegami（1959）／池上（2001）は前節の*-rilA-/ -silA-*「近い未来・確実な未来」に対して、この*-rAŋA-/ -siŋA-*は「遠い未来・不確実な未来」を表わすとしている。上掲の(157)～(159)はいずれも、その意味用法と矛盾しない。用例が少ないので積極的な検証が難しいところだが、ここでは概して「遠未来」と呼んでおく。

6.5 習慣*-bukki/ -pukki*

Petrova（1967）、Ikegami（2001）、池上（1994a [2001]）が記述した動詞語尾-BUKKI は、南方言では用いられない、北方言に特徴的な形式である。**表 6-12（次頁）**に示すように、「0.2 類」の動詞語幹につく場合は*-pukki*、その他の場合は*-bukki* という形で現れる。「0.2 類」以外では、-VV で終わる語幹につく場合、語尾の先頭の *b* が *w* に交替する。-CV で終わる語幹につく場合、語幹と語尾が融合する。また、語幹末の *n* は *m* に交替する。また、語幹末が*-V*k*V* の場合、理論的には融合形（例：?*lokkoukki*）が期待されるところだが、北方言話者から確認できたのは接着形（例：(172) *loo-wukki*）だけであった。このような形態変化を総合して、本稿ではこの形式の基底形を*-bukki/ -pukki* と表記している。

この語尾は他に、下記の例(160)(161)のように、*-bookki/ -pookki* という形で現れることもある。

(160)*UiN.*

čadu	***biččipu***	***pulipookki***	***biččipu,***	***anu***
čadu	*bi+či(n)-pu*	*puli-pookki*	*bi+či(n)-pu*	*anu*
that.DAT	COP+PRF.P-1PL	walk-HBT	COP+PRF.P-1PL	FIL
baaruni	***pil'tun***	***baaruni.***		
baaru-ni	*pil'tun*	*baaru-ni*		
toward-3SG	Pil'tun	toward-3SG		

そこに住んで、ピリトゥンの方へ行き来してた。[7.2.1.30]

(161)*UiN.*

pəətə	***ulissəəni***	***borrookkilil***	***biččiči***	***giləəsəl?***
pəətə	*ulisə+bA-ni*	*bori+bookki-lil*	*bi+či(n)-či*	*giləə-sAl*
seal	meat+ACC-3SG	distribute+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL	Nivkh-PL

アザラシの肉をごちそうしてくれた、ニブフの人たちは？[7.2.1.34]

同一の話者が*-bookki/ -pookki* と*-bukki/ -pukki* のどちらをも使うことがあり、話者によるとそ

の使い分けに意味はないという。おそらく、両者は自由変異であると思われる。なお精査が必要であるが、この問題はひとまず置き、以下は*-bukki/ -pukki* について記述を進める。

表 6-12　習慣の活用語尾*-bukki/ -pukki* の結合

語幹末の音韻構造		例			音韻変化	
		基底形（STEM＋*-bukki/ -pukki*）		結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-bukki*	＞	*waa-**w**ukki* 「殺す」	なし	*b* > *w*
-VCV		*ŋənə-*＋*-bukki*	＞	***ŋənnəukki*** 「行く」	融合	
-CCV		*əksə-*＋*-bukki*	＞	***əksəukki*** 「置く」		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-bukki*	＞	*bujal-bukki* 「こわす」	なし	
	-g	*xaag-*＋*-bukki*	＞	*xaag-bukki* 「(岸に)着く」		
	-n	*un-*＋*-bukki*	＞	*u**m**-bukki* 「言う」	*n* > *m*	なし
*-V*k*V		*loo*(<**-loko*)＋*-bukki*	＞	*loo-wukki* 「掛ける」	なし	

「0.2 類」	*andu*＋*-pukki*	＞	*andu-pukki* 「作る」	なし

Petova（1967: 104）が指摘したように、この動詞語尾*-bukki/ -pukki* はもっぱら述語形式として用いられる。Petrova（1967: 104）は形動詞と呼んでいるが、本稿の分類（**表** 6-1）では統語機能として定動詞に該当するように思われる。しかしながら、以下の二つの問題によって他の定動詞とは特徴が異なるばかりか、形動詞とも副動詞とも合致しない。

問題の第一は、すでに**表** 6-2 で示したように、この語尾*-bukki/ -pukki* がとる人称語尾の系列（**表** 6-2 の(vii)）が他のどの活用形のとる人称語尾の系列とも異なることである。まず、主語が一人称単数の場合、後につく人称語尾が*-bi* というかたちである。これは、人称形動詞の人称語尾のとる系列（**表** 6-2 の(i)）と共通する。ところが、三人称の場合は、三人称単数*-ø*、三人称複数*-ø*(*-l*) ~ *-ø*(*-li*) ~ *-ø*(*-lil*)という形をとる。定動詞の人称語尾／複数語尾のとる系列（**表** 6-2 の(iii)）と似ているが、三人称複数の場合に特殊な複数語尾*-li* や*-lil*[47]がつくことがあるのは他の定動詞と異なる。

以下、人称変化の例を挙げる。(162)は一人称単数形で、*doombukkibi* の末尾に*-bi* を分析できる。(163)は二人称複数形で、末尾に*-su* を分析できる。(164)は三人称（単数）形で、人称は*-ø* で表わされる。(72)（再掲）や(165)は三人称複数形で、それぞれ特殊な複数語尾*-li* や*-lil* がつく。

[47] *suddəəkilil*「恐ろしい」[7.2.1.09]の末尾の形式も同一の要素かもしれない。

(162)*UiN*.

ənimbi	***əmi***	***ittəə,***	***gəgdək***	***doombukkibi***
əni-bi	*ə-mi*	*itə-rA*	*gəgdək*	*doon-bukki-bi*
mother-REF	NEG-COOR.C	see-NIM	always	remember-HBT-1SG

bičči.

bi+či(n)

COP+PRF.P

母に会えなくて、私はいつも恋しがっていたものだった。(20101029_7MLG_FIJ.011)

(163)*UiN*.

tačindaukisu.

tači-ndA+bu(k)ki-su

learn-DIT+HBT-2PL

あなたがたは学校に通っている（いつも学びに行っている）。(20101126_FIJ.036)

(164)*UiN*.

potom	***tari***	***mapa***	***kəə***	***anu***	***čimai***	***gəgdək***
[potom]	*tari*	*mapa*	*kəə*	*anu*	*čimai*	*gəgdək*
[after.that]	that	old.man	FIL	FIL	morning	always

wəədəptukki	***səksədələndə.***
wəədə-ptu+bukki	*səksə-dAlA(A)=ndA*
disappear-SPN+HBT	evening-TILL[48]=HS

それからそのじいさんは、さあ、えーとあれ、朝いつもいなくなる、晩までだと。（池上 2002: 112）

(72')*UiN*.

nooči	***əmənǰi***	***pulipukili***	***biččiči***.
nooči	*əməə(n)-ǰi*	*puli-pu(k)ki-li?*	*bi+či(n)-či*
3PL.NOM	saddle-INS	go-HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL

彼らはトナカイに乗って行き来していたものだった。（Petrova 1967: 104）

(165) *UiN*.

təəli	***ǰiŋ***	***anu,***	***asarami***	***kəssəəči,***	***ǰiŋ***
təəli	*ǰiŋ*	*anu*	*asara-mi*	*kəsə+bA-či*	*ǰiŋ*
then	very	FIL	take.care-COOR.C	language+ACC-3PL	very

[48] この例(164)の*-dAlAA* は名詞につく接尾辞と見られるが、同音の形式に動詞語幹の直後について「～するまで」という意味で用いられる副動詞語尾*-dAlAA* がある（Ikegami 1959 [2001: 29]）。動詞につく例：***bujaldalaa takkuraxani***（*bujal-dAlAA takkura-xA(n)-ni*；break-TERM.C use-PRF.P-3SG）「壊すまで使った」（Ikegami 1959 [2001: 30]）。他に、[7.1.8.09]も参照。

asarami	***ɲurrookkilil***	***biччiči.***
asara-mi	*ɲuri+bukki-lil?*	*bi+či(n)-či*
take.care-COOR.C	write+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL

だからとても、そのあれ、慎重にことばを、とても慎重に記録したものだった。[7.1.5.15]

もう一つの問題は、すでに上掲の例(162)(72')(165)で示されたように、動詞語尾*-bukki/ -pukki* の後にコピュラ動詞 *bi-*の活用形が補足されるという、動詞複合体の構成にある。第 4 章の**表 4-4** で見たように、肯定文の述語の場合の動詞複合体の構成は「語幹ー活用語尾（ー人称語尾／複数語尾）（＝倚辞）（＃付属語）」が一般的だが、動詞語尾*-bukki/ -pukki* の後ろに立つ *bi-*の活用形は、それ自体が人称変化をしている点で付属語とは異なる。

動詞語尾*-bukki/ -pukki* のつく動詞形を「前項」、コピュラ動詞 *bi-*の活用形を「後項」とすると、例えば、上掲の(72')(165)では、前項に数の標示と思われる*-li, -lil* が、後項に人称形動詞（完了）*-či(n)*と三人称複数の人称語尾*-či* がついている。また、次に挙げる(166)では、前項と後項の両方に一人称複数の人称語尾がつく。

(166)*UiN.*

xaalandaa	***dəpookkipu***	***biччipu.***
xaalanda	*dəp+bukki-pu*	*bi+či(n)-pu*
long.time.ago	eat+HBT-1PL	COP+PRF.P-1PL

ずっと前はいつも食べていた。(0101125_5DLG_KLN&FIJ.062)

また、次の(165)(166)は後項に定動詞（体験過去）語尾*-tAA* がつく。

(167)*UiN.*

tak	***taraŋači***	***umbukki***	***bitəə.***
[tak]	*taraŋači*	*un-bukki*	*bi-tAA*
then	like.that	say-HBT	COP-EVD.PST.F.3

［母が］そんなふうにいつも言ってた。(20110306_1MLG_BEA.009)

(168)*UiN.*

čadu	***ǰiŋ***	***pakčirauli***	***biwukki***	***bitəə.***
čadu	*ǰiŋ*	*pakčirauli*	*bi-bukki*	*bi-tAA*
that.DAT	very	dark	COP-HBT	COP-EVD.PST.F.3

あそこ［テントのなか］はいつだってとても暗かった。(20110306_1MLG_BEA.012)

このように、動詞の自立的な形式が、述語において二つ連続して動詞複合体をかたちづくる構成は、**表 4-4** で示したような一般的な特徴に対して特殊と言わざるをえない。動詞語尾

-bukki/ -pukki のつく動詞形を「述語形式」から外して副動詞的と見ることもできようが、なお精査が必要である。

以上に挙げた二つの問題により、この動詞語尾*-bukki/ -pukki* の活用形の種類を特定することは難しい。そのため、本稿では定動詞・形動詞・副動詞のいずれにも分類しない。

ここまで動詞語尾*-bukki/ -pukki* の形式について見たが、意味についていえば、Petrova（1967）や Ikegami（2001）／池上（1994a [2001]）が指摘したとおり、広い意味で「習慣」的な行為を表わすと考えられる。この語尾自体は時制に拘束されないが、上述のようにコピュラ動詞 *bi-*の人称形動詞（完了）*bičči*（の人称変化形）を補足すると、過去の習慣的な行為の意味になる。

例として、上掲の(161)(162)では、特定の人物が継続して行っている習慣的な行為を動詞語尾*-bukki/ -pukki* の形式が表わしている。次に挙げる(169)は、上掲の(163)(164)とは異なり、特定の人物の習慣というよりは、一般的・普遍的な傾向を表わしている。この点は、上述の非人称形動詞（不完了）*-buri/ -puri* とも意味的に類似する。

(169)*UiN.*

tačči	***nari***	***agdami***	***biwukki***.
tatu+ri	*nari*	*agda-mi*	*bi-bukki*
learn+IM.P	man	please-COOR.C	COP-HBT

（よく）学ぶ人は、いつだって幸せに生きるものだ。(20110815_10ELT_FIJ&BEA.002)

以下(170)～(173)は、過去の習慣的行為を表わす例である。(170)は話し手が見聞きした体験を思い出として語る文脈、(171)(172)(173)では昔のウイルタの暮らしについて語る文脈において、それぞれ動詞語尾*-bukki/ -pukki* が用いられている。

(170)*UiN.*

xasultaddaa	***panumi***	***geeda***	***kəssəə,***	***muŋnaawukki***
xasu-ltA=ddAA	*panu-mi*	*geeda*	*kəsə+bA*	*muŋnaa-bukki*
how.much-MULT=EMPH	ask-COOR.C	one	language+ACC	torment-HBT
biččini	***mamarilba.***			
bi+či(n)-ni	*mamaril-bA*			
COP+PRF.P-3SG	old.women-ACC			

何度も一つの単語について尋ねて、ばあさんたちを悩ませたものだ。(20110817_2MLG_FIJ.016)

(171)*UiN.*

goropčinnee	***uilta***	***uilta***	***bɵjɵŋŋɵɵri***	***waapissaa***	***xupiddukki***
goropči-nnee	*uilta*	*uilta*	*bɵjɵ-ŋu+bAri*	*waa-pissAA*	*xupi-du+bukki*
old-PERS	Uilta	Uilta	bear-AL+REF.PL	kill-COND.PL.C	play-REV+HBT
biččiči		***kadaara***	***dukkoo***	***anduwaččeeri***	***aundakkoo.***
bi+či(n)-či		*kadaara*	*duku+bA*	*andu-kAččeeri*	*aundau+bA*
COP+PRF.P-3PL		big	house+ACC	make-SUB.C	conical.hut+ACC

むかしの人のウイルタ、ウイルタは自分たちのくまを殺してくま祭りの遊びをしていた,
大きい家をつくり円錐形家屋を。（池上 2002: 108）

(172)*UiN.*

tuwə	***buččisəlbə***	***mookki***	***loowukkil***
tuwə	*bul+či(n)-sAl-bA*	*moo-kki*	*loo-bukki-l*
in.winter	die+PRF.P-PL-ACC	tree-REF.PRL	hang-HBT-PL
biččiči	***poonilduni.***		
bi+či(n)-či	*poonilduni*		
COP+PRF.P-3PL	sometimes		

冬に死んだ人たちを、ときおり枝の上に載せ（て葬っ）たものだった。
（20100610_1MLG_BEA.006）

(173)*UiN.*

narisal	***məən***	***məəttəkki***	***ǰiŋ***	***uliŋgaǰi***
nari-sAl	*məənə*	*məəttəkki*	*ǰiŋ*	*uliŋga-ǰi*
person-PL	REF.NOM	REF.DIR	very	good-INS
biwukkil	***biččiči.***			
bi+bukki-l	*bi+či(n)-či*			
COP+HBT-PL	COP+PRF.P-3PL			

人々は互いに仲良く暮らしたものだった。（20101125_2MLG_KLN.006）

以上に見た動詞語尾*-bukki/ -pukki* の形式的・意味的特徴には、ウイルタ語南方言の文法をもとにした記述の枠組みには当てはまらないことが多い。この点は、池上（1994a [2001]）が指摘したように、この形式がエウェンキー語からの借用であることに関連する可能性が高い。

6.6 まとめ

以上、本章では、先行記述をもとにした記述の枠組みに、筆者の調査によって得られた結果を取り入れる方法でもって、ウイルタ語北方言の動詞活用と時制に関わる文法を記述した。この方法で記述したことで、北方言の文法の枠組みが概して南方言のそれと共通で

あることが確かめられる。しかし、全体的な共通性とともに、部分的には北方言に特殊な点も明らかになった。以下に、その 3 点を要約する。

第一に、人称形動詞（未来）*-li* は、南方言には見られない北方言特有の形式である（6.2.3）。本稿では使用頻度まで検討しなかったが、この形式は今日の北方言の会話で頻繁に用いられる。その点で、この形式の存在が他の形式、とりわけ同じ形動詞で南方言では《非過去》的な機能を持つ*-ri/-si* や、同じ《未来》のカテゴリーに入る*-rilA-/ -silA-, -rAŋA-/ -siŋA-*の用法にも影響を及ぼしている可能性がある。

第二に、南方言と共通の形式だが意味機能が異なる、非人称形動詞（完了）*-pulA* である（6.3.1）。非人称形動詞（完了）*-pulA* では、南方言の場合、動詞語幹の表わす動作の対象（これを述語とした場合の目的語）が対格であるのに対し、北方言の場合は、それが主格で表わされる。これにより、北方言の非人称形動詞（完了）*-pulA* はヴォイスの転換に関与していることが考えられる。

第三に、習慣の語尾*-bukki/ -pukki* は、南方言の先行記述にもとづく文法の枠組みに合わない特徴をもつ（6.5）。特に、この語尾による活用形がとる人称語尾の系列、特殊な複数語尾の形式、およびコピュラ動詞を後に補足して《過去》を表わす点が注目される。

以上の記述は、直説法肯定文の述語形式に限定したものだが、今後は他の分野にも考察対象を広げることによって、この方言の特徴がより明らかになってくることだろう。そして、南方言にない北方言の特徴には、北方言との接触言語からの影響が反映されている可能性が考えられる。ウイルタ語北方言の特徴とその接触言語、特にエウェンキー語の特徴を比較することで、言語接触の様相も見えてくることが期待できる。

付録　ウイルタ語北方言テキスト

7.0 概要と語り手紹介

以下、本稿の考察のもととしたウイルタ語北方言テキストの一部を付録として掲げる。採録方法等は、各節の冒頭で述べる。

全体をとおして、表記と訳付は、以下に紹介するテキストの語り手本人による分析のほか、語り手以外の話者からの教示をもとに筆者が作成した。その際、澗潟（1981）、池上（1997）、Tsumagari（2009）、Ozolinja（2001）、Ozolinja & Fedjaeva（2003）などの辞書や文法記述も参考にした。

なお、7.1.5, 7.1.6 および 7.4.1～7.4.4 を除くテキストの各文末尾に掲げるロシア語の訳文は、語り手がウイルタ語の語順に則して逐語的に付けたもので、ロシア語としては語順が不自然なことがある。

・　フェジャエワ　イリーナ　ヤーコヴレヴナ（Fedjaeva Irina Jakovlevna）

（採録テキスト：7.1.1, 7.1.5, 7.1.8, 7.2.1、**写真7-1**）

1940年、ワール村で生まれた。ロシア人の父とウイルタの母をもつ。幼少期は母方の祖母と母のもとで、ワール村およびトナカイ飼育キャンプ地のあったナビリNabil’などで暮らした。ウイルタ語とロシア語のほか、エウェンキー語の知識がある。教員養成課程を修了後、小学校および幼稚園で教師として働きながらウイルタ語の詩や歌などを教えた。ワール村の民族アンサンブルの指導も行っている。

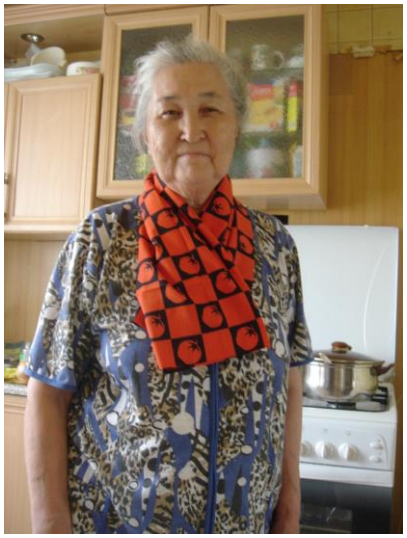


写真 7-1　フェジャエワ I. Ja.
（2009 年 9 月 4 日筆者撮影）

母親である故セミョーノワ　オリガ　ニコラーエヴナ（Semjonova Ol’ga Nikolaevna）が語ったテキストが、池上（2002）に載る。1990～1992年にワール村で行われた採録時にはフェジャエワも立ち会った。その頃からウイルタ語書記法の策定などで池上教授ほかさまざまな研究者と協力するようになり、ウイルタ語の保存と復興に力を注いできた。

『ウイルタ―ロシア語・ロシア語―ウイルタ語辞典』（Ozolinja & Fedjaeva 2003）、ウイルタ語文字教本（Ikegami et al. 2008）の共編者の一人である。2013年3月現在、ワール村在住。

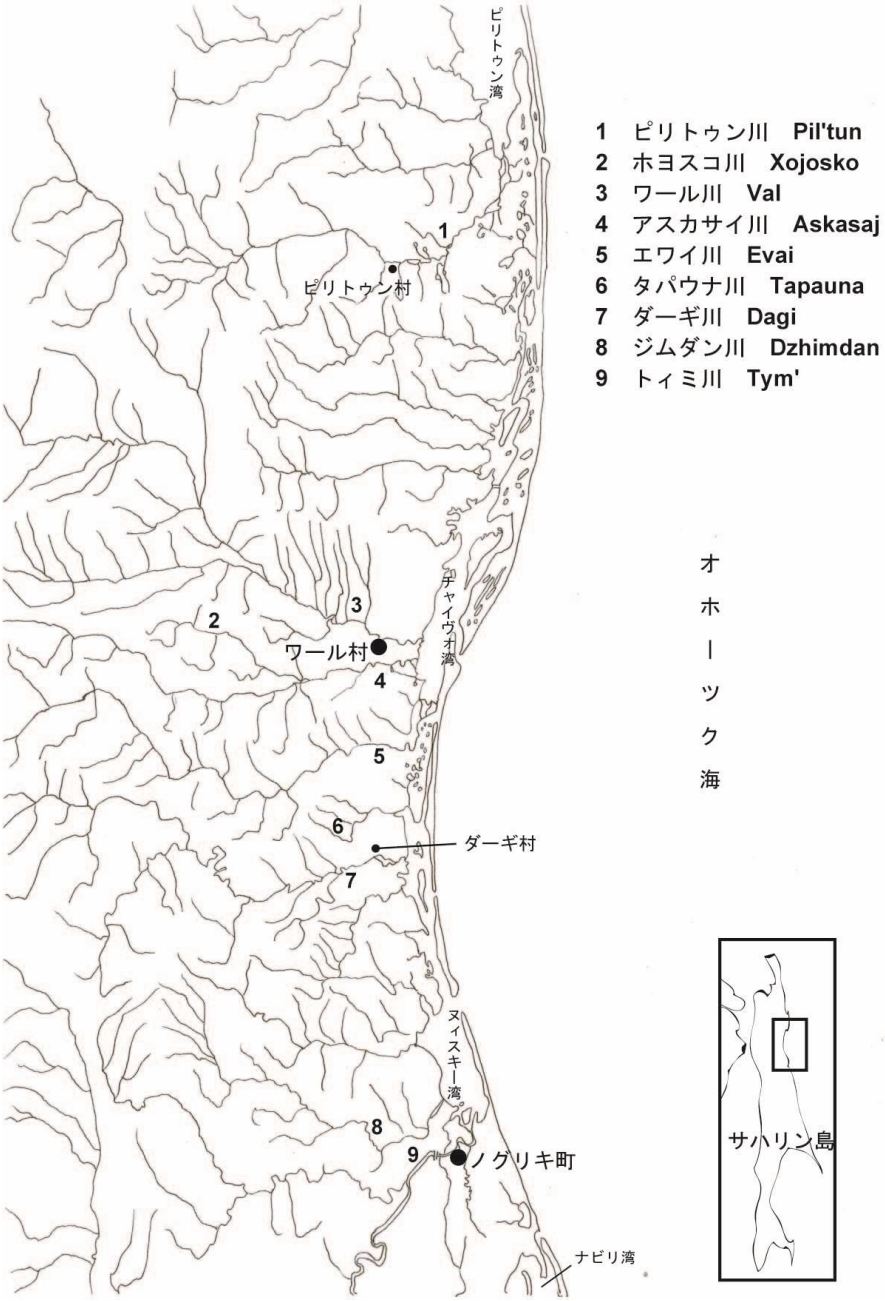


図 7-2　サハリン北東海岸部の関連地図

・　ビビコワ　エレーナ　アレクセーヴナ（Bibikova Elena Alekseevna）

（採録テキスト：7.1.2, 7.1.4, 7.1.6, 7.1.7, 7.1.9, 7.3.1, 7.3.2, 7.4.1, 7.4.2, 7.4.3, 7.4.4、**写真7-3**）

1940 年、ダーギDagi（ウイルタ語で*daaxi*）近くのトナカイ飼育キャンプ地で、双方ともウイルタの夫婦の家庭に生まれた[49]。2・3歳から6歳までは別のウイルタの老夫婦の家庭で

[49] 生みの父はエウェンキーだったという。

養育を受けた（7.1.2 [7.2.1.02]）。ウイルタ語とロシア語のほか、エウェンキー語を話すことができる。また、ニヴフの人たちとの親交も深く、その関係でニヴフ語についても聞いて理解できる程度の知識もある。1961年に教職に就き、1979年にはウラン・ウデ教育大学でロシア語・ロシア文学の学位を取得した。



写真 7-3　ビビコワ E. A.
（2008 年 9 月 17 日筆者撮影）

1990年代初め頃から、ワール村を訪れる研究者たちとの交流をきっかけに、ウイルタの言語・文化の保存・復興に執心するようになった。自らワール村の古老のもとに通い、フェジャエワとも協力しながらウイルタの言語・文化の記録・研究を重ねてきた。Ikegami（2007）（池上2002の一部露訳）のロシア語部分の訳者であり、ウイルタ語教科書（Ikegami et al. 2008）の共編者の一人である。2009年には、本人がロシア語で著した回想録が刊行された（Bibikova 2009）。

2010年10月から、ノグリキ町で近所の有志を集めて毎週一回のウイルタ語教室を開いている。また、2012年9月に発表された世界人権宣言ウイルタ語訳は、フェジャエワとビビコワの渾身の作である。2013年3月現在、ノグリキ町在住。

・　コーヌソワ　リュボヴィ　ニコラエヴナ　（Konusova Ljubov’ Nikolaevna）
（採録テキスト：7.1.3, 7.2.1、**写真**7-4）

1949年、トナカイ飼育キャンプ地（不詳）で生まれた。幼少期はトナカイ飼育業者の子として、各地に移り住んだ（7.2.1 [7.2.1.16]～[7.2.1.33]）。ウイルタ語とロシア語を話すことができる。エウェンキー語は聞いて理解できるが、話すことはできないという（7.2.1 [7.2.1.92]～[7.2.1.93]）。長く近所に住んでいたウイルタ女性の故ミヘエワ　マリーヤ　ステパーノヴナ（Mixeeva Marija Stepanovna）（1912-1993；トゥイミTym’河口近くの生まれ、ウイルタ名*Gisiktauda*、**写真**7-29）との親交が深く、会う時にはいつもウイルタ語で話していた。ミヘエワが亡くなってからウイルタ語を話す機会がなくなってしまったが、上記のフェジャエワと時折会話をしながら、ウイルタ語の知識を保っている。筆者の知る限り、現在では最も若いウイルタ語話者である。2013年3月現在、ワール村在住。



写真 7-4　右がコーヌソワ L. N.
（2010 年 10 月 29 日筆者撮影）

7.1 一人語り

7.1.1 回想録(1)：おばあちゃんの影を見た話

本テキストは、2008年9月14日ロシア連邦サハリン州ワール村にて、フェジャエワ I. Ja. から採録した。テキスト録音の所要時間は2分33秒であった。採録時、語り手は調理をしている途中で、手をとめずに即興で語った。そのため録音データに雑音が入ったり、語りのなかでロシア語が混ざったり、文脈が途切れた部分がある。録音を筆者が書き起こし、2010年8月27日には語り手本人と表記を確認しながらロシア語で意訳をつけた。

本テキストでは、フェジャエワが1948年の夏、ナビリNabil'近くの、ウイルタ語で*ŋaalu*と呼ばれた土地[50] に滞留していたときに経験した話を語る。母の遣いで祖母のところに行く途中、川岸で祖母の姿を見たが近づいて行くと消えてしまった。恐ろしくなって駆け込んだテントで祖母を見つけ、一緒に家に帰った、というあらすじである。

テキストでは語られないが、フェジャエワによると、その出来事のあと祖母は「（それは）きっと私の影*pana*だ」と言い、話を聞いたフェジャエワの母親は「それはお前のおばあさんに似た魔女オンゲーガ*Oŋgeeŋa*[51] だろう」と言ったそうだ。フェジャエワ自身は、祖母のいうとおり影*pana*を見たのだと考えている。

[7.1.1.01]

geedara [52]	***ənimbi***	***mittəi***	***unǰini,***
geedara	*əni(n)-bi*	*mittəi*	*un-ri-ni*
once	mother-1SG	1SG.DIR	say-IM.P-3SG
gaaŋŋu	***ačitakki***	***sundattaa.***	
gaani+ru	*ači-tAkki*	*sundatta+bA*	
go.to.pick.up+IMP	grandmother-REF.DIR	fish+ACC	

ある時、母が私に言う、「おばあちゃんのところに魚を取りに行っておいで」。Однажды моя мама отправила меня к бабушке за рыбай.

---

[50] ビビコワ（2010-12-27 p.c.）によると、ナビリ Nabil'は化け物の出る地域として知られ、そのなかでも特に *ŋaalu* はウイルタの間で最も恐れられる場所だった。ここに滞留するとき、化け物が出るから子どもだけで遠くに行かないように、と大人たちに厳しく禁じられたという。

[51] 魔女オンゲーガ *Oŋgeeŋa* については、Roon & Tsupenkova（1995: 225-226）、池上（2002: 109-110）に故ミヘエワ M. S.（7.3.1 **写真** 7-29）の語りによる伝説が載る。ミヘエワの語りに立ち会いロシア語訳を担当したビビコワによると、オンゲーガは、顔立ちが美しく、色白で、眉毛がなく、背が高い、巧みな歌声で人を山奥へ引き込んで殺し、その心臓を食らう魔女であるという（2009-06-02 p.c.）。

[52] *geedara* は、字義的には「一度、一回」という意味の語だが、慣用的に昔語りの冒頭や話題の切れ目などで「あるとき」（不特定の時点）という意味で用いられる[7.1.5.01][7.2.1.03][7.2.1.67][7.3.2.08]。また、反復して *geedara geedara*「ときどき、めったに〜ない」という熟語を形成する[7.1.4.03][7.1.4.17]。

[7.1.1.02]

bii	***ŋənəxəmbi.***
bii	*ŋənə-xA(n)-bi*
1SG.NOM	go-PRF.P-1SG

私は出かけて行った。Я пошла.

[7.1.1.03]

xu	***sindagačči***	***iččeewi***	***ačibi***	***ugdadu***
###	*sinda-kAčči*	*itə+ri-wi*	*ači-bi*	*ugda-du*
###	come-SUB.C	see+IM.P-1SG	grandmother-1SG	boat-DAT

təəsini	***boboonikkalu***	***tətөelu,***	***sagari***	***tətөelu.***
təə-si-ni	*boboonikka-lu*	*tətөe-lu*	*sagari*	*tətөe-lu*
sit-IM.P-3SG	headband-PROP	clothes-PROP	black	clothes-PROP

着いてから、祖母が舟の上に座っているのを見た、鉢巻き[53]をして、黒い服を身につけて。

Придя туда, вижу моя бабушка сидит в лодке, в платоке и чёрном пальто.

[7.1.1.04]

bii	***zavtra...***	***“spustilas’”***	***skazhu,***	***“spustilas’”,***
bii	*[zavtra]*	*[spustilas’]*	*[skazhu]*	*[spustilas’]*
1SG.NOM	tomorrow	go.down	I.will.say	go.down

ugda	***dapkataini***	***sindaxambi.*** [54]
ugda	*dapka-tAi-ni*	*sinda-xA(n)-bi*
boat	border-DIR-3SG	čome-PRF.P-1SG

私は、舟の側に下りて行った。Я спустилась с песчанной горки рядом с лодкой, и пришла.

[7.1.1.05]

ugdadu	***ŋuiddəə***	***anaa.***
ugda-du	*ŋui=ddAA*	*anaa*
boat-DAT	who=EMPH	no

舟の上には誰もいない。А в лодке некого нет.

---

[53] ビビコワによると、*boboonikka* はスカーフや手近な布を頭に載せて端を首の後ろで結ぶことをいう（山田・笹倉 forthcoming）。それに対し、*bilaatu* は、スカーフを端を首の前か頭の上で結ぶことをいう（ibid.）。

[54] 採録時、ロシア語の spustit’sja「下りる」に当たる動詞 *sisoon-*を語り手が思い出せなかった。フェジャエワによると、この文は次のように言い換えられる（2010-08-27 p.c.）。

bii	***xonoktomo***	***təktəədu***	***sisooččimbi***	***ugda***
bii	*xonokto-mA*	*təktəə-du*	*sisoon-či(n)-bi*	*ugda*
1SG.NOM	sand-ADJ	slope-DAT	descend-PRF.P-1SG	boat

dapkataini.
dapka-tAi-ni
border-DIR-3SG

私は砂の坂を下りていった、舟の側へ。

[7.1.1.06]

bii	***oloxombi,***	***bolgoxombi.***
bii	*olo-xA(n)-bi*	*bolgo-xA(n)-bi*
1SG.NOM	be.frightend-PRF.P-1SG	be.frightened-PRF.P-1SG

怖くなった。Я испугалась.

[7.1.1.07]

čoočči	***kusalǰi***	***tuksaxambi***	***palaatkatai.***
čoočči	*kusal-ǰi*	*tuksa-xA(n)-bi*	*palaatka-tAi*
after.that	quick-INS	run-PRF.P-1SG	tent-DIR

それで、急いでテントへ走った。И быстро побежала к палатке.

[7.1.1.08]

palaatkatai	***iigəčči***	***ačibi***	***palaatkadu***	***anaa.***
palaatka-tAi	*ii-kAčči*	*ači-bi*	*palaatka-du*	*anaa*
tent-DIR	enter-SUB.C	grandmother-1SG	tent-DAT	no

テントへ入ると、祖母はテントにいない。К палатке воидя, а там бабушки нет.

[7.1.1.09]

sovsem	***ŋəələluxəmbi.***
[sovsem]	*ŋəələ-lu-xA(n)-bi*
quite	fear-INCH-PRF.P-1SG

とても怖くなった。Совсем забоялась.

[7.1.1.10]

ŋəələlugəčči	***tuksaxambi***	***goi***	***mamatai.***
ŋəələ-lu-kAčči	*tuksa-xA(n)-bi*	*goi*	*mama-tAi*
fear-INCH-SUB.C	run-PRF.P-1SG	another	old.woman-DIR

怖くなって、別のおばあさんの方に走って行った。Испугавшись, побежала к другой старушке.

[7.1.1.11]

čadu	***čadu***	***biččiči***	***mama***
čadu	*čadu*	*bi+či(n)-či*	*mama*
that.DAT	that.DAT	COP+PRF.P-3PL	old.woman

mapaŋumuna.

mapa-ŋu-munA

old.man-AL[55]-POSS

そこには、おばあさんとおじいさんが住んでいた。Там жили старуха со стариком.

[7.1.1.12]

sindaxambi.

sinda-xA(n)-bi

come-PRF.P-1SG

私はやって来た。Я пришла.

[7.1.1.13]

isalbi	***gabala***	***isalŋačini***	***poŋgolo***	***očči.***
isal-bi	*gabala*	*isal-ŋAči-ni*	*poŋgolo*	*o+či(n)*
eyes-1SG	toad	eyes-LIKE-3SG	round	become+PRF.P

私の目はヒキガエルの目のように真ん丸になっていた。Глаза как у жиби круглые стало.

[7.1.1.14]

čoočči	***ačibi***	***unǰini.*** [56]
čoočči	*ači-bi*	*un-ri-ni*
after.that	grandmother-1SG	say-IM.P-3SG

そして、祖母が言う。Потом моя бабушка говорит.

[7.1.1.15]

xaiǰi	***bolgo…*** [57]	***ŋui***	***simbee***
###(xai-ǰi)	*###(bolgo)*	*ŋui*	*simbee*
###(what-INS)	###(be.frightened)	who	2SG.ACC

xasačini	***xaapkaitaxanee?***
xasa-či(n)-ni	*xaapka(n)-kitA-xA(n)-ni+kA*
pursue-PRF.P-3SG	catch.up-ITT-PRF.P-3SG+WHQ

「誰がお前を追いかけたんだい？　“Кто за тобой гнался?

---

[55] 譲渡可能接尾辞は、他のツングース諸語と共通して、「その名詞の表わす所有物が所有者（人間に限られる）との関係において、他に譲渡しうるような間接的所有であることを示す」（津曲 1990: 140）と、ゆるやかに定義することができる。より具体的には、相手となる人物、材料とする物、向かう場所[7.1.4.52]など所有者の意志の向かう対象を表わす名詞につくことが確認される[7.1.1.11][7.1.3.02][7.1.4.27][7.1.4.28][7.1.4.32][7.1.4.35][7.1.4.42][7.1.4.55][7.1.4.57][7.1.6.09][7.1.6.21][7.1.7.13][7.1.7.17][7.1.7.19][7.1.7.24][7.3.2.05][7.3.2.06][7.3.2.07][7.3.2.10][7.3.2.12]。

[56] 知り合いの老夫婦の住むテントに駆け込んだところ、探していた祖母が偶然そこにいたという文脈が省略されている。

[57] [7.1.1.16]の *xaiǰi bolgoxosee*「なんでおびえているんだ？」を先に言いかけて、言い直した。

[7.1.1.16]

xaiǰi	***bolgoxosee,***	***ŋəələluxəsee?***
xai-ǰi	*bolgo-xA(n)-si+kA*	*ŋəələ-lu-xA(n)-si+kA*
what-INS	be.frightened-PRF.P-2SG+WHQ	fear-INCH-PRF.P-2SG+WHQ

なんでおびえているんだい？」　Чем ты напугалась и забоялась?”

[7.1.1.17]

bii	***simbee***	***ugdadu***	***itəxəmbi.***
bii	*simbee*	*ugda-du*	*itə-xA(n)-bi*
1SG.NOM	2SG.ACC	boat-DAT	see-PRF.P-1SG

「私はあなたを舟の上で見たよ。“Я тебя в лодке видела.

[7.1.1.18]

a	***sii***	***jədu***	***čaiwa***	***ummisi***	***unǰiwi.***
[a]	*sii*	*jədu*	*čai-bA*	*umi+ri-si*	*un-ri-wi*
but	2SG.NOM	this.DAT	tea-ACC	drink+IM.P-2SG	say-IM.P-1SG

それなのに、あなたはここでお茶を飲んでる」と私は言う。A ты здесь чай пьёшь”, говорю я.

[7.1.1.19]

čaičči.
čaiči+ri-si
drink.tea+IM.P-2SG

「お茶を飲んでる」と。　“Чай пьёшь.”

[7.1.1.20]

bii	***xaalanda***	***jələ***	***sindaxambi***	***unǰini***
bii	*xaalanda*	*jələ*	*sinda-xA(n)-bi*	*un-ri-ni*
1SG.NOM	long.time.ago	this.LOC	come-PRF.P-1SG	say-IM.P-3SG

ačibi.
ači-bi
grandmother-1SG

「私はずっと前からここに来ていたよ」と私の祖母は言う。“Я давно сюда пришла”, говорит моя бабушка.

[7.1.1.21]

xaiwa	***gaanixasee?***
xai-bA	*gaani-xA(n)-si+kA*
what-ACC	go.to.pick.up-PRF.P-2SG+WHQ

「おまえ、何しに来たんだい？」“Зачем пришла?”

[7.1.1.22]

ənəkə	***učči-ni***	***sundattaa***	***gadubuddoowwee.***
ənəkə	*un-či(n)-ni*	*sundatta+bA*	*gadu-buddoo-wwee*
mama	say-PRF.P-3SG	fish+ACC	bring-PURP-1SG

「お母さんが言ったの、魚を取りに行くように。」“Моя мама сказала, чтобы я рыбу принесла.”

[7.1.1.23]

sundattaa	***ačibi***	***buuxəni.***
sundatta+bA	*ači-bi*	*buu-xA(n)-ni*
fish+ACC	grandmother-1SG	give-PRF.P-3SG

魚を祖母はくれた。Рыбу моя бабушка дала.

[7.1.1.24]

čoočči	***nooni***	***mindu***	***gəsə***	***xamasai***
čoočči	*nooni*	*mindu*	*gəsə*	*xamasai*
after.that	3SG.NOM	1SG.DAT	together	back

dukutaiwwee	***sindaxani.***
duku-tAi-wwee	*sinda-xA(n)-ni*
house-DIR-1SG	come-PRF.P-3SG

その後、彼女は私と一緒に私の家に来た。Потом она вместе со мной назад к нашем дому пришла.

[7.1.1.25]

palaatkataippoo,	***gasattaippoo.***
palaatka-tAi-ppoo	*gasa(n)-tAi-ppoo*
tent-DIR-1PL	village-DIR-1PL

私たちのテントへ、私たちの村へ。К нашей палатке, к нашей деревне.

[7.1.1.26]

ələ.

ələ

enough

おしまい。Всё.

［以上、7.1.1は山田（2011b）の一部を加筆・修正したものである。］

7.1.2　回想録(2)：奇妙な声に恐怖した話

2010年8月30日、ロシア連邦サハリン州ノグリキ町にて、ビビコワ E. A.から採録した。採録方法として、あらかじめ語り手が筆記した原稿を読み上げてもらい、それを録音する

方法をとった。録音時間は1分20秒であった。原稿にはロシア語で逐語的な訳も書いてもらった。その後、筆者が原稿と録音データを確かめながら、表記と分析を加えた。

本テキストでは、ビビコワが1946～1947年（6歳のとき）の冬にキャンプ地で体験した話を語る。トナカイを追って移動中、アスカサイAskasajとノグリキとの間（**図7-4**）のどこかであったが、正確な場所は覚えていないという。

あらすじは以下のとおりである。ある夜テントで眠っていると、外から異様な声が聞こえた。声は長い間つづき、恐ろしくて眠れなかった。朝起きると、テントの外に大きな爪跡が残っていた。大人たちはそれが何であるか語らず、その時に何がテントの外を歩いていたのか、いまだにわからないという。

[7.1.2.01]

tari	***təəluŋu,***	***tari***	***bii***	***nučiikənduwwee***	***tari***
tari	*təəluŋu*	*tari*	*bii*	*nučiikə(n)-du-wwee*	*tari*
that	story	that	1SG.NOM	small-DAT-1SG	that

biččini.

bi+či(n)-ni

COP+PRF.P-3SG

この話は、私の小さいときに、あった（話だ）。Этот рассказ, это я когда маленькая была, было.

[7.1.2.02]

buu	***čombokko***	***əpəkəndoo***	***katakuri***	
buu	*čombokko*	*əpəkə-ndoo*	*katakuri*	
1PL.NOM	Chombokko	grandpapa-COM	Katakuri	
atakandoo	***tuwə***	***purəndu***	***biččipu,***	***sundattaa***
ataka-ndoo	*tuwə*	*purə(n)-du*	*bi+či(n)-pu*	*sundatta+bA*
grandmama-COM	in.winter	forest-DAT	COP+PRF.P-1PL	fish+ACC

bəičiməri.

bəiči-mAri

do.hunting-COOR.PL.C

私たちはチョンボッコじいさんとカタクリばあさん[58]と一緒に、冬、タイガで魚を捕って暮らしていた。Мы с Чомбокко-дедушкой и Катакури-бабушкой зимой в тайге жили рыбу ловя.

[58] ビビコワは2・3歳から6歳まで、ウイルタ語名で *Čombokko*（別名 *Asaŋa*；ロシア姓 Zaxarov、名・父称不明）と *Katakuri*（ロシア名 Zaxarova Darija Antonovna）という老夫婦に預けられていた（Bibikova 2009: 33-34）。この事件が起きたのは、老夫婦のところから父母のもとに戻ったか戻らないかのときだった。本テキスト採録時（2010-08-30）には老夫婦と一緒にいたという説明であったが、後日（2011-01-02）確認したところ、もしかしたらこの二人でなく父母と一緒に住んでいたときであったかもしれないという。

[7.1.2.03]

geedara	***dolbo***	***aumi***	***meelčimbi.***
geedara	*dolbo*	*au-mi*	*meel-či(n)-bi*
once	at.night	sleep-COOR.C	wake.up-PRF.P-1SG

ある時、夜中に眠っていて、目が覚めた。Однажды ночью я спала и проснулась.

[7.1.2.04]

xanakkeeppoo	***xaika***	***xəəji***	***xəəji***	***xəəji***	***oini.***
xana-kkee-ppoo	*xai=kA*	*xəəji*	*xəəji*	*xəəji*	*o+ri-ni*
wall-PRL-1PL	what=WHQ	ONP	ONP	ONP	become+IM.P-3SG

テントのそばで、何かホーイホーイホーイという音がする。Возле палатки что-то хэи-хэи-хэи делает.

[7.1.2.05]

bii	***ǰiŋ***	***xəŋŋuniluxəmbi.***
bii	*ǰiŋ*	*xəŋŋuni-lu-xA(n)-bi*
1SG.NOM	very	fear-INCH-PRF.P-1SG

私はとても怖くなった。Мне очень не по себе стало.

[7.1.2.06]

goroo	***tari***	***xəəjixəni***	***xaika.***
goroo	*tari*	*xəəji-xA(n)-ni*	*xai=kA*
for.a.long.time	that	ONP-PRF.P-3SG	what=WHQ

長い間そのように、何かがホーイホーイと聞こえた。Долго так хэи делала это что-то.

[7.1.2.07]

lakəə	***xəəjixəni.***
lakəə	*xəəji-xA(n)-ni*
near	ONP-PRF.P-3SG

すぐ近くでホーイホーイといっていた。Близко хэи делала.

[7.1.2.08]

čogočči	***ŋənumi***	***čii***	***xəəjimi,***	***čii***
čogočči	*ŋənu-mi*	*čii*	*xəəji-mi*	*čii*
after.that	return-COOR.C	all.the.time	ONP-COOR.C	all.the.time
xəəjimi,	***čomǰika***	***xəməə***	***oččini.***	
xəəji-mi	*čomǰika*	*xəməə*	*o+či(n)-ni*	
ONP-COOR.C	at.the.moment	in.silence	become+PRF.P-3SG	

その後、ずっとホーイホーイといいながら遠のいて行って、そのうちに静かになった。Потом уходя пока совсем замолчала.

[7.1.2.09]

bii	***ologočči***	***goroo***	***əččimbi***
bii	*olo-kAčči*	*goroo*	*ə+či(n)-bi*
1SG.NOM	be.frightend-SUB.C	for.a.long.time	NEG+PRF.P-1SG

aura.

au-rA

sleep-NIM

私は恐ろしくて、ずっと眠れなかった。Я испугавшись долго не могла спать.

[7.1.2.10]

čopee	***apkaččimbi.***
čopee	*apkan-či(n)-bi*
and.then	lie.down-PRF.P-1SG

そして、寝入った。Потом заснула.

[7.1.2.11]

čimai	***təəluŋuni,***	***təəluŋunixə,***	***təəluŋučixəmbi.***
čimai	*###*	*###*	*təəluŋuči-xA(n)-bi*
morning	###	###	tell.legend-PRF.P-1SG

朝、（その）話をした。Утром рассказала.

[7.1.2.12]

bootoi	***nəəxəpu.***
boo-tAi	*nəə-xA(n)-pu*
outdoor-DIR	go.out-PRF.P-1PL

私たちは外へ出た。На улицу вышли.

[7.1.2.13]

xanatai	***xaiduka***	***xaidu***	***xəəjixənee.***
xana-tAi	*xai-du(u)=kA*	*xai-du(u)*	*xəəji-xA(n)-ni+kA*
wall-DIR	what-ABL=WHQ	what-ABL	ONP-PRF.P-3SG+WHQ

テントの幕に向かってどこからそのホーイという音が聞こえたのか。К стенке палатки откуда слышалось это хэи.

[7.1.2.14]

čadu	***čaawaktama***	***pokto***	***ǰiŋ***	***daaji.***
čadu	*čaawakta-mA*	*pokto*	*ǰiŋ*	*daaji*
that.DAT	claw-ADJ	track	very	big

そこにはとても大きな爪の跡があった。Там был след больших когтей.

[7.1.2.15]

xai	***tari***	***poktoni***	***biččinee,***	***əччiči***
xai	*tari*	*pokto-ni*	*bi+či(n)-ni+kA*	*ə+či(n)-či*
what	that	way-3SG	COP+PRF.P-3SG+WHQ	NEG+PRF.P-3PL
undə,		***mamajjaa***	***mapajjaa.***	
un-rA		*mama=jjAA*	*mapa=jjAA*	
say-NIM		old.woman=AND	old.man=AND	

何の跡だったのか、おばあさんとおじいさんは言わなかった。Что за следы были дедушка с бабушкой не сказали.

[7.1.2.16]

əbuddoowwee	***ŋəəllə***	***taani.***
ə-buddoo-wwee	*ŋəələ+rA*	*taani*
NEG-PURP-1SG	fear+NIM	INFER

たぶん、私が怖がらないように、だろう。Наверное, чтобы я не боялась.

[7.1.2.17]

nooči	***mimbee***	***umuukəmbə***	***wəədəmi***
nooči	*mimbee*	*umuukə(n)-bA*	*wəədə-mi*
3PL.NOM	1SG.ACC	alone-ACC	lose-COOR.C

uumbuŋŋukkil	***biččiči.***
uumbuni+bukki-l	*bi+či(n)-či*
go.fishing+HBT-PL	COP+PRF.P-3PL

彼らは私を一人残して魚釣りに行ったものだった。Они меня часто оставляли одну и ходили рыбы ловить.

［以上、7.1.2は山田（2011b）の一部を加筆・修正したものである。］

7.1.3　回想録(3)：スープの思い出

2010年11月25日にロシア連邦サハリン州ワール村にて、コーヌソワ L. N.から採録した。採録方法として、あらかじめコーヌソワがロシア字で書いた原稿を読み上げるところを、筆者が録音する方法をとった。録音に立ち会ったフェジャエワ I. Ja.が、ところどころコーヌソワがことばにつまったところで助言をしている（助言の内容は、脚注に記す）。助言が入って中断したところなども含め、全体の録音時間は3分06秒であった（20101125_2MLG_KLN.WAV）。

採録後、2010年12月15日に同ノグリキ町にて、ビビコワ E. A.と筆者で録音を聞きながら表記を確認し、ロシア語で訳付をした。

[7.1.3.01]

xaalandaa	***buu***	***gasapu***	***biччini***	***purəə.***
xaalandaa	*buu*	*gasa-pu*	*bi+či(n)-ni*	*purəə*
long.time.ago	1PL.NOM	village-1PL	COP+PRF.P-3SG	forest

昔、やま[59]こそが私たちの村だった。Давно нашим селом была тайга.

[7.1.3.02]

xasultaddaa	***əninnə***	***ananiŋun***	***purəndu***	***buwwookki*** [60]
xasu-ltA=ddAA	*###*	*anani-ŋu-n(i)*	*purə(n)-du*	*bi+bookki*
how.much-MLT=EMPH	###	year-AL-3SG	forest-DAT	COP+HBT

biччipu.

bi+či(n)-pu

COP+PRF.P-1PL

何年間か、やまに住んでいた。Несколько лет в тайге жили.

[7.1.3.03]

dukupu	***biччini***	***palaatkal,***	***nučuukə***	***puril***	***bakkaa***
duku-pu	*bi+či(n)-ni*	*palaatka-l*	*nučuukə*	*puril*	*bakkaa*
house-1PL	COP+PRF.P-3SG	tent-PL	small	children	also

ənimunə	***amimuna***	***biwukki***	***biччiči.***
əni-munA	*ami-munA*	*bi-bukki*	*bi+či(n)-či*
mother-POSS	father-POSS	COP-HBT	COP+PRF.P-3PL

私たちの家はテントだった、小さい子どもたちは父母と一緒に住んでいた。Домом нашим была палатка, маленькие дети с отцом с матерью жили.

[7.1.3.04]

əəktə	***puril***	***duwa***	***soondoolba***	***uittəukkil***
əəktə	*puril*	*duwa*	*soondoo-l-bA*	*uitə+bukki-l*
woman	children	in.summer	reindeer.aged.1.year-PL-ACC	tie+HBT-PL

biччiči,	***ənimbəri***	***bələччuukkil***	***biччiči.***
bi+či(n)-či	*əni(n)-bAri*	*bələči+bukki-l*	*bi+či(n)-či*
COP+PRF.P-3PL	mother-REF.PL	help+HBT-PL	COP+PRF.P-3PL

女の子たちは夏に母親たちを手伝って仔トナカイをつないだものだ。Девочки летом телят привязывали матерям своим помогали.

---

[59] *purə* は「住居のある場所に対して生活資料をうる山野」という意味で「やま」と訳す（池上 1997 にもとづく）。話者によるロシア語訳 tajga も、字義どおりにはタイガ（北方針葉樹林）のことだが、この地方では同じウイルタ語の *purə* と同じ意味で用いられている。

[60] *buwwookki* は、*biwwookki* の言い間違い（ビビコワによる）。

[7.1.3.05]

xusə	***puril***	***ulaalba***	***dapabuǰǰi …***	***dapaitawukkil*** [61]
xusə	*puril*	*ulaa-l-bA*	*dapa-buǰǰi*	*dapa-kitA-bukki-l*
male	children	reindeer-PL-ACC	catch-PURP.REF	catch-ITT-HBT-PL
biččiči,		***amimbari***	***bələččuukkil***	***biččiči.***
bi+či(n)-či		*ami(n)-bAri*	*bələči+bukki-l*	*bi+či(n)-či*
COP+PRF.P-3PL		father-REF.PL	help+HBT-PL	COP+PRF.P-3PL

男の子たちは、父親たちを手伝ってトナカイを捕まえたものだ。Мальчики оленей ловили отцам своим помогали.

[7.1.3.06]

narisal	***məən***	***məəttəkki***	***ǰiŋ***	***uliŋgaǰi***
nari-sAl	*məən(ə)*	*məəttəkki*	*ǰiŋ*	*uliŋga-ǰi*
person-PL	REF.NOM	REF.DIR	very	good-INS
biwukkil	***biččiči.***			
bi-bukki-l	*bi+či(n)-či*			
COP-HBT-PL	COP+PRF.P-3PL			

人々は互いに仲良く暮らしたものだった。Люди друг с другом очень хорошо жили.

[7.1.3.07]

məən	***məəttəkkeeri***	***tөjjөu***	***tөwwөukil …***	***tөjjөukkil*** [62]
məənə	*məəttəkkeeri*	*###*	*###*	*tөjө+bukki-l*
REF.NOM	REF.DIR.PL	###	###	entertain+HBT-PL
biččiči.				
bi+či(n)-či				
COP+PRF.P-3PL				

互いにごちそうした。Друг друга угощали.

[7.1.3.08]

xaiwaddaa	***waagaččeeri,***	***өlөpee***	***orogbukkil***
xai-bA=ddAA	*waa-kAččeeri*	*өlө-pee*	*orok-bukki-l*
what-ACC=EMPH	kill-SUB.PL.C	boil-COND.C	take-HBT-PL
biččiči.			
bi+či(n)-či			
COP+PRF.P-3PL			

何か獲物が入れば、調理して持って行った。Что-нибудь когда добывали сварив приносили.

---

[61] コーヌソワは *dapabuǰǰi* と読み上げてことばにつまった。そこで側にいたフェジャエワが *dapaitawukkil* と言い直し、コーヌソワがそのまま復唱した。

[62] コーヌソワが *tөjө-*「ごちそうする」という語の活用形をあれこれと言い直しているところ、フェジャエワが *tөjjөukkil* と言い直し、コーヌソワがそのまま復唱した。

[7.1.3.09]

geedalta	***bii***	***amimbi***	***ŋənnəukki***	
geeda-ltA	*bii*	*ami(n)-bi*	*ŋənə+bukki*	
once	1SG.NOM	father-1SG	go+HBT	
biččini	***purətəi***	***baaruni***	***ulaaǰi,***	***i***
bi+či(n)-ni	*purə-tAi*	*baaru-ni*	*ulaa-ǰi*	*[i]*
COP+PRF.P-3SG	forest-DIR	toward-3SG	reindeer-INS	and
waaxani	***geeda***	***gassaa.***		
waa-xA(n)-ni	*geeda*	*gasa+bA*		
kill-PRF.P-3SG	one	bird+ACC		

あるとき、私の父がトナカイに乗って森へ行き、とり[63]を獲ってきた。Однажды мой отец пошёл в тайгу на олене и убил одну птицу.

[7.1.3.10]

ənimbi	***ɵləčini***	***gasa***	***suuppooni,***	***ɵləčini***	
əni(n)-bi	*ɵlə-či(n)-ni*	*gasa*	*suupu+bA-ni*	*ɵlə-či(n)-ni*	
mother-1SG	boil-PRF.P-3SG	bird	soup+ACC-3SG	boil-PRF.P-3SG	
xuulčini	***alukkutai***	***gasa***	***suuppooni***	***i***	***uččini,***
xuul-či(n)-ni	*alukku-tAi*	*gasa*	*suupu+bA-ni*	*[i]*	*un-či(n)-ni*
pour-PRF.P-3SG	bowl-DIR	bird	soup+ACC-3SG	and	say-PRF.P-3SG
orogdu	***ǰeesiltaippoo.***				
orok-ru	*ǰeesil-tAi-ppoo*				
take-IMP	partners-DIR-1PL				

私の母はそのとり肉でスープを作り、器に注いで私に言った、「仲間たちのところに持って行きなさい」と。Моя мама сварила суп из птицы, когда поспел суп, в посуду налила суп и сказала, “Отнеси товаришам.

[7.1.3.11]

tɵjəmi	***ǰeesilbi***	***naada.***
tɵjə-mi	*ǰeesil-bi*	*naada*
entertain-COOR.C	partners-REF	necessary

仲間たちにごちそうしなければ。Угостить друзей надо.

[7.1.3.12]

kak?

[kak]

how

[63] *gasa*「とり」は、カモのこと。

どう？Как? [64]

[7.1.3.13]

orogdu!

orok-ru

take-IMP

持って行きなさい。Отнеси!

[7.1.3.14]

bii	***təəli***	***nučuukə***	***biččimbi***.
bii	*təəli*	*nučuukə*	*bi+či(n)-bi*
1SG.NOM	then	small	COP+PRF.P-1SG

あの時、私はまだ小さかった。Я тогда меленькой была.

[7.1.3.15]

gaččimbi	***alukkumba***	***gasa***	***suuppooni***	***i***	***ŋənəxəmbi***
ga+či(n)-bi	*alukku(n)-bA*	*gasa*	*suupu+bA-ni*	*[i]*	*ŋənə-xA(n)-bi*
take+PRF.P-1SG	bowl-ACC	bird	soup+ACC-3SG	and	go-PRF.P-1SG
goi	***dukutai,***	***tөjəndəxəmbi***.			
goi	*duku-tAi*	*tөjə-ndA-xA(n)-bi*			
another	house-DIR	entertain-DIR-PRF.P-1SG			

器を、とりのスープを取って、別の家へごちそうしに行った。Я взяла суп из птицы в посуде и пошла к соседем угостить.

[7.1.3.16]

ŋənəmǰikəəda	***tuuxəmbi.***
ŋənə-mǰikəə=(d)dA(A)	*tuu-xA(n)-bi*
go-PRG.C=EMPH	come.down-PRF.P-1SG

歩いて行って、転んでしまった。Когда я шла, упала.

[7.1.3.17]

məən	***dukutakki***	***isugaačči***		***ənittəkki***	
məən(ə)	*duku-tAkki*	*isu-kAčči*		*əni(n)-tAkki*	
REF.NOM	house-REF.DIR	come.back-SUB.C		mother-REF.DIR	
soŋomi	***uččimbi,***	***xaibuǰǰi***	***čadu***		***toŋdoo***
soŋo-mi	*un-či(n)-bi*	*xai-buǰǰi*	*čadu*		*toŋdoo*
cry-COOR.C	say-PRF.P-1SG	what-PURP.REF	that.DAT		pit

[64] 近くにいるフェジャエワに、自分のウイルタ語が間違いないかと尋ねている。フェジャエワが「大丈夫」とうなずいたので、続けた。

oččinee?

o+či(n)-ni+kA

become+PRF.P-3SG+WHQ

自分の家に帰って、母に泣きながら言った、「どうしてあそこに穴があったの？」と。В свой дом вернувшись матери плача сказала, “Зачем там яма появилась?

[7.1.3.18]

bii	***təəxəmbi***	***...***	***tuuxəmbi***	***i***	
bii	*təə-xA(n)-bi*	*...*	*təə-xA(n)-bi*		*[i]*
1SG.NOM	sit-PRF.P-1SG		come.down-PRF.P-1SG		and

čipaal	***gasa***	***suuppooni***	***xuulčimbi.***
čipaal	*gasa*	*suupu+bA-ni*	*xuul-či(n)-bi*
altogetherbird	soup+ACC-3SG	pour-PRF.P-1SG	

私は座って…転んで、とりのスープを全部こぼしてしまったのだ。Я села, упала и всё суп из птицы пролила.

[7.1.3.19]

ənibi	***əčči***	***paallee,***	***inəmee***	***goi***
əni-bi	*ə+či(n)-ni*	*paali+rA*	*inə-mi+kAA*	*goi*
mother-1SG	NEG+PRF.P-3SG	scold+NIM	laugh-COOR.C+EXC	another

gasa	***suuppooni***	***alukkutai***	***xuulčini,***	***silə***	***tochno.***[65]
gasa	*suupu+bA-ni*	*alukku-tAi*	*xuul-či(n)-ni*	*silə*	*[tochno]*
bird	soup+ACC-3SG	bowl-DIR	pour-PRF.P-3SG	soup	exactly

母は私を叱らず、微笑んでとりのスープをもう一杯の器に注いだ。そうだ「スープ」だ。Мама не ругала меня. Смеясь в другую чашку суп налила.

[7.1.3.20]

xuulčini	***i***	***učči***	***ŋənnəu***	***anniddaa***	***orogdu***
xuul-či(n)-ni	*[i]*	*un-či(n)-ni*	*ŋənə+ru*	*anniddaa*	*orok-ru*
pour-PRF.P-3SG	and	say-PRF.P-3SG	go+IMP	again	take-IMP

ǰeesiltaippoo.

ǰeesil-tAi-ppoo

partners-DIR-1PL

注いで言った、「もう一度行きなさい、仲間たちのところに。Налила и сказала, “Иди опять неси друзьям.

---

[65] ここまで、スープに当たる語を表わすのにロシア語のスープ sup をウイルタ語に音訳して *suupu* と言っていたが、この時にウイルタ語の *silə*「スープ」という単語を思い出した。

[7.1.3.21]

əjjee	***tuurə.***
ə+ru	*tuu-rA*
NEG+IMP	come.down-NIM

「転んではだめですよ。Не падай.

[7.1.3.22]

uliŋgaǰi	***poktoo***	***itəччu.***
uliŋga-ǰi	*pokto+bA*	*itə-či+ru*
good-INS	way+ACC	see-ITR+IMP

足元をよく見ていなさい。Хорошо на дорогу смотри.

[7.1.3.23]

ŋənnəu.

ŋənə+ru

go+IMP

行きなさい」と。Иди! ”

7.1.4　回想録(4)：アザラシ肉とニヴフと日本人

2010 年 10 月 27 日、ロシア連邦サハリン州ノグリキ町にて、ビビコワ E. A.から同時聞き書き（数単語ずつゆっくりと話してもらい、語り手本人の目の前で同時に書きとる方法）で採録した。一通りウイルタ語で語った後に、書き出したテキストを最初から確認・修正しながら、逐語的なロシア語訳をつけた。一連の作業は IC レコーダーで録音しながら行った。全体の所要時間は 2 時間 17 分であった（20101027_2DIC_BEA.MP3）。この採録には、調査で滞在していたロシア科学アカデミー言語研究所主任研究員のペヴノフ　アレクサンドルミハイロヴィチが立ち会い、筆者の作業と並行して記録・録音した。[66]

このテキストは、アザラシの肉にまつわる思い出を語ったもので、内容が大きく二つに分かれる。まず、前半の[7.1.4.01]～[7.1.4.24]では、エウェンキーとウイルタ、そしてニヴフの人たちにとってアザラシ肉がどのようなものだったかが語られている。アザラシの毛皮や脂の利用についても触れ、ウイルタやニヴフの人々にとってアザラシが重要な生活資源になっていたことを物語る。だが、アザラシ肉の独特な臭いはウイルタの人々にとってあまり好ましいものではなかったという。そのため、ウイルタの人々はアザラシ肉をよく食べるニヴフの人たちの集落に近寄らなかったと話す。

後半の[7.1.4.25]～[7.1.4.68]は、アザラシ肉の臭いの話題から発展して、この採録の少し前の 2010 年 10 月 9 日にビビコワが体験したことが語られている。当時、同氏の家に筆者（山田）と進藤冬華（美術家）が滞在していて、ビビコワが他所からもらったアザラシ肉を茹

[66] ペヴノフから採録方法などについて専門的な教示をくださったこと、本記録を筆者が資料として発表することについて了解くださったことに、謝意を表わす。

でて、コケモモ採集の休憩時に筆者と進藤にふるまってくれた。今日では滅多に手に入らないごちそうを感謝しつつも、アザラシ肉の臭いが強くて私たちはあまり多く食べることができなかった。そんな日本人二人を前に、ビビコワが自分でたくさん食べたという体験が、ユーモアを交えて語られた。

[7.1.4.01]

əwənkil [67]	***pəətə***	***ulissəəni***	***əwwukkil***	***dəptə.***
əwənki-l	*pəətə*	*ulisə+bA-ni*	*ə+bukki-l*	*dəptu+rA*
Evenki-PL	seal	flesh+ACC-3SG	NEG+HBT-PL	eat+NIM

エウェンキーの人たちは普通、アザラシ肉を食べない。Эвенки нерпичье мясо обычно не едят.

[7.1.4.02]

waaludu	***əsi***	***əwənkildəə***	***ǰiŋ***	***oi***
waalu-du	*əsi*	*əwənki-l=ddAA*	*ǰiŋ*	*oi*
Val-DAT	now	Evenki-PL=EMPH	very	few

otuxači.

otu-xA(n)-či

become-PRF.P-3PL

ワール村には今やエウェンキーは少なくなってしまった。На Валу сейчас даже эвенков очень мало осталось.

[7.1.4.03]

uiltasal	***pəətə***	***ulissəəni***	***geedara***	***geedara***	***dəpukkil***
uilta-sAl	*pəətə*	*ulisə+bA-ni*	*geedara*	*geedara*	*dəp+bukki-l*
Uilta-PL	seal	flesh+ACC-3SG	once	once	eat+HBT-PL

joosomori.

jooso-mAri

hunt.sea.animals-COOR.PL.C

ウイルタは海獣狩猟をしてアザラシ肉を食べることがめったにない。Уйльта нерпичье мясо редко редко едят охотясь на нерпу.

[7.1.4.04]

joosoǰi	***gəlburisiči***	***pəətəmbə***
jooso-ǰi	*gəlburi-si-či*	*pəətə(n)-bA*
hunting.sea.animals-INS	give.a.name.to-IM.P-3PL	seal-ACC

[67] この語は、*kiilləəsəl* とあるべき（Bibikova E. A. p.c.）。

gobdourree.

gobdo+buri+bA

hunt+IPSN.IM.P+ACC

「ヨーソ」とは、アザラシを狩ることを言う。“Ëco” называют на нерпу охоту.

[7.1.4.05]

tamačee	***jooso***	***kəssəəni***	***saariči***	***uiltasal***
tamačee	*jooso*	*kəsə+bA-ni*	*saa-ri-či*	*uilta-sAl*
like.that	hunting.sea.animals	word+ACC-3SG	know-IM.P-3PL	Uilta-PL

giləəsəl	***əwwee***	***naadu***	***biisəl,***	***suunə***
giləə-sAl	*əwwee*	*naa-du*	*bi+ri-sAl*	*suunə*
Nivkh-PL	here	land-DAT	COP+IM.P-PL	sun

kaapaǰǰeeduni.

kaapadu+ri-du-ni

rise+IM.P-DAT-3SG

「ヨーソ」ということばを、この地、日の昇るところに暮らす人たち、ウイルタとニヴフが知っている。Такое слово “ëco” знают уйльта и нивхи на этой земле живущие, там где солнуе встаёт.

[7.1.4.06]

tawwee	***bii***	***giləəsəl***	***tamačee***	***kəssəə***	***əsiči***
tawwee	*bi+ri*	*giləə-sAl*	*tamačee*	*kəsə+bA*	*ə-si-či*
there	COP+IM.P	Nivkh-PL	like.that	language+ACC	NEG-IM.P-3PL

saara.

saa-rA

know-NIM

あっちに暮らすニヴフの人たちは、このようなことばを知らない。Там живущие нивхи такое слово не знают.

[7.1.4.07]

uiltasal	***pəəttəə***	***joosomori,***	***nattaani***
uiltasal	*pəətə+bA*	*jooso-mAri*	*natta+bA-ni*
Uilta-PL	seal+ACC	hunt.sea.animals-COOR.PL.C	fur+ACC-3SG

gaǰiči	***nattaǰini***	***silmaddoori***	***andusiči,***
ga-ǰi-či	*natta-ǰi-ni*	*silma-ddoori*	*andu-si-či*
take-IM.P-3PL	fur-INS-3SG	bridle-REF.PL.DSG	work-IM.P-3PL

maatuddoori	***andusiči***	***dauŋgariǰi***	***uttaari***
maatu-ddoori	*andu-si-či*	*dauŋgari-ǰi*	*utta+bAri*
lasso-REF.PL.DSG	make-IM.P-3PL	seal-INS	boots+REF.PL

pərəmissiči.

pərəmisi+ri-či

sole+IM.P-3PL

ウイルタはアザラシを獲って、毛皮をはぎ、毛皮から（トナカイの）牽引具や投げ縄、アザラシで自分たちの靴の底を縫う。Уйльта на нерпу охотесь, шкуру барут, из шкуры уздечки себе делают, арканы себе делают из сивучами для обуви шьют подошвы.

[7.1.4.08]

ǰoččooni	***čirriči,***	***anu***	***pəətə***	***keuriddooni***
ǰočču+bA-ni	*čiru+ri-či*	*anu*	*pəətə*	*?keuri-ddoo-ni* [68]
fat+ACC-3SG	melt+IM.P-3PL	FIL	seal	? stomach-DSG-3SG

buisiči	***ildaa.***
bui-si-či	*ilda+bA*
preserve-IM.P-3PL	oil+ACC

アザラシ脂は溶かして、アザラシの胃袋に入れて保存した。Сало перетапливают в нерпичих желудках хранят полученный жир.

[7.1.4.09]

ulissəəni	***dəpčiči,***	***anu,***	***xaiwaniddaa***	***aptaullee***
ulisə+bA-ni	*dəptu+ri-či*	*anu*	*xai-bA-ni=ddAA*	*aptauli+bA*
flesh+ACC-3SG	eat+IM.P-3PL	FIL	what-ACC-3SG=EMPH	delicious+ACC

dəpčiči.

dəptu+ri-či

eat+IM.P-3PL

その肉は食べる、美味しいものは何でも食べる。Мясо нерпы съедают всё что вкусно съедают.

[7.1.4.10]

bəgǰilbəni	***kaamučigaččeeri***	***talaariči.***
bəgǰi-l-bA-ni	*kaamuči-kAččeeri*	*talaa-ri-či*
leg-PL-ACC-3SG	singe-SUB.PL.C	eat.raw-IM.P-3PL

アザラシの足は火にあぶって、生に近い状態で食べる。Ноги опалив едят в сыром виде.

[7.1.4.11]

nučiikə	***pəətə***	***ulisəni***	***aptauli***	***dəjə.***
nučiikə	*pəətə*	*ulisə-ni*	*aptauli*	*dəjə*
small	seal	meat-3SG	delicious	soft

小さなアザラシの肉は、やわらかくておいしい。У меленькой нерпы мясо вкусное мягкое.

---

[68] 採録のとき、1 回目には *keuriduni*（*keuri-du-ni*; stomach-DAT-3SG）「その胃に」（与格）と言ったのだが、筆者が確認のため聞き返すと、2 回目以降 *keuriddooni*（指定格）に変更した。その後の筆者の分析では、1 回目に言った *keuriduni*（与格）の方が文法的だと考えられる。

[7.1.4.12]

daaji	***pəətə***	***ulisəni***	***ŋokkuuli.***
daaji	*pəətə*	*ulisə-ni*	*ŋokkuuli*
big	seal	flesh-3SG	stinking

大きなアザラシの肉は、臭みが強い。У большой перпы мясо вонючее.

[7.1.4.13]

pəətə	***ulissəəni***	***ɵləmi,***	***baramba***	***əsisi***
pəətə	*ulisə+bA-ni*	*ɵlə-mi*	*bara(n)-bA*	*ə-si-si*
seal	flesh+ACC-3SG	boil-COOR.C	a.lot-ACC	NEG-IM.P-2SG

puiwoondə.

pui+boon-rA

boil+CAUS-NIM

アザラシ肉を煮るときは、あまり煮立たせてはいけない。Нерпы мясо варя много не кипятишь.

[7.1.4.14]

maŋauli	***pixəruuli***	***osini.***
maŋauli	*pixəruuli*	*o-si-ni*
hard	dried.out	become-IM.P-3SG

固くてぱさぱさになってしまう。Твёрдое сухое становится.

[7.1.4.15]

pəətə	***ulissəəni***	***ɵləsiči***	***dausulu***	***anaa***.
pəətə	*ulisə+bA-ni*	*ɵlə-si-či*	*dausu-lu*	*anaa*
seal	flesh+ACC-3SG	boil-IM.P-3PL	salt-PROP	no

アザラシ肉は塩を入れないで煮る。Нерпы мясо варят без соли.

[7.1.4.16]

čoočči	***xuruutannee***	***dausulu***	***muutəi***
čoočči	*xuru-kutA-nnee*	*dausu-lu*	*muu-tAi*
after.that	ripen-PRF.COND.C-3SG	salt-PROP	water-DIR

tupəəčiməri	***dəpčiči.***
tupəə-či-mAri	*dəptu+ri-či*
dip-ITR-COOR.PL.C	eat+IM.P-3PL

火が通ったら、塩水に浸しながら食べる。Потом когда сварится в солёную воду макая кушают.

[7.1.4.17]

uiltasal	***pəətəmbə***	***geedara***	***geedara***	***dəpčiči.***
uilta-sAl	*pəətə(n)-bA*	*geedara*	*geedara*	*dəptu+ri-či*
Uilta-PL	seal-ACC	once	once	eat+IM.P-3PL

ウイルタはアザラシ肉をめったに食べない。Уйльта нерпу редко едят.

[7.1.4.18]

giləəsəl	***xəwərə***	***kiraduni***	***biməri,***	***gəgdəkə***
giləə-sAl	*xəwərə*	*kira-du-ni*	*bi-mAri*	*gəgdəkə*
Nivkh-PL	bay	shore-DAT-3SG	COP-COOR.PL.C	always

dəpčiči.
dəptu+ri-či
eat+IM.P-3PL

ニヴフの人たちは湾岸に住んでいて、いつもアザラシ肉を食べている。Нивхи на берегу залива живя, постоянно кушают.

[7.1.4.19]

bolo	***waamari***	***baramba***	***əksəǰǰiči.***
bolo	*waa-mAri*	*bara(n)-bA*	*əksə-du+ri-či*
in.autumn	kill-COOR.PL.C	a.lot-ACC	put-REV+IM.P-3PL

秋、アザラシを獲って、たくさん保存する。Осенью убивая много ложат для хранение.

[7.1.4.20]

tuwə	***dəptubuddoori.***
tuwə	*dəptu-buddoori*
in.winter	eat-PURP.PL.REF

冬に食べるために。Чтобы зимой кушать.

[7.1.4.21]

baramba	***pəəttəə***	***dəptumi***	***giləə***	***puuni***
bara(n)-bA	*pəətə+bA*	*dəptu-mi*	*giləə*	*puu-ni*
a.lot-ACC	seal+ACC	eat-COOR.C	Nivkh	smell-3SG

pəətəŋəči	***ŋokkisini.***
pəətə-ŋAči	*ŋokki-si-ni*
seal-LIKE	smell-IM.P-3SG

アザラシをたくさん食べるから、ニヴフの人たちはアザラシの臭いがする。Много нерпы едя нивхов запах как нерпа пахнет.

[7.1.4.22]

čaa	***puuwə***	***əmi***	***ajaura,***	***uilta***
čaa	*puu-bA*	*ə-mi*	*ajau-rA*	*uilta*
that	smell-ACC	NEG-COOR.C	like-NIM	Uilta
giləə	***gasaduni***	***goro***	***əwukkil***	***bee.***
giləə	*gasa-du-ni*	*goro*	*ə-bukki-l*	*bi+rA*
Nivkh	village-DAT-3SG	long.time	NEG-HBT-PL	COP+NIM

ウイルタはその臭いが好きではなかったから、ニヴフの集落に長く近づかなかった。Тот запах не любя, уйльта в Нивхском стойбище долго не бывают.

[7.1.4.23]

uilta	***giləəkkəə***	***miirəm***	***ŋənəməri***	***məənə***
uilta	*giləə+bA*	*miirə-m(Ari)?*	*ŋənə-mAri*	*məənə*
Uilta	Nivkh+ACC	be.married-COOR.PL.C?	go-COOR.PL.C	REF.NOM

məəttəkkeeri	***uilta***	***gasaduni***	***biwukkil.***
məəttəkkeeri	*uilta*	*gasa-du-ni*	*bi-bukki-l*
REF.DIR.PL	Uilta	village-DAT-3SG	COP-HBT-PL

ウイルタとニヴフの男女が結婚するとき、その夫婦はウイルタの集落に住んだ。Если уйльта и нивхи женятся друг на друге, в уилтинском стойбище живут.

[7.1.4.24]

tamačee	***numi***	***ǰiŋ***	***oi***	***buu***	***dooduppoo.***
tamačee	*numi*	*ǰiŋ*	*oi*	*buu*	*doo-du-ppoo*
like.that	family	very	few	1PL.NOM	inside-DAT-1PL

私たちのところでは、そういう家庭はとても少なかった。Таких семей очень мало на нашей замле.

[7.1.4.25]

puta	***beeduni***	***mittəi***	***bii***	***ǰeebi***
puta	*bee-du-i*	*mittəi*	*bii*	*ǰee-bi*
trap	month-DAT-3SG	1SG.DIR	1SG.NOM	friend-1SG
giləə	***əəktəni***	***mittəi***	***buuxəni***	***pəətə***
giləə	*əəktə-ni*	*mittəi*	*buu-xA(n)-ni*	*pəətə*
Nivkh	woman-3SG	1SG.DIR	give-PRF.P-3SG	seal

ulissəəni	***ojuukamba.***
ulisə+bA-ni	*ojuuka(n)-bA*
flesh+ACC-3SG	some-ACC

10 月、私の友人のニヴフの女性が私に、少量のアザラシ肉をくれた。В октябре моя подруга нивхская женщина мне дала немного нерпы мясо.

[7.1.4.26]

bii	***mərəққiwi:***	***əsi***	***ələsiləmi***	***sisa***
bii	*mərəči+ri-wi*	*əsi*	*ələ-silA-mi*	*sisa*
1SG.NOM	think+IM.P-1SG	now	boil-NFUT.F-1SG	Japanese

patalasalbani	***dəpoonǰiləmi.***
patala-sAl-bA-ni	*dəptu+boon-rilA-mi*
girl-PL-ACC-3SG	eat+CAUS-NFUT.F-1SG

私は「さあ、日本から来た娘さんたちに食べさせよう」と思った。Я подумала: “Сейчас сварю японских девушек накормлю.”

[7.1.4.27]

dukutakki	***isuxambi,***	***pəətə***	***ulisəŋŋoori***
duku-tAkki	*isu-xA(n)-bi*	*pəətə*	*ulisə-ŋu+bAri*
house-REF.DIR	come.back-PRF.P-1SG	seal	meat-AL+REF.PL

siltuxambi,	***əksəxəmbi***	***kəčəələitəi,***	***muuwə***
siltu-xA(n)-bi	*əksə-xA(n)-bi*	*kəčəəli-tAi*	*muu-bA*
wash-PRF.P-1SG	put-PRF.P-1SG	bucket-DIR	water-ACC

xuulәčimbi,	***čimanaani***	***čimai***	***ələbuǰǰi.***
xuulə-či(n)-bi	*čimanaa-ni*	*čimai*	*ələ-buǰǰi*
pour-PRF.P-1SG	tomorrow-3SG	morning	boil-PURP.REF

家に帰って、アザラシ肉を洗い、鍋に入れ、水を注いだ、翌日に煮るために。Домой вернулась нерпы мясо своё вымыла, положила в кастрюлю, водой залила, чтобы завтра утром сварить.

[7.1.4.28]

čimanaani	***čimai***	***kəčəəliŋubi***	***itəxəmbi.***
čimanaa-ni	*čimai*	*kəčəəli-ŋu-bi*	*itə-xA(n)-bi*
tomorrow-3SG	morning	bucket-AL-REF	see-PRF.P-1SG

翌日の朝、鍋を見てみた。На-завтра утром кастрюлю посмотрела.

[7.1.4.29]

ərəəi,	***muuni***	***ǰiŋ***	***səəm***	***biini.***
ərəəi	*muu-ni*	*ǰiŋ*	*səəm*	*bi+ri-ni*
INTJ	water-3SG	very	red	COP+IM.P-3SG

あれまあ、水が真っ赤だ。Ой, вода очень покрасила.

[7.1.4.30]

pəətə	***səəksəni***	***ǰiŋ***	***bara.***
pəətə	*səəksə-ni*	*ǰiŋ*	*bara*
seal	blood-3SG	very	a.lot

アザラシの血がいっぱいだ。Нерпы кровь очень много.

[7.1.4.31]

təəli	***buu***	***čaa***	***inəŋidu***	***gaaktaa***
təəli	*buu*	*čaa*	*inəŋi-du*	*gaakta+bA*
then	1PL.NOM	that	day-DAT	cranberry+ACC

gatanibuddoori	***toччipu.***
gatani-buddoori	*to+či(n)-pu*
go.gathering-PURP.PL.REF	do+PRF.P-1PL

その時、私たちはその日にコケモモ採りに出かけようとしていた。Тогда мы в тот день клюкву собирать собрались.

[7.1.4.32]

inəŋiŋupu	***ǰiŋ***	***uliŋga***	***biччini,***	***nuŋǰuuli***	***xədu***	***anaa.***
inəŋi-ŋu-pu	*ǰiŋ*	*uliŋga*	*bi+či(n)-ni*	*nuŋǰuuli*	*xədu*	*anaa*
day-AL-1PL	very	good	COP+PRF.P-3SG	cold	wind	no

良い天気で、冷たい風もない。День наш очень хороший был, хородного ветра нет.

[7.1.4.33]

bii	***čaa***	***pəətə***	***ulissəəni***	***təəwuxəmbi***	***tawatakki.***
bii	*čaa*	*pəətə*	*ulisə+bA-ni*	*təə-bu-xA(n)-bi*	*tawa-tAkki*
1SG.NOM	that	seal	meat+ACC-3SG	sit-TR-PRF.P-1SG	fire-REF.DIR

私はそのアザラシ肉を火にかけた。Я то нерпы мясо поставила на огонь.

[7.1.4.34]

pujjugəччeeri,	***ɵlɵgoччeeri,***	***ǰiŋ***	***dəksiluxəpu***
pui+bu-kAччeeri	*ɵlə-kAччeeri*	*ǰiŋ*	*dəksi-lu-xA(n)-pu*
boil+TR-SUB.PL.C	boil-SUB.PL.C	very	be.busy-INCH-PRF.P-1PL

purəttəi	***ŋənəbuddoori.***
purə(n)-tAi	*ŋənə-buddoori*
forest-DIR	go-PURP.PL.REF

煮立たせて茹でてから、やまに行くのを急いだ。Вскипятив сварив очень заторопились чтобы в тайгу поити.

[7.1.4.35]

ulisəŋupu	***xuruxəni,***	***xaagbuxambi***	***kɵčɵliŋubi,***
ulisə-ŋu-pu	*xuru-xA(n)-ni*	*xaagbu-xA(n)-bi*	*kɵčɵ(ɵ)li-ŋu-bi*
flesh-AL-1PL	ripen-PRF.P-3SG	take.off-PRF.P-1SG	bucket-AL-REF

xaagbuxambi	***ulisəŋubi***	***kɵčɵlidu***	***əksəxəmbi***
xaagbu-xA(n)-bi	*ulisə-ŋu-bi*	*kɵčɵ(ɵ)li-du(u)*	*əksə-xA(n)-bi*
take.off-PRF.P-1SG	meat-AL-REF	bucket-ABL	put-PRF.P-1SG

pakeetutai.

pakeetu-tAi

bag-DIR

肉に火が通ったら、おろして、鍋を（火から）おろし、肉を鍋から（出して）袋[69]に入れた。

Наше мясо сварилось, я сняла кострюлю, сняла мясо из кострюли, положила в пакет.

[7.1.4.36]

tari	***pakeettoo***	***goi***	***pakeetutai***	***əksəxəmbi.***
tari	*pakeetu+bA*	*goi*	*pakeetu-tAi*	*əksə-xA(n)-bi*
that	bag+ACC	another	bag-DIR	put-PRF.P-1SG

その袋を、さらに別の袋に入れた。Тот пекет в другой пакет положила.

[7.1.4.37]

čoočči,	***xoonikanaa***	***umburi?*** [70]
čoočči	*xooni=kA=nAA*	*un-buri*
after.that	how=WHQ=WND	say-IPSN.IM.P

そして…、何て言うかな？Потом, … как сказать?

[7.1.4.38]

xooni	***umburikənəə?***
xooni	*un-buri=kA=nAA*
how	say-IPSN.IM.P=WHQ=WND

どう言うかな？Как сказать?

[7.1.4.39]

koroopkatai	***əksəxəmbi.***[71]
koroopka-tAi	*əksə-xA(n)-bi*
basket-DIR	put-PRF.P-1SG

「かご」（食品用タッパー容器）に入れた。В контейнер положил.

[7.1.4.40]

kap	***somixambi.***
kap	*somi-xA(n)-bi*
ONP	close-PRF.P-1SG

ぴったりとふたを閉めた。Крепко-накрепко закрыл.

---

[69] 筆者らが日本から持って行ったチャック付ビニール袋（食品を冷凍保存できるもの）を、ビビコワは愛用している。このときも、アザラシ肉を密閉して携帯するためにチャック付ビニール袋に入れた。ビニール袋のことをいうロシア語 paket を、ここではウイルタ語に音訳して *pakeetu* と言った。

[70] 食品用のタッパー容器のことを何というか思い出せず、ことばを選んでいる。

[71] 食品用のタッパー容器のことをいうロシア語 kontejner（英語の container と同源）を思い出せなかったので、とっさに「籠」を意味するロシア語 korovka をウイルタ語に音訳して、*koroopka* と言った。

[7.1.4.41]

esshjo	***xaikaamba***	***xaikaamba***	***təsugəččeeri***
[esshjo]	*xaikA(n)-bA*	*xaikA(n)-bA*	*təsu-kAččeeri*
further	whatever-ACC	whatever-ACC	gather-SUB.PL.C

xuisələxəpu.

xuisə-lA-xA(n)-pu

rations-VSF-PRF.P-1PL

さらに何だかんだと寄せ集めて、携帯食にした。Ещё кое-что кое-что насобирав взяли тормозок.

[7.1.4.42]

čaiŋuddoori	***orokčipu***	***teermosidu.*** [72]
čai-ŋu-ddoori	*orok-či(n)-pu*	*teermosi-du*
tea-AL-REF.PL.DSG	take-PRF.P-1PL	thermos-DAT

お茶を魔法瓶に入れて持った。Чай себе взяли в термосе.

[7.1.4.43]

gə,	***ŋənəxəpu,***	***guuliččipu,***	***taksiiji.*** [73]
gə	*ŋənə-xA(n)-pu*	*guulin-či(n)-pu*	*taksii-ji*
INTJ	go-PRF.P-1PL	depart-PRF.P-1PL	taxi-INS

さて、タクシーで出かけた。Вот, поехали тронулись в путь на такси.

[7.1.4.44]

daaji	***tugdələ***	***tawweetaini***	***taksiiji***	***ŋənəxəpu.***
daaji	*tugdələ*	*tawwee-tAi-ni*	*taksii-ji*	*ŋənə-xA(n)-pu*
big	bridge	there-DIR-3SG	taxi-INS	go-PRF.P-1PL

大きい橋の向こう側へタクシーで行った。За большой мост на такси поехали.

[7.1.4.45]

tamačču	***poktokki***	***gitumari***	***ŋənəxəpu.***
tamačču	*pokto-kki*	*gitu-mAri*	*ŋənə-xA(n)-pu*
from.there	way-REF.PRL	walk-COOR.PL.C	go-PRF.P-1PL

そこから道を歩いて行った。Оттуда по дороге пешком пошли.

[7.1.4.46]

gə,	***ŋənneepoo.***
gə,	*ŋənə+ri-pu+kAA*
INTJ	go+IM.P-1PL+EXC

---

[72] 魔法瓶のことをいうロシア語 teemos（英語の thermos と同源）をウイルタ語に音訳して、*teermosi* と言った。

[73] タクシーのことをいうロシア語 taksi（英語の taxi と同源）をウイルタ語に音訳して、*taksii* と言った。

さあ、どんどん行く。Вот идём.

[7.1.4.47]

josiko	***unǰini:***	***tari***	***ruksaakidu***	***pəətə***	***puuni***
josiko[74]	*un-ri-ni*	*tari*	*ruksaaki-du(u)*[75]	*pəətə*	*puu-ni*
Yoshiko	say-IM.P-3SG	that	rucksack-ABL	seal	smell-3SG

ŋokkisini.

ŋokki-si-ni

smell-IM.P-3SG

ヨシコが「そのリュックサックからアザラシの臭いがしますよ」と言う。Ёсико говорит, из того рюкзака нерпы запах пахнет.

[7.1.4.48]

duu	***pakeettoo***	***koroopkəə***	***ruksaakkii***	***pos***	***ŋokkisini.***
duu	*pakeetu+bA*	*koroopkə+kkəə*	*ruksaaki+kkəə*	*pos*	*ŋokki-si-ni*
two	bag+AND	basket+AND	basket+AND	ONP	smell-IM.P-3SG

二枚（重ね）の袋もタッパー容器もリュックサックも通して臭いがする。Два пакета контейнер рюкзак насквозь воняет.

[7.1.4.49]

bii	***unǰiwi:***	***ai***	***biǰini!***
bii	*un-ri-wi*	*ai*	*biǰini*
1SG.NOM	say-IM.P-1SG	INTJ	let

私は「ああ、ほっとこう」と言う。Я говорю: “Ай, пусть!

[7.1.4.50]

purəə	***goči.***
purəə	*goči*
forest	PTCL

「ここは、やま（の中）だもの。Тайга же.

[7.1.4.51]

puuni	***wəədəpčilləə.***
puu-ni	*wəədə-ptu+rillAA*
smell-3SG	lose-SPN+NFUT.F.3SG

臭いは消えるでしょう。」Запах потеляется.”

[74] 筆者（山田）のこと。

[75] リュックサックのことをいうロシア語 rjukzak（英語の rucksack と同源）をウイルタ語に音訳して、*ruksaaki* と言った。

[7.1.4.52]

dətuŋŋoori	***aaptuxapu.***
dətu-ŋu+bAri	*aaptu-xA(n)-pu*
marsh-AL+REF.PL	arrive-PRF.P-1PL

私たちの目指す湿地に着いた。До своей мори дошли.

[7.1.4.53]

kuŋtikətəi	***kaapaxapu.***
kuŋtikə-tAi	*kaapa-xA(n)-pu*
hill-DIR	ascend-PRF.P-1PL

丘を登った。На холмик взобрались.

[7.1.4.54]

gə,	***dəptubuddoori***	***toipu.***
gə	*dəptu-buddoori*	*to+ri-pu*
INTJ	eat-PURP.PL.REF	do+IM.P-1PL

さて、食べよう。Вот, кушать собрались.

[7.1.4.55]

naakki	***əksəčixəpu***		***dəppiŋŋoori***		
naa-kki	*əksə-či-xA(n)-pu*		*dəppi-ŋu+bAri*		
earth-REF.PRL	put-ITR-PRF.P-1PL		food-AL+REF.PL		
pəmidoorrii	***luukkii***	***pakam***	***očči***		***xileeppoo,***
pəmidoori+kəə?	*luuki+kkəə?*	*pakam*	*o+či(n)*		*xileepu+bA*
tomato+AND?	onion+AND?	black	become+PRF.P		bread+ACC
kəmpeetkəə,	***salaattoo,***	***i***	***əmbee***	***pəətə***	***ulisəŋŋəəri.***
kəmpeetkə+kəə?	*salaatu+bA*	*[i]*	*əmbee*	*pəətə*	*ulisə-ŋu+bAri*
candy+AND?	salad+ACC	and	of.course	seal	flesh-AL+REF.PL

地面に私たちの食事を広げた、トマトとタマネギと黒パンとキャンディーとサラダと、そして、もちろんアザラシ肉を。На замле разложили свою еду: помидоры, лук, чёрный хлеб, конфеты, салат и конечно нерпы мясо.

[7.1.4.56]

gə,	***itadakimas*** [76]	***ugəččeeri***	***dəptuluxəpu.***
gə,	*[itadakimasu]*	*u(n)-kAččeeri* [77]	*dəptu-lu-xA(n)-pu*
INTJ	let’s.eat	say-SUB.PL.C	eat-INCH-PRF.P-1PL

さて、「いただきます」と言って食べ始めた。Вот, “итадакимас” сказав начали есть.

[76] 一緒にいた私たち（筆者と進藤）に合わせて、なじみの日本語の挨拶で「いただきます」と言った。

[77] Ikegami（1959 [2001]）のパラダイムに照らせば、*ukkəččeeri* が期待される。cf. [7.3.2.27]

[7.1.4.57]

patalaŋulbi	***pəətə***	***ulissəəni***	***sabuǰi***	***dapaxači,***
patala-ŋu-l-bi	*pəətə*	*ulisə+bA-ni*	*sabu-ǰi*	*dapa-xA(n)-či*
girl-AL-PL-REF	seal	meat+ACC-3SG	chopstick-INS	catch-PRF.P-3PL
amŋattakkeeri		***gidalaxači.***		
amŋa+tAkkeeri		*gida-lA-xA(n)-či*		
mouth+REF.PL.DIR		pierce-VSF-PRF.P-3PL		

私の（客人の）娘たちはアザラシ肉を箸で取って、口へ入れた。Девушки мои нерпы мясо полочками взяли. В рот сунули.

[7.1.4.58]

seeluxači.

see-lu-xA(n)-či

chew-INCH-PRF.P-3PL

噛み始めた。Жуют.

[7.1.4.59]

bii	***panusiwi ,***	***aptaulii?***
bii	*panu-si-wi*	*aptauli=i*
1SG.NOM	ask-IM.P-1SG	delicious=YNQ

私は尋ねる、「おいしい？」Я спрашиваю: “Вкусно?”

[7.1.4.60]

nooči	***unǰiči,***	***aptaulee,***	***aptaulee.***
nooči	*un-ri-či*	*aptauli+kAA*	*aptauli+kAA*
3PL.NOM	say-IM.P-3PL	delicious+EXC	delicious+EXC

彼女たちは言う、「おいしい、おいしい」Они говорят: “Вкусно, вкусно.”

[7.1.4.61]

məənə	***musimoo***	***musimoo***	***oiči.***
məənə	*musimoo*	*musimoo*	*o+ri-či*
REF.NOM	swallow.laughter	swallow.laughter	become+IM.P-3PL

自分（たち）は笑いをこらえている。Сами незаметно улыбаются.



写真 7-5
（左から）おいしそうにアザラシ肉をほおばるビビコワと、その様子を見て笑いをこらえる進藤（2010 年 10 月 9 日、筆者撮影）



写真 7-6
茹でたアザラシ肉の残り：骨のまわり（2010 年 10 月 10 日、筆者撮影）

[7.1.4.62]

barambalaka	***əsiči***	***dəptəə***	***pəətə***	***ulissəəni.***
bara(n)-bA=lAkA	*ə-si-či*	*dəptə+rA*	*pəətə*	*ulisə+bA-ni*
a.lot-ACC=TOP	NEG-IM.P-3PL	eat+NIM	seal	meat+ACC-3SG

アザラシ肉をたくさんは食べない。Много то не едят нерпы мясо.

[7.1.4.63]

dəpčiči	***salaattoo,***	***sagari***	***xileeppoo,***	***pəmidoorree.***
dəptu+ri-či	*salaatu+bA*	*sagari*	*xileepu+bA*	*pəmidoori+bA*
eat+IM.P-3PL	salad+ACC	black	bread+ACC	tomato+ACC

食べているのは、サラダ、黒パン、トマトだ。Кушают салат, чёрный хлеб, помидоры.

[7.1.4.64]

bii	***mərəčči**wi:***	***pəətə***	***ulissəəni***	***galliči,***
bii	*mərəči+ri-wi*	*pəətə*	*ulisə+bA-ni*	*galu+ri-či*
1SG.NOM	think+IM.P-1SG	seal	meat+ACC-3SG	dislike+IM.P-3PL

əsiči	***dəptə.***
ə-si-či	*dəptə+rA*
NEG-IM.P-3PL	eat+NIM

私は思った、「アザラシ肉は苦手で、食べないらしいな」。Я думаю: “Нерпы мясо не хотят, не кушают.”

[7.1.4.65]

təəli	***bii***	***məənə***	***čipaal***	***dəptuxəmbi***
təəli	*bii*	*məənə*	*čipaal*	*dəptu-xA(n)-bi*
then	1SG.NOM	REF.NOM	altogether	eat-PRF.P-1SG

ŋokkisiwani	***əmi***	***kixanda.***
ŋokki-si-bA-ni	*ə-mi*	*kixan-rA*
smell-IM.P-ACC-3SG	NEG-COOR.C	care-NIM

それで私は自分で全部食べた、その臭いを気にせず。Тогда я сама всё съела на запах не обращая внимания.

[7.1.4.66]

minduləkə	***aptaa***	***aptaa***	***biččini.***
mindu=lAkA	*aptaa*	*aptaa*	*bi+či(n)-ni*
1SG.DAT=TOP	delicious	delicious	COP+PRF.P-3SG

私には、おいしかった。А мне то вкусно вкусно было.

[7.1.4.67]

taraŋači	***bii***	***sisa***	***patalalbani***
taraŋači	*bii*	*sisa*	*patala-l-bA-ni*
like.that	1SG.NOM	Japanese	girl-PL-ACC-3SG

dəpoočixəmbi	***pəətə***	***ulisəǰini.***
dəptu+boo(n)-či-xA(n)-bi	*pəətə*	*ulisə-ǰi-ni*
eat+CAUS-ITR-PRF.P-1SG	seal	meat-INS-3SG

こんな風に、私は日本のお嬢さんたちをアザラシ肉でもてなしたのでした。Так я японские девушик кормила нерпы мясом.

[7.1.4.68]

gə,	***ələt***	***taani,***	***ii?***
gə,	*ələt*	*taani*	*ii*
INTJ	enough	INFER	yes

はい、おしまいね。И всё хвачит ладно?



写真 7-7　三人でコケモモを集めた湿地（2010 年 10 月 9 日、筆者撮影）



写真 7-8　湿地に実るコケモモ：地衣類で覆われてスポンジ状にやわらかい地面の上に生っている直径 1〜1.2cm ほどの赤い実を拾い集めるように採取する（2010 年 10 月 9 日、筆者撮影）

7.1.5　回想録(5)：池上先生の思い出

本テキストは、2011 年 8 月 17 日、ロシア連邦サハリン州ワール村で、フェジャエワ I. Ja. から採録した。採録前の前日（16 日）、あらかじめ筆者から池上二良先生との思い出をウイルタ語で語っていただけるよう依頼し、考えを整理して原稿を用意してもらった。原稿をもとにした語りは、IC レコーダーを使った録音と、デジタルカメラでの録画を並行して記録した。録音時間は、3 分 00 秒だった（20110817_2MLG_FIJ&BEA.WAV）。

採録後に原稿を複写して音声記録と照合したが、原稿を見ずに即興で語られた部分や、読むときに変更した部分が多く、内容は必ずしも一致しない。本資料では、原稿ではなく、音声の記録を表記する。意訳は、語り手本人への聞き取りを参考に筆者が作成した。

[7.1.5.01]

geedara	***elena***	***alekseevna***	***bibikova***	***orokčini***	***bičči***
geedara	*[Elena]*	*[alekseevna]*	*[bibikova]*	*orok-či(n)-ni*	*bi+či(n)*
once	Elena	Alekseevna	Bibikova	take-PRF-3SG	COP+PRF.P

bii	***dukutaiwwee***	***geeda***	***narree.***
bii	*duku-tAi-wwee*	*geeda*	*nari+bA*
1SG.NOM	house-DIR-1SG	one	man+ACC

ある時、エレーナ・アレクセーヴナ・ビビコワが私の家に一人の人を連れてきたのだった。

[7.1.5.02]

dukutaiwwee	***iigəčči***	***tari***	***nari***	***uččini,***	***soroǰee!***
duku-tAi-wwee	*ii-kAčči*	*tari*	*nari*	*un-či(n)-ni*	*soroǰee*
house-DIR-1SG	enter-SUB.C	that	man	say-PRF.P-3SG	how.do.you.do

私の家に入って来るとその人は言った、「ソロジェー」（ウイルタ語で「こんにちは」）。

[7.1.5.03]

bii	***noottoini***	***itəgəčči***	***mərəččiwi,***	***xai***
bii	*noottoini*	*itə-kAčči*	*mərəči+ri-wi*	*xai*
1SG.NOM	3SG.DIR	see-SUB.C	think+IM.P-1SG	what
narigəndə	***tari?***			
nari=kA=ndA	*tari*			
man=WHQ=HS	that			

私は彼を見て思った、「何者だというのか、この人は？

[7.1.5.04]

uiltadairini,	***uiltaa***	***əčči***	***urrəə.***
uilta-dAi-ri-ni	*uilta+bA*	*ə+či(n)*	*urə+rA* [78]
Uilta-LNG-IM.P-3SG	Uilta+ACC	NEG+PRF.P	come.to.resemble+NIM

ウイルタ語で話すけど、ウイルタに似ていない」。

[7.1.5.05]

tari	***nari***	***biččini***	***dziro***	***ikegami.***
tari	*nari*	*bi+či(n)-ni*	[*dziro*]	[*ikegami*]
that	man	COP+PRF.P-3SG	Jiro	Ikegami

その人が、ジロー・イケガミだった。

[7.1.5.06]

taraŋači	***bii***	***baačixambi***	***čaa***	***narree.***
taraŋači	*bii*	*baači-xA(n)-bi*	*čaa*	*nari+bA*
like.that	1SG.NOM	meet-PRF.P-1SG	that	man+ACC

こうして私は彼と出会った。

[78] 池上（1997: 221）で *urə-*は「発育する」という意味の動詞語幹とされる。一方、今日の北方言では対格をとって「〜に似てゆく」を意味する。

[7.1.5.07]

tamačču	***buu***	***uiləluxəpu.***
tamačču	*buu*	*uilə-lu-xA(n)-pu*
from.there	1PL.NOM	work-INCH-PRF.P-1PL

それから、私たちは仕事（調査）を始めたのだった。

[7.1.5.08]

dziro	***ikegami***	***xasultaddaa***	***puličini***	***waalutai.***
dziro	*ikegami*	*xasu-ltA=ddAA*	*puli-či(n)-ni*	*waalu-tAi*
[Jiro]	[Ikegami]	how.much-MLT=EMPH	walk-PRF.P-3SG	Val-DIR

ジロー・イケガミは、何度もワール村へやって来た。

[7.1.5.09]

uiləxəni,	***sagǰi***	***uilta***	***əkkəsəlǰini.***
uilə-xA(n)-ni	*sagǰi*	*uilta*	*əkkəsəl-ǰi-ni*
work-PRF.P-3SG	aged	Uilta	women-INS-3SG

年とったウイルタの女性たちと仕事（調査）をした。

[7.1.5.10]

tari	***gisiktauda*** [79]	***mixeeva***	***marija***	***stepanovna,***	***oolganǰaa*** [80]
tari	*gisiktauda*	*[mixeeva]*	*[marija]*	*[stepanovna]*	*oolganǰaa*
that	Gisiktauda	Mixeeva	Marija	Stepanovna	Olganja

moja	***mama***	***semjonova***	***ol'ga***	***nikolaevna,***	***moja***	***tjotja***
[moja]	*[mama]*	*[semjonova]*	*[ol'ga]*	*[nikolaevna]*	*[moja]*	*[tjotja]*
my	mama	Semjonova	Ol'ga	Nikolaevna	my	aunt

semjonova	***anna***	***vasil'evna,***	***bibikova***	***elena***	***alekseevna***
[semjonova]	*[anna]*	*[vasil'evna]*	*[bibikova]*	*[Elena]*	*[alekseevna]*
Semjonova	Anna	Vasil'evna	Bibikova	Elena	Alekseevna

i	***bii.***
[i]	*bii*
and	1SG.NOM

それは、ギシクタウダ、―ミヘエワ　マリヤ　ステパーノヴナ、オールガンジャー、―私の母セミョーノワ　オリガ　ニコラエヴナ、私の叔母セミョーノワ　アンナ　ワシリエヴナ、ビビコワ　エレーナ　アレクセーヴナ、そして私だった。

[79] 故ミヘエワ M. S.（Mixeeva Marija S.）のウイルタ名。
[80] フェジャエワの母親である故セミョーノワ　オリガ　ニコラエヴナ（Semjonova Ol'ga N.）のウイルタ名。

[7.1.5.11]

taraŋači	***buu***	***čipaalinnee***	***oччipu***
taraŋači	*buu*	*čipaali-nnee*	*o+či(n)-pu*
like.that	1PL.NOM	altogether-PERS	become+PRF.P-1PL

informantami.

[informantami]

informants

こうして、私たちはみんなインフォーマントになった。

[7.1.5.12]

bii	***leenandoo***	***bəlәčixəpu***	***professoritəi,***
bii	*leena-ndoo*	*bəlәči-xA(n)-pu*	*professori-tAi* [81]
1SG.NOM	Lena-COM	help-PRF.P-1PL	professor-DIR

balabalda	***uilta***	***narisal***	***bičixxəəni***	***ɲuribuddooči.***
balabalda	*uilta*	*nari-sAl*	*bičixə+bA-ni*	*ɲuri-buddoo-či* [82]
quickly	Uilta	man-PL	letter+ACC-3SG	write-PURP-3PL

私とレーナ[83]は教授を手伝った、はやくウイルタの人々の書物[84]が書けるように。

[7.1.5.13]

tari	***professori***	***ǰiŋ***	***uliŋgaǰi***	***doolǰiččookki***	***biččini,***
tari	*professori*	*ǰiŋ*	*uliŋga-ǰi*	*doolǰi-či+bukki*	*bi+či(n)-ni*
that	professor	very	good-INS	hear-ITR+HBT	COP+PRF.P-3SG

xooni	***mamaril***	***ləədənǰiči,***	***təəluŋuččiči***	***təəluŋumbə,***
xooni	*mamaril*	*ləədən-ri-či*	*təəluŋuči+ri-či*	*təəluŋu(n)-bA*
how	old.women	speak-IM.P-3PL	tell.legend+IM.P-3PL	legend-ACC

saxurreeči,	***jaajjeeči.***
saxuri+ri-či	*jaaja+ri-či*
tell.story+IM.P-3PL	sing+IM.P-3PL

その教授は、ばあさんたちが会話したり、昔話を語ったり、おとぎ話をしたり、歌ったり

---

[81] 動詞の表わす動作の相手は、ウイルタ語では一般に対格-*bA* で表わされる。ここで方向格-*tAi* が用いられたのは、ロシア語の規範意識が影響したためと思われる。ロシア語では、動詞 dat' 「与える」の表わす動作の相手は与格で表わされる。ウイルタ語では、上述のようび授受動詞 *buu*-「与える」の表わす動作の相手は方向格-*tAi* で表わされる。こうしたことから、ロシア語とのバイリンガルである今日のウイルタ語話者は、ロシア語の与格がウイルタ語の方向格に対応するという感覚をもっているようである。結果として、フェジャエワにも、ロシア語の pomoch' 「手伝う」の表わす動作の相手は与格をとるので、ウイルタ語の動詞 *bəlәči*-「手伝う」の表わす動作の相手は（ロシア語の与格に相当する）方向格、という類推が働いたと考えられる。

[82] ここでは、動詞の目的形に動作主が三人称複数（原則として「彼ら」の意）であることを表わす語尾がついている。ロシア語における三人称複数の不定人称用法をウイルタ語に適用した結果であると思われる。

[83] ビビコワ E. A.の愛称。

[84] ウイルタ語文字教本（Ikegami et al. 2008）のことか。

するようすを、とても注意深く聞いていたものだった。

[7.1.5.14]

i	***gəgdəkə***	***pəskəukki***	***biччini,***	***tari***
[i]	*gəgdəkə*	*pəskə+bukki*	*bi+či(n)-ni*	*tari*
and	always	be.surprised+HBT	COP+PRF.P-3SG	that

mamaril	***jaajjeewači,***	***təəluŋuччiwəči,***
mamaril	*jaajja+ri-bA-či*	*təəluŋuči+ri-bA-či*
old.women	sing+IM.P-ACC-3PL	tell.legend+IM.P-ACC-3PL

kəsəǰǰiči [85]**.**

kəsə-ǰi?-či

language-INS?-3PL

そして、ばあさんたちが彼ら自身のことばで歌ったり語ったりすることに、絶えず驚嘆していたものだった。

[7.1.5.15]

təəli	***ǰiŋ***	***anu,***	***asarami***	***kəssəəči,***	***ǰiŋ***
təəli	*ǰiŋ*	*anu*	*asara-mi*	*kəsə+bA-či*	*ǰiŋ*
then	very	FIL	take.care-COOR.C	language+ACC-3PL	very

asarami	***ŋurrookkilil***	***biччiči.***
asara-mi	*ŋuri+bukki-lil*	*bi+či(n)-či*
take.care-COOR.C	write+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL

だからとても、そのあれ、慎重にことばを、とても慎重に記録したものだった。



写真 7-9　ワール村で調査をする（左から）池上、セミョーノワ A. V.、フェジャエワ I. Ja.（井上紘一撮影；池上 1993: 8 より転載）

[85] Ikegami（1956[2001]）によると、この文脈では再帰所有人称（複数）*kəsəǰǰeeri*（*kəsə-ǰǰeeri*；language-PEF.PL.INS「自分たちのことばで」）が期待される。この部分は、*kəsəǰǰi*（*kəsə-ǰǰi*；language-PEF.INS「自分のことばで」）および *kəsəǰiči*（*kəsə-ǰi-či*；language-INS-3PL「彼らのことばで」）との混用による誤りかと思われる。

[7.1.5.16]

tari	***professori***	***ikegamisan***	***biččini***	***ǰiŋ***	***uilələ!***
tari	*professori*	*[ikegami]-[san]*	*bi+či(n)-ni*	*ǰiŋ*	*uilələ* [86]
that	professor	Ikegami-san	COP+PRF.P-3SG	very	hardworking

その教授、イケガミさんはとても働き者だった。

[7.1.5.17]

xasultaddaa	***panumi***	***geeda***	***kəssəə***	***muŋnawukki***
xasu-ltA=ddAA	*panu-mi*	*geeda*	*kəsə+bA*	*muŋna(a)-bukki*
how.much-MLT=EMPH	ask-COOR.C	one	language+ACC	worry-HBT

biččini,	***mamarilba.***
bi+či(n)-ni	*mamaril-bA*
COP+PRF.P-3SG	old.women-ACC

何度も一つの単語について尋ねて、ばあさんたちを悩ませたものだ。

[7.1.5.18]

mamaril	***xaaliddaa***	***əwwookkil***	***biččі,***	***xaaliddaa***
mamaril	*xaali=ddAA*	*ə-bookki-l*	*bi+či(n)*	*xaali=ddAA*
old.women	when=EMPH	NEG-HBT-PL	COP+PRF.P	when=EMPH

əwwookkil	***tagdaa***	***biččiči.***
ə-bookki-l	*tagda+rA*	*bi+či(n)-či*
NEG-HBT-PL	get.angry+NIM	COP+PRF.P-3PL

ばあさんたちは一度もしなかった、腹を立てなかった。

[7.1.5.19]

professori	***ikegami***	***uiləmiddəə***	***ǰiŋ***
professori	*[ikegami]*	*uilə-mi=ddAA*	*ǰiŋ*
professor	Ikegami	work-COOR.C=EMPH	very

asarami	***uiləwukki***	***biččini,***	***məənəddəə***
asara-mi	*uilə-bukki*	*bi+či(n)-ni*	*məənə=ddAA*
take.care-COOR.C	work-HBT	COP+PRF.P-3SG	REF.NOM=EMPH

uliŋga	***nari.***
uliŋga	*nari*
good	man

イケガミ教授は、仕事の時も深い思いやりをもって働き、ご自身も良い人だった。

[86] 動詞語幹 *uilə-*「働く」に不明の要素*-lA* がついたものと分析することができる。同様の形式は今日の北方言で他にも *tuksala*（*tuksa-*「走る」＋*-lA*）「よく走る」、*dəptulə*（*dəptu-*「食べる」＋*-lA*）「よく食べる」、*jaajala*（*jaaja-*「歌う」＋*-lA*）「よく歌う」など生産的に用いられ、形容詞的に用いられる。*-lA* にどのような文法的な機能を認めるか、今後の検討を要する。

[7.1.5.20]

bii	***professorimbə***	***ikegamisaannoo***	***goroo***
bii	*professori(n)-bA*	*ikegamisaanu+bA*	*goroo*
1SG.NOM	professor-ACC	Ikegamisaanu[87]+ACC	for.a.long.time=EXC

doolliwi.

doon-li-wi

remember-FUT.P-1SG

私は教授を、イケガミさんを、いつまでも思い出すだろう。

［以上、7.1.5 は山田（2012a: 161-165）の内容を加筆・修正したものである］

7.1.6　回想録(6)：池上先生の思い出

本テキストは、2011 年 8 月 17 日、ロシア連邦サハリン州ワール村で、ビビコワ E. A.から採録した。採録方法は前節のテキストと同様で、フェジャエワの後に続き、原稿を読んでいただいた。ビビコワの語りの採録時間は、2 分 50 秒だった。

前節同様、原稿ではなく、音声の記録を表記する。意訳は、語り手本人への聞き取りを参考に筆者が作成した。

[7.1.6.01]

sorǒjee.

sorǒjee

how.do.you.do

こんにちは。

[7.1.6.02]

bii	***əsi***	***vspominajliwi***	***professori,***	**…**
bii	*əsi*	*[vspominaj]-li-wi*	*professori*	
1SG.NOM	now	remember-FUT.P-1SG	professor	
(doolliwi)		***doolliwi***	***professori***	
doon-li-wi		*doon-li-bi*	*professori*	
remember-FUT.P-1SG		remember-FUT.P-1SG	professor	

[87] ウイルタ語で男性の人名には、例えば *Amuljikaanu, Bakaanu, Səmməənu, Naruŋgeenu* などのように末尾が VV*nu* となるものがある。こうした傾向から、ロシア語名 Nikolaj をウイルタ語式に *Nikolaanu* と変化させる例もある（池上 1997: 137）。*ikegamisaanu* というかたちもまた、ウイルタ語の人名の形式から類推して変化させたものと思われる。なお、[7.1.5.20]ではさらに対格語尾*-bA* が融合して *ikegamisaannoo* というかたちで表される。

dziro ***ikegami.***

[dziro] *[ikegami]*

Jiro Ikegami

私はこれから教授について回想……、ジロー・イケガミ教授について回想します。

[7.1.6.03]

biččini	***geeda***	***miŋga***	***xuju***	***taŋgu***	***xujundoo***	***ilaa***
bi+či(n)-ni	*geeda*	*miŋga*	*xuju*	*taŋgu*	*xujundoo*	*ilaa*
COP+PRF.P-3SG	one	thousand	nine	hundred	ninety	three

anani.

ana-ni

year-3SG

1993 年のことだった。

[7.1.6.04]

mumboopə	***xəwəčixəči***	***xottotoi,***	***juzhnytai.***
mumboopə	*xəwəči-xA(n)-či*	*xotto-tAi*	*[juzhny]-tAi*
1PL.ACC	call-PRF.P-3PL	town-DIR	Yuzhno.Sakhalinsk-DIR

私たちは町へ、ユジノ・サハリンスクへ呼び出された。

[7.1.6.05]

buu	***tari***	***kitazima***	***ljuba,***	***minato***	***sirjuko,***
buu	*tari*	*[kitazima]*	*[ljuba]*	*[minato]*	*[sirjuko]*
1PL.NOM	that	Kitazima	Ljuba	Minato	Sirjuko

fedjaeva	***irina***	***jakovlevna,***	***i***	***biikkəə,***	***bibikova***
[fedjaeva]	*[irina]*	*[jakovlevna]*	*[i]*	*bii=kkəə*	*bibikova*
Fedjaeva	Irina	Jakovlevna	and	1SG.NOM=AND	Bibikova

elena.

elena

Elena

私たちというのは、キタジマ　リューバ、ミナト　シリュコ、フェジャエワ　イリーナ　ヤーコヴレヴナ、そして私ビビコワ　エレーナだ。

[7.1.6.06]

xooni	***bələčilipoo***	***əsipu***	***saara.***
xooni	*bələči-li-pu+kA*	*ə-si-pu*	*saa-rA*
how	help-FUT.P-1PL+WHQ	NEG-IM.P-1PL	know-NIM

私たちはどうやって手伝えばいいのか、わからない。

[7.1.6.07]

ǰiŋ	***meenǰipu.***
ǰiŋ	*meen-ri-pu*
very	be.constricted-IM.P-1PL

私たちは気おくれしてしまう。

[7.1.6.08]

kəssəəriləkə	***saaripu***	***čipaalinnee.***
kəsə+bAri=lAkA	*saa-ri-pu*	*čipaali-nnee*
language+REF.PL=TOP	know-IM.P-1PL	altogether-PERS

みんな自分たちの言葉ならわかる。

[7.1.6.09]

gə,	***baačixapu***	***ǰaŋgeeŋŋoori.***
gə	*baači-xA(n)-pu*	*ǰaŋgee*[88]*-ŋu+bAri*
INTJ	meet-PRF.P-1PL	official-AL+REF.PL

さて、私たちは先生と対面した。

[7.1.6.10]

əə,	***ǰiŋ***	***bərəmi***	***nari***	***maaŋissoo.***
əə	*ǰiŋ*	*bərəmi*	*nari*	*maaŋissoo*
INTJ	very	submissive	man	apparently

「あれれ、とても大人しい人らしいな」[と思った]。

[7.1.6.11]

nooni	***muttəi***	***unǰini,***	***əbuddoopu***	***ŋəəllə́ə.***
nooni	*muttəi*	*un-ri-ni*	*ə-buddoo-pu*	*ŋəələ+rA*
3SG.NOM	1PL.DIR	say-IM.P-3SG	NEG-PURP-1PL	fear+NIM

彼は私たちに言う、私たちが心配しないように。

[88] *ǰaŋgee* の語義について、南方言の辞書で「役人、警官、巡査」(池上 1997: 87)、「役人、争いを裁定する長老」(澗潟 1981: 57) とある。一方、北方言話者のフェジャエワが編集に関与した Ozolinja & Fedjaeva (2003: 49) では「1) 長、2) 主、3) 演者、4) (古語で) 役人」と記述されている。かつては一義的に「役人」を指す単語であったと考えられるが、今日では目上の指導者に対して用いるようである。ビビコワは池上先生のことを「私たちの *ǰaŋgee* だった」と言う。本稿の和訳では「先生」とした。なお、親しみを込めて呼ぶときには、日本語を真似て「センセイ」と言う (例：[7.1.5.25][7.1.5.29])。

[7.1.6.12]

nandəəkə	***uiləŋəttəli,***	***unǰini.***
nandəəkə	*uilə-ŋAttAli*[89]	*un-ri-ni*
slowly	work-IMP.1PL	say-IM.P-3SG

「ゆっくりと勉強しましょう」と言う。

[7.1.6.13]

təəli	***uilta***	***kəssəəni***	***muttəi***	***təəluŋučimi***
təəli	*uilta*	*kəsə+bA-ni*	*muttəi*	*təəluŋuči-mi*
then	Uilta	language+ACC-3SG	1PL.DIR	tell.legend-COOR.C

allauxani,	***xooni***	***kəssəə***	***nurripoo.***
allau-xA(n)-ni	*xooni*	*kəsə+bA*	*nuri*[90]*+ri-pu+kA*
teach-PRF.P-3SG	how	language+ACC	write+IM.P-1PL+WHQ

そこでウイルタのことばについて私たちに説明しながら、どうやってことばを書き表わすのか、教えてくれた。

[7.1.6.14]

xaimi	***taraŋači***	***nurilipoo.***
xai-mi	*taraŋači*	*nuri-li-pu+kA*
what-COOR.C	like.that	write-FUT.P-1PL+WHQ

どうして、そのように書くのか。



写真7-10　2000年、文字教本編集の打ち合わせをする（左から）池上先生とビビコワ（ビビコワ提供写真）

[89] ビビコワへの聴取にもとづく筆者の考察により、*-ŋAttAli* を一人称複数命令形「（私たちは）～しよう」とした。先行記述では Ikegami（1959 [2001: 37-38]）・池上（2001: 161）による南方言の形式*-ŋA-ttA* と類似するが、こちらは「かれはあとで～させろ」といった意味の三人称命令形（未来）であり、意味が相違する。例：*ŋənə-ŋə-ttə.*「かれはあとで行かせろ」（池上 2001: 161）

[90] フェジャエワは同じ動詞を *ɲuri-*と発音する。cf. [7.1.5.12][7.1.5.15]

[7.1.6.15]

xamačee	***biinee***	***uilta***	***kəsəni***	***doroni.***
xamačee	*bi+ri-ni+kA*	*uilta*	*kəsə-ni*	*doro-ni*
what.kind.of	COP+IM.P-3SG+WHQ	Uilta	language-3SG	order-3SG

ウイルタのことばのきまりとは、どのようなものか。

[7.1.6.17]

kəsəpu	***goi.***
kəsə-pu	*goi*
language-1PL	different

私たちの［使う］ことばが違うのだ。

[7.1.6.18]

nooni	***poonilduni***	***luča***	***kəsəǰini***
nooni	*poonilduni*	*luča*	*kəsə-ǰi-ni*
3SG.NOM	sometimes	Russian	language-INS-3SG

kəənǰini,	***čoočči***	***angličaanu***	***kəsəǰini***	***kəənǰini,***
kəən-ri-ni	*čoočči*	*angličaanu*	*kəsə-ǰi-ni*	*kəən-ri-ni*
talk-IM.P-3SG	after.that	English	language-INS-3SG	talk-IM.P-3SG

poonilduni	***uilta***	***kəsəǰini***	***kəənǰini,***	***tuksə***
poonilduni	*uilta*	*kəsə-ǰi-ni*	*kəən-ri-ni*	*tuksə*
sometimes	Uilta	language-INS-3SG	talk-IM.P-3SG	interpreter

biigini	***sisa***	***kəsəǰini***	***kəənǰini.***
bi+rA(g)i-ni	*sisa*	*kəsə-ǰi-ni*	*kəən-ri-ni*
COP+COND.C-3SG	Japanese	language-INS-3SG	talk-IM.P-3SG

彼は、ときにロシア語、英語、ときにウイルタ語、通訳がいるときは、日本語で話す。

[7.1.6.19]

buulәkə	***duu***	***kəssəə***	***saaripu,***	***luča***
buu=lAkA	*duu*	*kəsə+bA*	*saa-ri-pu*	*luča*
1PL.NOM=TOP	two	language+ACC	know-IM.P-1PL	Russian

kəssəəni,	***məənə***	***kəssəəri.***
kəsə+bA-ni	*məənə*	*kəsə+bAri*
language+ACC-3SG	REF.NOM	language+REF.PL

私たちは二つのことばを、ロシア語と自分たちのことば（ウイルタ語）を知っている。

[7.1.6.20]

muŋnaamari	***tačixapu.***
muŋnaa-mAri	*tači-xA(n)-pu*
worry-COOR.PL.C	learn-PRF.P-1PL

頭を悩ませながら、勉強した。

[7.1.6.21]

ǰaŋgeeŋupu	***əsiniddəə***	***paallee.***
ǰaŋgee-ŋu-pu	*ə-si-ni=ddAA*	*paali+rA*
official-AL-1PL	NEG-IM.P-3SG=EMPH	scold+NIM

私たちの先生は叱ったりしない。

[7.1.6.22]

nandəəkə	***tattuurini.***
nandəəkə	*tattuu-ri-ni*
slowly	teach-IM.P-3SG

ゆっくりと教えてくれる。

[7.1.6.23]

saawooččini	***buu***	***kəssəəppoo,***	***kəsəpu***
saa-boon-či(n)-ni	*buu*	*kəsə+bA-ppoo*	*kəsə-pu*
know-CAUS-PRF.P-3SG	1PL.NOM	language+ACC-1PL	language-1PL

doromboni	***saawooččini.***
doro(n)-bA-ni	*saa-boon-či(n)-ni*
order-ACC-3SG	know-CAUS-PRF.P-3SG

私たちのことばを、私たちのことばのきまりを知らしめてくれた。

[7.1.6.24]

čoočči	***bičixxəə***	***andusiduppoo,***	***ǰiŋ***	***ǰaa***	***biččini.***
čoočči	*bičixə+bA*	*andu-si-du-ppoo*	*ǰiŋ*	*ǰaa*	*bi+či(n)-ni*
after.that	letter+ACC	make-IM.P-DAT-1PL	very	easy	COP+PRF.P-3SG

その後、私たちが書物を作るとき、とても簡単だった。

[7.1.6.25]

ikegami	***sensei***	***ǰiŋ***	***aja***	***nari***	***biččini.***
[ikegami]	*[sensei]*	*ǰiŋ*	*aja*	*nari*	*bi+či(n)-ni*
Ikegami	teacher	very	good	man	COP+PRF.P-3SG

イケガミセンセイはとても良い人だった。

[7.1.6.26]

mərəni	***ǰiŋ***	***uliŋga.***
mərə-ni	*ǰiŋ*	*uliŋga*
mind-3SG	very	good

心がきれいだ。

[7.1.6.27]

ǰeesilbi	***ǰiŋ***	***asarami***	***biччini.***
ǰeesil-bi	*ǰiŋ*	*asara-mi*	*bi+či(n)-ni*
partners-REF	very	take.care-COOR.C	COP+PRF.P-3SG

自分の協力者たちに対し、深い思いやりをもっていた。

[7.1.6.28]

noomboni	***saagačči***	***buu***	***ərgəpu***	***ǰiŋ***
noomboni	*saa-kAčči*	*buu*	*ərgə-pu*	*ǰiŋ*
3SG.ACC	know-SUB.C	1PL.NOM	spirit-1PL	very

agǰeeni.
agda+ri-ni
please+IM.P-3SG

彼と知り合うことができて、私たちはとても幸せだ。

[7.1.6.29]

agdapsee	***ikegami***	***sensei.***
agdapsee	*[ikegami]*	*[sensei]*
thanks	Ikegami	teacher

ありがとう、イケガミセンセイ。

［以上、7.1.6 は山田（2012a: 165-170）の内容を加筆・修正したものである］

7.1.7　ヨードプの作り方

本節では、についての導入的な考察、および、今日「ヨードプ」を制作するビビコワ E. A. がその工程を説明するウイルタ語北方言のテキストを写真・文法注記とともに提示する。

「ヨードプ」とは、ウイルタ民族に伝わる一種の楽器「ヨードプ」（手に持ち振って音を立てる楽器、「振楽器」）である（池上1982: 82参考；**写真7-11**, **7-12**）。澗潟（1981）は次のように記述している。

> jōdopu(n) シャーマンの前踊りの者が両手に持って重ね打ちして調子をとる拍子具（杓子形長さ八寸ぐらい、末端が鼓状で両面を鮭の皮またはトナカイのなめし皮で張り、中に豆、米、小石を入れて音を出す、下部に木の柄がついている）（澗潟 1981: 100）



161. 手にもち振って音をたてる神事用具 joodopu　長さ27　　網走市立郷土博物館蔵品

写真 7-11
池上（1982: 82）より転載。なお、写真の資料は 2013 年現在、北海道立北方民族博物館に所蔵されている。



写真 7-12
ヨードプ（最長部の長さ 51.5cm；北海道立北方民族博物館所蔵資料 E797）

以下に掲げるテキストの採録方法は次のとおりである。まず2010年10月11～19日、ノグリキ町においてビビコワが「ヨードプ」を作る工程に立ち会い、参与観察を行った。本節に掲載する写真は、特に注記のない限り、この参与観察を協同した進藤冬華が撮影したものである。のち10月27日、「ヨードプ」の制作方法をウイルタ語で説明していただき、聞き書き（数単語ずつゆっくりと話してもらい、同時に速記する方法）で採録した。その後11月3日、内容・表記と訳付および写真との照応を確認し、12月3日、写真の説明を聞き書きした。

[7.1.7.01]

xooni	***joodopumba***	***andupuri.***
xooni	*joodopu(n)-bA*	*andu-puri*
how	joodopu-ACC	make-IPSN.IM.P

どのようにヨードプを作るか。

[7.1.7.02]

joodopumba	***andumi***	***xaidda***	***čipaali***	***naada:***
joodopu(n)-bA	*andu-mi*	*xai=ddA(A)*	*cipaali*	*naada*
joodopu-ACC	make-COOR.C	what=EMPH	altogether	necessary

pee	***mooni,***	***sundatta,***	***səurə,***	***suurakta,***	***kamdu.***
pee	*moo-ni*	*sundatta*	*səurə*	*suurakta*	*kamdu*
white.birch	bar-3SG	fish	silk.cloth	beads	glue[91]

ヨードプを作るにはいろんな物が必要です：シラカバの枝、魚、絹、大玉ビーズ、接着剤。

[7.1.7.03]

dooduni	***əksəuri***	***ǰollooddoo***	***girapsaaddaa***
doo-du-ni	*əksə+buri*	*ǰolo+bA=ddAA*	*girapsa+bA=ddAA*
inside-DAT-3SG	put+IPSN.IM.P	stone+ACC=EMPH	bone+ACC=EMPH

nučiikə	***nučiikə***	***abdumba.***
nučiikə	*nučiikə*	*abdu(n)-bA*
small	small	goods-ACC

その中には、石や骨など小さい物を入れます。

[7.1.7.04]

pee	***moowani***	***tubguri,***	***čuŋgulluri*** [92]***,***
pee	*moo-bA-ni*	*tubgu+buri*	*čuŋguli+buri*
white.birch	tree-ACC-3SG	drop+IPSN.IM.P	cut+IPSN.IM.P

xoowwuri,	***ərəpčinəddəuri.***
xoo-buri	*ərəpčinə-dA+buri*
chop-IPSN.IM.P	plane-VSF+IPSN.IM.P

シラカバの枝を切り取り、切断し、打ち割り、かんなをかけます。[93] → **写真**7-13, 7-14, 7-15, 7-16

[7.1.7.05]

čogočči	***naada***	***sognut'*** [94]	***lapamǰi***	***duu***
čogočči	*naada*	*[sognut']*	*lapa(n)-ǰi*	*duu*
after.that	necessary	bend	very.firmly-INS	two

[91] *kamdu* は、本来魚皮などから作る膠を意味する語だが、ここでは広い意味での接着剤を指す。

[92] [llu] > 口蓋化[llʲu]

[93] 筆者が観察した作業の際、かんな *ərəpčinə*（**写真** 7-14）が壊れていたため、ナイフで代用して削った（**写真** 7-15）。ナイフで削る場合は *geewwuri* という（**写真** 7-15）。

[94] 聞き取りの際、ウイルタ語の *mokčuula-* という動詞を思い出せなかったためロシア語で言った。後に**写真** 7-16 の説明をつける際に思い出して、*mokčuullauri* という語を用いた。

soowani	***ujjuri***	***xoldobuddooni.***
soo-bA-ni	*ui+buri*	*xoldo-buddoo-ni*
end-ACC-3SG	bind+IPSN.IM.P	dry-PURP-3SG

そして、曲げて、その両端をしっかりと結んで、乾かします。→ **写真**7-17, 7-18



写真 7-13

čuŋgulipula	***pee***
čuŋguli-pulA	*pee*
cut-IPSN.PRF.P	white.birch

mooni

moo-ni

bar-3SG

切断された白樺の枝



写真 7-14

xoowwuri

xoo-buri

chop-IPSN.IM.P

打ち割る



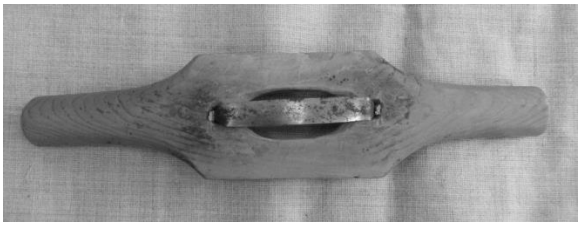


写真 7-15

ərəpčinə

ərəpčinə

plane

かんな

写真上：表面
写真下：裏面
（長さ約31cm：筆者撮影、ノグリキ町立郷土博物館所蔵資料）



写真 7-16

joodopuŋatu	***moowo***
joodopu-ŋAtu	*moo-bA*
joodopu-ADJ	bar-ACC

geewwuri

gee-buri

shave-IPSN.IM.P

ヨードプ用の棒を削る



写真 7-17

joodopuŋatu	***moowo***
joodopu(n)-ŋAtu	*moo-bA*
joodopu(n)-ADJ	bar-ACC

mokčuullauri

mokčuu-la+buri

bent-VSF+IPSN.IM.P

ヨードプ用の棒を曲げる

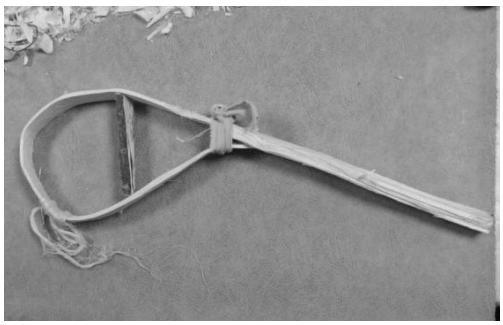


写真 7-18

joodopu	***səgərini***
joodopu	*səgəri-ni*
joodopu	skeleton-3SG

xolǰeeni

xoldo+ri-ni

dry+IM.P-3SG

ヨードプの骨組が乾く

[7.1.7.06]

xolǰeeduni	***sundattaǰi***	***oibonǰipu.***
xoldo+ri-du-ni	*sundatta-ǰi*	*oibon-ri-pu*
dry+IM.P-DAT-3SG	fish-INS	take.care.of-IM.P-1PL

乾かしている間に、魚の処理をします。[95]

[95] サケ・マス類、カジカ、カレイなど、皮がある程度厚く、ヨードプの片面を覆う程度の大きさのある魚を選ぶ。写真はギンザケ（kizhch）。鮮度が落ちると皮やうろこがはがれにくくなるので、新鮮なうちに手早く処理をする。テキストでは説明が省略されているが、魚から皮を剥いだ後、平面上に魚皮を広げ、ナイフの背などでうろこを擦りとる。

[7.1.7.07]

sundatta	***subguni***	***xəsiktəəni***	***xəsisipu.***
sundatta	*subgu-ni*	*xəsiktə+bA-ni*	*xəsi-si-pu*
fish	fish.skin-3SG	scale+ACC-3SG	remove.scales.from.fish-IM.P-1PL

魚皮のうろこを取り除きます。

[7.1.7.08]

xəsigəččeeri,	***annooni,***	***ǰoččooni***
xəsi-kAččeeri	*anu+bA-ni*	*ǰoččo+bA-ni*
remove.scales.from.fish-SUB.PL.C	FIL+ACC-3SG	fat+ACC-3SG

xəərripu.
xəəri+ri-pu
scrape+IM.P-1PL

うろこを取り除いたら、えーとあれ、脂肪を擦り取ります。

[7.1.7.09]

muutəi	***ulagaččeeri***	***silčipu.***
muu-tAi	*ula-kAččeeri*	*siltu+ri-pu*
water-DIR	soak-SUB.PL.C	wash+IM.P-1PL

水に浸した後、洗います。

[7.1.7.10]

ulleepu	***meelalu***	***muutəi.***
ula+ri-pu	*meela-lu*	*muu-tAi*
soak+IM.P-1PL	soap-PROP	water-DIR

石鹸水に浸します。

[7.1.7.11]

siltugaačči	***siltugaačči,***	***ulleepu***	***dausulu***	***muutəi.***
siltu-kA[A]čči	*siltu-kA[A]čči*	*ula+ri-pu*	*dausu-lu*	*muu-tAi*
wash-SUB.C	wash-SUB.C	soak+IM.P-1PL	salt-PROP	water-DIR

よく洗ってから、塩水に浸します。

[7.1.7.12]

xərəə	***xərəə***	***čadu***	***biini***	***tari***	***subgu.***
xərəə	*xərəə*	*čadu*	*bi+ri-ni*	*tari*	*subgu*
a.little	a.little	that.DAT	COP+IM.P-3SG	that	fish.skin

少しだけそのまま置きます。

[7.1.7.13]

čaŋŋoori	***sipirripu,***	***joodopuŋŋoori***
ča-ŋu+bAri	*sipiri+ri-pu*	*joodopu(n)-ŋu+bAri*
that-AL+REF.PL	wring.out+IM.P-1PL	joodopu(n)-AL+REF.PL

səgərikkeeni	***tulleepu***	***əwəsəi***	***tawasai***	***toonimari.***
səgəri-kkee-ni	*tulə+ri-pu*	*əwəsəi*	*tawasai*	*tooni-mAri*
skeleton-PRL-3SG	gill+IM.P-1PL	this.DIR	that.DIR	pull-COOR.PL.C

それをしぼり、（皮を）あちこち引っ張りながら骨組に取り付けます。→ 写真7-19



写真7-19

sundatta	***subgooni***	***joodopu***
sundatta	*subgu+bA-ni*	*joodopu(n)*
fish	skin+ACC-3SG	joodopu

səgərikkeeni	***tullәuri***
səgəri-kkee-ni	*tulə+buri*
skeleton-PRL-3SG	gill+IPSN.IM.P

魚皮をヨードプの骨組に取り付ける

[7.1.7.14]

məənə	***kamduǰi***	***lip***	***dakseeni***	***mootoi***
məənə	*kamdu(n)?-ǰi*	*lip*	*daksa+ri-ni*	*moo-tAi*
REF.NOM	glue-INS	exactly	stick.to+IM.P-3SG	bar-DIR

tari	***subgu.***
tari	*subgu*
that	fish.skin

魚皮は、それ自体の接着剤でぴったりと棒に貼り付きます。

[7.1.7.15]

əwweepəni	***tawweepani***	***daksaukkačči***	***xolǰipu.***
əwwee+bA-ni	*tawwee-bA-ni*	*daksa+boon-kA(A)čči*	*xolǰi+ri-pu*
here+ACC-3SG	there-ACC-3SG	glue+CAUS-SUB.C	dry+IM.P-1PL

両面を張り付けてから[96]、乾かします。

[96] 片面ずつ貼り付け、枠からはみ出す部分はハサミで切り取る。

[7.1.7.16]

xoldoutannee	***irgaa***	***andusipu***
xoldo-kutA-nnee	*irga+bA*	*andu-si-pu*
dry-PRF.COND.C-3SG	pattern+ACC	make-IM.P-1PL

dəwəmi.

dəwə-mi

cut.pattern.for.applique-COOR.C

それが乾いたら、縫い付け飾りの模様を作ります。→ **写真**7-20



写真 7-20

saipula	***irga***
sai-pulA	*irga*
draw-IPSN.PRF.P	pattern

描かれた模様（模様の下絵）[97]

[7.1.7.17]

čaŋŋoori	***kamduǰi***	***daksaunǰipu.***
ča-ŋu+bAri	*kamdu-ǰi*	*daksa+boon-ri-pu*
that-AL+REF.PL	glue-INS	glue+CAUS-IM.P-1PL

それを接着剤で貼り付けます。 → **写真**7-21



写真 7-21

irgaa	***kamduǰi***
irga+bA	*kamdu(n)?-ǰi*
pattern+ACC	glue-INS

daksaumburi

daksa+boon-buri

glue+CAUS-IPSN.IM.P

模様を接着剤で貼り付ける

[97] この後、小さなハサミで下絵に沿って模様を切り取り、[7.1.7.17]ないし**写真** 7-21 の工程に進む。

[7.1.7.18]

čogočči	***xolǰičči̯pu.***
čogočči	*xolǰi-či+ri-pu*
after.that	dry-ITR+IM.P-1PL

そして、よく乾かします。

[7.1.7.19]

joodopuŋŋoori	***dootaini***	***gijǰeepu***	***ǰoloŋŋoori,***
joodopu(n)-ŋu+bAri	*doo-tAi-ni*	*gida+ri-pu*	*ǰolo-ŋu+bAri*
joodopu-AL+REF.PL	inside-DIR-3SG	pierce+IM.P-1PL	stone-AL+REF.PL

girapsaŋŋoori.

girapsa-ŋu+bAri

bone-AL+REF.PL

ヨードプの中に、石や骨を入れます。→ **写真**7-22, 7-23

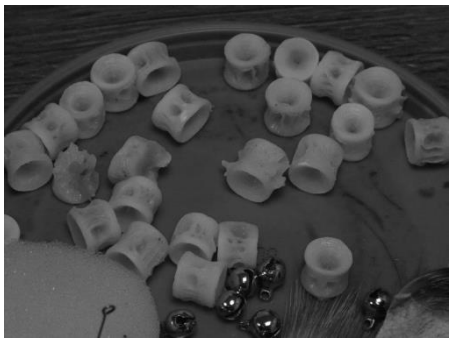


写真 7-22

nalduma	***niriktaani***
nalduma	*nirikta+bA-ni*
taimen	vertebra+ACC-3SG

əksəuri	***joodoputai***
əksə+buri	*joodopu(n)?-tAi*
lay+IPSN.IM.P	joodopu-DIR

イトウの椎骨をヨードプに入れる[98]



写真 7-23

joodopu	***dootaini***
joodopu(n)	*doo-tAi-ni*
joodopu	inside-DIR-3SG
giddauri	***girapsaa,***
gida+buri	*girapsa+bA*
spear+IPSN.IM.P	bone+ACC

ǰolloo

ǰolo+bA

stone+ACC

ヨードプの中に骨や石を挿しこむ

[98] 観察時の制作ではイトウの椎骨を用いたが、ほかに小石、豆、あるいは**写真** 7-22 の写真下に見えるような市販の鈴を入れることもある。

[7.1.7.20]

čogočči	***kamduǰǰipu***	***saŋŋaani.***
čogočči	*kamdu-du+ri-pu*	*saŋa+bA-ni*
after.that	glue-REV+IM.P-1PL	hole+ACC-3SG

そして、穴をくっつけてふさぎます。[99]

[7.1.7.21]

xoldoutannee	***səurə***	***poowani***	***dapagačči,***
xoldo-kutA-nnee	*səurə*	*poo-bA-ni*	*dapa-kAčči*
dry-PRF.COND.C-3SG	silk.cloth	piece-ACC-3SG	catch-SUB.C
daputakkuddooni	***ulpipu.***		
daputakku-ddoo-ni	*ulpi+ri-pu*		
handle-DSG-3SG	sew+IM.P-1PL		

乾いたら、絹の切れを取り、柄として縫います。→ **写真**7-24

[7.1.7.22]

čogočči	***səurəmə***	***leentəǰi***	***kataraččipu.***
čogočči	*səurə-mA*	*leentə-ǰi*	*katara-či+ri-pu*
after.that	silk.cloth-ADJ	ribbon-INS	bind-ITR+IM.P-1PL

そして、絹のリボンを結びます。



写真 7-24

daputakkuddooni

daputakku-ddoo-ni

handle-DSG-3SG

(siiddooni)	***ulpuri***
sii-ddoo-ni	*ulpi+buri*
handle-DSG-3SG	sew+IPSN.IM.P

柄として縫う

[7.1.7.23]

tari	***leentə***	***sookkeeni***	***suuraktaa***	***tulleepu.***
tari	*leentə*	*soo-kkee-ni*	*suurakta+bA*	*tulə+ri-pu*
that	ribbon	end-PRL-3SG	beads+ACC	gill+IM.P-1PL

そのリボンの端に大玉ビーズを付けます。

[99] この工程では、魚皮がすでに乾いていて粘着性がない。そのため[7.1.7.14]と異なり、市販の接着剤で穴をふさぐ。

[7.1.7.24]

joodopuŋupu,	***gəə,***	***andupula.***
joodopu(n)-ŋu-pu	*gəə*	*andu-pulA*
joodopu-AL-1PL	INTJ	make-IPSN.PRF.P

私たちのヨードプが、ほら、できた。→ **写真**7-25



写真 7-25

joodopuŋupu	***andupula.***
joodopu(n)-ŋu-pu	*andu-pulA*
joodopu-AL-1PL	make-IPSN.PRF.P

私たちのヨードプができた。

［以上、7.1.7 は山田（2011a）の一部を加筆・修正したものである］

7.1.8　スルクタのつくりかた(1)

本テキストは、2010 年 10 月 28 日、ロシア連邦サハリン州ワール村にて、フェジャエワ I. Ja.から同時聞き書き（数単語ずつゆっくりと話してもらい、語り手の目の前で同時に書きとる方法）で採録した。その後、書き出したテキストを語り手と最初から確認・修正しながら、逐語的なロシア語訳をつけた。一連の作業は IC レコーダーで録音しながら行った。録音時間は合計で約 34 分であった（20101028_3DIC_FIJ.MP3, 20101028_4DIC_FIJ.MP3）。

テキストの題材「スルクタ *sulukta*」は、魚の身を細かくして乾燥させた保存食を表わすウイルタ語名である。この語について、本稿テキストの語り手は「魚の粉」（*Rus.* ryb'ja muka）の意であると説明する。

既存の辞書のうち、澗潟（1981）および池上（1997）では「スルクタ」に該当する語彙が載っていない。一方、Ozolinja（2001: 320）, Ozolinja & Fedjaeva（2003: 151）は *sulikta* ~ *sulukta*（表記は本稿に合わせて改変）という語を載せている。

> *sulikta* ~ *sulukta* 1) 干し魚から作る粉；порса［原文ママ］; 2) 魚の粉から、あるいは細かくした干し魚と米飯から作る料理の名称（Ozolinja & Fedjaeva 2003: 151；Ozolinja 2001: 320 もほぼ同様）

ただし、本稿テキストでは、語り手両名とも干し魚ではなく生の魚を茹でて作っている。

その点で Ozolinja（2001）, Ozolinja & Fedjaeva（2003）の辞書的記述と本稿テキストとの間で若干の相違がみられる。

また、Roon（1996: 57）は、ウイルタの伝統における魚の加工について、「女たちは魚の身をほぐして日干しし、魚の粉を作った」と記述している。ウイルタ語での名称は記述されていないが、この「魚の粉」も本稿でいう「スルクタ」に該当すると考えられる。

[7.1.8.01]

suluktaa	***andupulas***	***undatta***	***(ogoro,***	***dawa)***
sulukta+bA	*andu-pulA*	*sundatta*	*ogoro*	*dawa*
sulukta+ACC	make-IPSN.PRF.P	fish	trout	salmon

xoltoǰini.

xolto-ǰi-ni

fillet-INS-3SG

「スルクタ」は魚の肉（マス、サケ）で作る。“Сулукта” делают из рыбьего мяса (горбуши, кеты).

[7.1.8.02]

gaǰisi	***iiməu***	***sundattaa.***
ga-ri-si	*iiməu*	*sundatta+bA*
take-IM.P-2SG	fresh	fish+ACC

新鮮な魚を選ぶ。Берёшь свежую рыбу.

[7.1.8.03]

təlǰeesi	***bokkonduni***	***biiwə***
təldə+ri-si	*bokko(n)-du-ni*	*bi+ri-bA*
take.out.the.insides.of.fish+IM.P-2SG	belly-DAT-3SG	COP+IM.P-ACC

siluktalbani,	***puxilbəni,***	***paakalbani,***
silukta-l-bA-ni	*puxi-l-bA-ni*	*paaka-l-bA-ni*
intestine-PL-ACC-3SG	stomach-PL-ACC-3SG	liver-PL-ACC-3SG
meewalbani,	***xairilbani***	***aččisi.***
meewa-l-bA-ni	*xairi-l-bA-ni*	*atu+ri-si*
heart-PL-ACC-3SG	roe-PL-ACC-3SG	take.off+IM.P-2SG

（魚の）腹の中にある腸、胃、レバー、心臓、イクラを取り除く。Разделываешь рыбу все внутринности что есть в животе, кишки, печень, сердце, икры убираешь.

[7.1.8.04]

məənə	***sundattaa***	***ələsisi,***	***čoočči***
məənə	*sundatta+bA*	*ələ-si-si*	*čoočči*
REF.NOM	fish+ACC	boil-IM.P-2SG	after.that

ɵlɵpissəə	***abgummisi***	***sundattaa.***
ɵlɵ-pissAA	*abgumi+ri-si*	*sundatta+bA*
boil-PRF.COND.PL.C	pull.out+IM.P-2SG	fish+ACC

魚を茹でる、茹でたら魚を取りだす。Рыбу варишь, потом сварив вытаскиваешь рыбу.

[7.1.8.05]

subgooni	***aččisi,***	***čoočči***	***ča***
subgu+bA-ni	*atu+ri-si*	*čoočči* [100]	*ča(a)*
fish.skin+ACC-3SG	take.off+IM.P-2SG	after.that	that

xoltooni	***aččisi***	***girapsaduni.***
xolto+bA-ni	*atu+ri-si*	*girapsa-du(u)-ni*
fillet+ACC-3SG	take.off+IM.P-2SG	bone-ABL-3SG

皮を取る、そしてその身を骨から取り外す。Кожу снимаешь, потом это мясо отделаешь от кости.

[7.1.8.06]

xoltoo	***geeda***	***ŋaalabi***	***panaanduni***	***əkseesi,***
xolto+bA	*geeda*	*ŋaala-bi*	*panaa(n)-du-ni*	*əksə+ri-si*
fillet+ACC	one	hand-REF	palm-DAT-3SG	put+IM.P-2SG

goi	***ŋaalabi***	***panaanǰini***	***sipirinǰisi***
goi	*ŋaala-bi*	*panaa(n)-ǰi-ni*	*sipirin-ri-si*
another	hand-REF	palm-INS-3SG	wring.out-IM.P-2SG

muuwəni,	***uliŋgaǰi***	***sipirinǰisi.***
muu+bA-ni	*uliŋga-ǰi*	*sipirin-ri-si*
water+ACC-3SG	good-INS	wring.out-IM.P-2SG

身を一方の手のひらに置く、他方の手のひらで水分をしぼりだす、よくしぼる。Мясо на одну ладошку ложишь другой рукой ладошки выжимаешь, воду хорошо выжимаешь.

[7.1.8.07]

naadu	***əkseesi***	***gəəgdə***	***bussoo,***	***busudu***
naa-du	*əksə+ri-si*	*gəəgdə*	*busu+bA*	*busu-du*
land-DAT	put+IM.P-2SG	clean	cloth+ACC	cloth-DAT

xoltoo	***panaanǰi***	***xərəlimi***	***pəpkisi.***
xolto+bA	*panaa(n)-ǰi*	*xərəli-mi*	*pəpku+ri-si*
fillet+ACC	palm-INS	twist-COOR.C	crush+IM.P-2SG

床にきれいな布を置く、布の上で手のひらをまわしながら魚の身を細かくする。На землю

[100] この語には人によって *čogočči* [ʧɔʁɔtʧi] ~ *čowočči* [ʧɔwɔtʧi] ~ *čoočči* [ʧɔːtʧi]の間で音的な揺れが見られる。フェジャエワは *čoočči*、後述のビビコワは *čogočči* または *čowočči* と発音する。本稿では、それぞれの話し手の発音にもとづいて表記する。

ложишь чистую тряпку, по тряпке это рыбье мясо ладошками крутя измельчаешь.

[7.1.8.08]

panaanǰi	***əwəsəi***	***tawasai***	***əksəččisi.***
panaa(n)-ǰi	*əwəsəi*	*tawasai*	*əksə-či+ri-si*
palm-INS	this.DIR	that.DIR	put-ITR+IM.P-2SG

手のひらであちこちへばらまく。Ладошками туда сюда раскладоваешь.

[7.1.8.09]

taraŋači	***xasultaddaa***	***andusisi***	***xoldodolooni***
taraŋači	*xasu-ltA=ddAA*	*andu-si-si*	*xoldo-dAlAA-ni*
like.that	how.much-MLT=EMPH	make-IM.P-2SG	dry-TERM.C-3SG

sulukta.

sulukta

sulukta

そのように何度か繰り返す、スルクタが乾くまで。Так несколько раз повторяешь пока не высохнет рыбья мука “сулукта”.

[7.1.8.10]

ča	***suluktaa***	***əksəuri***	***ɵləpulə***	***lalatai.***
ča(a)	*sulukta+bA*	*əksə+buri*	*ɵlə-pulA*	*lala-tAi*
that	sulukta+ACC	put+IPSN.IM.P	boil-IPSN.PRF.P	porridge-DIR

そのスルクタをおかゆに載せる。Эту рыбью муку перемешвают с варённой кашей.

[7.1.8.11]

čadu	***əksəuri***	***arimba,***	***čoočči***	***suulluri .***
čadu	*əksə+buri*	*ari(n)-bA*	*čoočči*	*suuli+buri*
that.DAT	put+IPSN.IM.P	butter-ACC	after.that	mix+IPSN.IM.P

そこにバターをのせ、かき混ぜる。Туда ложат масло и перемешают.

[7.1.8.12]

ǰiŋ	***aptauli***	***dəppi.***
ǰiŋ	*aptauli*	*dəppi*
very	delicious	food

とても美味しいごちそう。Очень вкусная еда.

［以上、7.1.8 は山田（2011c: 220-222）の一部を加筆・修正したものである］

7.1.9　スルクタのつくりかた(2)

本テキストの採録に先立ち、2010 年 10 月 17 日ノグリキにて、ビビコワ E. A.が「スルクタ」を作る現場を観察した。その翌日（18 日）、ビビコワに「スルクタ」の作り方を原稿に

書いていただき、原稿を読み上げてもらうところを録音した。録音時間は、1 分 37 秒であった（20101018_1MLG_BEA.WAV）。原稿にはロシア語の逐語訳も書いてもらった。その後、原稿と録音データを確認しながら表記・分析を加えた。

[7.1.9.01]

sulukta	***tari***	***pəpkupulə***	***xoldoxo***	***sundatta***	***xoltoni.***
sulukta	*tari*	*pəpku-pulA*	*xoldo-xA(n)*	*sundatta*	*xolto-ni*
sulukta	that	crush-IPSN.PRF.P	dry-PRF.P	fish	fillet-3SG

スルクタ、それは細かくして乾かした魚の身のこと。“Сулукта” — это крошенное высохшее рыбы филе.

[7.1.9.02]

xamačeedda	***sundattaǰi***	***andupuri.***
xamačee=ddA(A)	*sundatta-ǰi*	*andu-puri*
what.kind.of=EMPH	fish-INS	make-IPSN.IM.P

どんな魚からでも作れる。Хоть из какой рыбы можно делать.

[7.1.9.03]

dawaǰi,	***ogoroǰi,***	***naldumaǰi***	***uliŋga.***
dawa-ǰi	*ogoro-ǰi*	*nalduma-ǰi*	*uliŋga*
salmon-INS	trout-INS	taimen-INS	good

サケ、マス、イトウなどで作ると良い。Из кеты, горбуши, тайменя хорошо.

[7.1.9.04]

sundatta	***subgooni***	***atturi,***	***čowočči***
sundatta	*subgu+bA-ni*	*atu+buri*	*čowočči*
fish	fish.skin+ACC-3SG	take.off+IPSN.IM.P	after.that
maurree	***andubuǰǰi***	***miinəpuri.***	
mauri+bA	*andu-buǰǰi*	*miinə-puri*	
dried.fish+ACC	make-PURP.REF.SG	cut-IPSN.IM.P	

魚皮を取り除いて、その後干し魚を作るように切る。Рыбью кожу надо снять, потом чтобы юколу сделать, надо резать.

[7.1.9.05]

maurree	***xoldobuddooni***	***lokkouri.***
mauri+bA	*xoldo-buddoo-ni*	*loo+buri*
dried.fish+ACC	dry-PURP-3SG	hang+IPSN.IM.P

干し魚を乾かすために、掛けておく。Юколу надо повесить, чтобы высохла.

[7.1.9.06]

xoltolu	***səgərree***	***kaltaligaaččі***	***ələpuri.***
xolto-lu	*səgəri+bA*	*kaltali-kA(A)čči*	*ələ-puri*
fillet-PROP	skelton+ACC	split-SUB.C	boil-IPSN.IM.P

魚の身のついた骨を切り分け、煮る。C филе скелет разделив на части, надо сварить.

[7.1.9.07]

xuruutəinee[101]	***xaagburi,***	***uumboomburi,***
?xuru-kutA-inee?	*xaak-buri*	*uun-boon-buri*
?ripen-PRF.COND.C-3SG	unload-IPSN.IM.P	?melt-CAUS-IPSN.IM.P

gičuuli [102]	***opoomburi.***
gičuuli	*o-poon-buri*
cold	become-CAUS-IPSN.IM.P

煮えたら、火からおろして、冷まして、冷たく［常温に］する。Как сварится надо снять, надо остудить, чтобы холодном стать.

[7.1.9.08]

čowočči	***xoltooni***	***xoltoni***	***xoltoni***	***səgəriduni***
čowočči	*xolto+bA-ni*	*xolto-ni*	*xolto-ni*	*səgəri-du(u)-ni*
after.that	fillet+ACC-3SG	fillet-3SG	fillet-3SG	skeleton-ABL-3SG

atuččuri,	***atučigačči***	***sipirruuri,***
atu-či+buri	*atu-či-kA(A)čči*	*sipiri+buri*
take.off-ITR+IPSN.IM.P	take.off-ITR-SUB.C	wring.out+IPSN.IM.P

muulu	***anaa***	***opoomburi.***
muu-lu	*anaa*	*o-poon-buri*
water-PROP	no	become-CAUS-IPSN.IM.P

そして、骨から身を取り外し、取り外してからしぼって、水分をなくならせる。Потом филе от скелета отделям,отделив выжимаем чтобы без воды стала.

---

[101] Ikegami（1959 [2001: 28, 30, 59]）のパラダイムにもとづけば?*xuruutənnee*、Petrova（1967: 117-118）のパラダイムにもとづけば?*xuruɣutəni* あるいは?x*uruɣutənee* と推定されるところだが、そのどれにも当てはまらない。cf. [7.1.9.11]

[102] 同様の意味「冷たい」で、澗潟（1981: 67）・池上（1997: 69）は *giččuuli*、Ozolinja（2001: 62）、Ozolinja & Fedjaeva（2003: 33）は *gitčuli* ~ *gičuli* と記述している。



写真7-26
[7.1.9.08]で魚の身を取り外してしぼった後の状態（写真提供：進藤冬華）

[7.1.9.09]

čowočči	***bussoo***	***aligačči***	***čala***
čowočči	*busu+bA*	*ali-kA(A)čči*	*čala*
after.that	cloth+ACC	put.under-SUB.C	that.LOC
pəpkuri,	***nəmdəǰi***	***əksəčimi.***	
pəpku+buri	*nəmdə-ǰi*	*əksə-či-mi*	
crush+IPSN.IM.P	thin-INS	put-ITR-COOR.C	

そして布を敷いて、そこで薄く広げながら細かくする。Потом ткать растелив туда надо покрошить тонко разложив.

[7.1.9.10]

suunə	***suunneejini***	***suunnəini,***	***xədu***	
suunə	*###*	*suunə+rAi-ni*	*xədu*	
sun	###	shine+IM.COND.C-3SG	wind	
xədundəini,		***kusalǰi***	***xolǰeeni***	***tari***	***xolto.***
xədun-rAi-ni		*kusal-ǰi*	*xoldo+ri-ni*	*tari*	*xolto*
blow-IM.COND.C-3SG		quick-INS	dry+IM.P-3SG	that	fillet

日が照っていて、風が吹いていると、魚の身は早く乾く。Солнце когда светит, ветер когда дует, быстро сохнет это филе.



写真 7-27
[7.1.9.10]で、魚の身を乾かしている状態。(適当な布が見つからなかったため、日本の新聞紙で代用した。)(写真提供：進藤冬華)

[7.1.9.11]

xoldoutannee	***tari***	***sulukta***	***osini.***
xoldo-kutA-nnee	*tari*	*sulukta*	*o-si-ni*
dry-PRF.COND.C-3SG	that	sulukta	become-IM.P-3SG

乾いたらそれがスルクタになる。Как высохнет это “сулукта” становиться.

[7.1.9.12]

puutaattai	***əksəuri.***
puutaa(n)-tAi	*əksə+buri*
sack-DIR	put+IPSN.IM.P

布袋へ入れる。В мешочек надо положить.

[7.1.9.13]

tari	***uliŋga***	***xuisə***	***purəkki***	***pulisi***	***narisaltai.***
tari	*uliŋga*	*xuisə*	*purə(n)-kki*	*puli-si*	*nari-sAl-tAi*
that	good	rations	forest-PRL	walk-IM.P	person-PL-DIR

これはやまを歩く人たちに良い携帯食だ。Это хороший тормозок по тайге езждящим людям.

［以上、7.1.9 は山田（2011c: 222-226）の一部に加筆・修正したものである］

7.2 会話

7.2.1 昔の暮らし

2010 年 11 月 25 日にロシア連邦サハリン州ワール村にて、フェジャエワ I. Ja.とコーヌソワ L. N.より採録した。両氏にはとくにテーマを指定せず、即興で自由に会話をしてもらった。録音時間は約 26 分間だが、以下はそのうち録音開始後 1 分 30 秒から 8 分 13 秒まで（6 分 43 秒間）の会話のみを抜粋して表記・分析したものである（20101125_5DLG_KLN&FIJ.WAV）。表記と訳付には、フェジャエワの協力を得た。

発話者の替わる文の例文番号に、発話者を表わす略号を付す。F:はフェジャエワ、K:はコ

ーヌソワ、Y:は山田の発話である（山田の発話は[7.2.1.86]のみ）。

話し手たちは自由に話を展開するので、急に話題が変わったり、相手との関係で自明な情報は省略されたりする。また、文法的には説明しがたい破格の文が目立つ。そのため、客観的に見ると内容が不明瞭な部分が多い。しかし、会話特有の文句（あいづち、聞き返しほか）など、一人語りや文芸のテキストには見られない語用論的に貴重な情報が含まれている。

本テキストの目次：

[7.2.1.01]〜[7.2.1.15]　食べ物の分配とエンネウリ（禁忌）
[7.2.1.16]〜[7.2.1.33]　昔移り住んだ土地のいろいろ
[7.2.1.34]〜[7.2.1.44]　ニヴフの人たちがアザラシ肉をくれた
[7.2.1.45]〜[7.2.1.81]　竪穴住居での暮らし
[7.2.1.82]〜[7.2.1.96]　エウェンキー語の会話について



写真 7-28
左からフェジャエワとコーヌソワ（2011 年 8 月 17 日ワール村フェジャエワの自宅前にて、筆者撮影）

[7.2.1.01]　F:

goropčinnee	***ulaaba***	**…**	***sirombo***	***waagaččeeri,***
goropči-nnee	*ulaa-bA*		*siro(n)-bA*	*waa-kAččeeri*
old-PERS	reindeer-ACC		wild.reindeer-ACC	kill-SUB.PL.C

borrookkilil	***biččiči,***	***ii?***
bori+bookki-lil	*bi+či(n)-či*	*ii*
distribute+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL	yes

昔、トナカイ…野生のトナカイを獲ったら、皆で分け合ったわね。Старое време оленя дикого убив, делили.

[7.2.1.02] K:

konechno	***tөjjөukkilil***	***tөjjөukkil***	***biччiči***
[konechno]	*tөjө+bukki-lil?*	*tөjө+bukki-l*	*bi+či(n)-či*
of.course	entertain+HBT-PL?	entertain+HBT-PL	COP+PRF-3PL

məənbəri.

məənbəri [103]

REF.PL

もちろん、昔はいつも互いに自分の物を分け合ったものよ。Конечно старое време угошали друг друга.

[7.2.1.03]

a	***əsi***	***xai***	***ŋuiddəə***	***xaiwaddaa***	***dazhe***	***sundattaa***
[a]	*əsi*	*xai*	*ŋui=ddAA*	*xai-bA=ddAA*	*[dazhe]*	*sundatta+bA*
and	now	what	who=EMPH	what-ACC=EMPH	even	fish+ACC

waariči,	***geedamba***	***nučuukə***	***kusok***	***əsini***	***buurə.***
waa-ri-či	*geeda(n)-bA*	*nučuukə*	*[kusok]*	*ə-si-ni*	*buu-rA*
kill-IM.P-3PL	one-ACC	small	piece	NEG-IM.P-3SG	give-NIM

今時は誰も何も、魚を獲っても、一つも小さい一切れさえも人にあげないのに。А сейчас никто никому не дают не рыбы даже меленького кусочка.

[7.2.1.04] F:

təəliləkə	***uliŋgal***	***biччiči***	***əmbee***	***bajaǰi***	***ii?***
təəli=lAkA	*uliŋga-l*	*bi+či(n)-či*	*əmbee*	*baja-ǰi*	*ii*
then=TOP	good-PL	COP+PRF-3PL	of.course	rich-INS	yes

あの頃は良かった、もちろん豊かだったよね？Тогда то конечно они хорошо жили, богато.

[7.2.1.05] K:

ii.

ii

yes

ええ。Да.

[7.2.1.06] F:

dəppee	***xamačaaddaa***	***čipaal***	***dəppi***	***biччini,***
dəppi+bA	*xamačaa=ddAA*	*čipaal*	*dəppi*	*bi+či(n)-ni*
food+ACC	what.kind.of=EMPH	altogether	food	COP+PRF-3SG

məənə	***dəppipu.***
məənə	*dəppi-pu*
REF.NOM	food-1PL

[103] フェジャエワの教示によると、この語は *məəpəri* とあるべき。

どんな食べ物もあった、自分たちの食物だった。Всякая еда была, своя еда.

[7.2.1.07]

luča	***dəppeeni***	***təəliləkə***	***əwwookkipu***	***dəptə***	***bitəəpooči.***
luča	*dəppi+bA-ni*	*təəli=lAkA*	*ə+bookki?-pu*	*dəptə*	*bitəəpooči.*
Russian	food+ACC-3SG	then=TOP	NEG+HBT-1PL	eat-NIM	?

ロシア人の食べ物は、あの時は食べなかった。Русскую еду в то време не ели.

[7.2.1.08] K:

əsi	***[…]*** [104]	***sinǰeeni***	***mittəi,***	***unǰini,***	***gadu***
əsi	*[...]*	*sinda+ri-ni*	*mittəi*	*un-ri-ni*	*ga+ru*
now	[…]	come+IM.P-3SG	1SG.DIR	say-IM.P-3SG	take+IMP

gumaaskaǰi	***sundattaa!***
gumaaska-ǰi	*sundatta+bA*
money-INS	fish+ACC

最近、（人名）が私のところに来て、言うの、「魚を買ってよ！」って。[*человек*] приходит ко мне и говорит: “Купи рыбу!”

[7.2.1.09]

oroo,	***bii***	***unǰiwi***	***mərəččiwi,***	***ai***	***suddəəkilil***
oroo	*bii*	*un-ri-wi*	*mərəči+ri-wi*	*ai*	*suddəəki-lil?*
INTJ	1SG.NOM	say-IM.P-1SG	think+IM.P-1SG	INTJ	terrible-PL?

zhe.

[zhe]

EMPH

やれやれ、恐ろしいと思うわ。Ой, я говорю, думаю, “Ой, ужас же!”

[7.2.1.10]

əsiči	***təəjjəə.***
ə-si-či	*təjə+rA*
NEG-IM.P-3PL	entertain+NIM

人に分け与えない。Не угошают.

[7.2.1.11] F:

əsiči,	***əsiči,***	***əsiləkə***	***əsiči.***
ə-si-či	*ə-si-či*	*əsi=lAkA*	*ə-si-či*
NEG-IM.P-3PL	NEG-IM.P-3PL	now=TOP	NEG-IM.P-3PL

しない、しない、今はしない。Не, не, сейчас нет.

[104] この箇所は特定の個人名であるが、本稿では伏せておく。

[7.2.1.12]

goropčinneelaka	***umbookkilil***	***biččiči***	***ənnəuri.***
goropči-nnee=lAkA	*un-bookki-lil*	*bi+či(n)-či*	*ənnəuri.*
old-PERS=TOP	say-HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL	taboo

昔の人たちは「禁忌（エンネウリ）」と言ったものね。Старые люди говорили “эннэури”.

[7.2.1.13] K:

ənnəuri	***əsiči***	***xaiwaddaa***	***saara.***
ənnəuri	*ə-si-či*	*xai-bA=ddAA*	*saa-rA*
taboo	NEG-IM.P-3PL	what-ACC=EMPH	know-NIM

「禁忌」なんて、（今は）誰も知らないのよ。“Грех” ничего не знают.

[7.2.1.14] F:

əsiləkə	***ŋuiddə***	***əsini***	***ŋəəllə.***
əsi=lAkA	*ŋui=ddA(A)*	*ə-si-ni*	*ŋəələ+rA*
now=TOP	who=EMPH	NEG-IM.P-3SG	fear+NIM

今時の人は怖いもの知らずよね。Сейчас-то никто ничего не боятся.

[7.2.1.15] K:

xaiǰiddaa	***əsini***	***ŋəəllə.***
xai-ǰi=ddAA	*ə-si-ni*	*ŋəələ+rA*
what-INS=EMPH	NEG-IM.P-3SG	fear+NIM

何も恐れない。Ничего не боиться.

[7.2.1.16] F:

sii	***xaidu***	***biččisee***	***nučiikə***	***biŋəssəə***
sii	*xai-du*	*bi+či(n)-si+kA*	*nučiikə*	*bi-ŋAssAA*
2SG.NOM	what-DAT	COP+PRF.P-2SG+WHQ	small	COP-CONJ.C

aminǰi	***əninǰi***	***gəsə?***
ami(n)-ǰi	*əni(n)-ǰi*	*gəsə*
father-REF.DAT	mother-REF.DAT	together

あんたは小さい時、お父さんお母さんと一緒にどこに住んでたの？Ты где жила когда маленькая была, с отцом метерью вместе?

[7.2.1.17] K:

purəndu	***eewai***	***baaruni,***	***čoočči***	***askasaidu,***
purə(n)-du	*eewai*	*baaru-ni*	*čoočči*	*askasai-du*
forest-DAT	Evai	toward-3SG	after.that	Askasaj-DAT

purəndu,	***ǰiŋ***	***suddəəki***	***anu***	***baaruni.***
purə(n)-du	*ǰiŋ*	*suddəəki*	*anu*	*baaru-ni*
forest-DAT	very	terrible	FIL	toward-3SG

やまのエワイの方に、その後、アスカサイの方に。В тайге в сторону Эвая, потом в стороне Аскасая

[7.2.1.18] F:

soloi.

soloi

upstream

上流。

[7.2.1.19] K:

soloi	***ǰiŋ***	***suddəəki***	***puličipu.***
soloi	*ǰiŋ*	*suddəəki*	*puli-či(n)-pu.*
upstream	very	terrible	walk-PRF.P-1PL

上流の方のいろんな土地に移り住んだ。Везде ходили.

[7.2.1.20]

daagidu	***biččipu,***	***potom***	***...***
daagi-du	*bi+či(n)-pu*	*[potom]*	*...*
Dagi-DAT	COP+PRF.P-1PL	after.that	

ダーギに住んで、それから…。В Даги были, потом ...

[7.2.1.21] F:

xojoskodu	***biččisu***	***taani,***	***da,***	***anu,***	***askasaidu.***
xojosko-du	*bi+či(n)-su*	*taani*	*[da]*	*anu*	*askasai-du*
Xojosko-DAT	COP+PRF.P-2PL	INFER	yes	FIL	Askasaj-DAT

ホヨスコのアスカサイ川辺に住んでいた。В Хоёско жили наверное на Аскасае.

[7.2.1.22] K:

bauridu.

bauri-du

Bauri-DAT

バウリに。В Баури.

[7.2.1.23]

bauri,	***bauri***	***vovse***	***lučasal***	***čipaali***	***məənə***
bauri	*bauri*	*[vovse]*	*luča-sAl*	*čipaali*	*məənə*
Bauri	Bauri	at.all	Russian-PL	altogether	REF.NOM
kəsətəkki			***ɲurixači,***	***tapauna.***	
kəsə-tAkki			*ɲuri-xA(n)-či*	*tapauna*	
language-REF.DIR			write-PRF.P-3PL	Tapauna	

バウリはロシア人がロシア語の「タパウナ」と完全に呼び変えてしまった。Баури вообще русские всё на свой язык написали “Тапауна”.

[7.2.1.24]

čipauna	***zhe.***
čipauna	*[zhe]*
Chipauna	EMPH

ほんとは「チパウナ」よね！“Чипауна” же.

[7.2.1.25] F:

ii,	***čipauna***	***čoo.***
ii,	*čipauna*	*čoo*
yes	Chipauna	PTCL

そうよ、「チパウナ」！Да, Чипауна!

[7.2.1.26]

əə,	***əninǰi***	***gəsə***	***aminǰi***	***gəsə***	***puliŋəssəə,***
əə	*əni(n)-ǰi*	*gəsə*	*ami(n)-ǰi*	*gəsə*	*puli-ŋAssAA*
INTJ	mother-INS	together	father-INS	together	walk-CONJ.C

sundattaa	***uumbuččookkilil***	***biččisu?***
sundatta+bA	*uumbun-či+bookki-lil*	*bi+či(n)-su*
fish+ACC	go.fishing-ITR+HBT-PL?	COP+PRF.P-2PL

お父さんやお母さんと一緒に魚を獲りに行ったりした？C матерью вместе с отцом вместе ходили, рыбу ловили?

[7.2.1.27] K:

konechno	***uumbuččookkilil***	***biččipu.***
[konechno]	*uumbun-či+bookki?-lil?*	*bi+či(n)-pu*
of.course	go.fishing-ITR+HBT?-PL?	COP+PRF.P-1PL

もちろん、よく釣りに行ったわ。Конечно ловили.

[7.2.1.28]

a	***čoočči***	***amimbawwee***	***kak***	***kak***	***annoo***	***anu***
[a]	*čoočči*	*ami(n)-bA-wwee*	*[kak]*	*[kak]*	*anu+bA*	*anu*
and	after.that	father-ACC-1SG	how	how	FIL+ACC	FIL

baaruni	***ŋənnəuččiči***	***anu***	***pil’tun***	***baaruni,***
baaru-ni	*ŋənə+boon-či(n)-či*	*anu*	*pil’tun*	*baaru-ni*
toward-3SG	go+CAUS-PRF.P-3PL	FIL	Pil’tun	toward-3SG

čadu	***xamačaa***	***vtoroe***	***stado***	***biččini.***
čadu	*xamačaa*	*[vtoroe]*	*[stado]*	*bi+či(n)-ni*
that.DAT	what.kind.of	second	camp	COP+PRF.P-3SG

その後は、父が…あれ…あっちの方へ送られたの、あれ、ピリトゥンの方、そこには二つ目のキャンプがいて。А потом моего отца в эту сторону отправили, в сторону Пильтуна, там

какое-то второе стадо было.

[7.2.1.29]

kak	***umburee,***	***bələčibuddooni***	***narisalba.***
[kak]	*un-buri+kA*	*bələči-buddoo-ni*	*nari-sAl-bA*
how	say-IPSN.IM.P+WHQ	help-PURP-3SG	person-PL-ACC

何というか、手伝いのために。Как сказать, чтобы помогал людям.

[7.2.1.30]

čadu	***biččipu***	***pulipookki***	***biččipu,***	***anu***
čadu	*bi+či(n)-pu*	*puli-pookki*	*bi+či(n)-pu*	*anu*
that.DAT	COP+PRF.P-1PL	walk-HBT	COP+PRF.P-1PL	FIL

baaruni	***pil'tun***	***baaruni.***
baaru-ni	*pilʹtun*	*baaru-ni*
toward-3SG	Pil'tun	toward-3SG

そこに住んで、ピリトゥンの方へ行き来してた。Там жили ходили в сторону Пильтуна.

[7.2.1.31] F:

piləttu	***baaruni?***
piləttu	*baaru-ni*
Pil'tun	toward-3SG

「ピレットゥ」の方？В сторону “Пилэтту”.[105]

[7.2.1.32] K.

piləttu	***baaruni***	***giləəltəi***	***nimərookkilil***	***biččipu.***
piləttu	*baaru-ni*	*giləə-l-tAi*	*nimәri+bookki-lil*	*bi+či(n)-pu*
Pil'tun	toward-3SG	Nivkh-PL-DIR	visit+HBT-PL?	COP+PRF.P-1PL

「ピレットゥ」の方、ニヴフの人たちのいるところを、私たちは訪ねて行ったの。В сторону “Пилэтту” к нивхам ходили в гости.

[7.2.1.33]

čawa	***ǰiŋ***	***uliŋgaǰi***	***...***
čawa	*ǰiŋ*	*uliŋga-ǰi*	*...*
that.ACC very	good-INS		

それをとても良く…Этого очень хорошо...

[105] ロシア語でピリトゥンという地名を、フェジャエワがウイルタ語で *piləttu*「ピレットゥ」に呼び変えた。

[7.2.1.34] F:

pəətə	***ulissəəni***	***borrookkilil***	***biččiči***	***giləəsəl?***
pəətə	*ulisə+bA-ni*	*bori+bookki-lil*	*bi+či(n)-či*	*giləə-sAl*
seal	meat+ACC-3SG	distribute+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL	Nivkh-PL

アザラシの肉をごちそうしてくれた、ニブフの人たちは？Нерпичьм мясом угошали нивхи?

[7.2.1.35] K:

konechno	***borrookkilil***	***tøjjøukkilil***	***biččiči.***
[konechno]	*bori+bookki-lil*	*tøjø+bukki-lil*	*bi+či(n)-či*
of.course	distribute+HBT?-PL?	entertain+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL

もちろん、ごちそうしてくれたわ！Конечно, делили, угошали.

[7.2.1.36] F:

sii	***ajaurisi***	***pəətə***	***ulissəəni?***
sii	*ajau-ri-si*	*pəətə*	*ulisə+bA-ni*
2SG.NOM	like-IM.P-2SG	seal	meat+ACC-3SG

あんたはアザラシ肉は好き？Ты любишь нерпичье мясо?

[7.2.1.37] K:

anaa.

anaa

no

ううん。Нет.

[7.2.1.38]

bii	***ǰiŋ***	***sosseewi***	***əsi.***
bii	*ǰiŋ*	*soso+ri-wi*	*əsi*
1SG.NOM	very	have.diarrhea+IM.P-1SG	now

私は、今（食べたら）ひどい下痢をするの。У меня большая диаррея сейчас.

[7.2.1.39] F:

čoi?

čoi

really

そうなの？Да?

[7.2.1.40] K:

da.

[da]

yes

ええ。Да.

[7.2.1.41]

əsi	***konechno***	***sosseewi.***
əsi	*[konechno]*	*soso+ri-wi*
now	of.course	have.diarrhea+IM.P-1SG

今は、もちろん下痢するわ。Сейчас конечно у меня диаррея.

[7.2.1.42] F:

xaalandaa?

xaalandaa

long.time.ago

昔は？ Давно?

[7.2.1.43] K:

a	***xaalandaa***	***dəpookkipu***	***biččipu.***
[a]	*xaalandaa*	*dəp+bookki-pu*	*bi+či(n)-pu*
and	long.time.ago	eat+HBT?-1PL	COP+PRF.P-1PL

昔はよく食べたけどね。Давно ели.

[7.2.1.44]

giləəl	***annookkilil***	***biččiči***	***borrookkilil***	
giləə-l	*anu+bookki-lil*	*bi+či(n)-či*	*bori+bookki-lil?*	
Nivkh-PL	FIL+HBT-PL?	COP+PRF.P-3PL	distribute+HBT-PL?	
təjjəukkilil	***sundattamba,***	***esli***	***məənə***	***əччipu***
təjə+bukki-lil	*sundatta(n)-bA*	*[esli]*	*məənə*	*ə+či(n)-pu*
entertain+HBT-PL?	fish-ACC	if	REF.NOM	NEG+PRF.P-1PL
annoo	***dappaa***	***nooči***	***təjjəukkilil***	
anu+rA	*dapa+rA*	*nooči*	*təjə+bukki-lil*	
FIL+NIM	catch+NIM	3PL.NOM	entertain+HBT-PL?	
biččiči	***annoo***	***sundattaa,***	***annoo***	***pəətə***
bi+či(n)-či	*anu+bA*	*sundatta+bA*	*anu+bA*	*pəətə*
COP+PRF.P-3PL	FIL+ACC	fish+ACC	FIL+ACC	seal

ulissəəni.

ulisə+bA-ni

meat+ACC-3SG

ニヴフたちは魚をごちそうしてくれて、私たちに獲物がないときは、彼らは魚を、アザラシ肉をごちそうしてくれた。Нивхи делились угошали рыбай, если сами не ловили, они угошали нас рыбай и нерпичьм мясом.

[7.2.1.45] F:

ǰimda	***naaduni***	***biččisui?***
ǰimda	*naa-du-ni*	*bi+či(n)-su=i*
Zhimda	land-DAT-3SG	COP+PRF.P-2PL=YNQ

ジムダに住んだことはある？Вы на земле Зимда жили?

[7.2.1.46]

konechno	***biččipu,***	***xaiduddaa***	***čipaali***	***biččipu.***
[konechno]	*bi+či(n)-pu*	*xai-du=ddAA*	*čipaali*	*bi+či(n)-pu*
of.course	COP+PRF.P-1PL	what-DAT=EMPH	altogether	COP+PRF.P-1PL

もちろん、どこにでも住んでいたわ。Конечно мы жили везде всюду.

[7.2.1.47] F:

xaiduddaa	***čipaali***	***biččisu***	***təəli.***
xai-du=ddAA	*čipaali*	*bi+či(n)-su*	*təəli*
what-DAT=EMPH	altogether	COP+PRF.P-2PL	then

あんたたちは、いろいろな土地に住んだのね。Вы везде всюду были тогда.

[7.2.1.48] K:

ii.

ii

yes

ええ。Да.

[7.2.1.49]

oo	***ǰiŋ***	***bara***	***naadu***	***bii.***
oo	*ǰiŋ*	*bara*	*naa-du*	*bi+ri*
INTJ	very	a.lot	land-DAT	COP+IM.P

ああ、もう本当にいろいろな土地に住んだわ。О, в очень многих землях была.

[7.2.1.50] F:

biiləkə	***ŋaabbeeladu***	***biččimbi.***
bii=lAkA	*ŋaabbeela-du*	*bi+či(n)-bi*
1SG.NOM=TOP	Nabil’-DAT	COP+PRF.P-1SG

私は、ナビリに住んでた。А я на Набиле была.

[7.2.1.51] K:

biiləkə	***xaiduddaa***	***čipaal***	***biččimbi.***
bii=lAkA	*xai-du=ddAA*	*čipaal*	*bi+či(n)-bi*
1SG.NOM=TOP	what-DAT=EMPH	altogether	COP+PRF.P-1SG

私はいろんなところに。Я то везде всюду была.

[7.2.1.52]

eewai	***anuduni***	***čadu***	***naverno***	***do***	***six***	***por***
eewai	*anu-du-ni*	*čadu*	*[naverno]*	*[do]*	*[six]*	*[por]*
Evai	FIL-DAT-3SG	that.DAT	maybe	till	this	moment

biiči	***anu***	***...***	***kak.***
bi+ri-či	*anu*	*...*	*[kak]*
COP+IM.P-3PL	FIL		how

エワイのあそこには、そこにはたぶん今も、あれ、何て言ったっけ？В Эвае наверно до сих пор есть это самое... как.

[7.2.1.53] F:

balaal.

balaa-l

pit.dwelling-PL

竪穴住居。Землянки.

[7.2.1.54] K:

balaal.

balaa-l

pit.dwelling-PL

竪穴住居。Землянки.

[7.2.1.55] F:

ii,	***biiči.***
ii	*bi+ri-či*
yes	COP+IM.P-3PL

ある、ある。Да, есть.

[7.2.1.56] K:

biiči	***əččiči***	***...***
bi+ri-či	*ə+či(n)-či*	
COP+IM.P-3PL	NEG+PRF.P-3PL	

あったっけ？Есть?

[7.2.1.57] F:

nu,	***əsiləkə***	***dəgdəxəči***	***əmbee.***
nu	*əsi=lAkA*	*dəgdə-xA(n)-či*	*əmbee.*
INTJ	now=TOP	burn-PRF.P-3PL	of.course

今は焼けてしまったよ、もちろん。Ну теперь сгорели наверное.

[7.2.1.58] K:

čoi?

čoi?

INTJ

そうなの？ Да?

[7.2.1.59] F:

ii,	***anu***	***taulu***	***biŋəssəəni***	***dəgdəxəni***	***əmbee.***
ii,	*anu*	*taulu*	*bi-ŋAssAA-ni*	*dəgdə-xA(n)-ni*	*əmbee*
yes	FIL	fire	COP-CONJ.C-3SG	burn-PRF.P-3SG	of.course

ええ、山火事のあったとき、たぶん焼けてしまったわ。Да, пожар когда был, сгорели наверное.

[7.2.1.60]

xai	***balaalbani***	***baarilasi?***
xai	*balaa-l-bA-ni*	*baa-rilA-si*
what	pit.dwelling-PL-ACC-3SG	find-NFUT.F-2SG

どんな竪穴住居を見つけられる？Что за землянки наидёшь?

[7.2.1.61]

xaalandaala	***a***	***lučasal***	***ŋənəməri,***	***ča***
xaalandaa-lA	*[a]*	*luča-sAl*	*ŋənə-mAri*	*ča(a)*
long.time.ago-LOC	and	Russian-PL	go-COOR.PL.C	that
balaaldu	***aundaukkil***		***bičči.***	
balaa-l-du	*aundau+bukki-l*		*bi+či(n)-či*	
pit.dwelling-PL-DAT	camp+HBT-PL		COP+PRF.P-3PL	

昔はロシア人が来て、その竪穴住居に寝泊まりしてた。Давно русские ходили, в этих землянках ночевали.

[7.2.1.62] K:

čoi?

čoi?

INTJ

そうなの？Да?

[7.2.1.63] F:

ii.

ii

yes

ええ。Да.

[7.2.1.64]

əsiləkə	***geedaddaa***	***balaa***	***anaa.***
əsi=lAkA	*geeda=ddAA*	*balaa*	*anaa*
now	one=EMPH	pit.dwelling	no

いまや竪穴住居は一つも残ってない。Сейчас-то ни одной зеилянки нет.

[7.2.1.65]

waaludu	***bakka***	***balaal***	***bitəlkəleeči***	***waalu***
waalu-du	*bakka*	*balaa-l*	*bitəlkəleeči*	*waalu*
Val-DAT	also	pit.dwelling-PL	?	Val

xurəə	***dapkaduni.***
xurəə	*dapka-du-ni*
mountain	border-DAT-3SG

ワールにも竪穴住居があったじゃない、山のふもとに。На Валу тоже землянки были, возле воловских гор.

[7.2.1.66]

bii	***čala***	***puličimbi***	***marii***	***pavlovnatai***
bii	*čala*	*puli-či(n)-bi*	*[marii]*	*[pavlovna]-tAi*
1SG.NOM	that.LOC	walk-PRF.P-1SG	Marija	Pavlovna-DIR

noonduni	***gəsə.***
noonduni	*gəsə*
3SG.DAT	together

私はそっちに、マリヤ・パウロヴナのところへ行って、一緒に（住んだの）。Я туда ездела к Марии Павловне, с ней вместе.

[7.2.1.67]

geedara	***mambakkabi***	***wəədəxəmbi***	***bičči,***	***unikki***
geedara	*mambakka-bi*	*wəədə-xA(n)-bi*	*bi+či(n)*	*uni-kki*
once	mitten-REF	lose-PRF.P-REF	COP+PRF.P	river-REF.PRL

ŋənəŋəssəə	***anuǰi***	***ulaaǰi,***	***oksooǰi.***
ŋənə-ŋAssAA	*anu-ǰi*	*ulaa-ǰi*	*oksoo-ǰi*
go-CONJ.C	FIL-INS	reindeer-INS	reindeer.sledge-INS

あるとき、手袋を失くしたの、トナカイ橇に乗ってたときに。Однажды рукавицу потеряла, когда ехала на оленьих упряжках.

[7.2.1.68]

i	***anu***	***gasattaiči***	***sindagačči***	***čipaali***	***geeda***
[i]	*anu*	*gasa+tAi-či*	*sinda-kAčči*	*čipaali*	*geeda*
and	FIL	village+DIR-3PL	come-SUB.C	altogether	one

ŋaalabi	***suŋuччini***	***biччi.***
ŋaala-bi	*suŋun-či(n)-ni*	*bi+či(n)*
arm-1SG	be.frozen-PRF.P-3SG	COP+PRF.P

村に着いたときには、片方の手がすっかり凍えてしまってた。И когда приехала в стойбище, совсем одна рука замёрзла.

[7.2.1.69]

marija	***pavlovna***	***unǰini***	***mittəi,***	***mambakkabi***
[marija]	*[pavlovna]*	*un-ri-ni*	*mittəi*	*mambakka-bi*
Marija	Pavlovna	say-IM.P-3SG	1SG.DIR	mitten-REF

xaixasee?

xai-xA(n)-si+kA

what-PRF.P-2SG+WHQ

マリヤ・パウロヴナは私に「手袋をどこにやったの？」と言うの。Мария Павловна говорит мне, “Рукавицу куда дела? ”

[7.2.1.70]

poktokki	***wəədəxəmbi***	***xaiduka.***
pokto-kki	*wəədə-xA(n)-bi*	*xai-du=kA*
way-REF.PRL	lose-PRF.P-1SG	what-DAT=WHQ

「途中のどこかで失くしてしまったの。“По дороге потеряла где-то.

[7.2.1.71]

waalu	***uniduni***	***taani,***	***unǰiwi.***
waalu	*uni-du-ni*	*taani*	*un-ri-wi*
Val	river-DAT-3SG	INFER	say-IM.P-1SG

たぶん、ワール川だと思う」と私は言う。На речке Вал наверное,”- говорю.

[7.2.1.72]

bai	***bajee,***	***unǰini.***
bai	*bai+kAA*	*un-ri-ni*
worthless	worthless+EXC	say-IM.P-3SG

「だめだめ！」と言う。“Плохо!”- говорит.

[7.2.1.73]

xooni	***taraŋači***	***wəəddəuree?***
xooni	*taraŋači*	*wəədə+buri+kA*
how	like.that	lose+IPSN.IM.P+WHQ

「どうやってそんなふうに失くせるっていうの？」Как так можно потерять.”

[7.2.1.74]

čoočči	***noonduni***	***biŋəssəə,***	***čadu***	***biččini***
čoočči	*noonduni*	*bi-ŋAssAA*	*čadu*	*bi+či(n)-ni*
after.that	3SG.DAT	COP-CONJ.C	that.DAT	COP+PRF.P-3SG

sisil	***bara.***
sisi-l	*bara*
larch-PL	a.lot

その後、彼らのところに住んだとき、そこに背の高いカラマツがたくさんあった。Потом, когда я у них жила, там были много высокие лиственницы.

[7.2.1.75]

biiləkkə	***nučiikə***	***biččimbi***	***zhe,***	***a***	***sisil***
bii=lAkkA	*nučiikə*	*bi+či(n)-bi*	*[zhe]*	*[a]*	*sisi-l*
1SG.NOM=TOP	small	COP+PRF.P-1SG	EMPH	and	larch-PL

mindu,	***moročixambi,***	***orooi***	***ai***	***daajisal!***
mindu	*moroči-xA(n)-bi*	*orooi*	*ai*	*daaji-sAl*
1SG.DAT	think-PRF.P-1SG	INTJ	INTJ	big-PL

私は小さくて、カラマツの木が大きく見えた。Я была маленькая, а лиственницы мне козались большими!

[7.2.1.76]

moomil!
moomi-l
thick-PL

太くて！Толстими!

[7.2.1.77]

sss	***anumi***	***seetosiči***	***xədundu.***
sss	*anu-mi*	*seeto-si-či*	*xədu(n)-du*
ONP	FIL-COOR.C	rustle-IM.P-3PL	wind-DAT

ススとあれして（音をたてて）、風にそよいでいる。C-c-c шевелятся во время ветра.

[7.2.1.78]

a	***balaal***	***palaatkalči***	***biččini,***	***toŋdoodu***	***əwwee***
[a]	*balaal*	*palaatka-l-či*	*bi+či(n)-ni*	*toŋdoo-du*	*əwwee*
and	pit.dwelling-PL	tent-PL-3PL	COP+PRF.P-3SG	hollow -DAT	here

xulləə	***tawwee***	***xulləə***	***čaa***	***toŋdoodu***	***palaatkal,***
xulə+bA	*tawwee*	*xulə+bA*	*čaa*	*toŋdoo-du*	*palaatka-l*
pit+ACC	there	pit+ACC	that	hollow-DAT	tent-PL

čomeena	***ǰiŋ***	***namauli***	***biččini***	***billəə.***
čomeena	*ǰiŋ*	*namauli*	*bi+či(n)-ni*	*billəə*
therefore	very	warm	COP+PRF.P-3SG	PTCL

竪穴住居、テントがあった、あちこちに穴を（掘って）その窪みにテントがあって、だから（中は）とても暖かったのね。А землянки палатки были в низине с этой стороны с другой стороны горы там в низине палатки, поэтому очень тепло было.

[7.2.1.79]

a	***jədu***	***eewaidu***	***biŋəssəə***	***nuŋǰuuli***	***biččini.***
[a]	*jədu*	*eewai-du*	*bi-ŋAssAA*	*nuŋǰuuli*	*bi+či(n)-ni*
and	this.DAT	Evai-DAT	COP-CONJ.C	cold	COP+PRF.P-3SG

ここエワイに住んでいたときは、寒かった。А здесь на Эвае когда жили, холодно было.

[7.2.1.80]

no	***təəli***	***biččiči,***	***biččipu***	***buu***
[no]	*təəli*	*bi+či(n)-či*	*bi+či(n)-pu*	*buu*
but	then	COP+PRF.P-3PL	COP+PRF.P-1PL	1PL.NOM

balaaldu.
balaa-l-du
pit.dwelling-PL-DAT

でも、そのとき竪穴住居に住んだ（から凍えなかった）。Но тогда жили мы в землянках.

[7.2.1.81] K:

nu,	***buu***	***balaaldu***	***gəgdəkə***	***biččipu.***
[nu]	*buu*	*balaa-l-du*	*gəgdəkə*	*bi+či(n)-pu*
INTJ	1PL.NOM	pit.dwelling-PL-DAT	always	COP+PRF.P-1PL

ふーん、私たちはいつも竪穴住居に住んでいたわ。Ну, мы в землянках всё время жили.

[7.2.1.82]

anu	***narisal***	***anu***	***baaruni***	***ŋənneeči,***	***waalu***
anu	*nari-sAl*	*anu*	*baaru-ni*	*ŋənə+ri-či*	*waalu*
FIL	person-PL	FIL	toward-3SG	go+IM.P-3PL	Val

baaruni.
baaru-ni
toward-3SG

人々はワールの方へ行ってしまう。Люди в сторону Вала едут.

[7.2.1.83]

a	***buu***	***dərəiǰipu,***	***bii,***	***əmma***	***i***
[a]	*buu*	*dərəi-ǰi-pu*	*bii*	*əmma*	*[i]*
and	1PL.NOM	stay-IM.P-1PL	1SG.NOM	Emma	and

əɲəi,[106]	***ataka,***	***ilaannee.***
###	*ataka*	*ilaa-nnee*
###	grandmama	three-PERS

私たち三人、私とエマとおばあちゃんは居残った。А мы остаемся: я, Эмма, бабушка, в троём.

[7.2.1.84]

a	***esshjo***	***wolоǰakaanu***	***biччini.***
[a]	*[esshjo]*	*wolоǰakaanu*	*bi+či(n)-ni*
and	also	Volodja	COP+PRF.P-3SG

それに、ヴォロージャもいたわ。А ещё был Володя.

[7.2.1.85]

anu,	***ǰiinnee***	***koroche.***
anu	*ǰii(n)-nnee*	*[koroche]*
FIL	four-PERS	in.shirt

つまり、4 人ね。В четвером, короче.

[7.2.1.86] Y:[107]

wolоǰakaanu?

wolоǰakaanu

Volodja

「ヴォロジャカーヌ」？ “Володякану”?

[7.2.1.87] K:

wolоǰakaanu.

wolоǰakaanu

Volodja

「ヴォロジャカーヌ」。Володя.

[7.2.1.88]

təəli	***natashandoo***	***nooči***	***anuxači.***
təəli	*natasha-ndoo*	*nooči*	*anu-xA(n)-či*
then	Natasha-COM	3PL.NOM	FIL-PRF.P-3PL

あの頃は、ナターシャと一緒にあれした…。В то время с Наташей они ...

[7.2.1.89] F:

gamačixači.

ga-mači-xA(n)-či

take-RCP-PRF.P-3PL

結婚した。Сватались.

---

[106] *əɲəi* と言いかけて、直後に *ataka* と言い直した。

[107] 人名について、筆者が聞き返した。

[7.2.1.90] K:

gamačixači.

ga-mAči-xA(n)-či

take-RCP-PRF.P-3PL

結婚した。Сватались.

[7.2.1.91]

a	***narisal***	***ŋənneeči***	***waalu***	***baaruni***	***ŋənneeči***
[a]	*nari-sAl*	*ŋənə+ri-či*	*waalu*	*baaru-ni*	*ŋənə+ri-či*
and	person-PL	go+IM.P-3PL	Val	toward-3SG	go+IM.P-3PL

i	***wəədəpčiči.***
[i]	*wəədə-ptu+ri-či*
and	lose-SPN+IM.P-3PL

人々はワールに出かけては、行方をくらます。Люди едут, на Вал едут и теряются.

[7.2.1.92]

i	***buu***	***čii***	***biipu***	***mamandoo***	***gəsə,***
[i]	*buu*	*čii*	*bi+ri-pu*	*mama-ndoo*	*gəsə*
and	1PL.NOM	all.the.time	COP+IM.P-1PL	old.woman-COM	together

i	***čomi***	***saariwi***	***annoo***	***əwənkil***	***ləədəmbəni.***
[i]	*čomi*	*saa-ri-wi*	*anu+bA*	*əwənki-l*	*ləədə(n)-bA-ni*
and	therefore	know-IM.P-1SG	FIL+ACC	Evenki-PL	speak-ACC-3SG

私たちは皆、年寄りたちと一緒に暮らして、だから私もエウェンキー語の話がわかるのよね。Мы все живём со старухой вместе, поэтому знаю по эвенкийски говорить.

[7.2.1.93]

nu,	***saariwi,***	***no***	***ləədəmi***	***əsi***	***xoonidda***
[nu]	*saa-ri-wi*	*[no]*	*ləədə-mi*	*əsi*	*xooni=ddA(A)*
INTJ	know-IM.P-1SG	but	speak-COOR.C	now	how=EMPH

əsiwi	***annoo.***
ə-si-wi	*anu+bA*
NEG-IM.P-1SG	FIL+ACC

もっとも、わかりはするけど、話すことはどうも…。Ну знаю, но поговорить никак не могу.

[7.2.1.94]

no	***čip***	***tak***	***saariwi***	***xaiwa***	***ləədənǰiči.***
[no]	*čip*	*tak*	*saa-ri-wi*	*xai-bA*	*ləədən-ǰi-či*
but	ONP	ONP	know-IM.P-1SG	what-ACC	speak-IM.P-3PL

何を話しているのかは（聞いて）わかるわよ。Но так знаю что они говорят.

[7.2.1.95]

mama	***zhe***	***ewenka***	***biччini,***	***məən***	
mama	*[zhe]*	*[ewenka]*	*bi+či(n)-ni*	*məən(ə)*	
old.woman	EMPH	Evenka	COP+PRF.P-3SG	REF.NOM	
məəndəiji,	***luča***	***kəssəəni***	***əччini***	***saara,***	
məən-dAi-ji	*luča*	*kəsə+bA-ni*	*ə+či(n)-ni*	*saa-rA*	
REF-LNG-INS	Russian	language+ACC-3SG	NEG+PRF.P-3SG	know-NIM	
killəəji	***ləədənbukkil***	***biччini.***			
killəə-ji	*ləədən-bukki-l*	*bi+či(n)-ni*			
Evenki-INS	speak-HBT-PL	COP+PRF.P-3SG			

おばあさんはエウェンキーの人で、母語で話して、ロシア語は知らなくて、エウェンキー語で話していたっけ。Старуха то эвенкийской была, на своём языке говорила, о руссукий язык не знала, по эвенкийски разговаривала она.

[7.2.1.96]

i	***taraŋači***	***biwukkil***	***biччipu,***	***poka***	***narisal***
[i]	*taraŋači*	*bi-bukki-l*	*bi+či(n)-pu*	*[poka]*	*nari-sAl*
and	like.that	COP-HBT-PL	COP+PRF.P-1PL	yet	person-PL
əwukkil	***issoo***	***biччini.***			
ə-bukki-l	*isu+rA*	*bi+či(n)-ni*			
NEG-HBT-PL	come.back+NIM	COP+PRF.P-3SG			

そんなふうに私たちは暮らしてたの、人々が戻って来るまで。Вот так мы жили, пока люди не возращались.

7.3 民話

7.3.1 赤い川を渡った兄弟

2011 年 2 月 11 日、ロシア連邦サハリン州ノグリキ町にて、ビビコワ E. A.から採録した。ビビコワはこの話を故インノケンティエワ　マリーヤ　イワーノヴナ（Innokent'eva Marija Ivanovna）（ウイルタ女性、ウイルタ名 *Kəŋkə*：Getta-Sinaxudu 氏族）から 1978 年に聞いて、ロシア字でノートに記録したものを自分で保管している。

本テキストは、そのノートをビビコワに読み上げてもらうところを録音し、録音から書き起こしたものである（20110211_3MLG_BEA.WAV）。その後、ビビコワとともに表記確認と訳付を行った。語りの録音時間は、4 分 20 秒であった。



写真 7-29
（左から）ミヘエワ　M. S.（*Gisiktauda*）とインノケンティエワ M. I.（*Kəŋkə*）（ビビコワ所蔵写真）

ビビコワは、こでは故インノケンティエワ（ビビコワは *Kəŋkə mama* と呼ぶ）が、やまで化け物 *oŋdo* に出会った人たちについて話した物語だと紹介した。やまに行くと化け物 *oŋdo* がたくさんいるのだという。

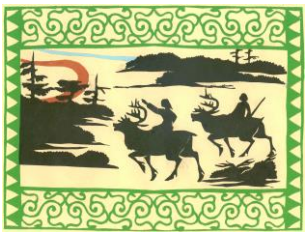
この語りの採録の後、北海道立北方民族博物館で同年夏に予定されていた特別展でウイルタの民話を紹介したいという話になった。そこで、ノグリキ町在住のウイルタの切り絵作家オシポワ　アルビーナ　ニコラエヴナ（Osipova Al’bina Nikolaevna）に依頼して、ビビコワの語りに合せて、内容をモチーフにした切り絵を制作していただいた（**図 7-30**）。なお、オシポワはウイルタ語がわからないので、ビビコワはロシア語であらすじを説明した。オシポワによる作品は、同館の第 26 回特別展「ウイルタとその隣人たち　サハリン・アムール・日本　つながりのグラデーション」で展示された。

[7.3.1.01]

duu	***purigə***	***narisal***	***əigəmunə***	***aundaudu***	***biččiči.***
duu	*purigə*	*nari-sAl*	*əigə-munA*	*aundau-du*	*bi+či(n)-či*
two	young	person-PL	elder.sister-POSS	conical.hut-DAT	COP+PRF.P-3PL

二人の若者が姉とともに幕屋で暮らしていた。Два молодых человека с сестрой в чуме жили.


1


2


3


4

図 7-30
切り絵「赤い川を渡った兄弟」（オシポワ A. N.作；北海道立北方民族博物館所蔵資料 H23.8.7-10）※数字はあらすじ順

[7.3.1.02]

gə,	***xusəsəl***	***purəttəi***	***ŋənəbuddoori***	***manduxači,***
gə	*xusə-sAl*	*purə+tAi*	*ŋənə-buddoori*	*mandu-xA(n)-či*
INTJ	male-PL	forest+DIR	go-PURP.PL.REF	try-PRF.P-3PL

gobdondomori	***itəpči***	***xurəətəi***	***baaruni***
gobdo-ndA-mAri	*itə-ptu+ri*	*xurəə-tAi*	*baaru-ni*
hunt-DIT-COOR.PL.C	see-SPN+IM.P	mountain-DIR	toward-3SG

ŋənəbuddoori	***toččiči.***
ŋənə-buddoori	*to+či(n)-či*
go-PURP.PL.REF	do+PRF.P-3PL

さて、男たちが遠くに見えるやまの方へ狩りに行く準備をした。Вот, мужчины в тайгу поити засобирались охотиться на видневшие далеко горы.

[7.3.1.03]

əigəči	***noomboni***	***bargixani,***	***unǰini,***
əigə-či	*noomboni*	*bargi-xA(n)-ni*	*un-ri-ni*
elder.sister-3PL	3SG.ACC	prepare-PRF.P-3SG	say-IM.P-3SG

poktokkeesu	***duu***	***uni***	***bilini,***	***paaji***	***uŋaatal.***
pokto-kkee-su	*duu*	*uni*	*bi-li-ni*	*paaji*	*uŋaa-tA(A)-l*
way-PRL-2PL	two	river	COP-FUT.P-3SG	shallow	stream-DIM-PL

姉は彼らの旅支度をして、言った。「お前たちの行く道に二つの小川があります、浅い小川です。Сестра их собрала в дорогу, говорит: “На пути две речушки будут, мелкие речушки.

[7.3.1.04]

geeda	***ǰiŋ***	***gəəgdə***	***muulu,***	***geeda***	***səəgdə***	***muulu.***
geeda	*ǰiŋ*	*gəəgdə*	*muu-lu*	*geeda*	*səəgdə*	*muu-lu*
one	very	clean	water-PROP	one	red	water-PROP

一つはきれいな水、もう一つは赤い水（の小川）です。Одна с очень чистой водой, одна с красной водой.

[7.3.1.05]

əǰǰeesu	***daura***	***onnoočimari***	***səəgdə***	***muulu***
ə+ru-su	*dau-rA*	*onnoo-či-mAri*	*səəgdə*	*muu-lu*
NEG+IMP-2PL	go.across-NIM	wade-ITR-COOR.PL.C	red	water-PROP

uɲaamba.

uɲaa+bA

stream+ACC

赤い水の小川を歩いて渡ってはいけません。Не переходите вброд через речушку с красной водой.

[7.3.1.06]

daussaari	***onnoočimari***	***gəəgdə***	***muulu***
dau-ssAAri	*onnoo-či-mAri*	*gəəgdə*	*muu-lu*
go.across-FUT.IMP	wade-ITR-COOR.PL.C	clean	water-PROP

uɲakkaa.

uɲaa+bA

stream+ACC

きれいな水の小川を歩いて渡りなさい。」Переходите вброд через речушке с чистой водой.”

[7.3.1.07]

narisal	***guuliččiči.***
nari-sAl	*guulin-či(n)-či*
person-PL	depart-PRF.P-3PL

男たちは出かけた。Мужчины тронули в путь.

[7.3.1.08]

aaptuxači	***čaa***	***uɲaalba.***
aaptu-xA(n)-či	*čaa*	*uɲaa-l-bA*
arrive-PRF.P-3PL	that	stream-PL-ACC

その小川に着いた。Добрались до тех речушек.

[7.3.1.09]

aagduma	***unǰini,***	***əkkəənu***	***uččini***	***səəgdə***
aagduma	*un-ri-ni*	*əkkəənu*	*un-či(n)-ni*	*səəgdə*
elder	say-IM.P-3SG	sister	say-PRF.P-3SG	red

muulu	***uɲaamba daudu***	***...***	***daubuddoopu.***
muu-lu	*uɲaa(n)-bA*	*###*	*dau-buddoo-pu*
water-PROP	stream-ACC	###	go.across-PURP-1PL

兄は言う。「お姉さんは私たちが赤い水の小川を渡るように言いました。」Старший говорит: “Сестра сказала, чтобы мы перешли речушку с красной водой.

[7.3.1.10]

nəuni	***məkkusini,***	***anaa,***	***gəəgdə***	***muulu***
nəu-ni	*məkku-si-ni*	*anaa*	*gəəgdə*	*muu-lu*
younger.brother-3SG	contradict-IM.P-3SG	no	clean	water-PROP

uɲaamba	***daurusu***	***əkkəənu***	***uččini.***
uɲaa(n)-bA	*dau-ru-su*	*əkkəənu*	*un-či(n)-ni*
stream-ACC	go.across-IMP-2PL	sister	say-PRF.P-3SG

弟は反対した。「いや、きれいな水の小川を渡りなさいと、姉は言いましたよ。」

Младший перечит: “Нет, речушку с чистой водой переходите, сестра сказала.

[7.3.1.11]

aagduma	***əmiddəə***	***doolǰee,***	***onnoočimi***
aagduma	*ə-mi=ddAA*	*doolǰi+rA*	*onnoo-či-mi*
elder	NEG-COOR.C=EMPH	hear+NIM	wade-ITR-COOR.C

dauxani	***səəgdə***	***muulu***	***uɲaamba.***
dau-xA(n)-ni	*səəgdə*	*muu-lu*	*uɲaa(n)-bA*
go.across-PRF.P-3SG	red	water-PROP	stream-ACC

兄は聞きもせず赤い水の小川を渡った。Старший не послушая вброд перешед речушку с красной водой.

[7.3.1.12]

nəuni	***nooni***	***xamareekkeeni***	***dauxani.***
nəuni	*nooni*	*xamaree-kkee-ni*	*dau-xA(n)-ni*
younger.brother-3SG	3SG.NOM	back-PRL-3SG	go.across-PRF.P-3SG

弟も彼の後について渡った。Младший за ним вслед перешёл.

[7.3.1.13]

daugaččeeri	***ŋənəxəči.***
dau-kAččeeri	*ŋənə-xA(n)-či*
go.across-SUB.PL.C	go-PRF.P-3PL

渡ってから、さらに進んで行った。Перебравшись пошли.

[7.3.1.14]

dolboduxani.

dolbo-du-xA(n)-ni

night-REV-PRF.P-3SG

夜が更けた。Ночь наступила.

[7.3.1.15]

aundabuddoori	***ilixači.***
aunda-buddoori	*ili-xA(n)-či*
stay-PURP.PL.REF	stand-PRF.P-3PL

宿をとるためにとどまった。Переночевать остановились.

[7.3.1.16]

apkaččiči.

apkan-či(n)-či

lie.down-PRF.P-3PL

眠りについた。Легли спать.

[7.3.1.17]

aumari		***tolčiččiči,***	***xərəliməri***	
au-mAri		*tolči-či+ri-či*	*xərəli-mAri*	
sleep-COOR.PL.C		dream-ITR+IM.P-3PL	twist-COOR.PL.C	
noomboči	***oŋdo***	***oŋdoччini,***	***pulaxxini,***	***čiiŋŋeeni.***
noomboči	*oŋdo*	*oŋdo-či+ri-ni*	*pulaxi+ri-ni*	*čiiŋə+ri-ni*
3PL.ACC	devil	devil-ITR+IM.P-3SG	shout+IM.P-3SG	whine+IM.P-3SG

眠っていて彼らは夢を見た。化け物が彼らを取り囲んで現れ、どなり、甲高い声をあげている。Спя видят сон: окрудая их чёрти появились, кричат, визжат.

[7.3.1.18]

ŋəələlugəччeeri	***meelduxači.***
ŋəələ-lu-kAччeeri	*meel-du-xA(n)-či*
fear-INCH-SUB.PL.C	wake.up-REV-PRF.P-3PL

怖くなって目覚めた。Испугавшись проснулись.

[7.3.1.19]

nəudumə	***təədugəччi***	***ǰiŋ***	***kusalǰi***
nəudumə	*təə-du-kAччi*	*ǰiŋ*	*kusal-ǰi*
younger	sit-REV-SUB.C	very	quick-INS

guuličči̇ni	***aundačixambi***	***naadu,***	***aaŋni***
guulin-či(n)-ni	*aunda-či-xA(n)-bi*	*naa-du(u)*	*aaŋ-ni*
depart-PRF.P-3SG	stay-ITR-PRF.P-1SG	land-ABL	elder.brother-3SG

nooni	***xamareekkeeni***	***xaapkami***	***ŋənəxəni.***
nooni	*xamaree-kkee-ni*	*xaapka(n)-mi*	*ŋənə-xA(n)-ni*
3SG.NOM	back-PRL-3SG	catch.up[108]-COOR.C	go-PRF.P-3SG

弟は起きてすぐに泊まっていた場所から出発した、兄も彼の後について行った。Младший встав очень быстро тронулся в путь с ночлежного места, старший брат за ним вслед догонал.

[7.3.1.20]

əmərіddəə	***gobdoo***	***məənə***	***oisalbi***
ə-mAri=ddAA	*gobdo+rA*	*məənə*	*oisal-bi*
NEG-COOR.PL.C=EMPH	hunt+NIM	REF.NOM	relative-REF

aaptuxači.

aaptu-xA(n)-či

arrive-PRF.P-3PL

狩りもせずに、親戚のところに着いた。Так и не поохотившись до своих родственников добрались.

[7.3.1.21]

aaptuxanduči	***aagduma***	***nari***	***bučči̇ni.***
aaptu-xA(n)-du-či	*aagduma*	*nari*	*bul+či(n)-ni*
arrive-PRF.P-DAT-3PL	elder	person	die+PRF.P-3SG

到着して、兄は死んだ。Добравшись старший брат умер.

[7.3.1.22]

tari	***əigəbi***	***əčči̇ni***	***doolǰee,***	***məkkusixəni.***
tari	*əigə-bi*	*ə+či(n)-ni*	*doolǰi+rA*	*məkku-si-xA(n)-ni*
that	elder.sister-REF	NEG+PRF.P-3SG	hear+NIM	contradict-VSF-PRF.P-3SG

彼は姉の言うことを聞かなかった。Он не слушал свою сестру.

[7.3.1.23]

ǰiŋ	***suddəəki.***
ǰiŋ	*suddəəki*
very	terrible

恐ろしいことだ。Очень страшно.

[108] 澗潟（1981）、池上（1997）によると、南方言の *xaakpan-*は「追いつく」という意味の動詞であるが、ここでは「追いかける」の意味で用いられている。

7.3.2　アザラシ―海の主

2011 年 3 月 24 日、ロシア連邦サハリン州ドリンスク市にて、ビビコワ　エレーナ　アレクセーヴナから採録した。



写真 7-31

ポロナイスク子ども美術学校生徒によるイラストのカード『オロク民話のイラスト』*Illjusuratsii k orokskim skazkam*.（2007, Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe oblastnoe knizhnoe izdatel'stvo）（発行に 2007 年サハリン北方先住少数民族共生発展計画・社会発展プログラムの助成を得ている）

この民話は、もともと Petrova（1967: 140-143）にウイルタ語とロシア語の対訳で掲載されたもので、著者であるペトローワ T. I.が 1937 年に Getta 氏族のパウラ　パウロワ（Pavla Pavlova）という人物から採録されたサフリ *saxuri*（おとぎ話）である。ロシアではウイルタの民話「アザラシ―海の主」として知られ、さまざまな出版物やインターネットでも紹介されているほか、サハリンでは**写真 7-31** のイラストカードにも掲載されている。筆者の知る限り、出版されているなかでウイルタ語の原文を載せているのは、Petrova（1967: 140-143）のみである。

この民話は、2011 年の夏に予定されていた北海道立北方民族博物館の特別展で紹介するために、ビビコワにウイルタ語で語ってもらったものである。ビビコワは、**写真 7-31** のイラストカードのカバー裏にロシア語で書かれているテキストをウイルタ語に訳して筆記した。訳す際 Petrova（1967）は見なかったので、かつて 1937 年に採録されたテキストとは異

なる、ビビコワ独自のウイルタ語訳となった。

筆者は、ビビコワが原稿を読み上げたところの録音（20110324_1MLG_BEA.WAV）、ビビコワの原稿、イラストカードのロシア語テキストを相互に参照して、書き起こしと訳付を行った。表記は原稿ではなく、ビビコワの発音にしたがう。なお、語りの録音時間は 2 分 35 秒であった。

なお、この採録に先立ち、前節同様にオシポワ A. N.に依頼して、ビビコワの語りに合せて、内容をモチーフにした切り絵を制作していただいた（**図 7-32**）。オシポワによる作品は、同特別展「ウイルタとその隣人たち　サハリン・アムール・日本　つながりのグラデーション」で展示されたほか、ビビコワの語りと合わせて同展図録（北海道立北方民族博物館 2011）に掲載されている。

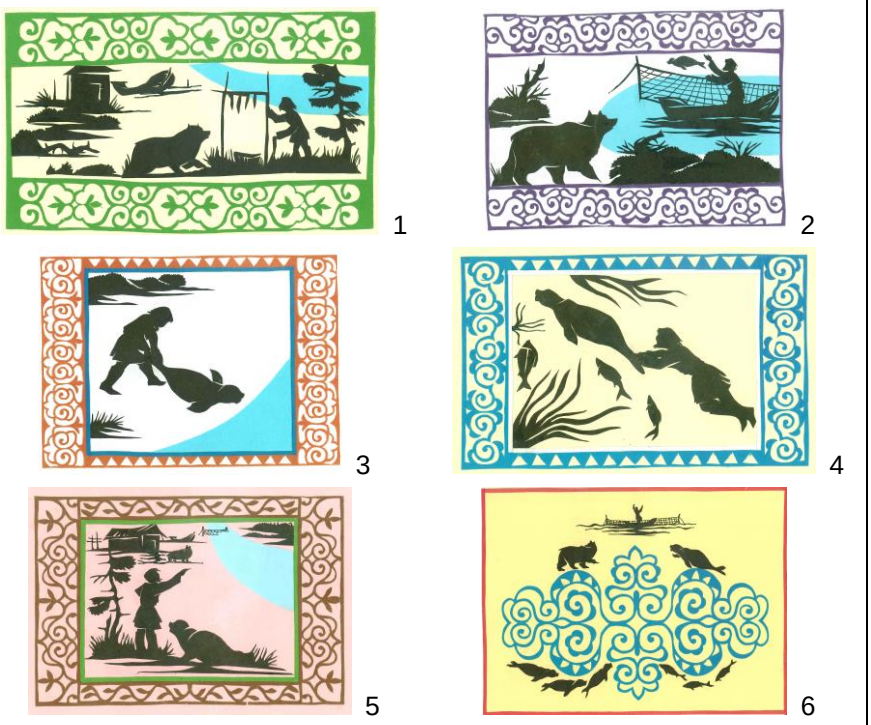


図 7-32

切り絵「海の主―アザラシ」（オシポワ A. N.作；北海道立北方民族博物館所蔵資料 H23.8.1-6）　※　数字はあらすじ順

[7.3.2.01]

pəətə	***namu***	***ədəni.***
pəətə	*namu*	*ədə-ni*
seal	sea	god-3SG

アザラシ―海の主　Нерпа - владычица моря

[7.3.2.02]

uilta	***saxurini.***
uilta	*saxuri-ni*
Uilta	story-3SG

ウイルタのおとぎ話　Уйльтинская сказка

[7.3.2.03]

duwa	***uni***	***daaduni***	***biччini***	***mapa***
duwa	*uni*	*daa-du-ni*	*bi+či(n)-ni*	*mapa*
in.summer	river	mouth-DAT-3SG	COP+PRF.P-3SG	old.man

sundattaa	***təlixəni.***
sundatta+bA	*təli-xA(n)-ni*
fish+ACC	cut.up-PRF.P-3SG

夏、ある川の河口で、おじいさんが魚を干していました。Летом в устье одной реки жил старик, рыбу заготовлял.

[7.3.2.04]

nooni	***geeda***	***bөjөmbo***	***uǰixəni.***
nooni	*geeda*	*bөjө(n)-bA*	*uǰi-xA(n)-ni*
3SG.NOM	one	beast-ACC	bring.up-PRF.P-3SG

そのおじいさんは一匹のクマを飼っていました。Он одного медвадя воспитывал.

[7.3.2.05]

bөjөdu	***biччini***	***tunda***	***ananiŋuni.***
bөjө-du	*bi+či(n)-ni*	*tunda*	*anani-ŋu-ni*
beast-DAT	COP+PRF.P-3SG	five	year-AL-3SG

クマは 5 才でした。Медведь его был пяти лет.

[7.3.2.06]

mapa	***bөjөŋubi***	***puttəŋəči*** [109]	***uǰixəni.***
mapa	*bөjө-ŋu-bi*	*puttə-ŋAči*	*uǰi-xA(n)-ni*
old.man	bear-AL-REF	child-LIKE	bring.up-PRF.P-3SG

おじいさんは自分のクマをわが子のように育てました。Старик своего медведя, как своего ребёнка воситывал.

[7.3.2.07]

sundattaa	***bəindəmi***	***bөjөŋubi***	***məənǰi***	***gəsə***
sundata+bA	*bəi-ndA-mi*	*bөjө-ŋu-bi*	*məənǰi*	*gəsə*
fish+ACC	catch-DIT-COOR.C	bear-AL-REF	REF.DAT	together

[109] 原稿では *puttəbiŋəči* とあるが、ここではビビコワの発音にしたがって表記した。

orogbukki	***biччini.***
orok-bukki	*bi+či(n)-ni*
take-HBT	COP+PRF.P-3SG

魚を獲りに行くときは、クマを一緒に連れて行きました。Рыбу идя промышлять, медведя с собой брал...

[7.3.2.08]

geedara	***səksə***	***adullee***	***tuləmi,***	***sundattaa***
geedara	*səksə*	*aduli+bA*	*tulə-mi*	*sundatta+bA*
once	evening	net+ACC	gill-COOR.C	fish+ACC

dapaitami	***unidu***	***pəətə***	***toosiwani***
dapa-kitA-mi	*uni-du*	*pəətə*	*too-si-bA-ni*
catch-ITT-COOR.C	river-DAT	seal	lie-IM.P-ACC-3SG

itəxəni.
itə-xA(n)-ni
see-PRF.P-3SG

あるとき、晩に網を取り付けて、魚を獲ろうとしていると、川にアザラシが寝そべっているのを見つけました。Однажды вечером сети ставя, собираясь рыбу ловить, по направлению излучины реки посмотрел- нерпа лежит.

[7.3.2.09]

pəətə	***ǰiŋ***	***peemura,***	***ǰiŋ***	***irgala***	***biччini.***
pəətə	*ǰiŋ*	*peemura*	*ǰiŋ*	*irga-lA*	*bi+či(n)-ni*
seal	very	spotted	very	pattern-ADJ	COP+PRF.P-3SG

アザラシは、とても良いまだら模様・ぶち模様でした。Та нерпа очень пятнистая (пёстрая).

[7.3.2.10]

mapa	***noomboni***	***itəgəччi***	***məənə***	***bөjөŋutəkki***
mapa	*noomboni*	*itə-kAччi*	*məənə*	*bөjө-ŋu-tAkki*
old.man	3SG.ACC	see-SUB.C	REF.NOM	bear-AL-REF.DIR

unǰini,	***nөkөө,***	***sii***	***ugdaari***	***itəччu,***
un-ri-ni	*nөkөө*	*sii*	*ugda+bAri*	*itə-či+ru*
say-IM.P-3SG	my.boy	2SG.NOM	boat+REF.PL	see-ITR+IMP

bii	***ŋənneewi***	***waabuǰǰi.***
bii	*ŋənə+ri-wi*	*waa-buǰǰi*
1SG.NOM	go+IM.P-1SG	kill-PURP.REF

おじいさんはそれを見て、クマに言います、「ぼうや、おまえは私たちの舟を見ていなさい、私は狩りに行く」Старик, её увидевши, своему медведю говорит: “Ну, око, ты лодку карауль, я иду убивать ... ”

[7.3.2.11]

mapa	***pəətəmbə***	***bagǰikkeeni***	***dapaxani.***
mapa	*pəətə(n)-bA*	*bagǰi-kkee-ni*	*dapa-xA(n)-ni*
old.man	seal-ACC	leg-PRL-3SG	catch-PRF.P-3SG

おじいさんはアザラシの足を捕らえました。Старик нерпу за ласты схватил.

[7.3.2.12]

pəətəŋuni	***ǰiŋ***	***seetosini***	***muutəi***	***toonisini.***
pəətə-ŋu-ni	*ǰiŋ*	*seeto-si-ni*	*muu-tAi*	*tooni-si-ni*
seal-AL-3SG	very	struggle-IM.P-3SG	water-DIR	pull-IM.P-3SG

アザラシは激しくあばれて、水の方に逃げていきます。Нерпа барахтается и в воду дёргает.

[7.3.2.13]

mapa	***mərəčči**ni,***	***bii***	***simbee***	***xaimiddaa***
mapa	*mərəči+ri-ni*	*bii*	*simbee*	*xai-mi=ddAA*
old.man	think+IM.P-3SG	1SG.NOM	2SG.ACC	what-COOR.C=EMPH

əsiwi	***čiində.***
ə-si-wi	*čiin-rA*
NEG-IM.P-1SG	let.go-NIM

おじいさんは思います、「わしは何としてもおまえを放さんぞ。Старик думает: “Я тебя ни за что не выпушу.

[7.3.2.14]

bii	***sinǰi***	***təтөəǰǰi***	***andusilami.***
bii	*sinǰi*	*təтөə-ǰǰi*	*andu-silA-mi*
1SG.NOM	2SG.INS	clothes-REF.DSG	make-NFUT.F-1SG

わしはおまえで自分の服を作るんじゃ」と。Я из тебя для себя одежду сделаю.”

[7.3.2.15]

tarittəə	***pəətə***	***mapamba***	***muutəi***	***tooччini.*** [110]
tarittəə	*pəətə*	*mapa(n)-bA*	*muu-tAi*	*toon-či(n)-ni*
at.once	seal	old.man-ACC	water-DIR	pull-PRF.P-3SG

そのとき、アザラシがおじいさんを水に引きずり込んでしまいました。Как-никак, нерпа старика в воду стащила...

[7.3.2.16]

tarittəə	***pəətə***	***mapamba***	***muutəi***	***tooччini.***
tarittəə	*pəətə*	*mapa(n)-bA*	*muu-tAi*	*toon-či(n)-ni*
at.once	seal	old.man-ACC	water-DIR	pull-PRF.P-3SG

[110] 原稿では *toosiwani* とあるが、ここではビビコワの発音にしたがって表記した。この一文を次の[7.3.2.16]でも反復している。

そのとき、アザラシがおじいさんを水に引きずり込んでしまいました。Как-никак, нерпа старика в воду стащила.”

[7.3.2.17]

mapa	***əsini***	***čiində.***
mapa	*ə-si-ni*	*čiin-rA*
old.man	NEG-IM.P-3SG	let.go-NIM

おじいさんは放しません。Старик не отпускает.

[7.3.2.18]

pəətə	***mapamba***	***muutəi***	***iiwuxəni.***
pəətə	*mapa(n)-bA*	*muu-tAi*	*ii-bu-xA(n)-ni*
seal	old.man-ACC	water-DIR	enter-TR-PRF.P-3SG

アザラシはおじいさんを水へ入れました。Нерпа старика в воду втащила.

[7.3.2.19]

suktataini.

sukta-tAi-ni

deep-DIR-3SG

その深みへ。В глубь моря.

[7.3.2.20]

mapa	***əsini***	***saara***	***xaidu***	***biinee.***
mapa	*ə-si-ni*	*saa-rA*	*xai-du*	*bi+ri-ni+kA*
old.man	NEG-IM.P-3SG	know-NIM	what-DAT	COP+IM.P-3SG+WHQ

おじいさんは、自分がどこにいるのか、わかりません。Старик, куда он ушёл, не знает.

[7.3.2.21]

čimai	***mapa***	***pəətəndoo***	***ŋənəxəči***	***mapa***	***dukuni***
čimai	*mapa*	*pəətə-ndoo*	*ŋənə-xA(n)-či*	*mapa*	*duku-ni*
morning	old.man	seal-COM	go-PRF.P-3PL	old.man	house-3SG

baaruni.

baaru-ni

toward-3SG

朝、おじいさんはアザラシを連れて、おじいさんの家のほうへ行きました。Утром старик с нерпой ушли, до дома старика дошли.

[7.3.2.22]

mapa	***dukuduni***	***bөjө***	***umuukə***	***biini.***
mapa	*duku-du-ni*	*bөjө*	*umuukə*	*bi+ri-ni*
old.man	house-DAT-3SG	bear	alone	COP+IM.P-3SG

おじいさんの家には、クマが一人ぼっちです。В доме старика медведь в одиночку живёт.

[7.3.2.23]

mapa	***unǰini***	***bəjətoi,***	***bəjəə,***	***bii***	***simbee***
mapa	*un-ri-ni*	*bəjə-tAi*	*bəjə+kAA*	*bii*	*simbee*
old.man	say-IM.P-3SG	bear-DIR	bear+EXC	1SG.NOM	2SG.ACC

pəətətəi,	***namu***	***ǰaŋgeetaini***	***buuriwi.***
pəətə-tAi	*namu*	*ǰaŋgee-tAi-ni*	*buu-ri-wi*
seal-DIR	sea	official-DIR-3SG	give-IM.P-1SG

おじいさんはクマに言います、「クマや、わしはおまえを海の主アザラシにささげよう。」
Старик медведю говорит: “Медведь, я тебя нерпе, царице моря, отдаю”.

[7.3.2.24]

mapa	***bəjəmbo***	***pəətətəi***	***buuxəni.***
mapa	*bəjə(n)-bA*	*pəətə-tAi*	*buu-xA(n)-ni*
old.man	bear-ACC	seal-DIR	give-PRF.P-3SG

おじいさんはクマをアザラシに差し出しました。Старик медведя нерпе отдал...”

[7.3.2.25]

pəətə	***mapatai***	***unǰini,***	***bii***	***sittəi***
pəətə	*mapa-tAi*	*un-ri-ni*	*bii*	*sittəi*
seal	old.man-DIR	say-IM.P-3SG	1SG.NOM	2SG.DIR

tamaliwi	***ilaa***	***anannee***	***sundattalba,***	***pəətəlbə***
tama-li-wi	*ilaa*	*anani+bA*	*sundatta-l-bA*	*pəətə-l-bA*
pay-FUT.P-1SG	three	year+ACC	fish-PL-ACC	seal-PL-ACC

bəičissəəri,	***ǰiŋ***	***uliŋgasalba.***
bəi-či-ssAAri	*ǰiŋ*	*uliŋga-sAl-bA*
go.fishing-ITR-FUT.IMP	very	good-PL-ACC

アザラシはおじいさんに言います、「私はおまえにほうびをやろう。3 年の間、魚とアザラシを獲りなさい、とても良いものを。Нерпа старику говорит: “Я тебе за твоего медведя плачу: три года рыбу, нерпу буду позволять промышлять, три года буду позволять хорошо жить, три года лучших нерп выбирая,

[7.3.2.26]

bii	***noomboči***	***sittəi***	***ŋənnəulliwi.***
bii	*noomboči*	*sittəi*	*ŋənə+boon-li-wi*
1SG.NOM	3PL.ACC	2SG.DIR	go+CAUS-FUT.P-1SG”

私は魚とアザラシたちをおまえのところへ行かせよう。」к тебе буду заставлять приходить”.

[7.3.2.27]

taraŋači	***ukkəčči***	***pəətə***	***ŋənuxəni.***
taraŋači	*un-kAčči*	*pəətə*	*ŋənu-xA(n)-ni*
like.that	say-SUB.C	seal	return-PRF.P-3SG

そう言って、アザラシは帰って行きました。Так, когда сказала, нерпа ушла.

[7.3.2.28]

təddəəddəə,	***mapa***	***ilaa***	***anannee***	***sundattalba***	***pəətəlbə***
təddəə=ddAA	*mapa*	*ilaa*	*anani+bA*	*sundatta-l-bA*	*pəətə-l-bA*
really=EMPH	old.man	three	year+ACC	fish-PL-ACC	seal-PL-ACC

ǰiŋ	***barambaa***	***waaxani,***	***bajaččini.***
ǰiŋ	*bara(n)-bA+kAA*	*waa-xA(n)-ni*	*bajan-či(n)-ni*
very	a.lot-ACC+EXC	kill-PRF.P-3SG	become.rich-PRF.P-3SG

本当に、おじいさんは三年間、魚やアザラシをとてもたくさん獲って豊かになりました。Верно, старик три года рыбы, нерп мнодество промышлял...”

[7.3.2.29]

ələ.

ələ

enough

おしまい。Всё.

［以上、7.3.2 は北海道立北方民族博物館（編 2011: 36-37）を加筆・修正したものである］

7.4 歌謡と詩

7.4.1 歌謡(1)：ベリー摘みの歌

この歌謡は、2007 年 10 月 13 日にユジノ・サハリンスクにおいて津曲敏郎（北海道大学文学研究科教授）がビビコワ E. A.による口唱を採録した音声データにもとづく。

これと同一の歌は、2009 年 6 月 2 日に北海道大学で行われたコンサート「講演と唄の夕べ：サハリン先住民言語を伝え、残す」において、ビビコワとフェジャエワ I. Ja.が公演した（山田 2010b も参照のこと）。その他にも、この歌はさまざまなかたちで公開・記録されている。まず、歌詞については池上（2002: 127）、Ikegami et al.（2008: 65；**図 7-33**）に掲載されている。

しかし、以上に挙げたデータは、それぞれ歌い手や歌い方（人数や演出のしかた）などが異なるだけでなく、旋律や歌詞そのものにも少なからぬ差異が見られる。池上（2002: 127）では、セミョーノワ　アンナ　ワシーリェヴナ（Semjonova Anna Vasil’evna）（**写真 7-9**）の口唱による音声資料が訳注とともに載っているが、旋律や歌詞の一部が異なる。文字教本

（Ikegami et al. 2008: 65；**図 7-33**）では、北方言（略号で(с)）と南方言（略号で(ю)）の歌詞を併記している。

また、この歌謡は**図 7-33** の挿絵が描くような川岸での対話を情景としたもので、[7.4.1.02]～[7.4.1.10]が対話形式になっている。この記録および池上（2002）では一人の歌い手が単独ですべてを歌ったが、上述の他の記録では歌い手が複数おり、うち一人が[7.4.1.02][7.4.1.04][7.4.1.06][7.4.1.08][7.4.1.10]を、残りの一人あるいは複数人が[7.4.1.03][7.4.1.05][7.4.1.07][7.4.1.09]を、[7.4.1.01][7.4.1.11]を全員で歌うという形式で演じられた。



図 7-33
ウイルタ語教科書に載る歌謡(1)の情景とテキスト（Ikegami et al. 2008: 65 より転載）

さらに、ウイルタの近隣諸民族にもこれと類似する歌謡があることがわかっている。たとえば、ニヴフでは、旋律や歌詞の内容がウイルタのそれとほぼ同一の歌謡を白石・ローク（2003: 73-75, 111；同書付属 CD も確認）が記録している。ナーナイにも同様の歌謡があり、戦後にポロナイスク市へ移住してきたナーナイの人たちによって、サハリンでも歌い継がれている。

[7.4.1.01]

xainana nainananaa （×3 回）

xainana nainananaa

hainana nainanana

ハイナナ、ナイナナナー

[7.4.1.02]

xoottoi	***ŋənneesugə***	（×3 回）
xoottoi	*ŋənə+ri-su=kA*	
where.DIR	go+IM.P-2PL=WHQ	

「どこへ行くの？」

[7.4.1.03]

baisai	***dauripoo***	（×3 回）
baisai	*dau-ri-pu+kAA*	
to.the.other.side	go.across-IM.P-1PL+EXC	

「向こう岸へ渡るんだ」

[7.4.1.04]

xaiwa	***gannisugə***	（×3 回）
xai-bA	*gani+ri-su=kA*	
what-ACC	go.taking+IM.P-2PL=WHQ	

「何をとりに行くの？」

[7.4.1.05]

səduximbə	***gatannipoo***	（×3 回）
səduxi(n)-bA	*gatani+ri-pu+kAA*	
berry-ACC	go.gathering+IM.P-1PL+EXC	

「ベリーを集めに行くんだ」

[7.4.1.06]

mimbeeddə	***orogdusoo***	（×3 回）
mimbee=ddA(A)	*orok-du-su+kAA*	
mimbee=EMPH	bring-REV-IMP+EXC	

「おれも連れて行けよ」

[7.4.1.07]

simbee	***əǰilipu***	***orogdo***	（×3 回）
simbee	*ə-ǰili-pu*	*orok-du+rA*	
2SG.ACC	NEG-FUT.P?-1PL	bring-REV+IMP	

「お前は連れて行かないよ」

[7.4.1.08]

xaimi	***əǰilisu***	***orogdo***	（×3 回）
xai-mi	*ə-ǰili-su*	*orok-du+rA*	
do.what-COOR.C	NEG-FUT.P?-2PL	bring-REV+NIM	

「どうして連れて行かないの？」

[7.4.1.09]

ugdapu	***daluptuxanee***	（×3 回）
ugda-pu	*daluptu-xA(n)-ni+kAA*	
boat-1PL	be.filled-PRF.P-3SG+EXC	

「おれたちの舟がもう一杯なんだよ」

[7.4.1.10]

uliŋgaǰi	***ŋənnəusoo***	（×3 回）
uliŋga-ǰi	*ŋənə+ru-su+kAA*	
good-INSgo+IMP-2PL+EXC		

「良く行けよ［気をつけて行けよ］」

[7.4.1.11]

xainana	***nainananaa***	（×3 回）
xainana	*nainananaa*	
hainana	nainanana	

ハイナナ、ナイナナナー

［以上、7.4.1 は山田・荒山（2010: 65-67）の内容を抜粋し、一部修正したものである］

7.4.2　歌謡(2)：チュミルタカーヌの歌

この歌謡は、2007 年 10 月 13 日にロシア連邦サハリン州ユジノ・サハリンスク市において津曲敏郎がビビコワ E. A.による口唱を採録した音声データにもとづく。ビビコワが 1991 年にミヘエワ　M. S.が歌ったのを聞いて覚えたものだという。

[7.4.2.00]

gəəgəŋgəə	***gəəgəŋgəə***	***gəəgəŋgəə***	***gəəgəŋgəə***
gəəgəŋgəə	*gəəgəŋgəə*	*gəəgəŋgəə*	*gəəgəŋgəə*
gaganga	gaganga	gaganga	gaganga

ガーガンガー、ガーガンガー、ガーガンガー、ガーガンガー

[7.4.2.01]

təəməi	***uni***	***daadunee***
təəməi	*uni*	*daa-du-ni+kAA*
Tym	river	river.mouth-DAT-3SG+EXC

tori	***gasani***	***biččinee***
tori	*gasa-ni*	*bi+či(n)-ni+kAA*
Tori	village-3SG	COP+PRF-3SG+EXC

トゥイミ川[111]の河口にね、トリサ（族）の集落があったよ

[7.4.2.02]

tari	***tori***	***gasadunee***	***čumiltakaanu***	***biččinee***
tari	*tori*	*gasa-du-ni+kAA*	*čumiltakaanu*	*bi+či(n)-ni+kAA*
that	Tori	village-DAT-3SG+EXC	Chumiltakaanu	COP+PRF-3SG+EXC

そのトリサ（族）の集落にね、チュミルタカーヌ（という人が）いたよ

[7.4.2.03]

čumiltakaanu	***narinee***	***asilu***	***biččinee***
čumiltakaanu	*nari-ni+kAA*	*asi-lu*	*bi+či(n)-ni+kAA*
Chumiltakaanu	man-3SG+EXC	wife-PROP	COP+PRF.P-3SG+EXC

チュミルタカーヌという人にはね、妻がいたんだよ

[7.4.2.04]

čumiltakaanu	***narinee***	***baju***	***nari***	***biččinee***
čumiltakaanu	*nari-ni+kAA*	*baju*	*nari*	*bi+či(n)-ni+kAA*
Chumiltakaanu	man-3SG+EXC	lazy	man	COP+PRF.P-3SG+EXC

チュミルタカーヌという人はね、怠け者だったよ

[7.4.2.05]

čumiltakaanu	***asinee***	***noottoi***	***sorri***	***biččinee***
čumiltakaanu	*asi-ni+kAA*	*noottoi*	*sori+ri*	*bi+či(n)-ni+kAA*
Chumiltakaanu	wife-3SG+EXC	3SG.DIR	quarrel+IM.P	COP+PRF.P-3SG+EXC

チュミルタカーヌの妻はね、彼とけんかしていたよ

[7.4.2.06]

čumiltakaanu	***asinee***	***umbukki***	***biččinee***
čumiltakaanu	*asi-ni+kAA*	*un-bukki*	*bi+či(n)-ni+kAA*
Chumiltakaanu	wife-3SG+EXC	say-HBT	COP+PRF.P-3SG+EXC

チュミルタカーヌの妻はね、いつも言っていたんだよ

[7.4.2.07]

čumiltakaanu	***bajanee***	***pumiktəə***	***dəptumi***	***balǰixa***
čumiltakaanu	*baja-nee*	*pumiktə+bA*	*dəptu-mi*	*balǰi-xA(n)*
Chumiltakaanu	rich-PERS	gnat+ACC	eat-COOR.C	grow-PRF.P

「チュミルタカーヌという金持ちは、羽虫を食べて育ったのさ」

[111] トゥイミ Tym'はサハリン島中部を源流とし東海岸でオホーツク海に注ぐ河川で、現在河口にはノグリキ Nogliki（ウイルタ名：*Naxulakka*）がある（**図 7-2** 参照）。

[7.4.2.08]

gəəgəŋgəə	***gəəgəŋgəə***	***gəəgəŋgəə***	***gəəgəŋgəə***
gəəgəŋgəə	*gəəgəŋgəə*	*gəəgəŋgəə*	*gəəgəŋgəə*
gaganga	gaganga	gaganga	gaganga

ガーガンガー、ガーガンガー、ガーガンガー、ガーガンガー

［以上、7.4.2 は山田・荒山（2010: 67-68）の内容を抜粋し、一部修正したものである］

7.4.3　歌謡(3)：お祭りの歌

この歌謡は、2008 年 4 月 15 日にロシア連邦サハリン州ユジノ・サハリンスク市において津曲敏郎がビビコワ E. A.による口唱を採録した音声データにもとづく。なお、採録の際は山田も同席した。

これと同じ歌謡は、2008 年 4 月 14 日にユジノ・サハリンスク市内で開催されたウイルタ語文字教本（Ikegami et al. 2008）の出版記念式典でも公演された。また、2008 年 9 月に筆者（山田）がワール村でビビコワとフェジャエワの合唱を録音したデータ（未公開）もあるが、本稿のデータとは旋律や歌詞に異なる部分がある。歌うたびに、若干歌詞を変えているようである。

[7.4.3.01]

nəlutəjǰi	***andučimbi,***	***irgaǰi***	***irgaxambi***
nəlutə-ǰǰi	*andu-či(n)-bi*	*irga-ǰi*	*irga-xA(n)-bi*
breastplate-REF.DSG	make-PRF.P-1SG	ornament-INS	decollate-PRF.P-1SG

自分の胸当て[112]として作った、刺繍で模様をつけた

[7.4.3.02]

uliŋgajoo	***uliŋgajoo***
uliŋga=joo	*uliŋga=joo*
good=?	good=?

きれいでしょう、きれいでしょう

[112] *nəlutə*「胸当て」という訳は、ビビコワの説明にもとづく。北方言による語彙を豊富に載せた Ozolinja（2001: 219）および Ozolinja & Fedjaeva（2003: 106）にある語彙 *nolu* ~ *nəlu*「前掛け、（女性用）胸当て」と同じものを指していると思われる。この用途や特徴については Roon（1996: 138）に「胸当て *nəllu*」として詳述されている。同書によると、これは花嫁の婚礼衣装と葬儀服の一部であるという。一方、南方言で同じ語源に遡ると考えられる語彙には、澗潟（1981: 142）に *nəluu*「死人にかける前垂れ」が載る。

[7.4.3.03]

giləptuǰǰi	***andučimbi,***	***nixaǰi***	***irgaxambi***
giləptu-ǰǰi	*andu-či(n)-bi*	*nixa-ǰi*	*irga-xA(n)-bi*
armband-REF.DSG	make-PRF.P-1SG	beads-INS	decollate-PRF.P-1SG

自分の袖当て[113]として作った、ビーズ[114]で模様をつけた

[7.4.3.04]

uliŋgajoo	***uliŋgajoo***
uliŋga=joo	*uliŋga=joo*
good=?	good=?

きれいでしょう、きれいでしょう

[7.4.3.05]

giləptubi	***tətuxəmbi,***	***nəlutəbi***	***tətuxəmbi***
giləptu-bi	*tətu-xA(n)-bi*	*nəlutə-bi*	*tətu-xA(n)-bi*
armband-REF	put.on-PRF.P-1SG	breastplate-REF	put.on-PRF.P-1SG

自分の袖当てを着けた、自分の胸当てを着けた

[7.4.3.06]

əsi	***jaajjeewi,***	***məurree***	***məurreewi*** [115]
əsi	*jaaja+ri-wi*	*məuri+bA*	*məuri+ri?-bi*
now	sing+IM.P-1SG	dance+ACC	dance+IM.P?-1SG

今歌うよ、踊りを踊るよ

[7.4.3.07]

uliŋgajoo	***uliŋgajoo***
uliŋga=joo	*uliŋga=joo*
good=?	good=?

きれいでしょう、きれいでしょう

［以上、7.4.3 は山田・荒山（2010: 69-70）の内容を抜粋し、一部修正したものである］

7.4.4　歌謡(4)：ウイルタ語で話そう

この歌謡は、2008 年 4 月 15 日にロシア連邦サハリン州ユジノ・サハリンスク市で津曲敏

---

[113] *giləptu*「袖当て」という訳は、Ozolinja（2001: 61）、Ozolinja & Fedjaeva（2003: 32）にもとづく。南方言では、澗潟（1981: 142）に *geleptu, giləptu*「腕輪、手首の飾り」、池上（1997: 70）に *giləptu*「腕輪（中国からの渡来物）」が載り、珠玉で作った腕輪のことをいうようである（澗潟（1981）の巻末写真も参照）。

[114] *nixa*「ビーズ」という訳は、ビビコワの説明および Ozolinja & Fedjaeva（2003: 196）にもとづく。

[115] *məurreewi*「（私は）踊る」の部分は、通常の話しことばなら *məuriwi* という語形となる。ここでは本稿の音声データにおける歌い手の発音にもとづいて表記した。

郎がビビコワ E. A.による口唱を採録した音声データにもとづく。なお、採録の際は山田も同席した。

この歌は、歌い手であるビビコワ自身の作詞・作曲によるものだという。2008 年 4 月 14 日に同市内で開催されたウイルタ語文字教本（Ikegami et al. 2008）の出版記念式典において子どもたちが合唱で披露した。

[7.4.4.01]

uilta	***narisalni***	***kəssəəri***	***wəədəxəpu***
uilta	*nari-sAl-ni*	*kəsə+bAri*	*wəədə-xA(n)-pu*
Uilta	man-PL-3SG	language+REF.PL	lose-PRF.P-1PL

ウイルタの人々は、自分たちの母語を忘れてしまった

[7.4.4.02]

orki	***tari***	***orki***	***taree***
orki	*tari*	*orki*	*tari+kAA*
bad	that	bad	that+EXC

愚かなことだ、それは

[7.4.4.03]

uilta	***bičixxəəni***	***baaxapu***	***əsiləkkə***
uilta	*bičixə+bA-ni*	*baa-xA(n)-pu*	*əsi=lAkkA*
Uilta	letter+ACC-3SG	find-PRF.P-1PL	now=TOP

ウイルタの文字を私たちは見つけた

[7.4.4.04]

uliŋga	***tari***	***uliŋga***	***taree***
uliŋga	*tari*	*uliŋga*	*taree*
good	that	good	that+EXC

すばらしいことだ、それは

[7.4.4.05]

uiltasal	***doolǰusu,***	***kəssəəri***	***saarusu***
uilta-sAl	*doolǰi+ru-su*	*kəsə+bAri*	*saa-ru-su*
Uilta-PL	listen+IMP-2PL	language+REF.PL	know-IMP-2PL

ウイルタの人たちよ聞きなさい、自分たちのことばを知りなさい

[7.4.4.06]

əǰǰeesu	***omgo,***	***əǰǰeesu***	***omgo***
ə+ru-su	*omgo+rA*	*ə+ru-su*	*omgo+rA*
NEG+IMP-2PL	forget+NIM	NEG+IMP-2PL	forget+NIM

忘れるな、忘れるな

[7.4.4.07]

uiltadairusu,	***uiltadairisu,***	***uiltadairipu*** [116]
uilta-dAi-ru-su	*uilta-dAi-ri-su*	*uilta-dAi-ri-pu*
Uilta-LNG-IMP-2PL	Uilta-LNG-IM.P-2PL	Uilta-LNG-IM.P-1PL

ウイルタ語で話せ、ウイルタ語で話そう、ウイルタ語で話すよ

[7.4.4.08]

gə,	***aja***
gə	*aja*
INTJ	good

さあ良いね

［以上、7.4.4 は山田・荒山（2010: 70-71）の内容を抜粋し、一部修正したものである］

7.4.5 詩：ロシア人もフランス人も

この詩は、ビビコワ E. A.の創作で、ノグリキ町のウイルタ語教室で教材として用いられている。2011 年 2 月 18 日に、筆者が教室に参加したとき子どもたちが暗唱するようすを動画で記録した。そのほか、2012 年 9 月 13 日にユジノ・サハリンスク市にあるサハリン州立郷土博物館で行われた世界人権宣言ウイルタ語訳のプレゼンテーションでも、ノグリキ町の子どもたちが暗唱して見せた。

[7.4.5.01]

saariči	***lučа***	***kəsəbi***
saa-ri-či	*lučа*	*kəsə-bi*
know-IM.P-3PL	Russian	language-REF

ロシア人は自分のことばを知ってる

[7.4.5.02]

pilantuuǰi	***məəniŋi***
pilantuuǰi	*məəniŋi*
French	one’s.own

フランス人は自分のを

[116] [7.4.4.07]を歌う際、3 箇所に通常の話しことばでは見られない音[i]を挿入する（例：*uilta[i]dairusu*）。

[7.4.5.03]

saariči,	***ajauriči,***	***čipaali***	***xalasal*** [117]
saa-ri-či	*ajau-ri-či*	*čipaali*	*xala-sAl*
know-IM.P-3PL	love-IM.P-3PL	all	clan-PL

知ってる、愛している、どの民族も

[7.4.5.04]

sii	***uilta***
sii	*uilta*
2SG.NOM	Uilta

あなたはウイルタ

[7.4.5.05]

kəsəbi	***saarisi?***
kəsə-bi	*saa-ri-si*
language-REF	know-IM.P-2SG

自分のことばを知ってる？

[7.4.5.06]

əmi	***saara***	***tačiroo***
ə-mi	*saa-rA*	*tači-ru+kAA*
NEG-COOR.C	know-NIM	learn-IMP+EXC

知らないなら、学ぼうよ！

[7.4.5.07]

tačipeemali	***kəsəsi***
tači-pee=mAli	*kəsə-si*
learn-COND.C=LMT	language-2SG

学ぶだけであなたのことばが

[7.4.5.08]

sittəi	***lakəə***	***olini.***
sittəi	*lakəə*	*o-li-ni*
2SG.DIR	near	become-FUT.P-3SG

あなたと仲良しになるよ。

[117] *xala* には氏族という意味もあるが、ここでは母語の異同でくくられる民族集団のことを指している。

おわりに

本稿では、ウイルタ語をめぐる言語接触の概要と先行研究の流れを明らかにしたうえで、これまで体系的に記述されることのなかったウイルタ語北方言の文法の一部を明らかにした。本稿で見てきた北方言の特徴には、母音音素 *ɵ* の出現制約、接着と融合の揺れに見られる文法の簡略化傾向、エウェンキー語から借用されたと考えられる文法形式などが見られる。今後は本稿で明らかになった特徴をさらなる記述に適用しながらウイルタ語文法の考察対象を広げ、また、ウイルタ語の接触言語との比較を進める必要がある。

ウイルタ語が「消滅の危機に瀕した言語」と呼ばれて久しい。事実、上述のように 2013 年現在でウイルタ語を話せる人は 10 人に満たないと考えられる。しかしながら、その 10 人足らずのなかには、互いの会話のなかで意識的にウイルタ語を用い、草の根的な教育活動によって次の世代にウイルタ語を伝えようと努力している人たちがいる。また、ウイルタ語の研究には過去に第三者が記録したウイルタ語を集成し、比較言語学と言語調査にもとづいてウイルタ語を記述した研究者による成果の蓄積がある。加えて、未整理の記録があることもわかっている。その点で、ウイルタ語の研究に課せられた責務は大きい。

ウイルタ語の特徴に及んだ他言語の影響の研究は、いまだ初期的な段階にある。本稿では、前半で述べた言語接触の概要と後半の文法記述の関連づけが不十分である。この研究を次の段階に進めるために、ウイルタ語研究の蓄積にもとづいて現在を記録しつつ、未整理の記録の資料化にも努めていきたいと考えている。

なお、本稿の資料として収録した北方言テキスト（付録）も、資料の少ないこの言語の研究において重要であると考える。とりわけ、7.2.1 に収録した会話テキストなどは、これまでのウイルタ語資料にない新しい取り組みである。高齢の話者の協力を仰げるうちに、これまで録音したデータを表記・分析することで、この言語の研究の幅を広げてゆきたい。

謝　辞

私がウイルタ語の研究を始めたのは、2005年春に卒業論文のテーマにウイルタ語を選んだことがきっかけでした。あれから今日にいたるまでの8年間を振り返ってみれば、ウイルタ語の研究をやめたいと思ったことは一度もありません。優柔不断で意志の弱い私が一つの研究テーマに継続して取り組んでこられたのは、多くの人たちの導きと支えがあったからです。研究をここで終えるわけではありませんが、これまでお世話になった方々に記して感謝を申し上げます。

津曲敏郎先生には、卒業論文から本論文までずっとご指導をいただいています。学部、大学院と進むあいだ、研究の基礎を教え、何事も強要することなく自主性を伸ばし、お忙しいときでも嫌な顔一つせず優しく導いてくださいました。就職して籍を退いてからも、けしてあきらめずに論文を書くように励ましてくださいました。誰よりもまず、先生に深く感謝を申し上げたいと思います。

2011 年に逝去された池上二良先生からは、直接のご指導を受ける機会がありませんでした。しかし、この8年間、先生の著述や資料、教え子であられた津曲先生ほか研究者の方々、サハリンの調査に協力したウイルタの人たちをとおして、不思議といつも池上先生に導かれてきた気がします。今も研究のなかで先生のお人柄に触れ、ますます尊敬の思いを強くするとともに、壮大な研究の志を遺してくださったことを心から感謝しております。

修士論文や研究論文 I・II の副査としてご指導くださった佐藤知己先生、加藤博文先生、佐々木亨先生に、心よりお礼を申し上げます。私の力が及ばず、これまでの審査でいただいた貴重なご指摘を本論文にすべて反映することができませんでしたが、今後の研究に活かしていけるよう一層努めてまいります。

学部から大学院まで所属した北海道大学では、大変多くの方々からのご指導をいただきました。学部では、上にお名前を挙げた先生方のほかに、とりわけ菊池俊彦先生、天野哲也先生から、本研究に関わるご教示をいただきました。所属した講座である北方文化論講座の皆様には在学中、大変お世話になりました。特に本論文の作成に関して、歌謡の考察を共同してくださった荒山千恵さん、本論文に関する資料の取り寄せに協力してくださった白尚燁さん、事務的な手続きなどについて親身に相談にのり常に励ましてくださった小坂みゆきさんに、記して感謝申し上げます。

また、同講座修了生の永山ゆかりさん、山越康裕さん、山田敦士さんは、専門的な指導だけでなく、研究生活の全般に関して助言をくださいました。将来の不安や経済的な理由から研究の道を断念しようとしたとき、先輩方が力強く励まして進学の道を勧めてくださったおかげで、ここまで研究を続けることができました。

2008 年から行っているサハリンでの調査にご協力くださり、ウイルタ語や関連するさまざまな知識を提供してくださる皆様に、感謝申し上げます。特に、2008 年 4 月からずっとサハリンで私を迎え入れてくださるビビコワ E. A.さん（ノグリキ町）とフェジャエワ I. Ja.さん（ワール村）の献身的なご支援なくしては、現地調査を始めることも続けることもできませんでした。2010～2011 年に長期滞在した折には、お二人と多くの時間をともにし、生活の何から何まで助けていただきました。また、お二人のほかにウイルタ語やウイルタの文化についてご教示をくださったコーヌソワ L. N.さん、クルシナ V. G.さん、キリッロワ E. A.さん、ソロヴィエフ V.さんとそのご家族（以上、ワール村）、ヤマカワ　イチロウさん、ミナト　シリュコさん、故オガワ　タカコさん（以上、ポロナイスク市）、エウェンキー語の調査に応じてくださったマチェヒナ K. F.さん、ボリソワ E. A.さん、ニヴフ語やニ

ヴフの文化のことを教えてくださるサチグン V. N.さん、ローク G. D.さん、パクリナ G. I.さんに、心より感謝申し上げます。

サハリンでは、その他にも多くの方々からのご支援とご助力をいただきました。サハリン州立郷土博物館（ユジノ・サハリンスク市）のローン T. P.館長には、毎回現地調査のためのサハリン渡航手続きをお世話していただいています。また、フィルソワ E. P.さん、レフコフスカヤ A.さん、ソロヴィエワ O. F.さん（以上、サハリン州立郷土博物館）、ロニック Z. L.さん（サハリンエナジー社）、ニトクク E. S.さん（サハリン州立美術館）、ヴォロニナ E.さんには、具体的な手助けをいただきました。ノグリキ町では、オシポワ V. V.さん、チュヴィガイン D.さん、ノグリキ郷土博物館のカルタヴィフ T. A.館長ほか職員の皆様から、ポロナイスク市では、ポロナイスク郷土博物館のサンギ S. V.館長、キタガワ　ユーリさん、ゴルブノフ S. V.さん（当時）ほか職員の皆様、ポロナイスク市立北方民族伝統産業技術伝習指定校全寮制普通科学校第 3 学習院のムィティィン V. L.校長ほか教職員の皆様、キタジマリュボヴィさん、ヤマカワ　マルガリータさん、オオカワ　エレーナさん、民族アンサンブル「ナーニ」から、調査のご協力をたまわりました。その他、2008 年の調査でペヴノフ A. M.さん、トルドワ S. Ju.さん、ブルィキナ M. M.さん、リム S. Ch.さん、2009 年から現在の調査で進藤冬華さん、2010 年の調査で風間伸次郎先生、坂巻正美先生、中田篤さん、田村将人さん、加藤絢子さん、リムスンソクさん、2011 年と 2012 年の調査でチェヒギョンさん、2012 年の調査でテンベニャミンさんからもご助力をいただきました。

調査・研究全般に関して、日頃より、ミソノワ L. I.さん、白石英才先生、奥田統己先生、佐々木冠先生、呉人惠先生、中山俊秀先生、長崎郁さん、丹菊逸治先生、篠原智花さん、廣瀬隆人先生、高橋靖似さん、田村将人さん、水島未記さんから専門的な教示や情報の提供をいただきました。また、2013 年 1 月に資料調査に対応してくださった板橋区立郷土資料館に感謝いたします。

2011 年秋から勤めている北海道立北方民族博物館では、日常業務と個人の研究との両立ができない自分のふがいなさに悩み、先が見えずに落ち込むことが多くありました。そのようなとき、私の状況を理解して優しく励ましてくださる岡田淳子館長や、常に近くで気にかけて見ていてくれる笹倉いる美学芸主幹をはじめ、職員の心遣いに救われてきました。特に本論文の最終段階では、笹倉学芸主幹から甚大な支援と具体的な手助けを受けました。心配と迷惑をかけてばかりであることをお詫びするとともに、深く感謝いたします。

最後に、本研究の内容には直接かかわりませんが、家族にもお礼を言います。母は、在学・休学期間を総じて 11 年に及んだ大学生活を支え見守り、長期の海外調査も反対せずに快く送り出してくれました。また、いつでも明るく応援してくれる二人の姉とその家族は、いつでも私の心の支えです。長く「卒業」を待ってくれた母や姉たちにも、この論文を贈りたいと思います。

※　本研究は科学研究費補助金基盤研究（B）「ツングース系危機言語のテキスト・コーパス作成」（代表：津曲敏郎、課題番号 18320061；2006-2009 年度）、文部科学省科学技術研究費補助金特別研究員奨励費「ウイルタ語の類型的記述にもとづくサハリンの言語接触に関する研究」（課題番号 21・2110；2009-2010 年度）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特別経費「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」（通称：言語ダイナミクス科学研究プロジェクト（LingDy））による研究未開発言語調査派遣（2011 年度）、岡田宏明基金（2012 年度）の助成を受けて行われました。

2013（平成 25）年 3 月

参考文献

池上二良・谷本一之 1974「オロッコ族の歌謡」『北方文化研究』8: 1-28，北海道大学文学部北方文化研究施設.

池上二良・津曲敏郎（訳解）1988『北川源太郎筆録「ウイルタのことば」(2)』（昭和 62 年産ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 9），北海道教育委員会・網走市北方民俗文化保存協会.

池上二良・津曲敏郎（訳解）1990『北川源太郎筆録「ウイルタのことば」(3)』（平成 2 年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 11），北海道教育委員会・網走市北方民俗文化保存協会.

池上二良・津曲敏郎（訳解）1991『北川源太郎筆録「ウイルタのことば」(4)』（平成 2 年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 12），北海道教育委員会・網走市北方民俗文化保存協会.

池上二良 1965「オロッコ族の口頭文芸」『ユーラシア文化研究』1: 137-171.

池上二良 1970「レニングラードで北方言語の調査研究を行なって」『民族学研究』35(2): 216-222［2004『北方言語叢考』: 115-128，北海道大学図書刊行会］

池上二良 1971a「十九世紀なかごろのオロッコ語集」『北方文化研究』5: 79-171，北海道大学文学部北方文化研究施設［2002『ツングース・満州諸語資料訳解』: 154-260，北海道大学図書刊行会］.

池上二良 1971b「ツングース語学入門」『學鐙』68(7): 28-30［2004『北方言語叢考』: 67-111，北海道大学図書刊行会］.

池上二良 1980「アイヌ語のイナウの語の由来に関する小考 : ウイルタ語の *illau* の語原にふれて」『民族学研究』44(4): 393-402［2004『北方言語叢考』: 204-220，北海道大学図書刊行会.

池上二良（解説）1982『ウイルタの暮しと民具』網走市北方民俗文化保存協会.

池上二良（編）1983『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』（昭和 57 年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 5），北海道教育委員会.

池上二良 1984「カラフトのウイルタ族の英雄物語とその伝来」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』52: 1-4，東京外国語大学［2001『ツングース語研究』: 213-221，汲古書院］.

池上二良（編）1986『「ぎりやーく・おろっこ器物解説書」・北川源太郎筆録「ウイルタのことば(1)」』（1985（昭和 60）年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 8），北海道教育委員会・網走市北方民俗文化保存協会.

池上二良 1987「ウイルタ語・オルチャ語研究における B.ピウスツキ」『国立民族学博物館研究報告別冊』5: 275-282［2001『ツングース語研究』: 222-231，汲古書院］.

池上二良 1988「ことばの上からみた東北アジアと日本」『北海道の文化』: 34-44，北海道文化財保護協会［2004『北方言語叢考』: 259-271，北海道大学図書刊行会］.

池上二良 1989a「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』2: 1058-1083，三省堂.

池上二良 1989b「東北アジアの土着言語」三上次男・神田信夫（編）『民族の世界史 3　東北アジアの民族と歴史』: 126-161，山川出版社［2004「東北アジアの土着言語とその分布」『北方言語叢考』: 15-47，北海道大学図書刊行会］.

池上二良 1990「日本語・北の言語間の単語借用」『北海道方言研究会会報』30: 2-11，北海道方言研究会［2004『北方言語叢考』: 272-285，北海道大学図書刊行会］.

池上二良 1993「最近のウイルタ語研究およびウイルタ語の現状」『アークティックサークル　北海道北方民族博物館友の会　季刊誌』6: 4-8，北方文化振興協会［2001『ツングース語研究』:

284-293，汲古書院］.
池上二良 1994a「ウイルタ語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38［2001『ツングース語研究』: 247-283，汲古書院］.
池上二良 1994b「樺太のウイルタ語の感嘆・疑問その他の語尾について」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集：ことばの世界』: 158-167，北海道方言研究会［2001『ツングース語研究』: 94-109，汲古書院］.
池上二良 1994c「アイヌ語の大陸語的要素」北方言語研究者協議会（編）『アイヌ語の集い：知里真志保を継ぐ』: 159-169，北海道出版企画センター［2004『北方言語叢考』: 221-231，北海道大学図書刊行会］.
池上二良 1997『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会.
池上二良 2000「二十世紀初期石田収蔵氏採録のウイルタ語資料について」小西雅徳（編）『特別展　石田収蔵：謎の人類学者の生涯と板橋』: 87-91，板橋区立郷土資料館.
池上二良 2001「ウイルタ語動詞活用大要」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』7: 157-166，文部省特定領域研究(A)：環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-002，大阪学院大学.
池上二良 2002『増訂ウイルタ口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集 16）文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013，大阪学院大学.
遠藤　史 1993『ユカギール語文法概説』（北大言語学研究報告 4）北海道大学文学部言語学研究室.
風間伸次郎 1992「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」宮岡伯人（編）『北の言語：類型と歴史』: 241-260，三省堂.
風間伸次郎（採録・訳注）2003a『エウェン語テキストと文法概説』（ツングース言語文化論集 23）文部省特定領域研究(A)：環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-030，大阪学院大学情報学部.
風間伸次郎 2003b「アルタイ諸言語の 3 グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか：対照文法の試み」アレキサンダー　ボビン・長田俊樹（共編）『日本語系統論の現在』: 249-340，国際日本文化研究センター.
風間伸次郎 2004「ツングース諸語における III 群の形成について」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』11: 91-114，北海道大学大学院文学研究科.
風間伸次郎 2009「ニブフ語と近隣諸言語との類型的異同・言語接触について」『サハリンの言語世界 ： 北大文学研究科公開シンポジウム報告書』: 127-144, 北海道大学大学院文学研究科.
風間伸次郎 2011「ウイルタ語調査報告」『北方人文研究』4: 51-74，北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
風間伸次郎 2012「ツングース諸語その他に関する池上二良先生の功績」『北方人文研究』5: 193-204, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
加藤九祚 1986『北東アジア民族学史の研究』恒文社.
金子　亨 1998「動詞複合体の構成について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1: 1-29、千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
亀井　孝・河野六郎・千野栄一（編）1996『言語学大辞典』6，三省堂.
樺太庁（編）1934『昭和五年国勢調査報告　附図表』樺太庁［国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」http://kindai.ndl.go.jp で閲覧可能（2013-03-20 確認）］.

樺太庁敷香支庁 1932『オロツコ土人調査其他』樺太庁敷香支庁［再掲：1997「オロツコ土人調査其他」谷川健一（責任編集）『北の民俗誌：サハリン・千島の民族』（日本民俗文化資料集成 23）: 337-357，三一書房］.
川村秀弥 1940『土語と土俗』私製.
菊池俊彦 1997「北の民俗誌 : 解説」谷川健一（責任編集）『北の民俗誌 : サハリン・千島の民族』: 551-570，三一書房.
菊池俊彦 2007「解説」菊池俊彦（編）『サハリン北方先住民族文献集 : 人類学・民族学篇　1905-45』: 197-205，北海道大学大学院文学研究科.
金田一京助（編）1912『日本國内諸人種の言語』東京人類學會［河野本道 1980『アイヌ史資料集　第四巻：言語・風俗編』北海道出版企画センター］.
児倉徳和 2007「シベ語（満洲語口語）」中山俊秀・山越康裕（編）『文法を描く 2 : フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』: 131-158，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
佐々木史郎 1991「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域：レーヴィン、チェボクサロフの「経済・文化類型」と「歴史・民族誌的領域」の再検討」『国立民族学博物館研究紀要』16(2): 261-309.
佐々木史郎 2001「近現代のアムール川下流域と樺太における民族分類の変遷」の再検討」『国立民族学博物館研究紀要』26(1): 1-78.
佐々木　亨（編）2002『サハリン少数民族の文化に関する文献学的研究　―石田収蔵資料のデジタル化―　報告書』北海道大学大学院文学研究科.
笹倉いる美 1992「ウイルタ語におけるトナカイの名称に関する覚え書」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1: 149-155.
笹倉いる美 2009「道立北方民族博物館所蔵の服部健博士旧蔵資料について」津曲敏郎（編）『サハリンの言語世界 : 北大文学研究科公開シンポジウム報告書』: 41-48，北海道大学大学院文学研究科.
白石英才・ガリーナ D. ローク（編）2003『ニヴフ語音声資料 2：アムール方言の民話と歌謡』文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-036，大阪学院大学.
田中　了・D　ゲンダーヌ 1978『ゲンダーヌ：ある北方少数民族のドラマ』現代史出版会.
谷澤尚一 1980「安政三年採録のニクブン語彙を繞って：松浦武四郎の「野帳」を中心に」『北方文化研究』13: 135-161.
田村すず子 1988「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』1: 6-94，三省堂.
田村将人 2008「第 11 章　樺太アイヌの〈引揚げ〉」蘭信三（編著）『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』: 463-502，不二出版.
丹菊逸治 2003「ニヴフ語の *sindux*『樽』についての短い考察」『itahcara』2，「itahcara」編集事務局.
丹菊逸治 2006「ニヴフ語を話す人々」『月刊言語』35(2): 98-101，大修館書店.
丹菊逸治 2009「II ニヴフ語」中川裕・月田尚美・丹菊逸治・李林静（監修）『ニューエクスプレス・スペシャル　日本語の隣人たち（CD 付）』: 30-47，白水社.
津曲敏郎 1987「B. ピウスツキのオロッコ語文法記述について」『国立民族学博物館研究報告別

冊』5: 283-294，国立民族学博物館.
津曲敏郎 1988「ウイルタ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』1: 744-746，三省堂.
津曲敏郎 1990「ツングース語の類型と相違」小谷凱宣（編）『北方諸文化に関する比較研究』: 137-147，名古屋大学教養部.
津曲敏郎 1997「ウイルタ語，ニヴフ語，アイヌ語の名詞並列構造」宮岡伯人・津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』3: 131-142，京都大学大学院文学研究科.
津曲敏郎 2009「サハリンの言語世界 : 単語借用から見る」津曲敏郎（編）『サハリンの言語世界』: 1-10，北海道大学大学院文学研究科.
津曲敏郎 2010「ウイルタ語文例」呉人惠（編）『環北太平洋の言語』15: 159-177，富山大学人文学部.
中目　覚 1917a『オロッコ文典』三省堂.
中目　覚 1917b『樺太の話』三省堂［1996「樺太の話」谷川健一（編）『北の民俗誌：サハリン・千島の民族』: 13-72，三一書房］.
中目　覚 1918『土人教化論』岩波書店［2005「土人教化論」菊池俊彦（編）『サハリン北方先住民族文献集：人類学・民族学篇 1905-45』: 31-41，北海道大学大学院文学研究科］.
服部　健 1943「オロッコ語『北風と太陽』」『音声学協会会報』72・73［2000『服部健著作集：ギリヤーク研究論集』: 248-249，北海道出版企画センター］.
服部　健 1952「樺太ギリヤークの漁撈語彙」『人類科学（九学会年報）』4，九学会連合［2000『服部健著作集：ギリヤーク研究論集』: 64-72，北海道出版企画センター］.
北海道教育庁振興部文化課（編）1974『オロッコ・ギリヤーク民俗資料調査報告書』北海道文化財保護協会.
北海道大学文学部付属北方文化研究施設 1985「池上二良教授経歴」『北方文化研究』17（池上二良教授退官記念号）: i-ii.
北海道立北方民族博物館 2011『第 26 回特別展図録　ウイルタとその隣人たち：サハリン・アムール・日本　つながりのグラデーション』北海道立北方民族博物館.
澗潟久治（編）1981『ウイルタ語辞典』網走市北方民俗文化保存協会.
村崎恭子 2004「樺太アイヌの人々」榎森進（編）『アイヌの歴史と文化 II』: 14-23，創童舎.
山越康裕 2007「ハムニガン・モンゴル語」中山俊秀・山越康裕（編）『文法を描く 2：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』: 229-258、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
山田祥子・荒山千恵 2010「ウイルタの歌謡 : 言語と音楽の記録 4 例」『北海道民族学』6: 62-74.
山田祥子・笹倉いる美 2011「北海道立北方民族博物館所蔵のウイルタ資料 I : 対応する北方言の語彙を中心に(2)」『北海道立北方民族博物館紀要』20: 97-112，北海道立北方民族博物館.
山田祥子・笹倉いる美 forthcoming「北海道立北方民族博物館所蔵のウイルタ資料 I : 対応する北方言の語彙を中心に(3)」『北海道立北方民族博物館紀要』22，北海道立北方民族博物館.
山田祥子 2008「ウイルタ語口頭文芸の伝聞形式 : サハリンにおける言語接触の可能性」『北海道民族学』4: 63-71.
山田祥子 2009a「ウイルタの語り物ニグマーについての予備的考察」『昔話：研究と資料』37: 133-144，東京：日本昔話学会.
山田祥子 2009b「ウイルタ語北方言調査の課題と展望」『サハリンの言語世界：北大文学研究科

公開シンポジウム報告書』: 11-26，札幌：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
山田祥子 2010a「ウイルタ語北方言にみられる動詞語尾*-li* について」呉人惠（編）『環北太平洋の言語』15: 85-100，富山大学人文学部.
山田祥子 2010b「【講演会等報告】講演と唄の夕べ：サハリン先住民族言語を伝え、残す」『北海道民族学』6: 102-109，北海道民族学会.
山田祥子 2011a「ウイルタの振楽器「ヨードプ」：復元工程についてのウイルタ語北方言テキストを中心に」『北方人文研究』4: 25-49，北海道大学文学研究科北方研究教育センター.
山田祥子 2011b「ウイルタ語北方言テキスト：思い出話 2 編」『北海道民族学』7: 48-59.
山田祥子 2011c「ウイルタ語北方言テキスト：スルクタの作り方」北方言語ネットワーク（編）『北方言語研究』1: 217-228，北海道大学大学院文学研究科.
山田祥子 2011d「【現地報告】ウイルタ語教室：「シレイ・セーックレ」（ロシア・サハリン州ノグリキ町）」『北海道民族学』7: 73-76，北海道民族学会.
山田祥子 2012a「ウイルタ語北方言テキスト：ありがとう、池上先生」『北方人文研究』5: 159-172，北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
山田祥子 2012b「池上先生とウイルタ語学」『北方人文研究』5: 179-192，北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
ローン、タチヤーナ（著），永山ゆかり・木村美希（共訳），津曲敏郎・加藤博文（監訳）2005『サハリンのウイルタ：18－20 世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』北海道大学大学院文学研究科.
Atknine, V. 1997 “The Evenki language from the Yenisei to Sakhalin”. In: *Northern minority languages: Problems og survival (Senri ethnological studies 44)*. : 109-121, Suita: National Museum of Ethnology.
Austerlitz, R. 1968 *Native seal nomenclatures in South-Sahalin.* Ann Arbor: Panel on Far Eastern Language Institutes of the Committee on Institutional Cooperation.
Bibikova, E. A. 2009 “Vospominanija”. In: *Ujl’ta. Evenki*. : 33-43, Yuzhno-Sakhalinsk: Oblastnoe gosudarstvennor uchrezhdenie kul’tury “Saxalinskij gosudarstvennyj oblastnoj kraevedcheskij muzej”, Izdatel'stvo “Lukomor'e”.
Bulatova, Nadezhda & Lenore Grenoble 1999 *Evenki*. (Language of the World: Materials 141) München: Lincom Europa.
Burykin, A. A. 1996 “Ethnic Composition of the Population, Ethno-cultural Contacts and Languaged of Interethnic Communication in the Northeast of the Asian Coastal Areas of the Pacific Ocean”. In: S. A. Wurm, P. Mühlhäusler, D. T. Tryon (eds.) *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and Americas*. Vol. 3: 989-998, Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.
Federal’naja sluzhba gosudarstvennoj statistiki（本文中ではFSGSと略す）2004 “Rasprostranennost’ vladenija jazykami (krome russkogo)”. In: *Vserossijskaja perepis’ naselenija 2002 goda*. Том 04-04. http://perepis2002.ru/ （2010年12月1日閲覧）
Funk, D. A., A. P. Zen’ko & L. S. Sillanpää 2000 “Materialy po sovremennoj kul’ture i sotsial’no-ekonomicheskomu polozheniju severnoj gruppy ujl’ta”. In: *Etnos i kul’tura*. 3: 14-30.
Gruzdeva E. Ju. & A. P. Volodin 1996 “Aboriginal language situation and contacts on Sakhalin and Kamchatka”. In: S. A. Wurm, P. Mühlhäusler & D. T. Tryon (eds.) *Atlas of languages of intercultural*

communication in the Pacific, Asia, and Americas. Vol. 1: Map 115, Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.

Gruzdeva, E. Ju. 1996 “The Linguistic Situation on Sakhalin Island”. In: S. A. Wurm, P. Mühlhäusler, D. T. Tryon (eds.) *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and Americas*. Vol. 3: 1007-1012, Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.

Gruzdeva, E. Ju. 1998 *Nivkh.* (Languages of the world: Materials 111) München: Lincom Europa.

Ikegami, J. 1956 “The substantive inflection of Orok”. 『言語研究』30: 77-96, 日本言語学会［2001『ツングース語研究』: 3-23, 汲古書院］.

Ikegami, J. 1959 “The verb inflection of Orok”. 『国語研究』9: 34-73, 国学院大学国語研究会［2001『ツングース語研究』: 24-66, 汲古書院］.

Ikegami, J. 1973 “Orok verb-stem-formative suffixes”. 『北方文化研究』7: 1-17, 北海道大学北方文化研究施設［2001『ツングース語研究』: 66-72, 汲古書院］.

Ikegami, J. 1974 “Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen”. *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Voelker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin*. : 271-272. Berlin: Akademie-Verlag［2001『ツングース語研究』: 395-396, 汲古書院］.

Ikegami, J. 1993 “A brief history of the study of the Uilta language”. In: *Ethnic Minorities in Sakhalin* ［2001『ツングース語研究』: 294-308, 汲古書院］.

Ikegami, J. 2001 “The verb inflection of Orok: Addenda”. 『ツングース語研究』: 73-93, 汲古書院.

Ikegami, J. 2007 *Skazanija i legendy naroda u ujl'ta*, 北海道大学大学院文学研究科.

Levin, M. G. & L. P. Potapov (eds.) 1956 *Narody sibiri*. Moskva i Leningrad: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR.

Majewicz, A. F. 1985 *Materials for the study of the Orok (Uilta) language and folklore I: Foneticheskie i grammaticheskie zamechanija k jazyku orokov, orokskie teksty*. Poznan: Adam Mickiewicz University.

Majewicz, A. F. 1987. *Materials for the study of the Orok (Uilta) language and folklore II: Grammatical notes on Orok Orok texts Orok-Polish Dictionary*. Poznan: Adam Mickiewicz University.

Majewicz, A. F. (ed.) 2011. *The Collected Works of Bronisław Piłsudski, Volume 4: Materials for the study of Tungusic languages and folklore*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Malchukov, A. L. 2003 “Russian interference in Tungusic languages in an areal-typological perspective”. In: P. S. Ureland (ed.). *Studies in Eurolinguistics.* : 235-251, Berlin: Logos Verlag.

Missonova, L. I. 2006 *Ujl'ta saxalina: Bol'shie problemy malochislennogo naroda*. Moscow: Izdatel'stvo Nauka.

Missonova, L. I. 2009a “Olenevodstvo i identichnost' Ujl'ta Saxalina (sovetskij i postsovetskij periody)”. In: *Acta Slavica Iaponica*, 27: 177-199. Sapporo: Hokkaido University.

Missonova, L. I. 2009b “Vekovoj put' identifikatsii ujl'ta”. In: *Ujl'ta. Evenki*. : 5-16, Yuzhno-Sakhalinsk: Oblastnoe gosudarstvennor uchrezhdenie kul'tury “Saxalinskij gosudarstvennyj oblastnoj kraevedcheskij muzej”, Izdatel'stvo “Lukomor'e”.

Missonova, L. I. 2010 “Rozhdenie pis'mennosti ujl'ta v XXI v. (Problemy etnosotsial'noj zhizni jazyka malochislennogo naroda)”. In: *Etnograficheskoe obozrenie*. 2010 (1): 100-115, Moskva: Institut etnologii i antropologii, Rossijskaja akademija nauk.

Nakanome, A. 1928. *Grammatik der Orokko-Sprache*. Osaka: Oosaka Touyougakusha.

Novikova, A. I. & L. I. Sem 1997 “Orokskij jazyk”, In: *Jazyki mira: Mongol'skie jazyki, Tunguso-man'chzhurskie jazyki, Japonskij jazyk, korejskij jazyk*. : 201-215, Moskva: Izdatel'stvo INDRIK.

Ozolinja, L. V. 2001 *Oroksko-russkii slovar': okolo 12000 slov*. Novosibirsk: Izdatel'stvo SO RAN.

Ozolinja, L. V. 2002 “Orokskii jazyk”. In: V. P. Neroznak & R. G. Abdulatipov (eds.) *Jazyk narodov, Rossii: krasnaja kniga*. : 143-148, Moscow: Rossiiskaja Akademija Nauk.

Ozolinja, L. V. & I. Ja. Fedjaeva 2003 *Oroksko-russkii i russko-orokskii slovar'*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.

Patkanov, S. 1912 *Statisticheskija dannyja, pokazyvajushija plemennoi sostav*. Tom 1. St. Peterburg.

Petrova, T. I. 1967 *Jazyk orokov (Ul'ta)*, Leningrad.

Petrova, T. I. 1968 “Orokskij jazyk”. In: P. J. Skorik et al. *Jazyki narodov SSSR, T. 5: Mongol'skie, tunguso-man'chzhurskie i paleoaziatskie jazyki*. Leningrad.

Pevnov, A. M. 1992 “Nivxskij i tunguso-man'chzhurskie jazyki: Problemy kontaktov”. In: *B. O. Pilsudskij: Issledovatel' narodov Saxalina (Materialy mezhdunarodnoj nauchnoj konferentsii. 31 oktjabrja - 2 nojabrja 1991g. g. Juzhno-Saxalinsk*. : 25-29, Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskij oblastnoj kraevedcheskij musej.

Pevnov, A. M. 2009 “On Some Features of Nivkh and Uilta (in Connection with Prospect of Russian-Japanese Collaboration)”. 津曲敏郎（編）『サハリンの言語世界：北大文学研究科公開シンポジウム報告書』: 113-125, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.

Roon, T. P. & I. A. Tsupenkova 1995 “Usnuvshaja legenda (Posvjasshaetsja pamjati Gisiktavdy - M. S. Mixeevoj)”. *Vestnik saxalinskogo muzeja: ezhegodnik saxalinskogo oblastnogo kraevedcheskogo muzeja*. 2: 222-230, Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskij oblastnoj kraevedcheskij muzej.

Roon, T. P. 1996 *Ujl'ta saxalina: Istoriko-etnograficheskoe issledovanie traditsionnogo xozhjajstva i material'noj kul'tury XVIII - serediny XX vekov*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe oblastnoe knizhnoe izdatel'stvo/ Saxalinskij oblastnoj kraevedcheskij muzej.

Roon, Tatyana 1999 “The Uilta of the Sakhalin Island: Current Economic Development Issues”. In: *The Proceedings of the 13th International Abashiri Symposium: Development and Environment in the North*. : 41-44, Abashiri: Association for the Promotion of Northern Cultures.

Schrenck, L. von 1881 *Reisen und Forschungen in Amurlande in den Jahren 1854-1856, Bd. 3, Die Volker des Amurlande*. 1, St. Peterburg.

Schrenck, L. I. 1883 *Ob inorodtsax amurskogo ktraja*, Tom 1, St. Peterburg: Izdanie imperatorskoj akademii nauk.

Shternberg, L. Ja. 1908 *Materiali po izucheniju giljakago jazyka i fol'klora*. T.1. St. Peterburg.

Shternberg, L. Ja. 1933 *Giljaki, Orochi, Gol'dy, Negidal'tsy, Ainy*. Xabarovsk: Dal'giz.

Smoljak, A. V. 1965 “Juzhnye oroki (Etnograficheskie zametki)”. *Sovetskaja etnografija*. 1: 28-42. Moskva: Nauka.

Smoljak, A. V. 1975 *Etnicheskie protsessy narodov nizhnego Amura i Saxalina: seredina XIX - nachalo XX v.*. Moskva: Izdatel'stvo “Nauka”.

Toldova, S. Ju. & M. M. Brykina 2009 “Dokumentatsija ujl'tinskogo jazyka: Chto predlagaet XXI vek?”. *Ujl'ta. Evenki*. : 44-53, Yuzhno-Sakhalinsk: Oblastnoe gosudarstvennor uchrezhdenie kul'tury

"Saxalinskij gosudarstvennyj oblastnoj kraevedcheskij muzej", Izdatel'stvo "Lukomor'e".

Tsintsius, V. I., V. A. Gortsevskaja, V. D. Kolesnikova, O. A. Konstantinova, K. A. Novikova, T. I. Petrova, T. G. Bugaeva 1975 *Sravnitel'nyj slovar' tungudo-man'chzurskix jazykov. Materialy k etimologicheskomu jazykoznanija*, Tom I. Leningrad: Izdatel'stvo "Nauka".

Tsintsius, V. I., V. A. Gortsevskaja, V. D. Kolesnikova, O. A. Konstantinova, K. A. Novikova, T. I. Petrova, T. G. Bugaeva 1977 *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskix jazykov: Materialy k etimologicheskomu slovarju*, Tom II. Leningrad: Izdatel'stvo "Nauka".

Tsumagari, T. 1985 "Grammatical Outline of Uilta". In: 『アジア・アフリカ文法研究』14: 1-15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Tsumagari, T. 2009 "Grammatical outline of Uilta (revised)". In: *Journal of the Graduate School of Letters*. 4: 1-21, Sapporo: Hokkaido University.

Tsumagari, T. 2010 "Long Journey of Walrus: a Linguistic Survey".『北方人文研究』3: 45-57, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.

Vishnevskij N. 1994 *Otasu: Etno-politicheskie ocherki.* Juzhno-Saxalinsk: Dal'nevostochnioe knizhnoe izdatel'stvo.

Vysokov, M. S. 1994 *Istorija Saxalina i Kuril v samom kratkom izlozhenii.* Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskij tsentr dokumentatsij novejshej istorii.

Vysokov, M. S. 1995 "Saxalin i kuril'skie ostrova v novoe vremja". In: *Istorija saxalinskoi oblasti: s drevneishix vremen do nashix dnej*: 49-96, Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskij tsentr dokumentatsij noveishei istorij.

Wurm, S. A., P. Mühlhäusler, D. T. Tryon (eds.) 1996 *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and Americas*. Vol. 1, Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.

Wurm, S. A. 1996 "Some Lingue Franche and pidgins in North Siberian and North Pacific Areas at the beginning of the 20th Century". In: S. A. Wurm, P. Mühlhäusler, D. T. Tryon (eds.) *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and Americas*. Vol. 3: 979-988, Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.

Yamada, Y. & O. F. Solov'eva 2011. "Pesni ujl'ta: jazyk i muzyka". *Vestnik saxalinskogo muzeja: ezhegodnik saxalinskogo oblastnogo kraevedcheskogo muzeja*. vol. 18.

Yamada, Y. 2010 "A preliminary study of language contacts around Uilta on Sakhalin".『北方人文研究』3: 59-75, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.